

新書太閤記

第一分冊

吉川英治

青空文庫

序

民衆の上にある英雄と、民衆のなかに伍ごしてゆく英雄と、いにしへの英雄たちにも、星座のように、各の性格と軌道があつた。秀吉は、後者のひとであつた。

生れおちた時から壮年期はいうまでもなく、豊ほう太たい閣こうとなつて

からでも、聚樂桃山の絢爛じゅらくや豪墨けんらんにかこまれても、彼のまわりには、いつも庶民のにおいが盈みちていた。かれは衆愚凡俗をも愛した。

かれは自分も一箇の凡俗であることをよく弁わえていたひとである。かれほど人間に対して寛大な人間はなかつた。人間性のゆたかな英雄はと問えば、たれもみなまず指を秀吉に屈するのも、かれのそういう一面が、以後の民衆の間に、ふかく親しまれて来たからではないだろうか。

おそらく秀吉への親しみは、この後といえどかわるまい。理由はかんとんである。かれは典型的な日本人だったから。そして、

その同身感どうしんかんから好きになる。わけてかれの大凡だいほんや痴愚な点が身近に共鳴するのである。

日本人の長所も短所も、身ひとつにそなえていた人。それが秀吉だともいえよう。かれの長所をあげれば型のごとき秀吉礼讃が成り立つが、その方は云わずもがなである。われわれが端的に長所をかぞえたてたりすれば、かえって彼という人間の規格は小さくなる。かれの大きさは、そんな程度のものではない。

わたくしのこの「新書太閤記」は、まだ秀吉の大往生までは書けていない。彼も英雄というものの例外でなく、晩年の秀吉は悲劇の人だ。大坂城の斜陽は「落日の荘嚴」そのものだった。私はむしろ、彼の苦難時代が好きである。この書においても、秀吉の

壮年期に多くの筆を注いだのは、そのためだった。また、ひとり秀吉だけの行動を主とする太閤記でもありたくなかった。尠くも、信長出現以後、天正・慶長にまでわたる無数の熒星けいせい、惑星わくせいの現没にも触れてゆきたい。特になお、家康が書けていなくては、太閤記は完しまったといえないと思う。

むかしからある多くの類本、川角太閤記、真書太閤記、異本太閤記など、それから転化した以後の諸書も、すべてが主題の秀吉観を一にして、彼の性情を描くのに、特種なユーモラスと機智と功利主義とを以てするのが言い合わせたように同型である。

かつての太閤記作家もみな、秀吉の人間とは、なかなか、真正

面に組みきれなかつたことが分る。わたくしはそういう逃げ方は
しまいと思つた。わたくしの力不足はわかっているが、彼もまた、
わたくしたちと同じ血と凡愚をもつていた一日本人であつたとい
う基本が、何よりも著者の力であつた。

著者

にちりん
日輪・月輪
げつりん

日本の天文五年は、中国の明みんの嘉靖かせい十五年の時にあたる。

日本では、その年の正月に、尾張おわりの国熱田あつたしんりょう神領しんりょうの——戸数
わずか、五、六十戸しかない貧しい村の一軒で——藁屋根わらやねの下の
藁わらのうえに奇異な赤ン坊あかぼうが生れていた。

後の豊臣秀吉である。

生み落された嬰兒は、母が貧しい物しか喰べていなかったで、五年樽ねんたるの梅干みために、赤くて皺しわだらけだった。

藁わらびさし廂つららの藁の先から、氷柱がさがっているような一月の寒さ

だったし、産褥さんじよくを囲む小屏風こびょうぶ一ツない家なので、嬰兒は、へその緒を切られても、泣く力すらなかった。

——死んで生れたか。

と、みな思った。

でも、父の弥右衛門やえもんだの、知己しるべの人たちが、産湯うぶゆから上げて、お襦袢むつのうえへ転がしてみると、突然、呱呱ここの声をあげた。

啼なくだけ啼きぬくと、この嬰兒あかごはまた、百年の眠りから覚めた

ように、大きな欠伸あくびを一つした。

——生きてるがなあ！

——何とか育とうによ！

たすき

襷たすきをはずした手伝いの女たちは、そういつて、せめて親の弥右衛門をなくさめ、産婦を祝福したものだつた。

.....

その年の頃。

隣邦の中国では、大同だいどうに兵乱があり、遼りょう東とうが騒いだりしていたが、元の国号げんを革あらためて明みんとしてから、朱氏しゆし数百年の治世はまだ揺ゆるぎもしなかつた。

いやむしろ、元の前時代、宋そうや唐とうの昔より、国運みなぎは漲り、近代

的に覚めて以て、今や明の盛代とさえ見えた。

黄河の水。

揚子江の水。

それも今と少しも変わらない——悠ゆうきゆう久として黄色い濁流を、

中国と日本のあいだの——大きな天地から観れば一跨またぎの溝みぞに過ぎない海へ——不斷に吐き出していたのである。

×

×

×

天あまのはら

ふりさけみれば

春日かすがなる

みかさの山に

いでし月かも

遠く日本を出てから、五郎大夫は、故国のこともいつか頭に薄
れていたが、この歌だけは、忘れはしなかった。

あべのなかまろ
阿倍仲麻呂の歌だ。

月を見、草を見、渡り鳥を見るにつけ、五郎大夫は、阿倍仲麻
呂が歌ったような日本恋しさの望郷に、どれほど駆られたことか。

だが、明日こそ帰るのだ！

十二年間も留まっていたこのこうせいしやう江西省じやうしゆうふ饒州府ふりやうの浮梁
(現在のけいとくちん景德鎮)を立って。

「夜が明けたら……」

五郎大夫は寝ても眠れなかった。

「——日本に残して来た家の者たちは、わしが生きているとは夢にも思っていないだろうな。母はまだ達者かしら。弟きょうだい妹まいたちは、どうしたろう」

更ふけるほど、頭さは冴さえてしまう。——明日の旅に、疲れを残してはならないと氣遣きづかいなながらも。

すると、同じ想いで、やはり寝つけないでいたものとみえ、日本から連れて来て以来、ずっと側に仕えてきた忠実な下僕すてじの捨すて次ろ郎うが、

「旦那さま。お目ざめでございませうか。お目ざめなら、ちよつと……」

と、寢室の扉を外から軽くたたいた。

五郎大夫は、臥床ふしどから降りて、榻ト（陶器製の腰掛け）へ腰を移しながら、

「おはいり。——おまえも眠れないのか」

「なあに、私は」

捨次郎は部屋の中へ進んで来て、主人の前に立った。

「宵にぐっすり寝ておりますが……ただあのことが一つ気になりまして」

「あのことは」

「お子様のことです」

「……ウむ」

と、五郎大夫も、ずきんと、胸の傷いたむ顔をした。

この浮梁ふりようにいる間に、五郎大夫はひとりの婦人との間に、子をもうけていた。

彼女は、廬山ろさんの向う側の星子せいしという土地から、この浮梁の窯業かま場ばへ、働はたらきに來ていた。

姓は楊よう、名は梨琴りきんといつて、氣のやさしい——その代り病身やまさうな細腰こしの美人めいじんだったから、激げきしい働はたらきには、不向ふきやうきだった。

話は、少し反それるが。

そもそもこの江西省きんしやうの浮梁ふりようという土地は、日本まで遠く聞きえている陶器たうきの産地さんちなのである。遠い唐たうの時代じだいから窯かまが築きずかれ、宋そう元の頃ころには、宮廷きやうていの御用品ごよひんを焼やく官窯かんようが出來、それに附随ふぞうする役所やくじよだの、商家かみやだの、職人町しやくじんまちなどで、当時たうじ、支那第一しなだいいちの陶府たうふとい

われるほど殷賑いんしんを極めていた。

五郎大夫は、この陶器の製法を究きわめるために、実に、十二年の辛苦と郷愁きょうしゅうに耐えて、異国に暮して来たのだった。

日本から来るには。——海上六百里、長江さかのぼを溯さかのぼつてから、なお四百余里もある。——そして、潯陽城じんよう（現在の九江キウキヤン）の河港からまた、水路や陸路を経て、廬山をあおぎながら、鄱陽湖はようこをわたり楽平河らくへいがをめぐり——文字どおり千里の旅を、半歳もかかるのだった。

その幾山河を、明日はまた、日本へ向つて帰るのだ。

五郎大夫も、捨次郎も、眠れないほど欣うれしい！

だが、宵とぼりから帳とぼりを垂れて、顔も見せず泣いてばかりいる者が

あつた。子を抱えた梨琴りきんであつた。

梨琴は、窯場で五郎大夫と親しくなつて、その妾めかけとも家婢かひともつかず、この家へ来たものだった。

五郎大夫の研究はその目的を達して、いよいよ曠はれて帰る日が来た。かねて覚悟していたことではあるし、彼の多年の苦心が、彼の本国で実を結ぶことを考えると、梨琴は悲しみ以上に、男のために欣よろこばなければいけないと思つた。けれど、まだ三歳のあどけない男の子を、膝に見ると、

「この子をどうしよう」

と、思いみだれ、おとといの夜から泣きつづけて、顔も見せない程だった。

下僕の捨次郎が今——ふいに主人の寢室を訪れたのもその梨琴が迷っていた問題を、やつと彼女も思い決めたというので、取次に来たのであつた。

「ただ今、梨琴りきんさんがいうには、きのうも一昨日も、あんなに云い張つたが、将来を考えると、やはり自分の手で育てるよりも日本へ連れて帰つていただいた方が幸福になるに違いない。——だから最初の相談はなしのように、子どもは、貴方にお頼みしたいと申すのですが」

「あ。……考え直したか」

五郎大夫は、彼女の気持を思いやつて、ほろりとした。

「ちよつと、呼んでくれい。——梨琴を」

「はい」

下僕の捨次郎は、部屋を出て行った。

大きい家ではない。

勿論、家も調度も、主従の服装も、すべてこの土地の風俗のままである。

「旦那さま。お連れしました」

捨次郎は、やがて梨琴の腕を抱いて、支えながらそこへはいつて来た。

梨琴はすぐ床へ泣きくずれ、

「祥シヨンスイ瑞さま！ ……」

と、咽むせんで呼んだ。

祥瑞えとくというのは、五郎大夫の中国名であつた。陶器を焼く秘法を会得えとくするためには、あらゆる習慣をすてて、この国の生活に、同化して来たのであつた。

「才才……。今、捨次郎から聞いた。子どものことは、心配しないがいい」

こんな言葉では、慰めきれない気がしたが、五郎大夫は、そういうしかなかつた。

梨琴は、やつと涙をおさめて、

「あなたにお別れする上に、子まで離すのは、死ぬより辛うございませうが、よくよく考えてみると、わたしには身寄りもなく、体も弱いし、この子が大きくなるまでは、生きていられないと思ひ

ます。そうすれば、この子はきつと、奴隷どれいに売られるか、土匪どひに手なずけられるか、いい人間には成りっこありません」

もう彼女は、聡明な母の冷静に返っていた。

「——それにひきかえ、長年の間、あなた様のお生活くらしぶりや、御主従のあいだ柄を見ていると——知らない日本という国がうすうすでも分る気がいたしました。私の国では、あなたの国の人を、倭奴わどだの、東洋鬼トシヤンキだのと、恐れています、それは南の海岸や、揚子江を溯つて来る、あの倭寇わこウばかり見て、それが日本人だと思ひこんでいるからでしょう。……けれど私は、そうは思いません」

彼女は、泣いてばかりいた三日分の思いを一ぺんに晴らすように、云いつづけた。

「——日本には行ってみませんけれど、貴方のお心のうちには、何年か住まわせていただきました。貴方はいくら中国の着物を着、中国の女を持ち、中国の家に暮しても、血は驚くほど変らない日本人です。その日本の国は、情義に強く、武勇に長^たけて、しかも優美な国だということもよく分っているつもりです。——ですからこの子は、私の手に育てるより、貴方にお頼みしたほうが子の幸福だと考えたわけでございます」

「……………」

五郎大夫は 肅しゆくぜん 然と、大きくうなずいて見せた。

捨次郎も傍らに立ったまま、頭を垂れて、聞いていた。

その時、がやがやと、家の外で声がしだした。

ふと見れば、窓は仄ほのかな夜明けの光に染まりかけている。外の声は、きよう日本へ立つ五郎大夫を見送りに来てくれた窯場かまばの人たちであろう。勿論がやがやいう言葉はみな中国音である。五郎大夫も、熟練した中国音で、

「やあ、皆の衆。お早くからありがとうございます。今すぐ支度しますから、茶でも喫のんでいて下さい」

扉をひらいて、挨拶した。

見送りの者たちは、

「いや、茶も朝飯も、途中の景色のいい所でやろうよ。支度がよかったですら出かけようじゃないか」

と、いった。

浮梁ふりようは、丘に囲まれた、盆地の町だった。

土採り山や、薪山まきやまや、無数の窯場かまばが、目の下に見える。

窯の数カ所から、暁の浅黄いろの空に向って、幾すじも、煙が立ちのぼっていた。

「祥瑞シヨンジさん、もうこれが、お別れだな」

見送りの人々もいう。

祥瑞五郎大夫は、丘の上の道に立って、

「ええ、まったく」

振り顧かえつて、しばらくじつと、眸ひとみをこらしていた。

言葉は、それだけしか出なかつたが、既往十二カ年のことが、一度に胸へ呼び起されていた。

わけて、後に残して来た梨琴りきんの身が、不愍ふびんであつた。

その梨琴は、今朝、

「わたしは、家の窓からお見送りさせて戴きます。生なまなか途中まで行けば、もつともつと、日本までも、従ついて行きたくなくなりますから」

といつて、家に残つた。

飽くほど、頼ずりして、泣く泣く彼女が手から離した子は下僕の捨次郎に今、負おぶわれている。男の子だ。

名は、楊景福ようけいふく。

見送り人は、十五、六名もいて、荷物は一頭の驢馬ろばと、一台のチイチャー鶏公車チイチャーとに積んだ。見送りの一人が途中で、

「捨さん、重いだろ。長い途みちだから、子どもはこれへ乗せたらどうだね」

と、いつてくれたので、捨次郎は背中の子を鶏公車へ移した。車輪の大きな手押し車である。野や山坂のきらいなく押し通る小型の荷車だから、わざと歯の心棒には油を注ささない。車輪が廻るにつれて、キイキイと牝めんどり鶏が啼くような軋きしみ声をたてるので鶏公車という名があった。

その荷物の中に挟あかまって、嬰兒あかごは嬉々としていた。時々、米の粉の搔いたのや、練ねり餛あめを舐ねぶらせて行く。

船で泊り、旅籠はたごに休み、幾夜を経てようやく、揚子江ほとりの畔じの潯んよう陽ように出て来た。

見送り人もそれまで来る途中で、二人別れ、三人去り、この城内まで従ついて来た者も、やがてみな帰った。

船宿で、五郎大夫主従は、幾日か船の便を待っていた。

すると金きん陵りょう（南京）まで下江くだる船が今夜おそく、
浦江ほんぽう

の河口から出るといふ日の——まだ明るい頃だった。

船宿の手代が、薄い紙包を持って来て、

「旦那にお上げしてくれと、瘦やせ形がたの綺麗な女が、これを置いて、

逃にげるように行つてしまいましたが」

と、告つげた。

容貌や年頃を糺ただすと、梨琴りきんにちがいないのである。

怪しんで、包を開いてみると、それは五郎大夫が長年のあいだ、

手に入れようとしても、どうしても手に入れることが出来なかつた陶製の秘本だつた。

この本を所持していた者は、窯場の職人頭かまばをしている、依怙地いこじ者もので、

「日本人には売らない」

といつたり、途方もない多額な値を吹っかけたり、五郎大夫も遂に、断念するほかなかつた物であつた。

「どうしてそれを、梨琴が手に入れたらう？」

彼女が、姿を見せたのは、たつた今のことだという。五郎大夫は、子を宿の者に頼んで下僕の捨次郎と共に、城内の街を隈なく探しあつた。

見つからない。——梨琴のすがたは、とうとう見つからなかつた。

日は暮れてしまふ。

夜は深くなる。

かえつて、宿の者が、五郎大夫主従を探しぬいて、やっと追い着き、

「もう、船が出ますぞ」と、いう。

あわてて、荷物や子どもを、ほんぼこう浦江の岸へ運んでもらい、ろ蘆荻てきのあいだに繋いである小舟に乗りこんだ。

便船は、江の中ほどに、いかり碇を下ろしている。そこまで小舟で行

くのだつた。

暗い水に怯おびえたのか、小舟が揺れ出すと、嬰兒あかごは、ひいツと泣き出した。

「泣くな、泣くな。何をお泣きやる。……よし、よし」

——すると何処いろうからか、琵琶びわの音がながれて来た。この辺に水す楼の灯は見えない。江一面に、蘆荻と暗い水の戦そよぎであつた。

「ア、梨琴りきんじゃないか」

五郎大夫は、見まわした。

梨琴も琵琶が上手であつたからである。——だが、櫓とを把つて
いる船頭は、少しも感情のない声でいった。

「旦那、ご存じありませんか。この潯陽城しんようの船着きは、むかし

はくらくてん
 白楽天とかいう詩人が、琵琶行つていう有名な詩を遺した跡
 だつていうんで、琵琶亭があるし、それから船で琵琶を弾いて、
 旅のお客さまに伽をする妓がいるんでさ。……お望みなら、舷を
 手でたたいて、オーイと呼んでごらんさい。すぐ漕ぎよせて来
 ますから」

五郎大夫は、聞き流して、闇をながめていた。

琵琶はやんだ。

そして、通りすがった蘆間の蔭に、一艘の船を見た。竹で編ん
 だ苦のうちから、薄い灯火の光が洩れ、その明りの中に、耳環
 をした女の白い顔が見えた。

「……?」

もとより梨琴ではない。

けれど彼女の心と、五郎大夫の心とは、この星の下と、波間のうえとで、明らかに交流していた。

「日本に帰っても」

と、彼は独り思った。形の上の別れが、絶対の別れではないと思つた。

一つの花が、他の一つの花へ、花粉を触れた時、それから生れ出た物は、永遠に地上から消えない芽を土から持つ。

その芽は、自然が手伝つて、繁茂する。花になりまた、結実する。

千里を隔てていても、土と土とが、また——心と心とが、かく

まで似ている二つの国では、そうした文化の交流は、雨と海水とのように、何千年も前から自然に行われて来た作用であつた。

深夜。長江の秋だ。

五郎大夫は、東へ東へと、揚子江を下つてゆく船の上でも、そんなことを想いつづけた。

自分が、この江を溯さかのぼつて来たのも、その作用の一役を、自然が命じているのである。自分と濃い血液のつながっている数代前の祖先、伊藤五郎大夫は、道元どうげんぜんじ禅師かに侍かいて、やはり支那へ渡つた人であつた。

臨りんざい濟えいざいの栄えいざい西せい禅師ぜんじも。

また、弘こうぼう法ぼうも。

ずっと以前の遣唐使けんとうしの若いたくさんな人々も。

同じに、支那からも、秦しんや漢代かんだいの人々が、無数に日本へ移り住み、それはすでに、この国の民くさとなつて、血も立派になつて、今日に流れて来ている。

野のの子ども

「おらの蜂はちだぞツ」

「おらのだい」

「うそだいうそだい」

「見つけたのは俺おらだい」

この辺りいちめん、真つ白な大根の花と、咽むせるような菜の花の畑である。

その中を、棒でたたいて、七、八名の悪童連が、朝鮮蜂とよぶ尻に袋を持ったのを、一匹でも見出すと土旋風つちつむじでも駈けるように、われがちに奪い合いだった。

弥右衛門やえもんの子、日吉ひよしは、ことし七歳になる。

胎内たいないにいた時、母が十分に食物を摂とつていなかったせいか、五年漬の梅干みみたいな顔をして生れ落ちたこの子は、七歳になつても、まだその不足が取り返せないとみえ、他の子より小粒で、貌かおに小皺こしわがあつた。

だが、悪戯と乱暴は、この中村郷なかむらごうの童わらべの中でも、一といつて

二と落ちない。

「阿呆ツ」

蜂を争いながら、日吉はどなった。

大きな子に、撥ねとばされたのである。

転んだ上を、またほかの子が踏んづけた。日吉は、その足を掬すくつて、

「――捕とつた者もンの蜂だぞ。捕とつたら捕とつた者もンの蜂だい」
と、宣言して、敏びん捷しょうに先へ駈けた。

そして、宙へ飛ぶと、その手の中に蜂をつかんでいた。

「やあい、おらの物もんだ」

日吉は、蜂を握てつて、十歩ほど先へ行てつてから掌てをひらいた。

蜂の首と、羽を挽もいで、すぐ口へ入れてしまった。

蜂の腹は、甘い蜜みつの袋である。砂糖などの味を知らない少年の舌には、天地にこんな美味うまい物があるうかと思われるのだった。

「……アア、甘え」

日吉は、眼をほそくして、蜜が喉のどをながれ込んでも、何度も舌を鳴らしていた。

「……………」

ほかの連中は、羨うらやましげに、彼の表情を唾つばを溜ためて眺めていた。蜂はいくらも飛んでるが、朝鮮蜂は少ないのだ。その口惜あげさが

「猿さる」

と、大きな童わっばがいった。仁王と綽名あだなのある少年である。

仁王だけには、日吉も敵かなわなかつた。それを知っているので、みな尾について、

「えて坊」

「猿やい」

「さる。さる。さる」

と、いちばんチビの於福おふくまでいった。

於福は、数え年九ツというが、七歳の日吉とそう違わなかつた。しかし、色は白いし、目鼻立ちもよく、容貌では較べものにならない。

それに、村では、大尽だいじんこ子の方で、小袖らしい着物を着ている

のも、於福だけだった。ほんとの名は、福太郎とか福松とかいうのだらうけれど、男名でも、頭字に於の字をかぶせて呼ぶことが、良家の風習となつていたので、このお大尽子も、そんな真似まねをして呼ばれているものとみえる。

「やい、いったな！」

日吉は、誰に猿とよばれても、怒つた例ためしはなかつたが、於福にいわれると、睨ねめつけた。

「いつも俺が、庇かばつてやるのを、忘れたのか。白茄子しろなすめ！」

日吉にそう罵ののしられると、於福は何ともいえない、気の弱い顔をして爪を噛んだ。

白茄子と悪口をいわれたことよりも、恩知らずといわれたこと

が、子ども心にも、強く恥を感じたらしかつた。

ほかの子供らは、もう眼を反らそしていた。そして朝鮮蜂の代りに、畑の彼方を通る一筋の黄色い埃ほこりに眼をあつめた。

「ア、兵隊だ」

「武者が通る」

「戦いくさから帰つて来た」

わあつと、両手を挙げて、彼らは歓呼かんこした。

領主の織田信秀おだのぶひでと、隣国の今川義元いまがわよしもととは、両立しない二つ

の勢力だった。国境方面では、絶えずどこかで小競り合こぜいがあった。或る年は、今川家の精銳が、この辺まで潜行して来て、ふいに民家に火を放つけたり、田の稲を刈きったり、畑を荒したりして去

つたこともある。

そういう時、領主の兵は、火の手を見るや、那古屋なごやや清洲城きよすじょうから殺到して、眼の前で、敵を蹴ちらし、敵を斬り、そして各所とりでの砦や木戸の兵も出合わせて、これを殲滅せんめつした。

冬——

そんな年には当然、土民は、食物にも家にも困つたが、誰も、領主を怨まなかつた。飢えれば飢えるで、寒ければ寒いで、

(今に、一泡あわふかしてやるで)

と、むしろ今川氏に対する敵愾てきがいしん心を昂たかめた。

この辺の童わっぱは、生れた時から、それを見、それを聞きして、育つて来たのである。

だから領主の軍勢とみれば、自分自身みたいに思った。また、子供らの生れながらの血も、兵馬を見ると、何を見たよりも強く昂奮した。

「行ってみろ」

誰かがいうと、わつと皆、それへ向つて今も、駈け出した。

於福と日吉だけは、後に残つてまだ睨みあっていた。気の弱い於福は、他の者と一緒に駈けて行きたかったが、日吉の眼に縛られて、去るに去れない姿だった。

「……ごめん」

於福は、恐々こわこわ、日吉のそばへ寄つて、彼の肩へ手をのせた。

「ごめんね。……ね」

日吉は、ぷつと赤い顔をして、肩を揺りうごかしたが、於福の泣き出しそうな眼をみると、急に、

「俺ん^{おら}ことを、一緒になつて、悪^{あく}ていいうからだい」

と、肩を柔^{やわ}らげた。

そしてまだ少し胸がすまないようにいった。

「汝^われのことを、何日^{いつ}もみんなが、唐人子^{とうじんこ}、唐人子^こつて、擲^{から}擲^かうだろが。おらは擲^{から}擲^かつたことなんかあるかい」

「ない……」

「唐人子^こだつて、おら達のなかまになればおら達の国の者^もんだい。そういつてるだろ」

「うん」

「ほんとだぞ、於福」

「うん……」

於福は、眼をこすつた。泥が涙に溶けて、眼のまわりにぶちができた。

「ばかやい。泣くから唐人子つていわれるだい。武者を見に行こう、ア、早く行かねえと行つちまうぞ」

於福を引ツぱつて、日吉も後から駈け出した。彼方の黄色い埃の中に、軍馬や旗差物はたさしものがもう近く見えていた。

二十騎ほどの侍と、二百人ばかりの歩兵だった。それに小荷駄の一隊が、ごつちやに交まじつて——槍ながえも長柄ながえも弓持も、秩序なく前後になつて——熱田街道あつたかいどうから稲葉地いなばじの野づらを横しぎり、庄しょう

ないがわ
内川ないがわの堤どての上へと、今、一騎一騎、背のびするように登りか
けたところだった。

「——わあッ」

畑から飛んで来た子ども達は、軍馬を追い越して堤へ駆けあが
った。

日吉も、於福も、仁王も、ほかの洩はなつ垂たらしも、眼をかがやか
して、そこらの野薔薇のばらすみれや堇すみれや雑草の花をむしり取って、両手につ
かみ、眼の前を勇しい武将や兵が通るたびに、

「八幡はちまん。八幡」

「勝ちいくさ」

「華武者はなむしや祝え。華武者祝え」

ふしをつけて叫びながら、手の花を、声と共に抛り合つた。

村でも、街道でも、領土の子ども達は、兵馬を見るとこう躁はしやいで祝福した。——けれど馬上の将も、足を引き摺って行く兵隊も、みな仮面のような強い顔を黙々と持つて、

(寄るな……)

とも叱らない代りに、彼らの歓呼に、ニコと一笑を酬むくいてもくれなかった。

殊に今通るこの一隊は、三河方面から引き揚げて来た軍の一部らしく、前線でさんざんに戦い抜いて来たものとみえ、馬も人も疲れぬいていた。

馬の中には、腹を突かれて、腸をぶら下げている馬もいた。兵

の中には、満身血になって、戦友の肩にすがってやっと歩いて行くような兵もいた。

槍の柄にも、具足にも、干乾ひからびた血は、漆うるしみたいほこりに黒く光っている。——そして、どの顔もどの顔も、汗と埃ほこりにまみれ、ただぎらぎらした眼のみが続いて行つた。

「水を飼かえ。——馬に」

河原へ降りると、先頭の武将のひとりが云つた。

側を囲んでいた騎馬の侍がすぐ、そのことばを大声で、隊に伝え、

「やすめ」

と、令しを布しいた。

騎馬の者は、ばらばらと馬を降り、徒歩かちの兵は、ほつと足を止めて、

ああ！

といわないばかりに皆、草の中に腰を落した。

清洲きよすの城は、川向うの彼方に小さく見えていた。隊の中には、

この尾張四郡の領主、織田おだびんご備後守信秀このかみのぶひでの弟にあたる織田よさぶろ与三

郎うがいた。——与三郎は床しょうぎ几ぎに掛け、五、六名の旗本に囲ま

れ、黙然と、空を見ていた。

「……………」

旗本たちも、口をつぐみ合っていた。脚の傷や、籠手こての傷を、縛り直している者もある。この人々の眉色から察するに、前線で

の戦いは、明らかに、味方の大敗であつたに違ひなかつた。

けれどもとより子ども達に、そういう観察はない。血を見れば、自分が血を流したように勇み、槍や長柄の光を見れば、敵を殲滅して来たものと思ひこんで、ただ昂ぶり躁ぐのだった。

「八幡八幡」

「華武者、華武者」

馬に水を飼っていると、馬にも花を投げて嘸した。——すると駒のそばにいた一人の侍が、日吉を見かけて、

「弥右衛門の倅。おつ母さんは変りないか」

と、手招きして訊いた。

「あ? ……。おらけえ」

日吉は、彼の手の下へ歩いて行つた。黒い鼻の穴を上へ向けて、その人を正視した。

「うん……」

日吉を手招きした手は、日吉の汗くさい頭を押えて、大きくうなずいた。

まだ二十歳そこそこの若い武者だつた。この人も戦つて来た兵隊のひとりかと思うと、日吉は、頭に載せられてゐる鎖籠手くさりごての重い手も、ぞくぞくする程、光栄なこちがした。

(どうだ、おれの家は、こういうお侍と知ってるんだぞ)

という誇らしさを、並んで此方こっちをながめている他の友達へありありと顔つきに示していた。

「弥右衛門の子。おまえはたしか日吉といったな」

「ああ」

「いい名だ。いい名だ」

若い武者は、彼の頭を一つ撫なでまわした。そしてその手を、自分の革かわ胴どうの腰帯のところへ当てると、少し身を反そらしながら、日吉の顔を眺め直して、独りで何か笑い顔していた。

日吉は、大人おとなにでも、女の人にでも、すぐなつつこい顔つきを示すのだ。これは生れ性とみえる。まして知らないおじさんから——しかも離れてばかり見ていた武者から、直じかに頭に手を載せてもらったので、大きな眼は忽ち得意にかがやいて、いつものお喋しゃべりべがすぐ出て来た。

「だけどなあ、おじさん。おらのことを、誰も日吉って呼ばないよ。日吉って呼ぶのは、おつ母さんとお父さんだけだ」

「似てるからな」

「猿にだろ」

「自分も心得ているのはなおいしい」

「だって、みんないうもの」

「はははは」

戦場暮しの侍の声は、笑い声まで大きかった。側にいた侍たちも同時に笑った。その間、日吉は無聊ぶりような顔して、ふところから黍きびの茎くきみたいな物を出してはポリポリ齧かじっていた。その茎の汁は青臭いなりに甘い味があった。

「ベツ。……ベツ」

日吉は、噛むだけ噛んだ甘黍あまきびの糟かすを、そこらじゅうへ、行儀もなく吐きちらした。

「幾歳いくつになるか」

「おらの年け」

「ウム」

「七歳ななつ」

「もうそうなるかなあ」

「おじさん、何処の人」

「おまえの母親と親しい者だ」

「へえ？」

「おまえの母の妹は、ようわしの屋敷へは遊びに見える。帰つたら、母へよろしくいつてくれ。藪^{やぶ}山^{やま}の加藤^{かとう}弾正^{だんじょう}が、お達者に——というていたとな」

一息やすんだ兵馬は、その時もう列を立て直して、庄内川の浅瀬を彼方へ渡り出していた。

振り向くと、弾正も急いで、馬の背に跳ねあがった。陣刀だの、具足だのが、その人の体で、羽ぶるいするようにガチャツと鳴つた。

「戦^{いくさ}がやんだら、そのうち遊びに寄るぞというてくれ。弥右衛門どのへも」

云い捨てる、列から後れた弾正は、駒^{こま}を速^{はや}らせて、川瀬へ入

れた。駒の脚から白い水が颯々^{さっさつ}と立って行く——。日吉は、甘^あまきびの糟^{かす}を口に入れたまま、恍惚^{うっとり}と見送っていた。

この一軒

彼の母は納屋^{なや}へはいるたびに、心が暗くなった。

漬物や穀類や焚^{たきもの}物や——ここへはいる時は必ずさういう蓄えを取り出しに来るのであるが、その生命^{いのち}の糧^{かて}は、常に途切れがちだった。

(この先、どうして……)

と、胸がつまるのである。

子どもは、七歳ななつの日吉と、十歳とおになる姉と、わずか二人に過ぎなかつたが、どっちもまだ何の働きに出せる年でもないし——良お人の弥右衛門つとやえもんは、夏でも炉ばたに坐つたきりで、湯沸ゆわかの下を見ているだけのことしかできない不具者かたわだつた。

「——あんな物、いつそのこと薪まきにして焚たいてしもうたら、胸むねが癒いえように」

納屋の壁を仰ぐと、真つ黒な櫛柄かしえの槍と、陣笠と、切れ端のような古具足ふるぐそくとが、吊つるしてあつた。

以前、良人が戦いくさに出るごとに、身に着けて出た晴着である。

それも今は、煤すすだらけになつたまま、不具ふぐの良人と同じように、納屋の隅に埋もれていた。彼女は、見るたびに、忌いまわしい気もち

に囚とらわれた。戦というものに顫おのきを覚えて、

(良人が何といおうが、日吉は、侍にはさせぬ)

と、思うのであつた。

自分が木下弥右衛門へ嫁とつごうとした頃は、良人を選ぶなら侍と思つたものであつた。自分が生れた御器所ごきその家も、小さいながら武家だつたし、木下弥右衛門も足輕ながら織田信秀の家の中だつた。そして今、この納屋すすの煤すすに埋もれている具足も、夫婦になると同時に、

(未来は千石取りに)

と、いう希望を賭けて、欲しい世帯道具よりも先に、無理工面して、新調したものではなかつたか。

夫婦にとれば、懐かしい思いでの品でもある——。

だが、そんな若い頃の夢は、今の現実のまえには、一顧の価もないし、むしろ呪わしい気がよけい胸を噛むばかりである。良人はろくな手柄も立てないうちに戦場で足腰も立たないような不具者になってしまった。身分の低い足軽なので、御奉公を退くと、もう半年目から生活にも困り、結局、百姓でもするしかなかつたが、その百姓仕事さえ出来ない今の良人であった。

でも、女手で。しかも二人の子を抱いて、桑を摘み、畑を打ち、麦を踏み、数年の貧乏と闘っては来たが、

(この先? ……)

と考え出すと、さすがに、この細腕と根気がつづくかどうか、

彼女の女ごころは、納屋の闇のように、凍こごえてしまう。

晩の糧かてに、乏しい粟あわと、大根の切干きりほしとを、箆ざるに入れて、彼女はやがてそこから出て来た。まだ三十前なのに、日吉を生んでからは、産後たが崇たつて、いつも青い桃のように見える彼女の顔いろだった。

「——おつ母」

日吉の声だ。

「おつ母ア……」

と、家の横を廻つて、自分の姿を探しているらしいのである。

彼女は、ニコと笑った。

そうだ！

自分にも一つの光明はある。あの日吉を育てることだ。はやく大きくして、あの気の毒な不具の良人に、一日一合のお酒でも上げられるような良い跡取り息子に仕上げることだ。

彼女はそう思つて、急に心も明るくなり、

「日吉やあ。ここだよ。——母はここにおるがのう」

と、大きく答えた。

母の声に、日吉は飛んで来た。そして、ぎる笊を抱えた母の肩へぶら下がって、

「おつ母。今日なあ、おつ母の知ってる人に会ったよ、河原で——」

「誰にの」

「お侍だよ。藪山やぶやまの加藤つていえば、おつ母が知つてるといった。——ああ、それから、達者で暮しているかつて、おらの頭を撫でて訊いたよ」

「じゃあ、弾正だんじょうさんじゃろ」

「戦いくさから帰つて来た大勢の武者の中に交じつてね、良い馬に乗つてたよ。——あれ、誰だい？」

「だから、今いうたでないか。光明寺の藪山やぶやまに住んでいる弾正さんだよ」

「弾正さんて」

「御器所ごきその妹の——許婚いいなずけじゃがの」

「許婚つて？」

「ま。執しつこい」

「だって、分んねえだもの」

「今に、夫婦になる、良人のことじゃがな」

「なアんだ。……じゃあ、おつ母の妹のお聾むこさんのことけ」

日吉は、何と解したか、クツクツ笑った。彼の母は、その白い歯と、小ましやくれた唇を見ると、わが子ながら、早熟な——と小憎らしく思うのだった。

「おつ母。納屋ん中に、これつくらいな、刀があつたらろ」

「あるが、どうするのじゃ」

「貸してくんないか。どうせ、あんなボロ刀、お父とっさんも、もう使やしないから」

「また。戦遊いくさあそびか」

「……いいだろ」

「いけません」

「なぜ」

「百姓の子が、刀など、持ち馴れたとて、どうなろうぞ」

「おら、侍になるんだい」

日吉は、駄々ツ子足を踏んで、一文字に唇くちをむすんで云った。

——彼の母は、じつと睨ねめすえているうちに、その眼を涙でいっぱいにしてしまった。

「……阿呆あほうっ」

突然、そう叱ると、母はあわてて涙を拭き、片手に、彼の手を

拉^{らっ}して、

「少しは、水など汲んだり、姉の手助けなどしなされ」

ぐいぐいと曳いて、土間口の方へ歩き出した。

「嫌^{いや}でい。嫌^{いや}でい」

日吉は、母と争つて、手と手を引つ張り合いながら叫んだ。しかし、地に踵^{かかと}を踏んばつても、彼の母は、彼の歩みを、自分の意志のほうへ引き寄せずにおかなかつた。

「——やだよウっ。嫌^{いや}だつてえに。おつ母の馬鹿。嫌^{いや}でい！」

すると、竹窓の中から、老人のような咳^{しわぶき}声^{こゑ}が、炉^{いろ}けむりと一緒に洩れてきた。

父の声を聞くと、日吉は首をすくめて黙ってしまった。父の弥

右衛門はまだ四十がらみであつたが、長年、廃人同様な起臥おきふしをしてるので、咳せきの声まで、五十過ぎの人みたいに皺しわが唄うたれていた。「……吩咐いいつけてやりますぞ。余り母を困らすと」

母は、そつと手を弛ゆるめて云つた。

解かれた手を顔へやると、日吉は眼をこすつて、しゆくしゆく泣き出した。母はこの駄々坊を持って余し顔に、

(この子はまア……)

と見つめているうち、自分も共に、泣いてしまいたくなつた。

「——お奈加なか、お奈加。なにをまた日吉と喚わめき合っているのだつ。見ツともない。自分の子と争いさつて、泣いているたわけがあるか」

暗い屋根裏の見える窓の内でもた——病人特有な、癩かんのたかい、

弥右衛門の声だった。

「あなた。——少しこの腕白を叱ってください。今も今とて」

弥右衛門に呶鳴どなられると、彼の母は、そこから窓越しに、日吉のいけないことを、一息に訴えた。

すると、家の中の弥右衛門は、げらげら笑って、

「何のこった、納屋の中に抛ほうりこんである俺の古刀を、日吉が、持ち出そうというだけか」

「そうなんです」

「戦いくさの真似事まねごとでもする気なのだろう」

「それがいけないんです」

「男の子だ。弥右衛門の子だ。いけないことがあるものか。出し

てやれ、出してやれ」

「……………」

お奈加は、まあと、呆れ顔あきを窓へ向けたまま、恨めしそうに唇を噛んで、眼に涙を溜ためていた。

(どうだ!)

日吉は、勝った気持ちを、高慢そうに眼にあらわした。——だが、ほんの瞬間だった。その眼は、母の青じろい頬をつたう涙を見るに及んで、すぐ萎しぼんでしまった。

「おつ母、泣くのお止しよ。おらはもう、刀はいらないや。——姉はしえに水を汲んでやろうつと!」

迅はしつこい日吉は、すぐ土間口のほうへ駈けて行った。土間は広

く、一方は炉部屋の上がりがまち框、一方は台所だった。

十一歳ばかりの女の子が、猫背を立てて、火吹竹で泥へつつい竈の口をふいていた。

「姉え。水汲んでやろか」

日吉が、飛び込んで来ると、おつみは、びくつとした眼を上げた。——そして何をされるかと、恟おどおど々として、

「いいがな。いいがな」

と、顔を振った。日吉は、水みず甕がめの蓋ふたをあけて見て、

「オヤ。水なんか、いっぱい汲んであるじゃねえか。味噌すを搗つてやろか」

「味噌など搗ってくれんでいいわ。邪魔な——」

「邪魔だつて、おらは、用をしたいんだ。用をさせろ。漬物出してやろか」

「今、母さんが、出しに行つたがな」

「じゃ、何するんだ」

「ぬしやあ、大人おとなしくしていたら、母さんも欣よろこぶによ」

「こんなに大人しいじゃないか。……なんだい。まだかまど竈の火がつかねえでやがる。おらがつけてやる。どけ、どけ」

「いいつてえに！」

「どけつたら」

「あれ、そんなことするで、消えちもうた」

「嘘つけ。自分が消したくせに」

「嘘。嘘。ぬしが……」

「うるせい」

日吉は、燃えない薪まきに焦じれて、そこを離れるついでに、おつみの頬を、ぴしやりと、一つ打った。

おつみが、大きな声で、泣きながら奥へ云いつけた。弥右衛門のいる炉部屋とは近いので、すぐ父の声が、日吉の耳を痺しびれさせた。

「こらっ、姉を打ったな。男のくせに、女を打ったな。——日吉っ。ここへ来い。ちよつと、これへ来い」

壁の陰で、日吉は唾つばをのんだ。そして告げ口したおつみを睨みつけた。後からはいつてきた母は、またしても——と呆れ顔に、

土間口で立ち止まっていた。

父親は怖かった。世の中で怖いものの第一が父親だった。

日吉は、かしこま畏つて、

「何ですか」

と、弥右衛門の顔を仰いだ。

木下弥右衛門は、炉を前に坐つて、麻箱にひじ肱をついていた。

うしろの壁には、起居につかう杖が立てかけてある。かわや廁へ通う

にも、その杖にすがらなければ歩けない彼であつた。

常に坐っている彼の傍らにある麻箱は、そういう不具な体でも、いくらかの家計を助けるために、気が向くと、麻をつむ紡いでは、それへ溜めておく内職道具の一つであつた。

「日吉」

「はい」

「あまり母親おふくろに世話をやかすじやないぞ」

「え」

「姉に向つて、悪たいをつくのもよくない。男のくせに、女どもを相手に、何という体ていだ」

「何も……何もおらは」

「だまれ」

「……………」

「わしには耳がある。おまえが何処で何をやっているかぐらいのことは、坐つていても知っている」

日吉は、心のうちで顫おのいた。父のことばは、父のいう通りに思つた。

だが弥右衛門は、この子が可愛くて堪らなかつた。——戦場で片輪となつた、この脚、この手は、二度と前の体に回かえすことはできないが、この子を通して、自分の血は百年先へも生かすことができるかと信じるからである。

(……だが?)

と弥右衛門はまた、日吉を見てみると、情けない心地がした。子を見ること親に如しかず——というが、いかにひいき目に見ても、この見るからに奇異な顔した洩はなたらしの腕白が、親以上の者になつて、親の名折れを雪そそいでくれようとは——考えても考えら

れなくなるからであつた。

とはいえ、これは一粒だねだ。弥右衛門は懸けられない期待を、無理にも日吉に懸けているのだつた。

「納屋の刀を、欲しいのか。——日吉」

「ううん……」

日吉は、首を振つた。

「欲しくないのか」

「……欲しいことは、欲しいけど」

「なぜ正直にいわぬ」

「だって、おつ母^{かあ}が、いけないっていうんだもの」

「女は、刀嫌いだからな。よしよし、待っているよ」

弥右衛門は、坐つたまま、ぐるりと後ろを向いた。そして壁の杖につかまり、ちんばを曳いて奥へはいつて行つた。

この家は、貧乏百姓に似ず、まかず間数はたくさんあつた。日吉の母の縁者が住んでいた家だからである。弥右衛門の方には、ほとんど身寄りがなかつたが、母の方の親類にはまだどうにか暮している家が何軒かあつた。

(何しに行つたんだろ?)

日吉は、叱言こごとをいわれないのが、かえつて気味悪かつた。

弥右衛門はやがて、一腰の脇差を取り出して戻つて来た。それは納屋の隅に錆びさびびている物とは違つて、袋にはいつていた。

「日吉。これはおまえの物だ。欲しければ、いつでも持て」

「え。おらの……？」

「だが、まだまだ、今のおまえでは、この刀は差せまい。差しても、人が笑う。——これを差して歩いてても、人が笑わぬようにはやくなれ。いいか、早くそうなってくれ」

「……………」

「この刀は、祖父おじいさんが、鍛うたせたものだ」

弥右衛門は、眼をねむって、ぽつりぽつり語り出した。

「祖父おじいさんは、百姓だった。その百姓から身を起して、一旗挙げようとした時に、これを刀鍛冶に鍛うたせなすった。その頃まで、木下家の系図という物もあつたらしいが——いっちょ一朝ちょうにして、焼いてしまった。祖父さんは、事を起す前に、領主に襲われて、討

死してしまいなすった」

「……………」

「そういう人が、わしの子供の時分には、たくさんあつた。乱らんせ世いの慣ならいだ」

弥右衛門は、眩つぶやくようにいう。

いつのまにか、隣の部屋には燈心ともが灯ともっている。この部屋は、
炉ろの焰ほのおで明るかった。

日吉は、赤い焰を見つめながら父親のことばに聞き入っていた。
——弥右衛門もまた、日吉に分つても分らないでも、こういう真
実を吐く相手には、妻でもいけないし、女の子のおつみでもいけ
なかつた。

「——木下家の系図があればのう、おまえにも、分るように話せるが、……系図は焼けてしまつてない。だが、生きた系図は、おまえにも伝えてある。……これじゃ」

弥右衛門は、手頸てくびの青い静脈じょうみやくを撫でていった。

——血だぞ。

と教えたのである。

日吉は、頷うなずいた。そして自分の腕くびを握つてみた。自分の体にも、青い血管がある。はつきりと分つた。これほど確かな——
しかも生きている系図はない。

「祖父おじいさんから先は、どんな人が御先祖だったか知れぬが、その遠い御先祖のうちには、偉い人もいたに違いない。多分、お侍も

いたろう。学者もいたろう。——そういう方たちの血が流れ流れて、わしからお前にも、伝わっているわけだ」

「……ええ」

日吉はまた、うなず頷いた。

「だが、わしは偉くない。あげくに、この通りな不具者だ。……だから日吉、貴様は偉くなってくれよ」

「……お父とっさん」

日吉は、円い目をあげた。

「偉くなるって、どんな人になったら偉いの」

「それやあ、き限りがないが……。せめて、槍一筋の武士になればなあ。……この祖父さんの遺物かたみをさして歩けるようになってくれ

れば——わしは死んでも心残りが無いのだ」

「……………」

日吉は、当惑したように、黙ってしまった。自信のない顔つきである。父の眼から眼を反^そらして、きよときよとしていた。

七歳の子どもだ。無理もない——と思いながらも、弥右衛門は、その頼りない挙動を見ると、

（やはり血ではない、境遇かなあ？）

と、心のうちで嘆息^{ためいき}が洩れるのだった。

先刻^{さつぎ}から、日吉の母は、膳^{ぜん}ごしらえをして、良人^{おとと}の話がやむのを、隅の方で黙って待っていた。

彼女の考えは、弥右衛門の考えとは、あべこべであった。

(侍になれ。偉くなれ)

と、子を励ます良人を、彼女は恨めしくさえ思った。そして密ひそかに、

(こんな子に、無理なことばかりを。……日吉や、お父っさんは、御無念なので、あんなことばかりかきうけれど、おまえまでが、お父っさんの轍てつを踏んではいけないよ。——愚か者なら愚か者でよいほどに、真面目に働いて、田の一枚でも持つような百姓になつてくだされや……)

胸いっばいに、子の行く末を、祈るのだった。

「さ、夜食にしようぞ。日吉もおつみも、寄つたがよい」

彼女は、子たちの父を中心に、炉のまわりへ、箸や椀わんをくばつ

た。

「飯か」

いつものことながら、弥右衛門は貧しい稗粥ひえがゆの鍋なべを見るたびに、さびしい顔になった。妻にも子にも、満たしてやり得ない自責を——男親として、人知れず苦しむらしかった。

だが、日吉もおつみも、一椀の稗粥に会うと、頬も鼻も赤くして、美味うまそうに啜すすり合い、貧しさなどは思わなかった。これ以上の富貴は知らないからである。

「新川の茶わん屋様から味噌もいただきであるし、乾菜ほしなも乾栗ほしぐりも、納屋に蓄えてあるほどに、おつみも日吉も、たんと喰べたがよいぞや」

子達の母は、そう云いながら、不具の良人が、家計を心配しないように、気を遣^{つか}つていた。

そして彼女自身は、二人の子が腹いっぱい喰べ、良人も十分に済ました後でなければ箸を取らなかつた。

夜食がすむと、間もなく寝てしまう。何処の家でもそうなのだろう。夜の中村は真の闇だった。

——ところが、闇夜になってから、野や道を、人の蹠^{あしおと}音がしきりとする。近国で戦^{いくさ}がある時ほど、そうだった。

野武士の群れだの、軍馬だの、落^{おちゆうど}人だの、密使の往来などが、夜を好んで動くのである——

「ウ、ウウム。……ウウム」

日吉は、よく魘うなされた。

眠りの中に、闇夜の跫音あしなが聞えるのか、天下の動乱が、彼の夢を、怯おびえさせて熄やまないのか。

或る夜などは、側に寝ていたおつみを蹴とばし、おつみがびつくりして、泣きだすと、

「八幡つ、八幡つ、八幡つ」

と呶鳴なだつて、いきなり寢床から跳ね上がり、眼ぎめて、宥なだめても、まだ寢呆ねぼけて、何か昂たかぶり続けるようなことがままあつた。

「疖かんの虫だ。この項うなじに、疖やいとの灸をすえてやれ」

と、弥右衛門はいう。

だが、日吉の母は、

「瘡かんやいとの灸は、いくらすえたか知れませぬ。あんな子に、あなたが、刀を見せたり、御先祖のはなしなど聞かせるから、いけないんですよ」

と、いった。

×

×

×

そのうちに、この一軒にも、大きな変りが見舞った。

翌年——天文十二年一月二日に、弥右衛門が病死したのである。人間の死。

というものを、日吉は初めて、父の死顔に見たが、涙はこぼれなかった。葬式の中でも、飛んだり跳ねたり、遊んでいた。

その一周忌も過ぎて、翌年の九月頃。

日吉が九歳ここのつの秋だった。

この一軒にまた、人がたくさん集まった。餅をついたり、酒をのんだり、めでたいめでたいと歌ったりして夜を更ふかした。

親類の一人が、

「日吉、今夜のあの賀むこどのが、おまえの次のお父さんになる人だ。

——弥右衛門どのとも、以前からの友達で、やはり織田家どうぼで同朋衆うしゆうを勤めている筑阿弥ちくあみどのだ。よいか、今度のお父さんにも、親孝行をせにやいかんぜ」

と、彼に云い聞かした。

日吉は、餅を喰べながら、奥を覗きに行った。いつになく、母がきれいに化粧して、知らない小父さんと並んで俯向うつむいていた。

それを見ると、欣うれしくなつて、

「八幡、八幡、花はな抛ほうれ」

と、日吉は、その晩も誰よりもはしやいでいた。

香こう炉ろ変へん

また、夏めが巡めぐつて来た——

とうもろこしの背が高くなつた。日吉や村の悪童連は、毎日、
庄しょう内ない川がわで泳いだり、田で赤蛙を捕つて喰つたり、裸はだか体かで暮くし
た。

赤蛙の肉はうまい。朝鮮蜂の尻しり袋ぶくろとは比較にならない。疝かん

の薬という母に、喰べることを教えられてから味をしめた物である。

だが、そうして彼が遊びに熱していると、間もなくきつと、

「——猿ウ。猿ウつ」

と、探しに来る者があつた。

義父ちちの筑阿弥ちくあみである。

弥右衛門なの亡あとい跡むこへ、聳むことして入にゆうふ夫ふした筑阿弥は、ただ働く人ひとだつた。一年たたないうちに、家計けいもだいぶ直ちつて、飢うえる日はなくなつた。

その代り、日吉も、家にいれば、朝から夜まで、手伝いをさせられた。

ちつとでも、怠けていたり、悪戯いたずらでもしていようものなら、筑阿弥の大きな手は、すぐ日吉の顔を撲はたいた。日吉は、嫌でたまらなかつた。仕事よりも、義父ちちの眼から少しの間でも遁のがれていたかつた。

毎日、筑阿弥はきつと午睡ひるねをした。日吉は得たりとばかり、その隙間に抜け出すのである。やがて筑阿弥が、畑や堤に姿を現わして、

「猿ウつ。うちの猿めは、何処へ行ったかあ」

と、探しに来ると、日吉は、何ものも捨てて、とうもろこしの中へ滑り込んでしまった。

探しあぐねて、筑阿弥がこのこ帰って行くと、日吉は躍り出

して、

「わあい」

と凱歌をあげ、晩に帰れば、夕飯も与えられず、仕置にあうことも、その時は頭にもなく、また、遊び狂うのだった——今日はそういうわけには行かなかった。

「野郎」

筑阿弥は、とうもろこしの中を、あっちこっち彼方此方、こわ恐い目めをして歩いて来た。

「こいつはいけねえ」

と、考えたので、堤をこえて、河原地の方へかくれた。

すると、一人ぼっち、おふく於福が堤に立っていた。夏でも於福だけ

は、ちゃんと着物を着て、水にも泳がず、赤蛙も喰べなかつた。

筑阿弥は、彼を見かけて、

「アア茶わん屋の坊っちゃんですか。うちの猿めは、何処へ隠れたでしょうか」

と、^{たず}訊ねていた。

於福は、

「知らない」

と、何度も首を振っていたが、筑阿弥^{ちくあみ}が、

「そんな嘘をいうと、てまえがお宅へ伺った時に、旦那に吩咐^{いいつ}けますぞ」

と、^{おど}脅したので、気の小さい於福はすぐ顔いろを変えて、

「あの舟ん中へかくれて、とま苦をかぶっているよ」と、指さした。

小さい河舟が河原に引きあげてあつた。筑阿弥がそこへ駆け寄ると、河童かつぼのように、日吉が中から跳はね出した。

「ヤ。こいつ！」

筑阿弥は跳びかかって日吉を突きとばした。突ンのめつた日吉は、河原の石に唇くちを打って、齒から血を出した。

「痛えっ」

「あたりまえだ」

「ごめんよ。ごめんよ」

「猿め。今日という今日はもう……」

二ツ三ツ頭を撲いた末、筑阿弥は彼よりも何倍も優つた力で、日吉の体を吊し上げ、わが家のほうへ駈けて行つた。

猿々と、憎悪して呼んでいように聞えたが、筑阿弥は何も、日吉がそう憎いわけでもなかつた。貧乏を直そうと焦心するために、誰へもやかましくなり、日吉の性質をも、強いて矯め直そうとするのだつた。

「もう十歳にもなりおつて。……この野郎、この野郎」
引つ吊して、家に帰ると、また二つ三つ拳をくらわせた。

彼の母が止めると、

「おまえが甘いからいけないのだ」

と、どなりつけ、姉のおつみが一緒になつて泣くと、

「何を泣く。わしの折檻せつかんは、この拗ね猿すを良うしてやろうと思
うから撲るのだ。この世話焼かせめ」

と、また撲った。

日吉も、初めは、撲られる度に頭をかかえて、謝あやまっていたが、

「なんだい、なんだい、他所よそから来やがったくせにして、お父さ
んみたいな顔して、威張つてやがら。……おらの、おらの、ほん
とのお父さんは」

と、囁うわごと言みたいに、泣き泣き悪たいを云い出した。

彼の母は、

「これっ……そんなことを」

と、真っ蒼になつて、彼の口を抑えたが、筑阿弥は、

「この早熟め」

と、激怒して、今度はゆるさなかつた。裏の納屋の中へ抛りこんで、晩飯もやってはならぬぞと云つた。

納屋の中から、暗くなるまで、日吉の喚く悪たいが聞えた。

「出しておくれよつ。……ようつ。……出しておくれつたらつ。

……ばか野郎つ。唐変木つ。……みんな聾つらしてけツかるな。

出してくれなければ火をつけるぞう」

そして、わあん、わあん、と吠えるように泣いていたが、夜半近くにになると、泣寝入りに寝てしまった。

すると、耳もとで、

——日吉や。日吉や。

と、呼ぶ声がした。

彼は死んだ実父の夢を見ていたので、うつつに、

「お父さん！」

と、叫んだが、眼の前に立っている姿を見ると、それは母のおなか奈加だった。

母は筑阿弥の眼をしのんで持って来た食物を与えて、

「さ。これを喰べて、朝まで大人しくしておいで。朝になったら、お父さんにお詫びしてあげるから」

と、いった。

日吉は、かぶりを振って、母のふところへしがみついた。

「嘘だ、嘘だ。おらには、お父さんはねえやい。お父さんは、

死んじまったじゃねえか」

「これ、またそんなことをいう。なぜおまえは、そう聞きわけがないのだろ。いつもいつも、私があんなにいつて聞かせておくのに」

彼の母は、身を切られるように、辛かった。けれど、母がなぜ身を慄ふるわせてそう泣くのか、まだ日吉には分らなかつた。

夜が明けると、日吉のことで、筑阿弥は彼の母を朝から呶鳴りつけていた。

「おれの眼をぬすんで、夜半よなかに飯をくれてやったろう。そういう親馬鹿だから、いつまで、あいつの根性は直りやしないっ。おつみも、今日は納屋のそばへ寄つちやあならぬぞ」

夫婦の中で、小半日も、何か揉めていた様子だったが、そのうちに日吉の母は、独りで泣く泣くどこかへ出て行つた。

陽が西になりかけた頃、お奈加は帰つて来た。光明寺こうみょうじの住僧がひとり一緒だった。

(何処へ行つていた?)

とも訊かず、筑阿弥はまずい顔して、おつみを相手に働いていた外の蕙むしろに坐りこんでいた。

光明寺の僧は、

「筑阿弥ちくあみどの、きよう御家内が見えて、こちらの息子どのを、寺へお小僧に出したいとの頼みじやが、御同意かの」

と、訊ねた。

筑阿弥は、黙ってお奈加のほうを見た。彼女は背戸の外で、両手を顔に当てて泣いていた。

「ふうむ。……それもよかろうが、寺入りには、証人も要^いるが」

「幸い、藪^{やぶ}山^{やま}のすそに住んでござる加藤殿の嫁御は、こちらの御内儀とは、御姉妹^{ごきょうだい}じゃということであるしな」

「あ。加藤へ行つたのか」

筑阿弥は、なおさらほろ苦い顔をしたが、日吉の寺入りには、反対しなかった。

「よろしいように」

と、ひと事のように、彼はおつみへ用をいいつけたり、農具を仕舞ったり、日暮を忙しげに働き出した。

その間に、日吉は納屋から出されて、母に懇々こんこんと何か諭さとされていた。

一晩中、納屋の蚊に食われどおしでいたので、彼の顔は大きく腫はれ上あがっていた。寺へ奉公に行くのだと聞かされた時、日吉はふと、涙を溜めたが、すぐ元気になって、

「お寺の方がいいや」

と、いった。

明るいうちにと、光明寺の住僧は、日吉に支度させて、連れて出た。

筑阿弥ちくあみも、さすがに少し、淋しい顔して、

「猿。お寺へ上がったら、心を入れ換えて、よう修行せねばいか

ぬぞ。すこしは、読み書きも習うて、はやく一人前の坊さんになつて見せい」

と、いった。

日吉は、うんと一つ、うなず頷いたきりだった。けれど、垣の外へ出て、いつまでも立つて見送つていた母の姿へは、何度も何度も振り返つた。

寺は、村外れから少し先の、やぶやま藪山という丘ほどな高い土地の上にあつた。にちれんしゆう日蓮宗のしょうがらん小伽藍で、住職は老年で寝たきりだし、若い住僧が二人して維持していたが、戦乱つづきで、村はひ疲弊へいしているし、だんか檀家も離散するばかりなので、形こそ違うが、こゝも貧乏の外ではなかつた。

だが、少年日吉は、生活が変ったただけでも、刺戟になったとみえ、生れ変ったようによく働いた。機転はきくし、はきはきしていた。住僧たちも可愛がって、

「こいつは仕込んでやろう」

と、毎夜、手習させたり、小学や孝経を教えたりした。記憶力も至つていい。

「おい。日吉。きのう途中でおまえのおつ母さんに会ったから、日吉もよくやっているといつておいたぞ」

住僧の一人がいうと、日吉も欣うれしそうににこりと笑った。――

母の悲しみはよく分らないが、母の歡びは、そのまま彼にも歡びだった。

けれど、そういう神妙な状態も一年とはつづかなかつた。十一歳の秋頃になると、日吉には、この伽藍がらんも狭くなつて来た。

二人の住僧が近郷へ托鉢たくはつに出て行くと、日吉は、隠しておいた木剣や、手製の采配さいはいを腰に差し、

「やアい、敵の奴ども。どこからでも攻めて来い」

と、麓ふもとで待機まちしている戦遊いくさあそびの友達へ向つて呼び立てた。

時刻でもないのに、突然、鐘楼の鐘がごんごん鳴った。

寺の丘から、石が飛んでくる。瓦が落ちてくる。

麓ふもとの者は、驚いて、

「何じゃ、何じゃ」

寺の丘を仰ぎ合つた。

畑に、働いていた百姓の娘に飛んで来た瓦が中^{あた}つて大怪我をしたりした。

「……光明寺のチビ僧めが、またおらどもの腕白をあつめて戦遊びをやりおるな」

麓の家の人たちは三、四人して登って行つたが、本堂の前に立つと、開いた口がふさがらなかつた。

本堂は灰だらけだ。外陣も内陣も乱脈^{てい}な態である。

香炉^{こうろ}は割れて落ちている。

旗にでも使つたのか、金欄^{きんらん}の帳^{とばり}は裂いて棄ててあるし、太鼓の皮はやぶれている。

「庄坊やアい」

「与作やアい」

親たちは、子を探したが、チビ僧の日吉も見えなければ、腕白たちも、忽然こつぜんとみな姿をかくして見当らない。

「この寺の猿と遊ぶと、もう家へ入れないぞ」

親たちが、麓へ降りて行くと、すぐにまた、わアつと、本堂が震動し、藪やぶがうごき、石が飛び、鐘が鳴り出した。

——日が暮れると。

わアん。わあん……

と、手を折つたり、瘤こぶをこさえたり、血だらけになつて降りて行く子が、多勢の中にはきつと二、三人ずつ出来た。

一日中、托鉢に歩いている二名の住僧は、毎度尻をもちこまれ

るので、もうさじを投げていたが、その日は、本堂へ立つと、

「……あつ」

顔見あわせて愕然がくぜんとした。

内陣の前にある大香炉が真つ二つに割れているのだ。

この大香炉は、寺にとつて、今のところ唯一の檀家だんかである新川の茶わん屋捨次郎が、つい三、四年ほど前、

(これは伊勢松坂のさるお方から、特に焼いてくだされた物。わしとは深い御縁があるので、生き遺物がたみとも思し召し、思い出の地の山水を絵付えつけして、特に丹精をこらして製つくられた香炉じやが、寺に納めておけば、末代まで長く什じゅうほう宝として伝わるであらうか

ら——)

と、云い添えて、寄進してくれた物なのである。

平常は、箱に納めて、珍重していたが、つい七日ほど前、その茶わん屋の御寮人様が、仏参に見えるといっているので、その折、出して用いたまま、つい仕舞いもせずにあつたのである。

それが割れているのだ。

「……?」

住僧は、顔いろを失った。老師の耳に入れたら、病が重るやまらうと、そこまで心配は走った。

「猿じゃな」

「そうだ。他にこんな悪戯をする童はわづらない」

「どうしてくれよう」

二人の住僧は、すぐ日吉を引き摺^ずつて来て、香炉を突きつけた。日吉は、この本堂で暴れたのは自分だけではないし、自分がした覚えはなかったが、

「ごめんなさい」

と、謝った。

謝られると、住僧はかえってかつと怒った。日吉の天性の顔つきが、平気でいっているように見えたからである。

「この外道^{げじょう}め」

二人がかりで、日吉をうしろ手に、縛り上げてしまった。本堂の丸柱へ、日吉はくくりつけられた。

「幾日でもこうしておいてやる。鼠にでも喰われてしまえ」

と、住僧は罵ののしつた。

だが、日吉には毎度のことだった。辛いのは、翌る日になつて友達が来ても、遊べないことだった。

「やい、縄を解いてくれよ。解かないと、ぶん撲るぞ」

日吉は脅おどしたが、日吉さえ罰せられているのを見ると、みな逃げて行つた。

たまたま、参詣にのぼつて来る年よりや村の女たちも、

「あれ、猿が」

と、指さして、

「よい気味や」

と、笑い合つたり、からかつて逃げた。

いつとなく彼の小さいたましいは、今にみる、今にみる、と眩つぶやくことを独り慰めにしていた。

また、その小さい肉体は、伽藍がらんの太柱を背に背負つて、かえつて体じゆうに、沸たぎり立つような強い血をよび起した。

その二つのものを、唇にむすび、自分の憂うき目めへ向つて、

「なにくそ」

と、不敵な顔を作つた。

柱によりかかつて、彼は睡つてしまった。——そして自分の涎よだれに目がさめた。

恐ろしく日が永い。

日吉は、退屈してきた。

そのうちに彼はふと、まだ眼のまえに突きつけたまま置いてある——二つに割れた陶器の大香炉に眼をすえ出した。

香炉の底には、

五郎大夫ごろうだゆう

祥瑞シヨーンズイ之製これをつくる

と、小さい文字で作者の名が記してあつた。

瀬戸村せとむらは近いし、尾張付近は陶器の産地である。そんな物はおとより何も彼の興味をひきはしませんが、その大香炉の腰に描いてある藍あいえ絵の山水が、

「どこだろ？」

と、退屈な眼に、想像をほしいままにさせたのである。

白磁はくじに藍一色で画かれている山や石橋や、楼閣や人物や——そして日本では見たこともない船の型や人間の着物が——ひどく彼の頭をなやました。

「どこの国だろ？」

日吉には、分らない。その分らないのを、少年の旺さかんな智慾は、飽くまで知ろうとし、想像を駆けめぐらした。

「……こんな国つて、あるのかしら？」

思いつめているうちに、彼の頭にひらめいたものがある。それは何日いつ、誰に、教えられたか、聞いたか、彼自身も忘れていたのであったが、苦しまぎれに飛び出した記憶であった。

「そうだ。唐からだ！ ……。唐の国の絵だ」

日吉はただ一人で、愉快だった。染付そめつけの絵を見ていると、たましいは唐の国へ飛んで遊んでいた。

日暮れがた——

また、托鉢たくはつから帰って来た二人の僧は、日吉が泣きしおれているかと思いのほか、前へ行くと、にやりと笑ったので、

「もういかん。折檻せつかんもむだなことだ。こいつは末怖ろしい。親元へ帰したがようござろう」

と、嘆息してしまった。

寺入り証人の加藤家は、この藪山やぶやまのすそなので、晩になると、僧の一人は、日吉に飯を与えて、山から連れて降りた。

たいほう
大鵬

加藤弾正は、短檠の灯を背にして、一間に寝転んでいた。明け暮れ、戦の中に身をおく武人は、たまたま、家に帰つてくつろぐ日も、身をつつむ家居のすべてが、余りに和やかに過ぎて、かえつてこの平和や居心地に馴れることが恐かつた。

「おえつ」

「はい」

と、返辞は遠く台所のほうです。つい一兩年前に、結婚したばかりの新妻であつた。

「誰か……枝折をたたいておるが」

「また、栗鼠^{りす}ではございませぬか」

「いや、訪^{おとず}れらしいぞ」

「……ほんに」

おえつは、手を拭きながら、門口へ出て行つたが、すぐ引き返して、

「光明寺のお坊さまが、日吉を連れてお見えなさいました」

と、瑞^{みずみず}々しい眉に、ふと愁^{うれ}いを見せながらいった。

弾^{だんじょう} 正は聞くと、

「ははあ、さては猿に、お暇^{いとま}が出たとみえる」

と、予期していたように笑つた。

この加藤家と、中村の木下家とは、当然、親戚の間であつた。

妻の姉の息子というので、寺入りの時、証人に立っているので、わけ事情を聞くと弾正は、

「僧侶に不向きとあれば、ぜひもないこと。当家から中村の親元へ帰すとしましよう。お世話がいもなく、御迷惑ばかりをかけて

――」

と、夫婦して詫びを述べ、日吉の身は、その晩に引き取った。

「では、親御へは、そちら様からどうぞ悪しからず」

光明寺の僧は、肩の荷を降ろしたように帰って行った。

日吉は、ぽつねんと置き残されたが、物珍らしげに、室内を見まわし、

「誰の家だろ？」

と、考えていた。

寺入りの時は、直じかに寺へ連れて行かれたので、ここへは立ち寄りなかつた。また、近くに親類があると知ると、辛抱がし難くなるであろうとおえつが嫁いで来ていることも、彼の耳へは聞かせてなかつた。

「小僧。晩の飯は喰べたか」

やがて、弾正が前へ来て坐りながら、にやにやいう。

「喰べた」

かぶりを振ると、

「菓子を喰え」

と、甘い物をたんとくれた。

日吉は、ボリボリそれを喰べながら、長押ながしの槍を仰いだり、具ぐ足櫃そくびつの紋を眺めたり——それから眼のまえに坐っている加藤弾正の顔を、穴のあくほど、じろじろ見つめたりした。

(この息子、すこし足らないのかな?)

弾正は疑った。なぜならば、余りに自分を見るので、試みに、彼も目をこらして、睨ねめ返したところが、日吉の目は、横よこに反らしもしなければ、俯うつむ向きもしないのである。——といって、まったくの白痴ほど無反射でもないが、ただにやにやと愛嬌をたたえしているからであつた。

「はははは」

彼の方が、先に目を反そらしてしまひながら、

「いつの間にか、大きくなつたなあ。日吉、わしの顔を覚えているか」

そういわれて、日吉はかすかに思い出した顔つきだつた。——これは七歳の頃、河原で頭を撫でてくれた小父さんなのだ。

武人の慣いとはいえ、良人の弾正は、ほとんど、清洲きよすの城内か、戦場で寝泊りしていた。

結婚してから、まだ日も浅いが、妻とふたりで、家庭を楽しむような一日すら滅多にない。

その良人は、たまたま、きのうから家に帰つて、休養していた。そして明日はもう清洲の城へ詰め、また幾月かは、この家で共に暮す日もない——と思つていた折も折なのである。

「……ま。困った子が」

と、おえつは当惑の眉をひそめた。

棟は離れているが、この小屋敷には、良人の老母もいるし、家族もいる。

(こんな童わっぱが、姉の子にいるのか)

と、思われるのも、嫁の身には、肩身の縮む気がするのだった。だがその日吉は、良人の居間で、先刻から頓狂な声を出しつづけていた。

「あ！ じゃ小父さんは、いつか河原で、大勢のお侍と一緒に、馬に乗ってたろ。あのお侍の中にいたんだろ」

「ウム、思い出したか」

「覚えてらい」

急に甘たれ声で――

「そんなら、おらの家と親類だもの。おらのおつ母さんの妹と、

おじさんと、いいなすけ許婚だったんだろ」

と、なれなれ馴々しくなる。

かひ下婢を相手に、茶の間へ、食膳を出していた彼女は、日吉の言

葉づかいや、野良で出すような大声に、ひやひや冷々していたが、

「もし……お食事の支度ができましたが」

と、ふすま襖をあけて、良人を呼んだ。

見ると、良人の弾正は、日吉を相手に、腕角力を取っているのだ。日吉は顔を真っ赤にして、蜂のように尻を立てているし、弾

正も子どもみたいにそれに応じていた。

「……あなた」

「飯か」

「汗が冷えますから」

「待て。……いや、おまえ先に独りで喰べてしまえ。この小僧、すぐ本気になるからおもしろい。はははは、どうもおかしな奴だぞ」

と、夢中である。

日吉の天てん真しん爛らん漫まんに、弾正はひき込まれている姿だった。馴

れやすい日吉はもうこの叔父さんを手玉に取って遊ばせていた。

指人形だの物真似だの、子ども仲間でする遊戯を、次々にやって、

彈正に腹をかかえて笑わせた。

翌日、清洲城へ立つ時、彈正は鬱ふさいでいる妻へ云い残した。

「親どもが承知なら、屋敷へ置いて養つてくれてはどうだ。物の役には立つまいが、ほんものの猿を飼うよりは増しだろう」

——だが、おえつは欣よろこばなかつた。枝折戸しおりどまで、良人を送り出しながら、

「……いえ、やはり中村の姉へ帰しましょう。もしお姑かあさま様などへ、粗相そそうがあるといけませんから」

「それやあ、どつちでも、其女そなたのいいようにするがよいが」

一步、家庭を出れば、もう生きて帰るか帰らぬか、心は主君と戦いくさにのみあつて、妻には、余りにも素気すげなくさえ見える良人だつ

た。

「あんなにも、男は、功名ばかりが、大事なものかしら！」

おえつは、後ろ姿を見送つて、また幾月かの淋しさを思った。

用事がすむと、彼女は早速、姉の子の日吉を連れて、中村へ出かけて行つた。

その途中。

「おう、これは」

と、向うから来て、おえつに丁寧なあいさつをした人がある。

商人だろう。しかし商人にしては、大家の主人にちがいない。

きらびやかな短羽織みじかばおりを着、脇差わきざしを一腰ひとこしさし、小桜革こざくらがわの足

袋びを穿はいて、四十がらみのにこやかな人だ。

「加藤様の御寮人ではございませぬか。どちらへお越しなされますな」

懇意とみえておえつは、

「中村の姉の家まで参ります。この子を連れて——」

と、日吉を抱えよせた。

「ホ……。その坊んちでござるかの。光明寺から追われたお小僧というのは」

「もう、お耳にはいりましたか」

「いや今も実は、そのことでの、ちよつと寺まで行って参つたので」

日吉は、何だか間が悪くなつて、眼をきよときよとしずずにいら

れなかつた。坊ンちと呼ばれたのは、生れてから初めてである。顔が熱くなるほど恥かしかつた。

「オヤ。この子のことで、お寺へお出かけ下さいましたのですか」
「そうですよ。光明寺から宅へ謝りに来ましてな。——何かと、
理^{わけ}を聞けば、わしが寄進した大香炉を割つてしもうたとか」

「ほんに、この悪戯^{いたずらぼう}坊が困つたことを致しました」

「何のさ。御寮人までがそういうわせられな。陶器^{やきもの}が割れるのは
あたりまえじゃ」

「でも、稀れな御名器というおはなし……」

「ただ、惜しいのは、わしがお伴^{とも}いたして、長らく明^{みん}国^{こく}に渡つ
ておいでなされた松坂の伊藤五郎大夫様のお作なのじゃ」

「祥瑞シヨンスズイと仰つしやるのは、その方でございますか」

「ところがもう、御病氣でお果てなされた。近頃、染付ものの陶器に、祥瑞シヨンスズイ五郎大夫ごらだゆう製とよく銘に書いてはあるが、それはその後の人々で、ほんとに明国みんこくへ渡つて、あの陶器の作法を伝えて来られたお方は今ではもうこの世にいませんぬ」

「世間のうわさゆえ、どうか存じませぬが、お宅様に引き取つてお育てになつている、於福おふくさまという坊んちは、その祥瑞様が、明国から連れ帰つて来たお子じやとやら……」

「はい。どうして知れたか、童たちわっぱと遊ぶと、唐人子とうじんこ唐人子とからかわれるとかで、この頃は、ちつとも外に出ませぬわい」

茶わん屋捨次郎はそういつて、にやにや日吉の顔をながめた。

友だちの於福おふくの名を聞いたので、日吉はよけいその人を、何だろ
うと考えた。

「ところが、この日吉どのだけは、いつも於福を庇かほうて下さるそ
うな。その日吉どのが、寺を追放されたと聞き、於福までがわし
へ詫わびをいいますので、実は今、光明寺へ行つて、どうぞ宥ゆるして
あげてくれと頼んだところ、先で申すには、香炉の罪ばかりでは
ない、云々しかじかのこともある、いやこれこれの事情もあると、受け
つけそうもござらぬので、引き退つて来たところですよ。……
ははははは」

と、捨次郎は、胸をそらして笑い、そしてまた、こう附け加え
て云つた。

「親御のお考えもおおざらうが、もしまた、奉公に出す場合、宅みたいな所でもよい思しおほめ召しなら、いつでも世話して進ぜまする。

どうして、なかなかこのお子は、見どころがありますよ」

また、初めのような丁寧なあいさつを交わして、その人は別れ去ったが、日吉は、おえつの袂たもとにつかまりながら、幾度も振り返った。

「おばさん。今のは誰」

「茶わん屋捨次郎といって、諸国の陶器やきものを捌さばいている問屋さんです」

「ア。それで茶わん屋っていうのか」

いちど黙って、おえつと共に、てくてく歩み続けていたが、ま

た、

「明^{みんこく}国^{こく}って、どこさ。明国^{みんこく}って——」

と、今の聞きかじりを思い出して、出しぬけに訊ねた。

「唐^{から}のことでしょ」

おえつは簡単にいったが、日吉がたてつづけに、

「どっちの方？」

だの、

「どれくらいな広さ？」

だの、

「明国にも、城があつて、侍がいて、戦^{いくさ}をするか」

だのと訊き出すので、

「ま、うるさい。少しは黙って歩くもんですよ」

と、おえつは袂たもとを振った。

だが、この叔母さんの叱言こごごとぐらいは、そよ風ともひびかない。日吉はぐんと首を仰向けて、頻りに青空をながめていた。

彼は、ふしぎでふしぎで堪たまらなかつた。どうして空はあんなに蒼あおくて深いのか。なぜ人間は地面ばかりにいるのか。もし人間が鳥みたいかに翔けられたら、香炉こうろの絵で見た明国へも、一足飛びに行かれるだろうに。

だから香炉の絵でみても、鳥のかっこうは尾張の国の鳥とちつとも変っていない。人間の着物も、船の型も変っているけれど、鳥は同じだ。鳥には国がない。いや天地がみんな一つ国だ。

「見たいなあ、方々の国を」

彼には、これから連れて帰されるわが家の狭さや、貧乏などは頭の隅っこにもなかった。

やがて——眼で見初めて、穴蔵あなぐらみたいに、昼間でも暗いわが家の奥をおえつと共に覗きこんだ。

用達ようたしにでも出ているのか、筑阿弥ちくあみは留守だった。おえつのお話を聞いて、母は、

「困った子よのう」

と、つくづく溜息ためいきをついて、日吉の暢氣のんき顔をながめたが、その眼は、彼を責めているのではなく、二年近くも見なかった間に、めつきり大きくなった子の姿に、気をとられている様子でしかな

かった。

日吉はまた、母の乳ぶさに吸いついている乳のみ児に、怪訝いぶかのような眼をすえていた。いつの間にか、自分の家にまた一人子が殖ふえていたのだ。彼はいきなり、その子の顔を持って、乳くびから挽もぎ離してのぞき込んだ。

「おつ母、いつ生れたの、この子」

「おまえは、兄さんになつたんだよ。慥しっかりしなければいけませんよ」

「なんてえ名？」

「小竹こちく」

「変な名だな」

頓狂な声でいったが、しかし彼は痛切に、何か感じたらしかった。弟というものに押し出された兄の意識だった。

「あしたから、おらが負^{おぶ}つてやろうね。ええ小竹^{こちく}や小竹や」

余り彼がいじくつたので、小竹は泣き出した。

おえつが帰って行くと、入れちがい^{ちち}に義父^{ちち}の筑阿弥^{ちくあみ}がもどつて

来た。母がさつき妹のおえつに愚痴をこぼしていたのによると、筑阿弥はこの頃、貧乏の立て直しにくたびれて、酒ばかり飲んでいるとのことだったが、今も赤い顔して家にはいつて来た。

そして、日吉を見出すと、すぐ呶鳴った。

「野郎っ、また追ン出されて来たか！」

家に帰ってから、一年の余はいつか経^たった。日吉は十二になつた。

「猿^{まき}つ、薪を割ったか、野郎、何でまだ、水手桶を畑^ほへ抛^なつたらかしておくか」

筑阿弥は、彼のすがたがちよつとでも見えないと、探し廻^{まわ}つて、
呶^う鳴りつけた。

「今、やりかけてるところだよ」

口^{くち}ごたえでもしようものなら、

「えい。またつべこべ」

と、土荒れした頑固^{てのひら}な掌^{てのひら}が、すぐ日吉の横顔へびしりと鳴った。
子を負^おつて、棉を摘^つんだり、麦を踏^ふんだり、炊^{かしぎ}をしたりしてい

る母は、そんな時は、強しいて背中を向けて黙もっていた。しかし、自分が打たれるより、悲しい辛い顔であつた。

「もう十二にもなれば、どこの童わでも、家業の手助けは当りまえだ。親の目ばかりぬすんで、遊びたがってばかりいると、腰骨をぶち折おつてくれるぞ」

そんな調子に、筑阿弥ちくあみは絶えず口ぎたなく日吉をこき使つかつたが、母の甘い慾よくめ目ばかりでなく、実際、寺から帰かつて来た後の日吉は、生れ變かつたようによく働はたらいた。

(他人の御飯をたべると、こうも急に變かるものか)

と、母は傷いた々いたしくながめたが、生なまなか庇かばい立てすると、かえつて、筑阿弥の荒い手や言葉が、日吉へ苛酷かこくに当るので、見て見

ぬ振りをしているのだった。

そのくせ以前とちがつて、筑阿弥は畑には滅多に出ず、家にもいない日が多かつた。町へ行くらしいのである。そして酔つて帰つては、子をどなり、妻に当つて、

「いくら働いたつて、この家の貧乏は直りツこねえわ。喰いつぶしは多いし、年貢ねんぐは増すし。餓鬼さえなければ、おれも野武士の仲間にでもはいつて、うまい酒も飲めるが、こう足手纏まとが多かつちやあ……」

と、口ぎたなく云いちらした末、なけなしの金を妻に算段させ、よるよなか夜夜中よるよなかでも、おつみや日吉に酒を買いにやらせるのだつた。

その義父ちちのいない時、

「おつ母、おらあまた、奉公に行きたい」

と、日吉が母に洩すと、お奈加なかはそういう日吉を抱きしめて、

「……いておくれ、今おまえが家にいなかったら」

と、後の言葉は、云い得ない涙になつて、ホロリと一雫しずく、横を向いて眼を拭ぬぐうだけだった。

母の眼の一しずく——

それを見ると、日吉はもう、何もいえなくなつてしまい、家を飛び出そうかという考えも、不平も、辛さも、胸から捨ててしまつた。

だが、そんな可憐いじらしい気持が起るかと思うと、少年の天性のうちには、遊びたい、喰くいたい、知識を得たい、遠くへ奔はしりたい——

—さまざまな欲望の芽が、雑草の伸びるように旺さかんになるのであった。そこへ義父ちちの筑阿弥が、母へいう無理だの、自分の頭こぶしにうける拳こぶしだのの衝動もあつて、

「くそをくらえ」

と、不敵なたましいが、彼の小さい体を燃やし、それが度重なつて、

「お義父とっさん、おらを、奉公にやってくれ。おら、こんな家にいるより、奉公に行きてえや」

と、恐い筑阿弥へ、直じかにぶつかつて云いきるほどな感情を、駆り立たせた。

「何。奉公に出たい。ようし、何処へでも行つて、他人の飯をま

た喰つて来い。その代り、こんど追い出されても、家には入れぬぞ」

と、筑阿弥もむきになつて云つた。子どもと思ひながら、性格のくい合わないせいか、彼は十二の日吉と五分になつて、いつも怒りを激発させるのだつた。

村の紅花屋べにばなやへ奉公に行つた。

紅花絞べにばなしぼりの職人たちから、

「口ばかり達者で、小生意気で、日向ひなたで臍へその垢あかばかり取つてやがる」

と、排斥されて、間もなく、世話した者から、

「どうも役に立たないので」

と、日吉は家に帰されて来た。

筑阿弥は、睨めつけて、

「どうだ猿。汝のような穀つぶしは、世間様でも飼ってはくれない。親のありがたさがわかったか」

と、いった。

日吉は顔を膨らせて、

「おらが悪いんじゃねえや」

と、云いたそうな顔して、義父の睨む眼を見返した。

そして、かえって、

「お義父さんこそ、百姓もしないで、馬市でばくちしたり、お酒のんだりしないがいいよ。よその人がみんな、おつ母が可哀そうだっっていつているぜ」

と、意見した。

「何をいう！ 親に向って」

筑阿弥ちくあみは、一喝かつで日吉の口を黙らせたが、心のうちでは、

「だんだん摺すれからして来やがったわい」

と、日吉を見直した。

他人の中へ出て、家へもどつて来るたびに、子の姿は目立つて大きくなっている。そして以前と違って、親を観る眼も、家庭を見る眼も、急に育つて来たように思われる。筑阿弥は、その大人みたいな眼で自分を観察されるのが、うるさいし、恐いし、嫌でならなかった。

「はやく奉公口を探して出て行け」

翌日、もう日吉は、次の雇主やといぬしの所へ行っていた。

やはり村の桶屋だった。

桶屋のおかみさんから、

「こんな末恐ろしい子は、わしが所ところへなど置けん」

というて、ひと月ばかりで帰された。

日吉の母は、何が末恐ろしいのか、世間の人のいう意味がわからなかった。

左官屋の手伝いにも行つた。馬市の弁当売りにも行つた。鍛冶かじ屋やへも行つた。どこも三月か半年だった。

身装みなりは、だんだん大きくなる。中村のうちではもう、

「ああ筑阿弥どんの家のせがれか、あの白痴こけざる猿ときては、口巧者

ばかりで、使いものになりやあせん」

と、定評がついて、もう世話してくれる人もない。

その世間へ、母のお奈加は、間まが悪くて、肩身がせまくて、日吉のうわさを人がいえば、すぐ、自分から先に、

「あの子はもう、何にしたらよいやら、百姓は嫌うし、家には落ちつかないし……」

と、極ごく道どう者ものの卵たまごみたいに、自分から先に卑ひげ下げして、人に謝あやまつてばかりいた。

十五の春である。

寡やっれた母は、沁しみ々じみと日吉を膝まによせて、

「今度こそは、辛抱しやい。また出るようなことになる、お世

話してくれた加藤殿へも、妹が顔向けならぬし、世間でも、またかと笑いますぞ。……いや今度、落度でもして、先様から出されたら、誰よりもこの母がききませぬぞ」

云い聞かせて、次の日、新川の大家へ、藪やぶ山やまの叔母に連れられて目見得めみえに行つた。

茶わん屋捨次郎の家だつた。

そこには、幼友達の於福おふくがいた。於福はもう、十七、八の色白の青年で、養父の捨次郎の家業を助け、茶わん屋の若旦那として、実直に手伝っている。

商家でも、主従のけじめは、厳しかった。

若主人の於福おふくの前へ、彼がはじめて目見得に出た時は、日吉は

板の間にかしこまり、於福は座敷の中で、義父ちちの捨次郎だの、美しい御寮人などと、茶うけの菓子など喰べながら、話に興じているところだった。

「おや。弥右衛門とこの小猿だね、おまえ。ああお父さんは死んで、村の筑阿弥が、次のお義父とつさんになったんだってね。——こんど家へ奉公に来たのかい。よく働かなくちやいけないよ」
於福のことばや物ごしはもう見違えるほど大人びていた。

「へい」

日吉はすぐ、下僕たちのいる部屋へ退さがった。茶の間で、主人の家族たちがその後で笑っている声がした。

友達の於福が、ちつとも友達らしい顔もしてくれないのが——

日吉にはさびしかつた。

日が経つと、於福は、

「おい、小猿」

使い馴れて、よけいに言葉なども、ずけずけいった。

「あしたは、早く起きて、清洲きよすまで行つといで。お役所へ御用の

品を持って行くんだからいつもの手押し車へ荷を積んでね。――

それから帰りは船問屋へ廻つて、肥前ひぜんから陶器やきものの荷が届いてい

るかどうか、聞きあわせておいで。――また、道くさして、こな

いだみたいに夜おそく帰つて来ると家へ入れないぞ」

日吉は、それに対して、

「はい」

とか、

「へい」

とかしかいえないのだった。古くから来ている奉公人ほど、

「かしこまりましたござります」

と、額ひたいを板の間にすりつけていう程なのである。

那古屋なごやや清洲の城下へは、のべつ使いにいった。その度に彼は、

お城の白壁と高い石垣を仰いで、

「どんな人があの中に住んでるのだろ。——どうしたらあんに住めるんだろ？」

と、漠ぼくとして考えた。

虫ケラのように小さな惨みじめな自分が、幼稚な心の中にも、口惜

しく思われるのだった。

そして陶器やきものの荷を積んだ、重い手車を押しながら町を行くと、
「あれ。猿がゆく」

「猿が車を押して行く——」

などと被衣かぎぎした麗人だの、都めかした町娘だの、若いきれいな
御察人たちが、囁ささやいたり指さしたり、じろじろ眺めて行ったりし
た。

きれいな女と醜みにくい女との見分けはもう日吉にもついていた。少
年の心にもつとも辛く思えたのは、そうした美しい女性の群れか
ら、奇異な眼で眺められることだった。

その頃、清洲の城にはまだ、室町大名の斯波義統しばよしむねが城主として

住み、おだひこころうのぶとも織田彦五郎信友がその家老だった。

城のお濠(ほり)と、五条川を中心にして、ここには古い足利あしかが文化の
 においと、戦乱の中にも持ち続けて来た繁昌が、国郡こくぐん第一の都と
 府ふという名に恥じなかった。

さけは酒屋に

よい茶は茶屋に

女郎は

清洲のすがぐちに

その須賀口すがぐちには、妓楼ぎろうや茶屋が軒をならべていて、昼間は、禿かむろ
 たちが鞠まりをつきながら、往来で唄っていた。

少年日吉は、荷を積んだ手車を押して、鞠唄の中を、うつつに

通つた。

ぼんやりと——

「どうしたら偉えらくなれる？」

まだ、その解決もつかめていないのに、ただ一念に、

「今にみる、今に」

と、漠ぼくとした希望に、さまざまな妄想を描きながら行くのだつた。

美味うまそうな食物、豊かそうな家、絢けんらん爛な武具、馬具、衣裳、

宝玉などを売っている店——彼には縁のないあらゆる物資がこの町には軒なみに積んである。

中村の家にいる姉のおつみの青い痩せた顔を思い泛べると、饅ま

頭屋んじゅうやの蒸籠せいろうから立つ湯気を見ても、

（姉やにも買つてやりたいなあ）

と思ひ、老舗しにせの薬屋の前を通つては、

（おつ母に、あんな薬をいつもやれたら、もつと丈夫になるだろ
うに——）

と、その薬草やくそうぶくろ囊みとに見惚れたりした。ただ筑阿弥のことだけ
は、べつにどうとも、考え出されなかつた。

（おらが偉くなれば）

と思ふ底には、世間の誰と見較べても、余りにみじめな、母と
おつみとを、幸福にしてやりたいという気持も、多分にあつた。

——で、彼は城下へ来ると、ふだんの望みや空想が一ばい大き

く強く燃えて、

「今に！ 今に！」

と心でつぶやき、

「どうしたら。どうしたら」

と、そののみ思つて、いつも歩きつづけるのだった。

「ばか者っ」

と、日吉はふいに、人ごみの中でどなられた。繁華な辻を曲りかけた途端である。

のりかえうま

乗換馬を曳かせ、槍を持った供の者を、十人以上もひき連れた馬上の侍に、手車をぶつけてしまったのである。

わら苞づとに巻いてある鉢だの皿だのは、くずれ落ちて粉々に碎け

たし、日吉の体も、手車と一緒に^{よろ}踏めいた。

「盲かッ」

「うつけ者めが」

馬も、従者も、砕けた瀬戸物の上を、そう罵^{のの}りながら、ばりばり踏んで行ってしまふ。往来の者も、誰ひとり、寄つて来てはくれなかつた。

割れた欠片^{かけら}を、拾いあつめ、また、手車を押して歩きながら、彼は人中^まの間のわるさと、憤りに血を熱くして、

「どうしたら彼奴^{あいつ}らを、おらの前に土下座させてやれるだろうか」と、幼稚な空想のなかで——しかし真剣に思いつめた。

だが、少し経^たつと、主人の家に帰つてからの叱言^{こごと}だの、於福の

冷たい顔などが目に見え出し、大鵬たいほうの翔かけるが如き大きな空想も掻き消えて、けし粒みたいな小さい心配にも、囚とらわれてしまうのだった。

群盜ぐんとう

とつぷり日が暮れていた。彼は手車を小屋の中へ押しこみ、井戸端で足を洗っていた。

この近郷で、陶器やきものやしきとよばれているだけあって、茶わん屋の構えは、大きな土豪の家ほどあつた。

母屋は広く、棟は幾つにもわかれ、倉も並んでいた。

「小猿う。小猿ツ」

於福おふくが、近づいて来た。日吉は石井戸の蔭から身を起して、

「おい」

と、返辞した。

於福は、何が氣に障さわつたのか、持っていた細竹で、日吉の肩を打ちすえた。日吉は拭きかけていた足をよろめかせて、また泥によごしてしまった。

「主人に向つて、おいという返辞があるか。いくら云つても、言葉の直らない奴だ。わしの家は百姓じゃないぞ」

雇人の長屋を見廻る時だの、倉で働いている者へさしずに来る時は、この若主人はいつも、細竹を持って歩いている。日吉がそ

れで打たれたことは、きょうばかりではない。

「なぜ黙ってるのか」

「……………」

「これ、はいといえ」

「……………」

「いわないな。こいつ」

日吉は、また一つ打たれるよりもと、喉のどを宥なだめて、

「はい」

と、云い直した。

「清洲からいつ帰ったんだい」

「今帰りました」

「うそをいえ。台所の者にきいたら、もう御飯をたべたというじやないか」

「眼がまわつて、仆れそうになつたんで」

「どうして」

「腹が減へつちまつて、やっと歩いて来たもんだから」

「なんだ、腹が減つたぐらい。帰つて来たら、すぐ主人に帰りましたとなぜあいさつ挨拶あいさつに来ない」

「足を洗つてから」

「言い訳するな。そのうえ今勝手元の者に聞いたら、清洲のお屋敷先へ届ける陶器を、途中でたくさん欠いたというじやないか」

「ええ」

「正直に詫びようともせず、わしへ何と嘘をいつたらいいだろうと、勝手の衆へ、げらげら笑いながら訊いていたろう。今夜は、堪忍しないぞ、やい」

於福は、日吉の耳たぶを引張つて、歩き出しながら、

「ぎ。来い」

「御免なさい」

「くせになる。うんと糺きゆうめい明してやるから来い。お父さんのところへ来い」

「かにん、かにん」

於福は手を離さない。井戸端にいた二、三人の雇人も、日吉の謝る声が猿の啼き声そっくりだといって見送っている。

父の捨次郎へ告げ口する気であろう。広い家の横を廻って行つた。倉の前から庭口へと行く道は孟宗竹もうそうだけが茂っていて、裏からも母屋からも見通せなかつた。

そこまで来ると、日吉はふいに踏み止まつて、

「やいッ」

と、於福の手を払い、また、

「やいッ」

と何度も云つて、

「話があるから聞け！」

と、於福の驚いた顔を、大きな眼をして睨みつけた。

「こら、何するんだ」

「なにが何だ」

「主人に向つて、お前は——」

と於福は、青ざめて、おのの顫きながら、

「わ、わしは、主人だぞ」

「だからいつも、すなお従順にしてるが、きようはいつてやるぞ。やい

ッ」

「……………」

「やい於福。てめえは、以前のことを忘れたか。おらとお前とは、友達だったろ」

「そんなことは、前のことだ」

「前のことは、何でも、忘れていいものか。唐人子、唐人子つて、

皆からてめえが虐められていた頃に、誰がいつも、庇^{かば}つてやったか、覚えてるだろう」

「覚えてるさ」

「覚えてたら、その時の恩も少しは考えろツ」

小さい日吉は、ずっと自分より大きな於福を、こう睨^ねめすえて、どつちが年上だか分らないように威張った。

「ほかの雇人でも、みんな云ってるぞ。大旦那はいいけれど、若旦那の於福は、生意気で、人情なしで思い遣^やりがないうって」

「……………」

「てめえみたいな、御苦労なしの坊ンちこそ、貧乏して、困つてみて、他人の家の飯をちつと喰べてみるといいんだ」

「……………」

「この先も、奉公人いじめをしたり、あんまりおらに辛くあたる
と、どうしてくれるか知れないぞ。おらの知っている小父さんは、
御厨みくりやの野武士で、千人も手下を持つてるんだから、その小父さ
んに来てもらって、こんな家、一晩で踏み潰つぶしてしまうからそう
思つてろ」

と、日吉は口から出放題にいつて、脅おどしたに過ぎないのであつ
たが、生来氣の小さい於福は、日吉の眼光と、口吻くちふりに氣をのま
れて、慄ふるえ上あがつてしまった。

——母屋のほうで、

「於福様あ」

「若だんな。若だんな」

と、先刻さつきから、召使の男や女がさがしていた。——けれど於福は、それに答える勇氣も失せて、日吉の眼に縛りつけられていた。

「呼んでら」

日吉は、教えるようにつぶやに呟いて、

「もう行つてもよし。だけど、今いったこと忘れるな」

云いすてて、彼は先に、元の裏口の方へもどってしまった。

だが日吉は、後では胸がどきどきしていた。

——今に奥から、呼びに来はしまいかとおそ虞れて。

しかし、何事もなかった。

いつかそんなことも忘れていゝうち、年が暮れた。彼は十六の

年を迎えた。

百姓は百姓なみに、町人は町人なみに、十六となれば、元服のまね事をし、若い者の仲間入りをするのであったが、彼には、そんな祝い事はおろか、扇子せんす一本、くれる者もなかった。

ただ、正月なので、広い台所の板敷の隅つこで、ほかの下男たちと共に、水みずツ洩ぼなをすすりながら、粟あわの雑煮餅を、めずらしく喰べただけだった。

それでも彼は心の裡うちで、

「おつ母や、おつみは、このお正月、餅を喰べているかしら？」
と、ふと思いやった。

粟を作る百姓でいながら、餅もなく送った正月を、何度も覚え

ているからである。

彼が、そんなことを思い出しているうち、他の下男たちは、

「今夜はまた、旦那さまの客呼びで、おらたちまで、お末に畏つて、長談義を聞かねばならぬ晩だぞ」

「嫌だのう。せつかくのお正月を」

「腹いたでも起して、寝ているとするか」

などと、何かこぼし合っていた。

年に二度か、三度。

初春とか、えびす講とか、何ぞの折というと、茶わん屋捨次郎はよく客を呼んだ。

瀬戸の職人たちだの、那古屋や清洲のとくい先の家族だの、武

家だの、親類先のまた知りあいの者だのと——ずいぶんな客が夕方からぞろぞろ集まった。

「ようこそ。……ようお越し」

捨次郎はその日、とりわけ機嫌よく、そして腰ひくく、自身で接待したり、日頃の疎遠そえんなど詫びあうのである。

彼の美しい妻女はまた、茶席をもうけて、珍らしい器や、心入れの花など挿さし、

「御所望ならば」

と好む者へは、茶をたてて清雅なもてなしもした。

東山殿が茶事ちやじの数寄すきを称とえられてから、その余風が、いつか民間にも移っていた。その影響がまた、民家の畳とか障子とか、床

の間とか、箸茶碗の好みにまで、自然と変化を促して来て、知らず識らず茶は生活の中へはいっていた。

わけて瀬戸村一帯で焼かれる特色のある陶器やきものは、その淡雅な味が、茶の用器に多く需要されだしてきたので、職人たちでも、茶をのむことを知っていた。——また、狭い小部屋の中で、一輪の花と、一服の茶だけで、その間、戦乱の世の中も、苦悩の人生も、ふと忘れて、濁世じよくせのなかにも気を養うという術すべを、理窟なく覚えていた。

「これは、お内儀どのか」

四十がらみの骨太な武士であった。次々と集まる客の中に入り交まじって来ていた一人なのである。茶席へはいって来ると、茶わ

ん屋の妻へいんぎんに挨拶をして、

「てまえは御親類の米野の七郎兵衛どのの知合でござる。七郎兵衛どのの御案内で参る約束でござったが、生憎と、その七郎兵衛どのがお風邪かぜ気とやらのため、不勝手ながら、一人でお招きへ寄せてもらいに参った」

と述べ、

「御厨みくりやの渡辺天蔵で」

と、辞儀でいねいに、後から名を云い添えた。

もの腰もやわらかい。郷士くさい武骨さもあるが、茶を一ぷくと望むので、妻女は、黄瀬戸の茶わんに、茶を立てて出した。

「作法はわきまえませぬ」

と、いうことは弁わきまえたもので、天蔵は気らくに服のみながらそこらを見まわし、

「さすがは、評判なお物持ち、結構なお道具ぞろいだ。失礼なれど、そのお水みずさし挿しに用いておられるのは、世にいう、赤絵とやらではござらぬか」

「お目にとまりましたか。そのような物だそうでございまする」
「ふーむ」

と、感じ入った眼をそれにすえて、

「赤絵とあれば、堺さかいの商人の手にかかれば、千金もいたすであらうに。……いや値などはとにかく、近頃、眼の保養をいたした」

などとなかなか腰を上げないでいたが、そのうちに、奥の支度
ができましたから——という迎えに、

「どうぞ、あちらへ」

と、妻女は案内して、共に広間のほうへ出て来た。

ぐるりと何十人前の膳が、広間の襖ふすまや壁に沿って輪になって並
んでいた。亭主役の茶わん屋捨次郎は、その真ん中に坐つてあい
さつを述べ、妻女や女童めわらべの酌で酒がすむと、捨次郎はいつもの
ように、

「では、てまえもお裾すそをいただいて——」

と、自分の席につく。

そしてそれから、彼が壮年時代に見聞して来た「明みんこく国こくばなし」

の長談義がはじまるのだった。ほとんど、その頃の日本では、何^なん^ん人と知らない明国の知識を話したいために、彼は客呼びをして、こんな馳走もするのだった。

家内中をあげて、接待したり、馳走をしたり、暇をつぶしてまで、茶わん屋の主人捨次郎が、こうした客呼びを年に幾度かする気もちの中には、自分のもっている明国の知識とか、渡洋した体験とかを、世間へ誇ろうとすることよりも、実はもつと痛切に、べつな意味があつたのである。

それは、わが子として——いや生みの子以上にも、可愛がつて育ててきた於^お福^{ふく}への、大きな愛の一つなのであつた。

なぜかというに——

於福がもともと彼の実子でないことは、誰でも知っているが、同時にまた、純粹な日本の生れでもない素姓を、いつか世間ではめずらしげな噂にしている。

で、幼少から、遊びに出ても遊び仲間の子どもらから、

(唐人子。唐人子！)

と、からかわれたり、泣かされて帰つて来たり、内気な於福は、よけい内気になる傾きがみえた。

捨次郎は、そのたび胸をいためて、亡き五郎大夫の依いしよく嘱しよくにすまない気がするのだった。

於福の生みの母は、明国の産で——梨りきん琴きんという氏素姓もひくい一中国婦人であった。長年、日本から景德鎮へ陶業の留学に渡つ

ていた伊勢松坂の人で——シヨンジイ祥 瑞 五郎大夫とのあいだにな生じた子が於福なのである。

楊景福

それが、於福の幼名なのだ。

五郎大夫が、いよいよ日本へ帰るとなった時、下僕の捨次郎は、その楊景福をおぶ負つて、長江や玄海の千里の船路を、日本まで連れて来たのであった。

ところがシヨンジイ祥 瑞 五郎大夫は、日本へ帰るとまもなくやまい病にかかつて亡くなつてしまった。多年、明国で研究してきたものを土台に、祖国の陶器やきもの工芸に一生面を拓ひらこうとした理想も途中で終つてしまったし、梨琴とのあいだにな生じた子の育つのも見ずにい逝つ

てしまったのである。

(於福はそちに頼む)

と、その主人から、捨次郎はいまわの際きわに、託されたのだ。

日本へ来てからは、もちろん「楊景福」ではおかしいので、福太郎と名を改めてはいたが、松坂あたりの人々のあいだでは、

(あれは、唐人子や)

と、隠れもないこととされていた。

祥シヨンズイ瑞

の亡き後、捨次郎はその松坂を去つて、郷里の尾張おわりへ

ひき移り、この土地の瀬戸村で産出する陶器をはじめ、諸国の窯かまの製品も扱つて、那古屋、清洲、京、大坂あたりまで手びろくあきな商あきないをしていたのであったが、於福の生い立ちと、その母が、日本

の女でないということは、諸国へ往来の繁しい土地がらだけに、
ここでもいつか人の耳へ伝えられていた。

（世間の衆が、明国の事情をよく知らないからだ。また生半可^{なかはんか}、
隠しだてするから奇異な目で見たがるのだ）

捨次郎は、こう考えた末、

（世間へ、明国とは、こういう国だということを、教えてやろう。

……そしたらかえって、於福も自覚をもつて、自分のうけた血に、
おどおど
恟々せず、内気がなおるかもしれない）

——彼の客呼びと、彼の得意にする明国ばなしは、そういう心
理からも起つていたわけであつた。

さて。

それはとにかく、当夜の来客たちも、如才なく、酒がすすむにつれて、

「御主人。ひとつまた、明国のおはなしでも」

と、客のほうから促した。

天竺てんじくとか、唐からとかいうと、夢の国のように思っていた民衆も、

近ごろは、鉄砲が渡来されたり、自鳴鐘じめいしょうという物を知ったり、

縞しまや更紗さらさなどの織物を見たりして来て、この天地のうちには、日

本のほかに、そういう大きな国々もほんとに在あるのだということ
を——漠然とではあるが——一般に知られかけてきた時代である。

捨次郎は、一座の客に向つて、

「ぼるとがるとか、すぺいんとか、おらんだとか、そういう紅毛

人の国々と明国とを、同じように考えてはいけませんよ。なぜならば明国と日本とは、東洋というて、国こそちがうが、皮膚の色から、髪の色、文字や宗教や道徳や——また、血までがまったく似ている国がらなのでしてな」

と、まず話した。

それから。

秦しんの時代や、漢かんや唐とうの頃にも、かの地から日本へ、多くの者が移住して来て、日本に帰化していること。その帰化人たちは、日本人の妻をもち、子を生み、そして日本の文化にも、いろいろな功績を残して来ていること。

また、日本からも、そのむかしは遣唐使けんとうしをのせた船が、頻り

に、海を往来して、知識や物産を交易し、ほとんど、ふたつの国のあいだがらは、齒と唇のような関係であつたということ。

たとえば日本で、日常よく喰べる豆腐みたいな物にしても、かの地の土産みやげものだし、食物ばかりでなく、山川風物も、人情も道徳も、また美術でも文学でも、すべてが不思議なほどよく似通っている国がらなので――。

ただ、まったく違っている点といえば、日本は、上に、一系の皇室をいただいて、連綿とかわることがないのにひきかえて、かの国では、余りな大国のせいもあるうが、何千年来、王おう覇の争いがたえず、興る者がみずから帝王を称えて、民心の帰一するところがないために、その歴史は乱脈で複雑で、従つて、国情という

ものが、大きに異っている。

ひと口にいえば、はとう覇道の国。

乱れても、戦い合つても、日本において、朝廷という御中心は確固として、幾千代までも御中心である。民の心のなかにも常に中心となっている。そういう安らかさは明国にはない。

「——思えばありがたい国にわたしたちは生れたもので」

捨次郎は、そんなふうに、日本と明国とを、比較して話したりした。

そしてそれとなく、於福に向つては、ひくつ卑屈な気を持つなど教え、世間に向つては、明国と日本との密接なさと関係を論じた。

だから於福も、近頃は、内氣どころではなくなつた。奉公人も

世間の者も、決して彼をからかわなくなった。

「いや、ご馳走になりました。こん夜もいろいろと、耳新しいお話をうかがったりして」

「もう十分に、頂戴いたしました。夜も更ふけましたれば、この辺で」

「ぼつぼつ、お暇いとまを」

「そうじゃ、おひらきといたそうかの」

無事——その晩の招き事も終つて、客は次々に歸つて行つた。

奉公人たちは、その後がまた、一しきり忙しい。

「やれ、やつと仕舞つたか」

「お客には、珍しいかもしれぬが、明国のはなしも、わしらには

年中なのでな」

などと欠伸あくびまじりに、大勢であと片づけにかかり出すのだった。もちろん日吉も、追いまわしに使われて、その中でぐるぐる働いていた。

ひろい厨くりやの灯も、広間や主人たちの部屋の灯も、やがてみな消されて、茶わん屋の家を囲む土塀の門にも、頑丈なかんぬきが横に懸けられた。

武士の屋敷はいうまでもない、町人の住居でも、少し財産家と見られるほどな家なら、必ず土塀をめぐらすとか、濠まわで周りをかこむとか、そして門の内にも、二重三重に、盗賊に備える要害をしていた。

そういう夜の不安は、おうにん応仁の乱らんあたりから後は、都会でも地方でも、もう当り前のことになって、誰も怪しもうとはしない。

日が暮れたら寝る。

それが習性になっていた。

寝るのが、ただ楽しみのような雇人たちは、各の寝小屋へもぐりこむと牛のように正体もなかった。——下男部屋の片隅に、木の枕をかって、薄い藁わらぶとんをひきかぶっている日吉のほかは。「……オヤ？」

日吉は、眠られぬままに、ふと首をもたげた。

彼も、今夜の客呼びのお下しものほうで、主人の捨次郎の大明国のはなしを熱心に聞いていたが、さなくても空想の多い彼のことな

ので、大きな感動をうけた後はいつも、軽い熱病のようになかなか眠りの中に落着けないのであった。

「何だろ」

身を起すと、日吉はふとんの上に坐ってしまった。

たしかに今、裏のほうで、木でも折れるような響きがした。——その前もぴたぴたと人間のあしおと蹠音のような気配がしたと思つて、耳をたてているうちにある。

台所から日吉はこつそり戸外をのぞいてみた。おおがめ大瓶の水も凍り、いたびさし板つらら廂から剣のような氷柱が垂れている寒空の冴えた夜半だった。——ふと、裏のおお巨きな木のうえを仰ぐと、それへよ攀じのぼっている人間がある。今の大きな響きは、その人間が足をかけ

た梢の一つが裂けたものとみえる。

日吉は体じゆうを眼にして、樹の上の人間の奇怪な行動を見つめていた。

その男は、ほたる蛍ほどな小さい火を、くるくる宙に振っていた。それは火縄にちがいあるまい。赤い渦巻から微かな光の粉が風にふきこぼれ——何かの合図でも外へしているらしく思われた。

「あッ、降りて来る——」

日吉はとび出して、いたち鼬のように物蔭へかくれた。木からすべ這り降りた男は、とたんに大股な足を移して、表のほうへ廻つて行く。それをやり過して、日吉は後から尾けて行つた。

「や。宵に見えたお客さまの一人だぞ」

彼は、ありえないことのようにつぶやいたが、やはり覚えのあ
る人間だった。

それは、この近郷の御厨みくりやの渡辺某であると名のつて、御寮人
の茶席へも通り、主人の捨次郎のはなしも始終、熱心に聴いて帰
った郷士の客にちがいない。

客はひとり残らず帰ったはずなのに、今頃まで、どうして、ど
こに残っていたものだろう。しかも今見れば、身拵みごしらえも宵とは
ちがって、草鞋わらじをはき、袴はかまの裾すそを巻き括くくり、大太刀を横ざまに帯
びて、角鷹つのだかのような険けわしい眼をあたりへ払っている様子——見
るからに殺伐さつぱつな血のにおいをすぐ思わせる扮装いでたちなのだ。

「待て、待て。——今、かんぬきを外すから、静かにしろ」

云いながら、その奇怪な人間は、門の内側へ寄つて、そこを開けにかかったが、その間も、外にひしめいている大勢の囁きや手が、門をがたがた揺がしていた。

どひ
土匪の襲来？

そうだ。野武士の頭が、いなごの群れのような数多の手下を闇から呼んで、掠めにやつて来たのだ。

日吉は、物蔭で、

(泥棒！)

と感じると、とたんに自分の血しおの沸りで、自分が分らなくなっていた。

だが、その忘失も、その恐怖も、自分の仕えている主家の大事

——という観念の以外に——である。いや、それだけが、彼の頭を占めてしまったので、他の考えも危険もまったくなくなつていたという方が正しい。さもなくては、その時、日吉が取つた行動は、余りに豪胆ごうたんすぎるし、白痴はくちの所作しよさというしかなかつた。

「おじさん——」

のこのこと、物蔭から歩き出して行くと、どう思つてか、彼が、こう呼んだものである。

今、——その門を開いて、大勢の手下を迎え入れようとしていた野武士の渡辺天蔵の背なかへ向つて。

「……?」

ぎよツとしたような顫ふるえが、天蔵の足から背すじへ、明らかに

走った。まさか十六歳のこの家の童僕とは思えなかつたに違いない。

「……………」

見れば、猿のような顔をした不思議な少年が、妙に馴なつツこい眼をして近づいているのである。野武士の天蔵は、ややしばし穴のあくほど見つめていたが、

「何だ、汝われは？」

と、どう考えても、解釈しようのない顔つきで、やがて訊ねた。日吉は平然と——いや平然と見えるほど、危険を忘れていたのだらう。ニコともしない代りに、格別、どうという顔色もせず、

「おじさんは、何だい？」

と、訊きかえした。

「なに？」

天蔵は、いよいよ自分の智恵と取り組んで解釈に苦しんだ。そして、

（馬鹿かな？）

と、疑ってみたが、気のゆるせない眸ひとみを感じるし、その眸が、子どものくせに、妙に此方を圧して来るのだった。

で、天蔵は、日吉のその視線を払い退のけるように、つよく睨ねめ返して、

「知れたこと、おれたちは、御厨みくりやの野武士だ。声をたてると、ぶツた斬るぞ。餓鬼いのちどもの生命などを取りに来たのではないから、

踏みつぶされないように、薪小屋まきごやにでも引っこんでいろ」

抜く手まねでもしたら横ツ飛びに消えてゆくであろうと、天蔵が、大太刀のつかを一つたいて見せると、日吉は、にやつと白い齒を出して、

「じゃあ、おじさんは泥棒なんだね。——泥棒なら、欲しい物さえ持つて行けばいいんだろ」

「うるさい。彼方あっちへ行け」

「行くけれど——その門を開けたら、おじさん達は、一人のこらず生きて帰れないぜ」

「なんだと」

「知らないだろ。誰だつて知らないけれど、おらだけは知ってる

んだ」

「小僧、汝はすこし、気が狂っているな」

「自分のことをいってら。おじさんこそ頭が悪いぜ。こんな家へ泥棒にはいつて来るなんて——」

門の外では、かかることも知らないので、そこの開くのを待ちしびれて、天蔵の仲間が、

「まだか、まだか」

と、扉を鳴らしていた。

野武士の渡辺天蔵は、

「待てよ。ちよつと待て」

と、門の外の者を、制しておいてから、また、日吉へ向つて、

「この屋敷へはいると、生きて帰れないと今てめえがいったが、ほんとか？」

「ほんとさ」

「それは、どういうわけだ。いい加減なことをぬかしたら、素ツ首くびをひき抜くぞよ」

「ただは教えてやらないよ。おらに何かくれなければ嫌だ」

「ふう……ム」

天蔵は呻うめいて、日吉に向けていた疑心暗鬼を、茶わん屋の家全体に向け直した。星の空は吹き研とがれて、明るいばかりだったが、土塀にかこまれたこの家の一劃は、屋の棟も下がるといふ丑満うしみつの闇に沈んでいた。

「——何が欲しい」

試みに彼がいうと、

「物なんか、欲しくない。おらを手下にしてくれれば」

と、日吉はいつた。天蔵は、眼をみはって、

「じゃあ汝われは、おれ達の仲間にはいりてえのか」

「うん」

「盗賊になりたいのか」

「うん」

「幾歳いくつだ」

「十六」

「なぜ盗賊になりたい？」

「この主人は、おらをこき使つてばかりいるし、この奉公人は、おらを猿々と虐めてばかりいるから、おじさんみたいな野武士になつて、仕返ししてやりたいんだ」

「よし。手下にしてやつてもいい。——だが、それは汝が証を立ててからだぞ。さあ、前に云つたことの理をいえ」

「この家へはいると、みな殺しになるといつたわけかい」

「そうだ」

「おじさんの謀事がまずいからさ。おじさんは宵のうち、お客に化けて、大勢の中へ交じつて来ていたろ」

「うむ」

「誰だか、おじさんの顔を、知っていた者がいたよ」

「そんな筈はない」

「ないッていったって、御主人がちゃんと知ってたもの。——だからおら、宵の口、まだお客さんがいるうちに、御主人の吩咐いいつけで、やぶやま藪山の加藤清忠様のおやしきまで走って行き、きつと夜半におしかけて来るにちがいないから、お願いしますと、知らせてあるんだぜ」

「藪山の加藤？ ……アア、織田の家中の加藤弾だんじょう正か」

「弾正さんとうちの御主人とは、親類づきあいだから、すぐ近所に住んでる侍さむらい衆しゅうを十人以上も集めて、みんなここのお客こしらにこしら揃え、宵のうちに来て、家の中で待ちかまえているんだ。嘘じゃないよ」

真ほんとう実らしい。——いや信じきった様子が、渡辺天蔵の狼うろた狽えた顔いろに見て取れた。

「ううむ、そうか……。してそいつらは、どうしている」

「車座になって、今し方まで、お酒をのんで待つていたけれど、もう襲つて来ないらしいぞといつて、思い思いに寝ているよ。——

—おら一人、こんな寒い中に、張り番に立たせておいて」

「では汝われは、見張りをいいつけられて、立つていたのか」

日吉が頷うなずくと、同時に、天蔵は飛びかかつて、

「喚わめくと、生命いのちがないぞ」

と、大きな掌てで、彼の口をふさいでしまった。日吉は、もがいて、

「おじさん、おじさん。約束がちがうよ。騒ぎはしないからこの手を放しておくれよ」

賊の天蔵の手に、爪を立てながら、塞が^{ふさ}れている口でわめいた。天蔵は、首を振って、

「いや、おれも御厨^{みくりや}の渡辺天蔵だ。汝^{われ}のはなしを聞けば、この家にも備えがあるそうだが、そうかといって、空手で引き退つては、手下の者へも、顔向けがならねえ」

「だから……だからさ」

「どうするというのだ」

「おらが、おじさんの盗みたい物を、持ち出して来てやるから――」

「汝われが取つて来ると」

「ああ。……そんならいいだろ。斬つたり斬られたり、危ないことをしなくてもすむし」

「きつとか!」

日吉の喉のどをぎゅつと締めつけて天蔵が念を押しした。

門のあくのが遅いので、門の外では、天蔵の手下たちが、不審を抱いて、恐れたり疑つたりしながら、

「頭かしら……頭」

「どうかしたんですか」

「門は、どうしたんです?」

などと頻りに、その扉をまた、ごとごと揺り出していた。

天蔵は、かんぬきを半分ほど抜いて、その隙間から外へ、

「すこし模様が悪いから静かにしている。そして、てめえたちはかたまっていねえで、そこらへ影をかくしていたがいいぞ」

さては——と疑いの怯み^{ひる}を衝かれて、手下たちは、さつと群れを解き、草むらや木蔭や、思い思いの闇をさがして、身を潜^{ひそ}めてしまった。

日吉は、渡辺天蔵から吩^{いいつ}つけられた品を、家の中から持ち出して来るために、元の下僕部屋の口から、そうつと、母屋のほうへは行って行った。

見ると、いつも夜半はついていない筈の主人の居間に、灯^{あかり}がさしていた。

「旦那さま」

日吉は、板縁かしこまに畏かしこつて、声をかけた。——返辞はなかつたが、

主人の捨次郎も、御察人も、そこに起きて坐っている気配がする。

「もし、御察人ごりようじんさま」

もいちどというと、

「……誰？」

と、御察人の声である。——明らかに顫ふるえをおびている。さつきからの微かな物音や人声に、主人か妻女かが、眼をさまして、一方をゆり起し、土匪どひの襲来せうらいを覚さとつて、観念の眼をふさいでいたところにちがいない。

そこへ、日吉が障子をあけてはいつて来たので、主人の捨次郎

も御寮人も、眼をみはつてしまつた。——恐怖のさめきららない不安の顔いろのうちに、あぜん啞然と、彼を見まもる眼を大きくすえていた。

「野武士がやつて参りましたよ——多勢して」

日吉は、告げた。

主人夫婦は、ごくりと唾つばをのんだだけで、何もいわない。——いや云い得ないほど白々と齒の根を嚙んだ顔しているのである。

「——踏みこまれたら、それこそ大変です。旦那さまも、御寮人さまも、縛り上げられてしまいましたよう。五人や六人の人ひと死しや怪我けが人は、きつとできるにきまつています。……ですから、私が計りごとを考え、野武士の頭かしらを、外に待たせておきました」

賊の渡辺天蔵にいった通りのことを、日吉は、主人夫婦へそのまま告げて、

「——ですから、旦那さま、野武士の頭が、欲しいっていう物を、出して遣やつてしまふとようございますよ。私が持つて行つて、渡してやれば、それで歸つてしまいますから」

と、いった。

——ややあつて。

「日吉。いつたい、野武士の頭は、何をよこせというのだね」
捨次郎が口をひらいた。

日吉は答えて、

「はい。賊の渡辺天蔵が目をつけて来たのは、御当家で御秘蔵の

——あかえ赤絵のみずさし水挿だといっていました」

「えつ。赤絵の水挿を」

「それを渡せば、帰ってやるといっています。こんな安いことは
ございませんから、渡してやろうじゃございませんか。……とい
つても、それは此方の計略ですから、私がこつそり、持ち出して
渡してやる振りをして」

日吉は、得意げに、主人夫婦へすすめたが、捨次郎は固もとより御
寮人の眉のあたりは憂いと恐怖に、黒ずんでしまっている。

「赤絵の水挿っていうのは、きようのお招きに、蔵から出して、
茶席でお使いになつていたあの陶やきもの器でございましょう。……野
武士の頭なんて、ばかな奴でございますよ。何を欲しがるかと思

「だったら、あんな物を持って来いっていうんですから」

日吉は、くすくす笑いたいほどな顔して、そういつたが、御寮人は化石してしまったように無言だし、捨次郎は、大きな吐息を吐いて、

「弱ったのう」

と考え込む。

「旦那さま、どうしてそんなに考えるんですか、陶器やきもの一つで、血を見ずにすむことを」

「あれは、わしが商売に扱っているような、ざらにある陶器ではない。明国みんこくにももう滅多にない品だ。その明国から、苦心して日本まで持って来た物だ。また亡くなられた祥シヨンズイ瑞様のお遺品かたみ

でもあるし」

捨次郎がつぶやくと、御寮人も一緒になつて、

「堺^{さかい}あたりの茶道具屋では、千金もするといふ高価なものだよ
前……」

恨みがましく、云いはしたものの、殺伐な野武士はなお恐かつた。抵抗して皆ごろしに遭い、家屋敷まで焼かれてしまった実例など——何処の国々でもめずらしくない今の世の中だった。

やはり、男はこんな場合、ふつりと思いきりがいい、捨次郎もしばらくは、断^たち難^{がた}い愛着を断ちかねていた様子だったが、やがて、

「ぜひがない！」

同時に、少し生氣を取りもどして、塗筆筒ぬりだんすの小ひきだしから、土蔵かきの鍵を出し、

「持つて行つてやれ」

ことばと共に、それを日吉の前へ、抛ほうり出した。

年に似げない才覚、よく計つたと——日吉の仕方を、心では思
いながら、むざむざ失う赤絵の水挿みずさしへの執着いまいまに、忌々いまいましさが
こみあげて、賞ほめられもしなかつた。

日吉は、一人で蔵をあけた。そして一箇の箱を抱えて来て、鍵
は主人の手へ返し、

「もう灯あかりを消して、そつとお寝やすみになつていたほうがようござい
ますよ。心配はありませんから」

とまで、注意をして、再び外へ出て行つた。

どうか？ ——と半ば、疑いながら待つていた渡辺天蔵は、日

吉の手から、赤絵の箱を受け取ると、品物の容態を^{あらた}検めて、

「ウム。これだ」

と、顔の筋を^{ほど}解いた。

「じゃ、おじさん達、はやく引き揚げたほうがいいぜ。今、蔵から探し出す時、^{ろうそく}蠟燭をつけたもんだから、加藤様やほかのお侍たちも、眼をさまして、一廻り屋敷のまわりを見廻ろうかといつてたから」

追い立てると、天蔵は、急にあたふた、門の外へ飛び出して、

「小僧、いつでも御^{みくりや}厨へたずねて来いよ。手下に使つてやろう」

云い捨てて、闇へと、影を消してしまった。

猫ねこの飯めし

怖ろしい一夜は明けた。

——あくる日の真昼間ごろ。

まだ松の内なので、御慶ぎよけいの客はちらほら絶えないが、茶わん屋の奥には、妙にしいんと冴えない陰ただよが漂ただよっていて、主人の捨次郎もむつそり顔かほしているし、いつも陽気な御寮人の姿も見えない。

その義母ははの部屋へ、息子の於福おふくは今、そつと来て坐まっていた。

彼女は、ゆうべの悪夢の怯おびえからまだ醒さめないように、青白い顔

して、病人のように寝籠ねこもっていた。

「義母かあさん、今、お義父とうさんにも話して来ましたから、もうご安心なさいまし」

「そうかえ。そして、何と仰っしやったえ？」

「初めは、私のいうことを、半信半疑でいらっしやいましたが、私が日吉の日頃の素振りから、いつぞや私をつかまえて、家の裏で——御厨みくりやの野武士をよんでくるぞ——と現まにあいつが、脅おどし文句もんくをいったことまでお聞かせすると、ウームそうかと、びっくりしたご様子でした」

「すぐに、暇を出すといっておいでたかえ」

「それもなかなか仰っしやらないで——見どころのある小猿だが

——と思索していますから、泥棒の手先を家の中に飼っておく気ですか——私が云つて上げたんです」

「第一、わたしは、最初からあの日吉の眼つきが嫌いなんだよ」

「それも云いました。そしたらやつと、そんなに皆が性しやうに合わな

いというなら、暇を出すしかあるまい。けれど、藪山の加藤殿か

らおひき受けした手前もあるし、自分からは云いにくいから、お

前たちで、何とでも談合して、当り障あたさわりないよう、暇を出してく

れと云い残して、お義父とうふさんは、出かけておしまいになりました

「よ

「ああそれでよかつた。わたしはもう半日でも、あんなお猿の妖まけもの怪けものみたいな子を、使っておくのは嫌で嫌でたまらない。……日

吉は今、何している？」

「蔵で荷造りを手伝っています——何ならすぐここへ呼んで来て、云い渡しませうか」

「よしておくれ。顔を見るのも嫌だから。お義父とうさんがそう仰つしやつたなら、おまえから、きよう限り暇を出すといつて、歸してしまつたらそれでいいではないか」

「はい」

於福は、内心ちよつと、怯ひるむようであつたが、

かしこま「畏りました。——手当のことは、どうしてやりませうか」

「元より給金など遣る約束で抱えたのではなし、ろくな働きもできないのに、喰べさせたり、着物を着せたり、それだけでも、あ

の子の分には過ぎています。けれど……そうだね、今着ている着物ほどこをくれてやって、塩の二升も施しておやり」

於福は、自分一人で云い渡すのは、何だか日吉に対して不気味な気がしたので、ほかの雇人を連れて、一緒に外の陶器蔵やきものぐらへ歩いて行つた。

蔵の中を覗いて、

「小猿。いるかい」

呼ぶと、頭から藁わらゴミをかぶつて働いていた日吉は、

「はい。何ですか」

いつもより元気な返辞をして飛び出して来た。

人にいつてはよくないと考えたから、誰にも話していないが、

ゆうべのことは、彼自身で、心のうちに、得意に思っていたのである。きつと今に主人から、改めて、賞^ほめてくれるにちがいないと、密^{ひそ}かに待っていたほどだった。

於福のそばには、雇人のうちでも、腕ぶしの強い——日吉がふだん一番怖れている手代が、突っ立っていた。

「小猿」

「へ？」

「おまえな。もう今日から、帰ってもいいよ」

於福のことばだった。

日吉は、怪訝^{けげん}な眼をして、

「どこへです？」

「どこつて、自分の家へさ。——家はあるんだろ。今でも」

「家はあるけれど……?」

何故? ——と日吉が云い出さないうちに、於福は、云いかぶせた。

「きよう限り、お暇が出たんだ。今、着ている着物はくれてやるから、すぐ出ておいで」

すると、側にいた手代が、日吉の寝衣ねまきの包に、二升の塩を添えて、

「これも、御寮人さまのお情けで、おまえに下さるとのことだ。

お礼はいわなくてもいいから、ここからすぐに出て行きなさい」

「……?」

日吉は、茫然としていた。

かつと熱いものが顔にのぼって来る。その眼は、於福へとびつきそうな怒りをあらわした。

「……分ったかい」

於福は、後ずさりながら、手代の手から寝衣包ねまきづつみと、塩の袋を取って、地へ置くと、あわてて行ってしまった。

日吉はなお、その姿へ、飛びかかって行きそうな眼をやつていたが——その眼には涙がいつぱいにあふれて来て、何もかも見えなくなってしまう。

野火のように暴れ狂ってやりたい憤りと——同時に彼の頭には、すぐ母の悲しげな顔がうか泛んでいた。

(こんどまた、奉公先から出されたら、藪山の加藤殿のお顔にもさわるし、この母も、世間へ恥かしゆうて、誰へも顔向けがならぬぞよ——)

茶わん屋へ来る前に——そういつて涙ぐんだ母の顔が——あの貧乏と、子を生むたびに、目立って窶やつれてくる母の姿が——彼の憤怒する血の中に、脆もろい涙と、情痴はなな涙すすを啜すすらせて、その身を、どうしていいか分らないように、しばし棒立ちにさせていた。

「猿」

「どうしたい」

「何かまた、しくじったな。お払い箱だつていうじゃないか」

「もう十六だ。どこへ行ったつて、御飯ぐらいは喰わせてくれる

さ。男だ。ベソ搔くな、ベソ搔くな」

笑いながら、他の雇人だの、居合わせた人々が、彼を真中に、あつちこつちで、働いていながら云つた。

日吉の耳には、ただ笑つて嘸はやされたような覚えしかなかつた。けれど彼は、誰にだつて泣き顔などは見せもしなかつた。かえつて白い歯を見せて、そこらを振り向き、

「誰が、ベソなんか搔くもんかい。——おらはもう、茶わん屋奉公など飽あきあき々だ。こんどは侍屋敷へ行つて、侍奉公をするんだよだ！」

寝衣包ねまきづつみを背なかに背負い、そこらに落ちていた細竹に、塩の袋を差して、ひよいと肩に担かついだ。

「侍奉公するとよ」

「あははは。あんな捨てぜりふをいつて行きやあがる」

憎めないが、誰ひとり同情の眼で、彼の出てゆく背を見ていた者はなかつた。日吉もまた、一步その土塀を出ると、青空の碧あおさに心を吸われて、解ほぐれた気持のほか何もなかつた。

——去年の八月、小豆坂あずきざかの合戦で、敵の今川勢のなかへ駆け入り、功をあせつたために、弾だんじょう正は重傷を負つて、やつと歸つた。

それ以来は藪山やぶやまの家に寝たつきりで——妻のおえつの看護みとりをうけていたが、年暮くれの寒さをこえて、この正月になつては、腹部

にうけた槍傷が毎日痛むらしく、苦しげな呻うめきがのべつ洩あれてい
た。

——その血膿ちうみに汚れた良人の肌じゅばんを、おえつは、屋敷の
中を通つてゆく流れで洗つていたが、ふと、

「誰であろう？ ……暢のんき気らしゆう……」

と、腹の立つように、身を伸ばして、声のする方を見まわした。

光明寺こうみやうじやま山

の中段にある屋敷なので、土塀の外へ顔を出すと、
麓ふもとの道も見える。中村の耕地も見える、庄内川しょうないがわや尾張の平野

もひろびろと眺められる。

寒々と、正月の陽は、平野の果てにうすずいて、きょうも暮れ
かけていた。

糸を繰くるのも

よるといい

日の暮るるをも

よるといふ

くるくるしくも何かせむ

くるより待つこそ

久しけれ

ヤヨ

久しやな

大きな声であつた。今の社会のけわしさも人間苦も知らない者の声だつた。室町末むろまちの人々に謡うたい飽かれた歌が、この尾張あた

りへ伝つて来て、農家の娘の糸繰いとくり歌などに訛なまつてよく謡うたわれている。

「……おや。日吉じゃないかしら？」

おえつは、麓から今、そう謡いながら登つて来る者を遠くから見てびつくりした。

弾正から頼んで、おとし頃、茶わん屋へ奉公にやつてある姉の子の日吉にちがいない。何か、汚いふろしき包を背なかに背負い、竹の棒にも何やら差して肩に担にないながら暢のんき氣そうにやつて来るのだ。

「まあ、すこし見ないうちに、大きゆうなつて……」

それにも眼をみはつていたが、その大きな身なりになつても、

相かわらずらしい暢気さに、呆あきれていたのだった。

よしや辛つらかれ

なかなか

人のなさけは

身の仇あだよ

ヤヨ……

「やあ、叔母さん、そんなところに立っていたんですか。……今日
は」

日吉はそこへ来るとぺこんとお辞儀をした。歌をうたいながら
歩いて来た心身の弾はずみが、わざとする気もなく、ひょうきんに挨拶をさせるのだった。

だが、若い叔母は、笑いを忘れた人のように、晴れない顔をしまま、

「めずらしいこと。——上の光明寺さまへでもお使いに来たのかえ」

と、いった。

「いえ」

日吉は、とたんに、頭を搔いて、少し云い難にくそうに、

「茶わん屋から、お暇が出てしまったんで……。叔父さんに知らせなければ悪いと思つて、寄つたんで」

「え。……また？」

おえつは眉をひそめて、

「またおまえ、追い出されて来たんですか」

「だって……」

日吉は、理わけを話そうと思つたが、何だか面倒くさくなつて、

「叔母さん。……叔父さんはいるの。いたら、会わしてくんない。おねがいがあるんだから」

と、甘えた調子でいった。

とんでもない——良人はそれどころか、小豆坂あずきざかの戦いくさで深傷ふかでを負つて、きょうかあすかを案じている重態。おまえなどに会つていられるものではない。

若い叔母は、つけつけと、

「ほんとに、おまえみたいな辛抱なしの子を持って、中村の姉さ

んも、かわいそうだね」

と、沁しみ々しみという。そう聞くと日吉は悄しよ気げで、

「じゃあ、叔父さんに、お願いしてみようと思ったけど、だめだ
ろうなあ」

「何をだえ」

「叔父さんは侍だから、こんどは何処か、侍屋敷へ奉公に、入れ
てもらおうと思つて」

「いったい、おまえは今年、幾つになつたんですか」

「十六さ」

「十六にもなつたら、少しは世間が分りそうなもの」

「だからもう、つまらない家には奉公しないんだ。叔母さん、ど

こか口がないだろうか」

「いい加減におし」

と、野放図もないと、たしなめるように、おえつは、女の眼で睨^ねめて、

「侍屋敷では、侍の家風に合う者でなければ、使いはしません。

おまえみたいな野育ちの暢^{のんきもの}気者を何処で——」

そこへ下婢^{かひ}が来て、彼女に告げた。

「ごしんぞ様。ちよつと急いでお越し下さいませ。旦那様がまた、お苦しみの御様子ですから」

おえつは、聞くとすぐ、日吉の姿など眼のうちにないように、何もいわず家の中へ駈け入ってしまった。

置き捨てられた日吉は、ちよつとほつ然^{ねん}として、尾濃^{びのう}の平野に暮れてゆく雲を見ていたが、やがて土堀口からはいりこんで、加藤家の台所の外に佇^{たたず}んでいた。

すぐ中村の家へ帰つて、母の顔を見たかったが、義父^{ちち}の筑阿弥^{ちくあみ}を思うと、わが家の垣にも、茨^{いばら}が感じられる。

(次の奉公口を、先にきめてから——)

というその辺の思慮と、藪山のこの家へは一度、耳に入れておくのが順序だとも考えたりして、来てみたのであるが、その弾正は、重態だというし……。

「どうしようかなあ？」

飢^{ひも}しい腹を思いながら、日吉は漠然と、今夜からの寢床を思案

していた。すると彼の冷たい足に、何か柔らかかなものが絡からみついた。ふと見ると愛らしい小猫なのだ。日吉は、抱きあげて、台所の端に腰かけた。

「汝われも、腹が減へつてるのか」

夕方の薄ら陽が、彼と小猫のまわりに寒げに映さしている。小猫は、日吉のふとところにかたがた顫ふるえていたが、少し温ぬくんでくると、彼の顔をペロペロ舐なめだした。

「よせやい。よせやい」

日吉は顔を逃げながら猫へいった。彼は、猫はあまり好きでなかった。けれど今、彼にこんな親しみを示してくれるものは猫しかなかった。

「あら……？」

ふと、日吉は耳をそばだてた。小猫の眼も、びつくりしていた。そこからすぐ向うに縁先の見える部屋から、病人の癩かんだかい呶鳴り声なげがふいにしたからである。

——と、やがて台所へ、おえつが眼を泣き腫はらした顔して退さがつて来た。何か、良人の気を損ねたのであろう。煎せん薬やくの土瓶をこん炉へかけながら袖口で涙をふいていた。

「叔母さん……」

気を遣つかいながら、日吉は猫の背をなでながらいった。

「この猫、腹が減へって、顫ふるえているよ。ご飯をやらないと、死しんじまう……」

実は自分の空腹をも、訴えているのであつた。けれど彼女は、

猫の御飯どころか——と、

「おまえ、まだそんな所にいたのかえ。陽が暮れても、家には泊めておかないのですよ」

といつて、また、袖に涙の目をかくした。

薬を煎^{せん}じながら、つきつめた胸をひとり抱いて、泣いている若い叔母のすがたには、二、三年前の幸福そうな、新妻の美しさはもう、雨にたたかれた花みために褪^あせている。

猫を抱いて、猫と共に、飢えと寢床に行きはぐれていた日吉は、（泣いてるんだから、叔母さんも、何か心配があるんだらうな）

と、相手の身にもなつて、まじまじと彼女のすがたを見ていた

が、ふと、その若い叔母の体つきに、或る異様なものを感じて、何気なしに、

「叔母さん……叔母さんはお腹なかが大きいんだね。妊にん娠しんなのけ」と、訊ねた。

泣いていたおえつは、自分がいちばん悲しんでいることを、いきなり突拍子もないことばで、訊かれたので、頬でも打たれたように、はつと顔を上げたが、

「男の子のくせに、そんなませたこと、いうものじゃありません。いやらしい子！」

と、よけいに悲嘆をいらだたせられたように、

「はやく、陽のあるうちに、中村へでも何処へでもお帰りよ。…

…わたしは今、そ、それどころではないのだから」

と、咽むせびかける声をのんで、部屋のうちへ隠れてしまった。

「……帰ろ」

自分で自分へつぶやいて、日吉は立ちかけたが、小猫はなお、彼の温かなふところから離れたがらなかつた。するとさつき彼が云つたので、下婢が気がついたものとみえ、小皿に冷飯を盛り、汁をかけて、それを見せながら外で呼んだ。

飯を見ると、小猫は、日吉のふところを捨てて、そのほうへ飛びついて行つた。日吉は、口にいっぱい唾つば液をためながら、猫の飯と猫に見み惚とれていた。

「………」

彼には、飯が与えられそうもない。中村の家へ行こうと心に決めた。そして空腹の身を起して、庭先を歩きかけると、閉じこめてある病人の居間から、耳ざとくその足音を咎めて、

「だれだツ」

と、呶鳴る声が出た。

はっ——と立竦みに、日吉はすぐ、それが弾正と知ったので、

日吉でございませと答えた。それから、ちようどよい折とも思つたので、茶わん屋から暇を出されて帰つて来たことも、ついでにそこから告げた。

「おえつ。そこを開けろ」

と、弾正の声が内でする。

けれど彼の妻は、夕方の風がはいつて冷えるとまた、傷口が痛むからと、しきりに宥なだめているらしく、その障子は開こうともしないのである。

すると、弾正が、

「ばかつ、十日や二十日、生きのびたとて、何になる。開けるツ」と、ふたたび癩かんしゃく癩しゃくを起したので、おえつは、泣く泣く障子をひらいて、

「日吉、御病気にさわるから、ごあいさつしたら直ぐ帰るんですよ」

「はい」

日吉は立ったまま、病室へ向ってお辞儀をした。弾正清忠は、

蒲団ふとんを重ねてそれへ重症の体を凭もたせかけていた。

「茶わん屋を出されたか。——日吉」

「はい」

「むむ。よかろう」

「……………」

「暇を出されたことは、少しも恥辱ではないぞ、不忠、不義さえしなければ」

「ええ」

「そちの家も、以前は武士だ。武士はな、日吉」

「はい」

「飯のため、飯に使われてあくせくせんのが武士だ。天職のため

に、御奉公の本分のために、生涯する。飯はつき物、人間の天てんろ禄くだ。——頼むから、貴様あ、飯を追って一生うろうろ送るよ
うな人間になってくれるなよ」

塩しお

もう夜半よなかに近い。

瘡かんのつよい、そのくせ体のひよわい小竹こちくは、泣きぬいていたが、
やつと藁わらぶとんの中で、乳を離れかけた。

「母さん。——起きたら寒うて凍こごえてしまいがな。そのまま寝やすんでいなされや」

姉娘のおつみは、母をいたわつて止めたが、お奈加は、

「何の、父さんも、まだ帰らぬのに」

と、起き出して、おつみと共に、宵よいから仕残してある夜業よなべ仕事を、炬のそばで、せつせとやりだした。

「父さん、どうしたのやる。今夜もまた、戻らぬのかしら」

「お正月じゃほどに」

「でも、家の者は、母さんはじめ——餅一つ祝うでなし、こうして寒々、夜業よなべして暮してるに」

「男は、交際つきあいというものもあるしのう……」

「いくら主あるじだからというて、働きもせず、お酒ばかり飲んで。——帰ってくれば、母さんばかり虐めいじ、わたし、腹が立つ……」

おつみも、もう年頃だった。ふつうなら嫁にも行く年だったが、この母を残しては嫁とつげもせず、この家計を知とつつていては、春着一枚はおろか、紅白粉などさえ、夢にも思えなかった。

「いうてくれるな」

と、母は涙もろい。

「父さんは、ああいう人じゃでな、あてにはならぬが、日吉もやがてよい若者になる程に、そしたら其女そなたも、嫁入りさせよう。：

…だが、この母を見ても、良人おつとはよくよく選ばぬと」

「母さん、あたし、お嫁にゆくことなど、まだ考えていませぬ。

いつまでも、母さんの側にいて」

「女子おなごはのう…：そうもゆくまい。今の父さんには内密じゃが、

前の良人弥右衛門様が、戦で傷を負うた時、御主君からいただいたおかねのうち、青ざし一貫文だけは、其女が嫁入りの代にと思しろうて取つてある。心がけておいた屑糸くずいとも、鞆まりにして七つも溜たまつた。あれで小袖の一つも織つてやりましょうぞ……」

母のことばを遮さえぎつて、

「あッ。母さん。……誰か土間へはいつて来たようですよ」

「父さんか」

おつみは、そこから、身をのぼして、土間の方を覗きながら、

「……いいえ」

「では、誰じゃ」

「誰だろ？ ……黙つて」

気味わるげに、おつみが、声を嚙のんでいると——

「おつ母かあ」

日吉の声だった。

暗い土間に立ったままで。——そしてじつと、いつまでも、上がって来ようもしないのであった。

「おやツ。日吉じゃないか！」

「……うん。おらだよ」

「ど、どうして、今頃」

「茶わん屋から暇が出たから帰って来たんだよ」

「えッ、お暇が出た……」

「かにんして。なあ、おつ母さん。かにんして……」

土間の闇に、すすり泣きがする。——お奈加も、おつみも、そこへまろ転ぶように出て行つた。

「お暇の出たものを、今さらどうしようぞ。さ、お上がり。……なぜいつまで、立っているのじゃ」

手を取ると、日吉は首を振つて云つた。

「いや、上がらずに、おらはまた、すぐ行くよ。一晚寝たらまた、おつ母のそばを離れるのが嫌になるから……」

この貧苦と、事情の複雑なところへ、日吉がふいに、暇を出されて帰つて来たことは、彼の母には、胸にこたえる当惑だったが、上がりもせずすぐにまた、この夜の夜中よるよなか、出て行くという彼の言には、なおさら胸をいた傷めて、驚きの目をみはつた。

「どこへ行くのじゃ。——今から？」

「分ないけど、こんどは、侍奉公して、きつとおつ母にも、姉さんにも、安心させるよ」

「侍奉公に」

「おつ母は、侍にはなるものじゃないといったけれど、おらはやつぱり侍になりたい。藪^{やぶ}山^{やま}の叔父^{おじ}さんもいった。——今だぞと

いった。——おらは侍になる」

「それにしても、まあ上がって、あしたの朝、よう義父^{とう}さまにも、ご相談してみやい」

「会いとうない」

日吉は、かぶりを振って、

「——おつ母、おらつてえ子を、十年ばかり、ないもんだと思つてな。体を丈夫にしといてよ。いいかな。……姉ちゃん、おまえもお嫁にも行かないで、悪いけど、辛抱してなあ。……その代りおらが偉くなつたら、おつ母には絹を着せ、姉ちゃんには、しゆち縞しんの帯を嫁入りに買うてやるでな」

「……………」

「……………」

母も、おつみも、おえつ嗚咽おえつしているだけだった。——日吉がこんなことをいうようになった！——そう思うだけで、胸は涙の湖になつて、身も溺れる心地だった。

「ここになあ、おツ母、茶わん屋から貰うて来た塩が二升あるで、

置いて行くぜ。おらが二年働いて稼かせいだ塩だ。姉ちゃん、後で台所へやつといておくれ」

「……あ、ありがと」

母は、日吉がそこへ置いた塩の袋を拝んだ。そして沁しみ々しみ、

「おまえが、世間へ出て、初めて働いて取ったお塩——」
と、見入つて云つた。

日吉は、満足した。

母の歡よろこぶすがたを見ると、彼も体が浮くように欣うれしかった。そして、また何かで、この母を、これ以上にも、歡うればせてやりたいと心に誓う。

——そうだ、塩になろう！

我が家の塩だ。いや我が家ばかりでなく村々の塩に。いやいつそのこと、天下の塩だ。

日吉は、肚はらの中で、そんなことを呟つぶやいた。だがいつも、何気なく思うことを、思うままいうと、世間の者から、すぐほら吹きといわれる。そのせいで、この頃彼は、いわない癖がついていた。

「——じゃあ、おつ母、姉ちゃん。当分、帰らないよ」

日吉は、土間の口まで、後あと退とじさりに退った。その間も、眼は、母とおつみの姿から離れなかった。

おつみは、いきなり伸び上がって叫んだ。——日吉の片足が、土間の外へ、跨またぎかけたからである。

「あつ、お待ち……日吉や、待って」

そして、母へ縫すがつて、

「母さん、さつきいった青ざしの一貫文。あたしは、お嫁入りにも、何もいらぬ。いいえ、お嫁になんか、行かんでもよいから

……日吉に、その金を遣やつて」

咽むせびかける唇を袂たもとに抑えて、母は奥へはいつて行つた。そして一さしの錢を日吉に渡した。

「いらぬ。いらぬ」

日吉は、首を振つたが、おつみは姉らしい思いやりを声にこめて、これから世間へ出るのに、おかねがなくてどうするかと叱つた。

日吉は、かねよりも、も一つ欲しい物があつた。

「おつ母、これよりも、おらにお父さんの持っていた刀をくんな
いか。お祖父じいさんの時からあるあの刀を——」

七歳の頃、実父の弥右衛門が見せたあの伝来の刀を、日吉は、
忘れてなかつたとみえる。

——が、彼の母は、どきつと胸を衝かれたように、

「刀よりは、おかねの方が、身の護りになる。刀は、思い止まっ
ておくれ」

と宥なだめすかした。

日吉は、すぐ察して、

「ないの」

と訊ねた。

「……ああ。ないよ」

云い辛そうに、母はいった。筑阿弥ちくあみの酒の代しろに、それはとうに
売り払われてしまったのである。

「じゃあ、あれでいい。——おつ母、物置小屋の中の鑄さびがたな刀な
らあるだろう」

「あ……。あれなら」

「いいかい。持って行っても」

日吉は、母の顔いろに、気がねをしながら、念を押した。

やはり七歳の時だった。そのボロ脇差を見つけて、どうしても
欲しいと駄々をこね、さんざん母を泣かせたことをも……彼は覚
えていたからであろう。

「……………」

お奈加も、その時のことを、今ふと思い出していた。侍になるな、戦^{いくさ}する身になるな——と、あの頃は、日吉の行く末に祈ったものであったが、自分で生んだ子も、成長するにつれて、どうにもならないものだということ、今はもう観念していた。

「持っておいで。……だけど日吉や、おまえはあれを、決して人様へ向って、抜いたりなどしまいね」

「えッ、いいの？」

「おつみ、持って来ておやり」

「いいよ。おらが取って来る」

日吉は、裏の物置小屋へ駈けこんだ。そして、そこらの物を踏^ふ

みだい
台にして、壁の梁はりに吊つてある一腰のボロ脇差を取り下ろした。
すぐ腰に差した。

七歳の時に泣き喚わめいた自分のすがたが——遠い以前に振り返られた。急にすつくと、背の伸びたような成長感が、彼の胸を通りぬけた。

「日吉や、母さんが、もいちどおいでつて」

おつみが、穿はきもの物をはいて、物置の方へ告げた。戻つて見ると、母は壁の神棚へ、燈明を上げ、小さい木皿へ、一つまみの粟あわと、それから日吉の齎もたらした塩とを盛つて、掌てを合わせていた。

「そこへお掛け」

上がりがまち櫃へ、日吉を腰かけさせておいて、母は神棚から、剃かみそ

刀を下ろした。

日吉は、それへ眼をまろくして、

「おつ母、何するんだい」

「元服して上げるのじゃ。形ばかりではあるけれど、おまえの門出を祝うて」

と日吉の髪へ剃刀を当てた。そして新らしい藁を水に浸し、切り上げた根もとを結び直して与えた。

生涯、忘れることの出来ない感銘が、そうしている間に、日吉の血へ沁み入っていた。頬に耳に、時折触れる母の荒れた手を、傷ましく思いながらも、彼は、

（おらも、もう人なみだぞ）

と、自覚を持った。

野良犬の声が、どこかで頻りとしている。戦国の深い闇に、殖ふえてゆくのは、犬の声ばかりだった。日吉は、外へ出た。

「おつ母。……じゃあ」

達者に——というべき後も、喉のどにつまんで、それしか出なかつた。母は神棚の前へ、背を曲げていた。泣きだした小竹こちくを抱いて、おつみは外へ追いかけて出て来た。

「……あばよ、あばよ」

日吉の影は、黒く小さく、後も見ずに駈けて行つた。霜のせい
か明るい夜だった。

まんじ
卍の一族

清洲きよすから数里。那古屋なごやからでも西へ十里とはない。

そこの蜂須賀村はちすかむらへはいると、すぐ何処からでも目につく笠形かさかた

の丘がある。夏木立の鬱蒼うつそうとしてこの頃の昼間はただ蟬せみの

声こえだった。夜は、大きな蝙蝠こうもりの影が月をかすめてまま飛び交う。

「おういッ」

何者かが、闇でこう呼んでいる。袂こたまのように丘の木立の中でも、

「おういッ……」

と、同じ調子に答えている。

よほど近づいてみないと、ちよつと気づかないが、丘の崖や大

樹を繞めぐつて、蟹江川の水を引いた濠ほりが、自然の古池のように蒼い水草がいつぱいなのだ。

その水草はまた、古い石垣と、土塀とを抱いて、何百年かの間、あるじこの主の地位と勢力と子孫とを、守り続けて来たものである。

丘一帯の宅地は、何千坪か、何万坪あるものか、外からはちよつと想像もつかない。勿論、邸の主は、この海東郷蜂須賀村の土豪で、姓名も代々、蜂須賀はちすかといい、小六ころうくと称している。

ここへ土着した中興の祖は、小六正昭まさあき。

今の当主小六正勝まさかつ。

彦右衛門ひこえもんともいう。

応永おうえい年間に、足利あしかがの姓を改めた家系だともいうし、応仁おうにん

の大乱をうけて、この地方へ土着したのだともいわれているから——その是非はとにかく、何しろ古い家すじであることに間違いない。

「おうウイツ。開門ツ……」

濠の外で、再び四、五人の人影が唝鳴っている。

何処からか今、立ち帰つて来た主の——小六正勝と、その家来。といっても、小六は今も、またその先代からも、正しい主筋も持っていないし、領土の権も、領政も施しいていない——いわゆる一土豪に過ぎないから、その家来といっても、主といっても、どこか粗野な風がある。

家長と家の子、といったような親しみぶかいところもある代り

に、とうもく頭目とてした手下と呼び合つてもおかしくない、野人ぶりもあつた。

「何をしておるか」

小六が、つぶや呟くと、

「まだかッ。門の者」

と家来がまた呶鳴つた。

すると、

「おううい」

と、三度も同じ返辞がしてから初めて、そこの木戸がどーんと開いた。

同時に、左右から、

「誰方だ？」
どなた

と、燈火を向ける。

薄金うすがねで作った吊鐘形つりがねがたの——それに把手とってが付いているので——

——戦場にでも雨の夜行にでも持ち歩けるがん燈どうとよぶ燈具だった。

「小六だ」

がん燈の光を浴びながら、木戸を固めている者へ、小六は尋常にそう答える。

分り切っている筈だが、たとえ主でも、これほど厳密でなければならぬ四隣の現状だった。

「お帰りなさいまし」

初めて、一斉に礼儀をする。その小六に従ついて、供の面々も、

「いなだおおいのすけ
稲田大炊助」

「あおやましんしち
青山新七」

「ながいはんのじょう
長井半之丞」

「まつばらたくみ
松原内匠」

といちいち名乗つて、あらたがん燈の検めを浴びながら、門の内へ通つた。

小六と、その一族四人はずしずしとあしおと跫音重く、暗い大廊下を、奥へ通つて行つた。

「お帰り」

「お戻り遊ばせ」

廊下の角々で、従僕の顔、女の顔、妻子達の顔——どれほどい

るのか分らない大家族の中に住む一部の顔が——外から戻つて来た家長を出迎える。

「うむ。……うむ」

小六は、いずれへも一様に、一瞥いちべつを与えながら、広間へ来て、円座の上へどかと坐つた。

——機嫌が悪い？

短檠たんけいの明りが、明らかに、小六の顔の筋を、横から照らしている。

白湯さゆ。それから茶、黒豆の菓子など、そこへ次々に持ち運ぶ女達も、恟々きょうきょうとして、気をつけていた。

「大炊おおい」

とやがていう。

四名の端にいた稲田大炊助を振り向いてである。

「はあ」

「いい恥をかいたな。今夜の招きでは」

「……さればで！」

と、四人とも、苦にがりきる。

小六の不機嫌は、やり場がなかった。

「内匠たくみ。半之丞。——おぬしらの考えはどうだ？」

「どうと仰せられるのは」

「こよいの恥をだ！——蜂須賀の一族として雪すすがずばなるまい

が」

四人はまた、沈黙にふさぐ。

蒸暑い夜だ。そよ風もない。蚊やりの煙が、徒らいたずに眼に沁みて立ち迷う。

事情はこうだ。

今日。

織田一家のさる大身から、茶事の招きをうけた。小六は元より、そういう趣味は全くない。だが、同席の客は、この尾張ではみな歴々な人物なので、顔つなぎにもよい折だし、また欠席したがため、

（土豪といえ、ていはよいが、いわば野武士の頭目。茶の招きには恐れたのだろう）

などと嘲笑あざわらられるも心外と——一族四人を連れて、特に威儀を張つて、出向いて行つたのである。

——ところが、その席で。

端はしなくも、主あるじが自慢の、赤絵の水挿みずさしが、客の目をみはらせた

はいいが、話のはずみから、

(はて? この品は、茶わん屋捨次郎すてじろうの宅で、見たことがある。

同家で野武士に盗まれたという名品と同じじやが)

と、つい口くちすべ辻つじらせた客がある。

主は驚いて、

(滅相もない。これは近頃さかい、堺の茶道具屋から、千金に近い値で

手に入れた物——)

と、書付まで示すと、客もことばの手前、

(では、盗んだ野武士が堺の商人へ売りとばしたのが、転々して、御当家へ廻つて来たのでおぎろう。茶わん屋へ押し入った野武士は、御厨みくりやの渡辺天蔵と、名まで知れておること、間違いはない)

と明らさまにいったので、席はいとど白けてしまった。

なぜなら、そういった客は、もちろんそこに居合わせた蜂須賀小六の、どんな存在か、また、どんな係けいるい累かさねを持っている者か、などということは、知らなかったに違いないが、御厨の渡辺天蔵といえ、小六の甥おいにあたる者で、同時に、彼の土豪的勢力を構成している一族の、その一人であるということは、主も客の大部

分も、かねがねわきま弁えていたからである。

(いづれ後日、小六から改めて、ごあいさつ致すであろう)

と、彼は、自分の汚名のように主へ誓つて、その恥いきどおと憤りを、
眉に抱いて帰つたのである。

どうだ？

おぬしらの考えるところは。

と、小六から今、沈痛に問われはしたが、さて、稲田大炊助に
も、青山新七にも、半之丞や内匠にしても、

(こうなされては)

と、すぐ答えられるような名案もなかった。

これが、自分たちのような、家来筋ならば、何とでもいえる。

また、どうにでも、処分はつく。

だが、その処分すべき人間が、主人の小六とは、血のつながっている甥おいの天蔵なのだ。御厨村みくりやむらに住んで、蜂須賀一族のわかれとして、常々、飼かいざむらい侍の二、三十人は家に置いている渡辺天蔵である。

だが、小六はかえつて、血のつながっている人間だけに、
「不埒ふらちな——」

と天蔵の悪事を、心から憎んで止まないのだった。

「迂闊うかつだが、思いあわせれば天蔵の奴、近ごろ身に綺羅きらをかざり、女など幾人も蓄たくわえているとか、不審なかども目に見えてあつた。

——家の名にかけても、彼奴きやつを、捨ててはおかれぬ」

すこしの間まをおいては、こう憤りの呻うめきのように、小六はひとり眩つぶやいた。

「……さもなくてさえ、土豪という家門のかなしきには、蜂須賀一族もまた、野盜の野武士ずれや、破廉恥はれんちな浮浪人どもと同視されて、この小六正勝の耳にすら——あれは野武士の頭目と——世上の聲が、まま聞えてくる折も折」

「ご推察いたしまする」

まつばらたくみ
松原内匠が云った。

半之丞も大炊助も、俯向うつむいた。——ふと、小六の眼がしらに光つた。悲涙を見て、はつと、胸を打たれたのだった。

「聞けよ。おぬしらも」

小六は、顔を向け、

「——この邸の屋根瓦には、卍まんじの紋こけが苔こけさびてあろう。遠祖源みなも

とよりまさ

頼政公が、義兵をあげられた時、高倉宮より賜った家紋と伝え聞いておる。その末が、足利將軍に仕え、蜂須賀太郎以来、失脚して野に下り、今のわしという者にまで——土豪とよばれて来ておるものの、これは時だ」

「……はい」

「血までは、野に朽果くちはてておらぬ」

「……」

「土豪よ、野武士の頭かしらよと、いわれればいわるる程、小六正勝は、ひそかに誓うて、今に！——と、この血を、この家名を、世人

に示し直す日を待っていたのだ」

「いつも、伺っているお言葉にございまする」

「……さればこそ、おぬしらにも平常、野には住むとも、武ぶを怠るな、身を戒いましめよ、弱たすきを扶たすけよと、嚴やかましく沙汰してあるに……。何ぞ知ろう、血のつながる甥おいめが、今なお、性根を改めずに、町人の家へ襲よせて、夜盗を働いておろうとは！」

屹きつと、唇を嚙むと、その時もう小六の肚は、決っていた。

「おおいのすけ
大炊助。新七」

「はい」

「二人して、すぐ行って来い。御厨みくりやまでだ」

「はっ」

「わしの命をもつて、天蔵めを、ひき連れて来い。だが、騙して
 呼びよせて来いよ。手飼の者もおるし、武力では、一すじ縄では
 ゆかぬ天蔵のことだ」

「心得ました」

主人の肚に、その決意がすわれれば、何の造作もないことと、稲
 田大炊助と青山新七のふたりは、すぐ御厨村へ立つて行つた。

森の丘は、鳥のさえずりに暁る。あけ——土豪蜂須賀の砦とりでづくり造の
 中の一棟に、早くから朝の陽があたっている。

「松。……松ッ」

小六が、眼をさましたらしい。

妻の松まつなみ波が、

「お目ざめでございますか」

寢所をのぞくと、紙蚊帳かみかやのうちで、小六は横になつたまま。

「ゆうべ御厨みくりやへ遣やつた使いの両名は戻つて来ないか」

「まだ立ち帰りませぬが」

「……ふむ？」

と、案じ顔うめに呻く。

悪い事をする奴だけに、頭のするどい甥おいの天蔵。まずくすると、感づいたかな？——ちと遅いが——と独り思う。

妻は、その間に、紙蚊帳のつり手を外はずしかけた。その蚊帳のすそに戯れていた亀かめいち一は、まだ満まる二歳ふたつにもならなかつた。

「亀よ。来い」

小六は抱きよせて、高々と差しあげた。絵に描いた唐子からこのようによく肥えた亀一は、若い父の腕にも重かった。

「どうした。瞼まぶたが赤う腫はれておるが——」

と、小六は、亀一の眼を舐なめてやる。亀一は、父の顔を引つ搔いて膝の上であばれた。

「蚊に喰べられたのでございましょう」

「蚊ならよいが」

「寝ても暴れて、蚊帳の外へ、ころげますので」

「寝冷えさすな」

「はい」

「疱瘡ほうそうに気をつけよ」

「仰せまでもございませぬ」

「夫婦ふたりが仲の初の児。いわばおぬしと俺との、これは初陣ういじんの賜物」

「ホ、ホ、ホ」

開けひろげた寢所へ、夏の朝風が吹き流れてくる。カーン、カーン、と何処かで鍛冶かじの鎚つち音がたかく響くのも、寢覚ねざめの耳には、快かった。

その鎚音を聞くと、

「どれ」

小六はもう、わが児を膝から捨てて顧かえりみななかった。妻の笑顔も、眼になかった。

風雲の裡へ。

動流の中へ。

今や、麻のごとく乱れていると知る天下の一角へ。

小六の若い血、逞しい体は、大きな野望を期しているものように、和やかな一時を振り棄てて、その室から出て行つた。

書院に坐つて、朝の茶を静かに啜るでもない彼である。衣服をかえ、顔を洗うと、もう外庭へ出て、大股に歩いてゆく。

鎚の音が近くなる。

小道をはいつて行くと、森の中に、祖先以来、斧を入れなかつた大木を伐採して、新しい平地を拓き、そこに二棟ほどの鍛冶小屋が並んで建っていた。

小六が泉州堺せんしゅうさかいから密ひそかに呼びよせた、鉄砲鍛冶の国吉くによしが、弟子と共に、仕事していた。

「どうだな？ 仕事は」

彼が立つと、国吉や弟子は、仕事場の土間に、平伏した。

「まだ、巧くゆかぬな。——見本の鉄砲と同じような物が、何とか出来ぬものか」

「ああしたら、こうしたらと——寝食もわすれて、苦心は致しておりますが」

——無理もない。

小六がそういうようにうなず頷いていると、母屋おもや使いの小侍が追つて来て、

「お頭様かしら。ただ今、御厨みくりやへ行つたお使いの御両所が、戻られま
したが」

と、告げた。

「なに。帰つて来た」と

「はい」

「して、大炊と新七は、天蔵めを連れて来たか」

「甥御おいごさまにも、御一緒にお越しなされました」

「よし！」

うまく誘い出したな——と小六はまず、首尾を心で頷うなずきながら、

「待たせておけ」

と、いった。

「いつもの御書院へ」

「そうだ。直ぐ行くから」

「はい」

小侍は、駈けて戻って行く。

奇策縦横の人物——と一族からは信頼されているが、小六の半面にはまた、ひどく気の弱いところもあつた。

義には強いが、涙には勝たれないという弱さなのだ。わけて骨肉の情には脆いもろ小六なのである。粗野で兇暴で荒削りな——土豪の家長として睨みも押しもきく骨太い性格の中に、それだけに本能的な涙と、また、怒ったら野火のように止らない血を持っていた。

その彼が、

(——今朝は甥おいを斬らねばならない！)

と今、胸をすえている。

だが決して、気のすすむ顔色ではなかつた。告げに来た小者が去つても、彼は鍛冶小屋の前に立つて、いつまでも、国吉と弟子の仕事ぶりをながめていた。

「——無理もない。何せい、鉄砲が渡来したのも、天文十二年、
ついで七、八年前のことだからな。それ以来、諸国の武家豪族ども
が争つて、この新武器の製作を計つてみたり、或いは、ばんせん 蛮船か
ら買い入れようと競きそつているが——この尾州びしゅうあたりはまだ地の
利を得ておるもの——甲州こうしゅう、越後えちご、奥州おうしゅうあたりの山やま

武士むらいのうちには、鉄砲とはどんな物か、まだ見たこともない者が多かろう。——職人にしても、手馴れぬのは当りまえだ。急がずともよい、みつしり工夫を積んで、つくり出したら、いくらでもつくれるよう、他日の備えに間に合えば——」

そこへまた、さっきの取次が、

「お頭様」

と、小道の露に身を屈かがめて、彼の足を促うながしに來た。

「もう御一同、書院にお揃いなされて、お待ち申しておりますが」

小六は、振り向いて、

「今、行く」

「は」

「すぐ参るから、待たせておけばよい」

「はい」

取次の小者は、多くをいうことも出来ず、引き返して行つた。
 小六の胸には、馬ばしよく諤をを斬るの気もちで——甥おいの成せい敗ばいを決心
 していながらもまだ——情と正義とが、割りきれずに、乱れ合つ
 ていた。

で、彼は去りがてに、

「国吉」

とまた、小屋の中へ話しかけた。

「……だが、年内には、使える鉄砲が、十挺ちようや二十挺は出来るだ
 ろうな」

「左様で——」

と、鍛冶の国吉は、責めを問われたように、職人氣質かたぎな苦痛を、
煤すすまみれな顔にあらわして、

「ただ一挺でも、これでよいと思う物が出来さえいたせば、後は四十挺でも百挺でも、一つ物をつくるのは、やすいことでござい
ますが……」

「その一挺だな。——難しいのは」

「お手当ばかり戴いていて、心苦しゅう存じますが」

「よけいな気遣きづかいはするな」

「ありがとうぞんじまする」

「来年、さらいな年、また、来る年も、来る年も。合戦はやむ間も

なからう。大地の冬草がみな萎しほみ果て、新しい芽に萌もえ代るまでは。——で、鉄砲も急ぐのだ」

「この上とも懸命に、やってみまする」

「しかし、密ひそかにだぞ」

「心得ております」

「鎚つちおと音が少し高過ぎるな。濠ほりの外まで、聞えはせぬか」

「それも、気をつけまする」

「むむ」

小六は、去りかけたが、またふと、鞆ふいのそばに立ててある一挺の鉄砲に目をとめて、

「それは」

と、指して訊ねた。

「見本の物か、出来た品か」

「新品にございますが」

「どれ、見せい」

「いえ、お目にかかるまでには、まだなかなか」

「いやいや。ちようど、ため試し物があるのだ。——撃てぬことはあ

るまい」

「たま弾は飛びますが、せきがね関金の噛み合わせが、どうやっても、原品

のようにつくれませぬ。もう一息、工夫いたせばと思っておりますが」

「試すのも、工夫の一つだ。よこせ、その鉄砲を」

小六が国吉の手からそれを取つて、銃の腹を肱ひじに乗せ、物を狙うような姿勢をしていた時である。

三度目の迎えが来た。

が、今度は、小者の取次ではなかつた。ゆうべ御厨みくりやへ行つて歸つて来た稲田おおいのすけ大炊助なのである。

「まだ、御用はおすみになりませぬか」

大炊の声に、小六は、鉄砲の台尻を肋骨ろっこつに当てたままふり顧かえつて、

「おお。稲田」

「お早くお越しねがいとう存じます。弁口べんこうをもつて、天蔵殿を

召し連れては参りましたが、妙な？——と氣どられたか、落着

かないご挙動。悪くすると、檻おりを破る虎になるやも知れませぬ」

「よしッ、参ろう」

おおいのすけ

大炊助に鉄砲を持たせて、小六は、森の小道から書院の庭の

ほうへ、大股に歩いて行つた。

成敗せいばい

何の急用か？

——疑うように、渡辺天蔵は、書院の端に坐つて、落着かない目をしていた。

青山新七。

長井半之丞。

松原内匠。たくみ

それに今、叔父を迎えに立った稲田大炊助おおいのすけといい、揃いも揃って、蜂須賀党の腹心たちが、自分のそばに坐りこみ、自分の眼のうごき、手の微動にも、監視をそそいでいるらしく思えるのだ。

——はてな？

変だわえ、と天蔵はここへ通るとすぐ感じていたのである。口実をもうけて、帰ろうかとさえ考えたが、その間に、庭のほうに小六の姿が見えてしまったので、

「おう。叔父御で」

と、彼の方から、強しいて笑顔を作りながら、迎えかけた。

小六は、鍛冶小屋から今、持って来た鉄砲を、地に立てて持ったまま、

「天蔵。庭へ出ぬか」

と、外から呼んだ。

その様子は、常の小六と変ったところもないので、天蔵はいつもの狎なれ癖ぐせをすぐ出して、

「何か、急にてまえに、御用だというお迎えで参じましたが」

「うむ」

「何の御用で」

「まあ、降りて来い」

「はあ」

沓ぬぎの藁草履わらぞうりをはいて、天蔵は庭へ出た。半之丞や内匠たくみも、彼について出た。

「そこに立て」

小六は、甥の天蔵へ、そう命じてから、自分は庭石の一つへ腰をかけた。手の鉄砲を立てて持ったなりに——である。

天蔵はとたんに、叔父の眸から自分を射て来た或るものを直覚して、はっとしたが、もう遅かった。

叔父の腹心たちは、碁石ごいしのように、四方に立って、囲みの形を取っていた。——天蔵の顔は見えているまに、蒼あおくなつた。

「……………」

「……………」

小六の体から、目に見えない憤りの炎が立っている。日頃、狎なれやすい天蔵にも、その眉は、むだ口ひとついわせなかった。

「天蔵ツ」

「は。……」

「おぬし、小六が日頃、いつてある言葉を、よも忘れはしまいな」
「覚えております」

「人と生れてだ——今の世の乱国に生れてだ——最も恥すべきことは徒衣といとしよく徒食と良民いじめだ」

「……………」

「諸国の土豪やからという輩が、みなそれなのだ。野武士という奴が、みなその類たぐいだ。——だが、小六正勝の一家は、それではならぬぞ。

……と堅く、いまし戒めてあるはずだが」

「はい」

「おれの身内だけは、志を大きいところへ持とう。百姓いじめや、野盗のまねはやるまい。そして一国一城を持つたら、お互いに栄えよう。……そう誓ってあるな」

「あ、あります」

「それを破ったのは、誰だ」

「……………」

「天蔵！ おのれは、そのためにおれが養わせておく武力を悪用して、夜盗を働いたな。茶わん屋へ押し入って、赤あかえ絵の名器を盗んだな！」

「……げッ」

逃げかかる天蔵へ、小六は、大^だ喝^{かつ}をあげせながら突ッ立った。

^{みぐる}「醜しいッ！ 坐れッ」

「坐れッ。それへ！」

と、もう一度、小六は呶鳴りつけて、天蔵の気を呑んでしまつてからまた、

「逃げる気か。おのれは」

と、責めた。

「に……にげなどは、いたしませぬ」

芝の上へ、腰をついたように、べたと坐つて、天蔵は顛^{ふる}え声^{こゑ}で

云つた。

「縛れ——」

小六は、四方に立っている四人へ向つて命じた。

松原内匠たくみと、青山新七とが、すぐ左右から飛びかかつて、

「おことばでござる」

と、うしろ手に捻ねじあげ、刀の下緒さげおで腕くびを巻きつけた。

はつきりと身の危険と、事の露顕ろけんを覚さとると、天蔵は蒼白な顔に、

奮然と、太々しい反抗をあらわして、

「あッ。お……叔父御。なんだつてこの天蔵を！ ……いくら

叔父御でも、無体むたいだッ。余りといえば」

「やかましい」

「覚えはないッ。この天蔵には今叔父御がいったような、盗みを

した覚えなどは」

「やかましいッ」

「誰に……。誰がそんなことを、告げ口したのかッ」

「まだ黙らぬか」

「叔父御も、叔父御じゃござらぬか。なぜ一応、うわさがあるならあると、天蔵に仰つしやつた上で」

「女々しい言い訳を」

「でも。——多くの身内を抱えている一族の頭目が、ひとの告げ口などに惑わされて、よく吟味ぎんみもせず」

吠ほえたけるのを、小六は、耳いとに嫌いといながら、手てについでいる鉄砲てつぽうを、肱ひじへ上げて云つた。

「こやつ。国吉の鍛うつたこの鉄砲の試しには、ちようどよい生き物だ。彼方むこうの牆かきのそばへ引き立て、木に縛くくつて立たせておけ」

新七と内匠たくみは、天蔵の背を突いたり、襟がみを持つたりして、庭の果てまで連れて行つた。弓矢では、よほどな射手でもない、矢の届かない程な距離であつたが、

「叔父御ツ。いうことがあるツ。もう一言、いわしてくれーツ」
と、そこから死にももの狂いでどなる天蔵の声は、よく聞えて来た。

「……………」

が、小六は耳もかささない。

おおいのすけ

大炊助が持つて来た火繩を取ると、弾たまごめして、直ぐそう叫

び狂っている甥おいの姿を狙い澄すましているのだった。

「わ、悪かった。叔父御一ツ。白状するツ。もういちど天蔵のいうことを聞いてくれい。いうことがあるツ」

的まに立たせられて喚わめいている者の声をよそに、四人は、小六の鉄砲の手元を、しいんとして、唾つばをのみながら見まもっていた。

刻。一刻……

彼方に狂っている天蔵の声はかすれてしまう。

そして、

(だめだ！)

と死を観念したか、がくりと天蔵が首を垂れたと思うと、

「大炊」

と、小六は鉄砲から眼を逸そらして、うしろに控えている彼を呼んだ。

「――せきがね金を引いても、たま弾が出ないぞ。どこかこの鉄砲にはまだ狂いがあるらしい。ちよつと小屋へ走って行って、鍛冶の国吉を呼んで来い」

鍛冶の国吉は、小屋からすぐ飛んで来た。

小六は鉄砲を示して、

「今、撃ち試してみたが、どこかまだ、不出来な箇所があるう。

弾が飛ばぬのだ。すぐ直せ」

と、いった。

国吉は、あらた検めて、

「すぐには直りかねまする」

「いつまで」

「夕刻ごろまでは」

「もつと早くいたせ、試しにかける生き物が、待つておるのだ」

「えッ？」

国吉は、そういわれて初めて、木へ縛くくしつけられている渡辺天蔵が、まと的に立っているのに気づいて、

「……あッ、甥御様を」

「余事よじを申すな」

と、小六は耳を逸そらして、

「そちは鉄砲鍛冶。一日も早く、ただ鉄砲の製作に成功するよう、

精しょうねん 念ねん すればよいのだ。——この一挺は、そちに取つても、それが成就するか否かの、大事な試作であろうが」

「はい……」

「悪人とはいえ、天蔵も身内の一人、犬死さすより、せめて鉄砲の試しにでも、役立たせてやれば、幾分でも世の多足たそくになろう。はやくして来い」

「へ。……へい」

「何を渋つておる！」

炬きよのような眼で、くわつと睨まれた心地がしたのである。その眼すら仰げないで、国吉は、

「はいッ、急ぎまする」

と鉄砲を抱えて、鍛冶小屋の方へあたふた戻って行った。

「内匠。たくみ——まと的の生き物には、水でも与えておけ。鉄砲の直るま

で、小者三名ほど、見張につけておくことも、いうまでもないぞ」

云い残して、小六は、母屋へ上がってしまう。それから、彼の

朝飯であつた。

内匠、たくみ大炊助、おおいのすけ新七たちの腹心も、それぞれ庭面から姿をか

くした。

長井半之丞は、その日、自分の郷土へ帰ることになっていたの
で、間もなく暇を告げ、いとま松原内匠も、用事で出かけ、後には稲田
大炊と青山新七のふたりだけが、丘のやしきに残っていた。

陽が高くなる。

きょうも暑い。

丘は蟬せみの声につつまれ、庭石は焦やけて、動いているものは蟻ありだけの炎天になった。

鍛冶小屋のほうから時折、烈しい鎚つちおと音がひびいてくる。必死に、鉄砲の関金を作り直しているのだろう。天蔵の耳には、それがどんなに聞えて行くか。

二、三度。

「まだか。鉄砲」

と、小六の部屋から、催促の声が出た。そのたびに、控部屋から青山新七が炎天を駈けて行って、やがて、

「もうしばらく……」

と、縁先へ戻つて来ては、鍛冶小屋の仕事ぶりを伝えていた。

その間に、小六は、自分の部屋に大の字なりになつて昼寝していた。新七も、夜来のつかれが出て、ついうとうとと居眠つていると、突然、

「にッ、にげたッ。新七どの！ 逃げたッ。き、来てくれッ」

と、庭先から、誰か喚わめいた。新七はびっくりして、裸足はだしのまま飛び出すと、番に付けておいた小者の一人が、

「お、甥御様が、後の二人を斬り仆して、に、逃げ出しましたッ」と、まるで粘土ねんどのような青い顔して、舌の根もうわの空に、告げるのだつた。

「えッ。逃げたと」

のめるように、新七は、その番人と共に、駈け出して行きかけたが、振り向いて、

「お頭目かしらツ。お頭目ツ。——甥御おいごの天蔵どのが、番の者を斬りすてて、逃げたと申しますぞツ。天蔵どのが逃げましたぞ」

ふた声ほど、呶鳴った。

蝉せみしぐれに包まれた母屋の一室で、快こころよげに昼寝していた小六は、

「なに！」

がばと、起き上がるなり、眠る間も抱いていた刀をそのまま小脇に、横縁から飛び下りて、もう新七のすぐ後に続いて駈けていた。

——来てみると。

さつき天蔵を縛り付けておいた木に、天蔵のすがたはなく、ただ木の根がたに、一筋の麻縄が、解き棄ててあるばかり。

足数にして、約十歩ばかり先に、一箇の死骸が、朱になつて俯つ伏しているし、ずっと土塀へ寄つた際にも、頭を柘榴割りにされた番の者が、塀の根へ寄りかかつたまま死んでいた。

そこらは、ぶち撒いたように、血がこぼれていた。炎天なので、土や草に乾いた血は、すぐ変色して、漆みたいに黒くみえるが、生々しい臭いに羽虫が寄りたかつて、面も向けていられない。

「番の者ッ」

「へ。……へい」

生き残つて、今知らせに駈けて来た男は、小六の声を浴びただ

けで、それへひれ伏してしまった。

「両の手くびを、下緒さげおで縛くくり、そのうえにもなお、麻繩をかけておいた天蔵が、どうして繩を抜けたのだ？ ……。この繩を見れば、断ち切ったようでもないが」

「はいッ……。と、解いて上げたのでございます」

「だれがッ？」

「あれに、殺されている、番の者の一人がで」

「何で解いた？ 誰のゆるしをうけて解いたか」

「もとより、初めは、耳にもかさずにおりましたが、甥御様が…
…尿いばりがしたい、尿をする間…と余り苦しがつて仰っしやいます

ので」

「ば、ばかな！」

と小六は、地だんだをふまないばかり、罵のつて、

「なぜ、そんな知れきつた手に乗つて——ええ！ たわけがッ」

「お頭かしら目様。おゆるし下さいまし……。ですが、甥御様が番の手

前どもへ仰つしやるには——あの情にもろい叔父が、どうして甥のおれを、ほんとに殺すものか。これはおれを意見するため、

仕置しているのだ。糺きゆうめい明だから、晩にはゆるされる。——そ

れを貴様たちが、おれのいうこともきかずおれを苦しめるなら苦しめてみる。……と、こう脅おどかしなさるので、一人がつい解いて、

彼方の木蔭へ、尿いばりをしに連れて参りました」

「そして……」

「ギャツ——という声が出た時はもう二人とも、殺されてしまったので、手前は、後も見ずに、お知らせに」

「くどいッ。——天蔵はどう逃げたか、それを先にいえ！」

「土塀へ手をかけていましたから——多分そこを越えて、外へ飛び下りたに違いございませぬ。どぼーんと、濠ほりの水音が、その時したように思いまする」

小六は、聴く間も、もどかしそうに顧みて、

「新七。追討ちしてしまえ。村の道へも、すぐ手配をしろ」

いいつけると、彼自身も、その手配のために、表門の方へ恐ろしい勢いで駆け去った。

今が今——というように、小六から性せっかち急にいいつけられて、

鍛冶小屋へ飛んで戻るなり、鉄砲の関金を鍛うち直していた国吉は、邸のうちには何が起つたのも、時が経つたのも、物音も一切知らなかつた。

ただ鉄砲。それしかない。

汗にまみれ、鞆ふいごの火塵を浴び、そしてようやくヤスリ掛けから仕上にまで来て、

「さあ。出来たが？」

と、ほつと一汗、肱ひじでこすつたが、果たして弾たまが思うように飛ぶか否か——は、まだ十分に自信がない顔だった。

空銃からづつを壁へ向けて、

ばしッ——

と、関金の調子を試し、

「うむ！ 良さそうだ」

初めて、呻うめいた。

だが、小六の前へ出てから、また不備があつたりしては面目ない。

国吉は、念のためと、それに弾たまごめして、銃口を地へ向けて一発撃つてみた。——ぶすツ、と勢いよく地面へ小さい穴が掘れた。

「しめたツ」

待ちかねている小六の顔を思いながら、国吉はすぐ、小屋から飛び出した。

そして、庭の方へ。——樹木のふかい小道づたいに、急いで行

くと、

「おい。おい」

誰か呼んだ。——木蔭に人影がちらと見えた。

国吉は足を止め、

「……誰だ？」

「おれだよ」

「おれとは」

「渡辺天蔵だ」

「えッ……。甥御様で」

「何をびつくりした眼をするのだ。……ははあ分った、今朝おれが、木に縛くし付けられて、鉄砲の試しになろうとしていたのに、

ひよいと出て来たから仰天したのか」

「ど、どうなされましたので」

「どうもこうもないさ。叔父甥の仲だ。脅おどかされたのよ。とんだ折せつ檻かんを喰くわせやがった」

「……へエ？」

「ところでだ。たった今、村の白旗しらはたの池で百姓と隣村の地じざむら

侍いとが、喧嘩けんかを起した。叔父御も、大炊おおいも新七も、すぐ駈かけつ

けて行った。おれにも直ぐ後からつづいて来いとのこと。——鉄

砲は仕上ったか」

「出来ましたが」

「よこせ」

「お吩咐いっつけでございましょうな」

「もとよりのこと。はやく出せ。相手が逃げたら試されぬ」

天蔵は、引つ奪たくるように、国吉の手から鉄砲も火縄も奪つて、森の間に走りこんだ。

「……はてな？」

手ばなしてしまつてから、国吉は変に感じて、彼の後を尾行つけてゆくと、天蔵は、表門のほうへは行かず、殊ことさら樹々の梢こずえでうす暗い裏手の土塀をのりこえて、外の濠ぼりぎわへ跳び下りた。

そして、濠の腐った水の中に、胸の辺まで、体が浸つかつてしまうのもかまわず、野獣のように、じゃぶじゃぶと渡つて行くではないか。

「やツ？ 逃亡だツ、出合いなされ！ 出合いなされ！」

国吉は、土堀の上から、大声で呶鳴った。その時もう泥鼠のようになつて、向うの岸へ這い上がっていた天蔵は、一発、彼の顔を狙つて撃つた。

ぐわアツン！

水のそばのせいにか、凄まじい音がした。国吉の姿は土堀から転げ落ちた。すぐわらわらと駈けつけて来るあしおと蹠音が彼へ迫つた。

だが、天蔵の影は、まるで豹が跳ぶひようように、畑や野の土を蹴つて、やがて消えてしまった。

やはぎがわ
矢矧川

布令ふれがまわつた。

家長の蜂須賀はちすかころうく小六の名をもつてである。

——集まれ！

というのだ。

晩方までに、土豪蜂須賀の丘の住居は、門の内、外、野武士で埋まつた。

「合戦か」

「何事だろ」

「何が起つたのか」

集まつて来た者はみなこれ、物ものの具ぐを取れば、一くせある面つらだ

ましいの者ばかりだったが、平常は、野に住んだり、畑を打ったり、繭まゆか買かいをしたり、馬を飼かつて市へ出したりなどしている、ただの農民や商人と変りがない。

ただ彼らは、根からの農民や商人ではなかつた。血のなかに、多分にまだ、祖先の勇武と、現代への不満を抱いて、時しあらばふたたび、弓箭ゆみやのなかに運命の風雲を捲まき起おこそうと——かねてから結びあつている家党ともがらの輩らなのである。

そのうちに、

「お庭へまわれ！」

「静肅に——」

「中門をくぐつて」

と、小六の腹心、おおいのすけ 稲田大炊助、青山新七たちが出て来て、指
図した。

その腹心たちは、すでに武装していた。もとより土豪の一族な
ので、ほんよろい 本 鎧 ではないが、こてすねあて 籠手脛 当をつけ、さしりよう 差 料 も大振
りな陣刀に代えていた。

「さては、でぶ 出触れだな」

と、一同は早くも察していた。

どこからどこまで、という確しかとした領土もない代りに、どこの
城に所属しているとか、誰に隨身しているとかいう、明瞭な味方
も敵もないのが土豪である。

だが、——それにしても時々、合戦には出る。

同じ土豪から、自分の一族の勢力圏内を犯されたとか、或いは、国主から味方に頼まれるとか——折入って遠国の大名からでも、つうぼう通謀を依頼されるとか——などの場合。

しかしそれは多く、金や報酬に依ってうごくのだが、小六はまだかつて利のために動いたことはない。

それはこの近国の織田家おだけでも認めていた。三河の松平家まつだいらけでも、駿遠すんえんの今川でも知っていた。だから、土豪とはいえ、自然重きをなしていたし、蜂須賀党を土地から除こうとする者もなかった。

その家長からの触れなので、すわとばかり、一族は駈けつけて来たが、広庭へむらがつて、ふと築山つきやまを仰ぐと、小六正勝は、折から、薄暮の空に見える二日月の下に、黒革くろかわの胴を着こみ、

大太刀を横たえて、輕装ながら、どこか家党の頭目らしい貫祿をそなえて、石像のように、黙然と突つ立っていた。

そして、水を打ったように、数百人の一族が、ひそまり返ると、甥おいの渡辺天蔵を、きよう限り義絶する旨を宣言して、その始末を、明白に述べた末——

「が、これは、家長たるおれの不行届でもある」

と、不徳を謝し、

「天蔵は、逃げうせたが、草の根を分けても誅ちゆうばつ罰ばつせずにはおかん。もし、彼を生かしておいたなら、土豪蜂須賀はちすかは、百年の後も、野盜の徒と過あやまられるだろう。お前らは、お前らの面目のために、祖先のために、子孫のために、天蔵めを、打ち殺せ。——お

れの甥だなどと思うな。彼奴は蜂須賀一党の賊だぞ！」

云い渡しているところへ、物見にやった者が駈け戻つて来て、告げることには、

「……御厨村みくりやむらのほうでも、渡辺天蔵とその一類が集まって、一戦をも辞せずと、物々しく固めている由にござります」

と、あつた。

敵が、渡辺天蔵と聞いて、彼らはすこし張合いぬけした様子だつたが、事の顛末てんまつと、

——一族の名のためだ！

と小六から聞かされると、奮い立って、真まつ黒に、武器蔵ぶきぐらへなだれて行つた。

武器蔵には、驚くばかり多量な武器が、貯蔵してあつた。

源平、建武、応仁の乱とつづいて、何百年かにわたつて作

られて来た武器は、合戦のたび、山野にも捨てられたが、その数は、おびただ夥しいものに違いなかつた。

わけて、近頃では、国々の合戦はやむまもなく、人の住む所には、不安と暗黒がみなぎ漲っているので、その心理が、武器を大切にしたら。どんな百姓の家にも、武器があつた。また、槍や、刀なら、食物の次に、すぐ金にもなつて売れた。

蜂須賀党の武器蔵には、先祖以来の物もずいぶんあつたが、急激に殖ふえたのは、小六の代になつてからであつた。——しかしまだ、その中に鉄砲は一挺もなかつたのである。

が、せつかく成功しかけたその鉄砲は、天蔵が盗んで行つた。

小六の憤怒は、絶頂に達していたといつていい。

「この上にも、一戦をも辞せぬなどとは、八ツ裂きにしても飽きたらぬ人非人。彼奴の首を見ぬうちは、この革胴かわどうを解いては寝ぬぞ」

小六は、門出に云つた。

そしてすぐ、人数を率い、御厨村みくりやむらへ向つて殺到したが、村近くまで来ると、

「あッ、火の手だ」

と、一同は、足を止めて、夜空を見まもり合つた。

水田の彼方に、土橋が見える。赤い夜空に、点々と人影がうご

いている。さては敵か——と先鋒せんぽうから一人放つて見せにやると、「天蔵の徒が、火を放つて、掠奪りやくだつを始めたので、逃げ惑うて来た村民だそうでございます」

と、いう報告。

人数を進めて行くと、なるほど、嬰兒あかごの声などもヒイヒイ聞える。村民たちは、家財や家畜や、病人などを担になつて、逃げて来たところへ、さらに、

「蜂須賀村の人数」

と聞いたので、ふるえ上がっていたが、小六の腹心青山新七が行つて、

「おれ達は、掠奪に来たのではない。一族の渡辺天蔵とその手下

どもを誅罰ちゆうばつに参つたのだ」

と、諭さとすと、ようやく鎮しずまつて、口々に、天蔵の暴悪を怨んで訴えた。

彼らの泣訴きゆうそするところを聞くと、天蔵の悪事は、茶わん屋へ夜盗にはいっただけの一事には止とどまらない。国主へ年貢ねんぐを納めるほかに、私に法を立てて、村民から田や畑の「守護しゆご銭」と称して、二重の税を取ったり、池や川の堰せきを、自分の手に奪つておいて、「水みず銭」を取ったりしていた。そして、不平を鳴らす者があれば、手下をやつて、田や畑を荒してしまふ。

もし、領主へ密告すれば、その一家をみなごろしにするおどと脅していた。国主は、戦備と戦争に追われているので、年貢の取立て

には見廻つても、平常の治安にまでは手がまわらない。

天蔵の一味は、よいことにして、博奕場ばくちばを開いたり、神社の境内で、牛や鶏を屠殺とぎつして喰つたりしていたらしい。また、邸やしきには、女をあつめ、神社の拝殿は、武器の隠匿場いんとくばにしていたという。

「して、その天蔵の人数は今夜、どんな配備をしているか」

新七が糺ただすと、村民たちはまた、口を揃えていった。

「神社から槍や長柄ながえを持ち出して、酒をくらい、戦つて死ぬと吠えておりましたが、遽にわかに、家々へ火を放つけ廻り、荷駄にだの背に、金目な物や、武器や喰べ物など、積めるだけ積みこむと、一団になつて、逃げ落ちてしまいました」

戦つて死ぬ——と云い触れさせたのは、逃げのびるための、天

蔵の策であつた。

「また、後手ごてを喰つたか」

と小六は地だんだを踏んだ。

が、彼は、

「村民どもを先へ、家へ帰せ」

と、下知した。

協力して、消火に努めた。そして天蔵が、博奕場ぼくちばにしたり、人
 獣の血をながしたりしていた神社の拝殿を明け方までに浄めさせ
 て、小六は、そこに額ぬかき、

「一族の端くれたりといえども、天蔵の悪行あくぎようは、やはり蜂須
 賀一党の罪。後日必ず誅罰ちゆうばつを正し、村民をなぐさみ、神帛しんぱく

を捧げて、お詫び仕るでござろう」

と、祈念した。

そのあいだ彼の一族と手兵は、肅として両側に整列していた。

この秩序と、彼の敬神の行をながめて、

(野武士の頭目かしらが?)

と、村民たちは、むしろ怪訝けげんな顔して、ながめていた。

渡辺天蔵は、蜂須賀の名をもつて、何事も振舞っていたし、小六の甥ということも知れ渡っていたので、その頭目かしらと聞いただけでも、戦慄していたのであろう。

だが、小六は、神と民とを味方に持たなければ、世に立てないことを知っていた。

やがて物見が帰つて来た。

それによると、

「天蔵の一味は、手下を加えて約七十人ばかりの同勢。東春日ひがしかすが井いの山道へかかつて、美濃路みのじへ逃げ越えてゆくらしい足どり」

と、ある。

小六は、そこで、

「人数の半数は、蜂須賀村へ帰つて、留守をまもれ。残る半数の半分は、この村に止まつて、焼け出されの村民を救護したり、治安に当れ。——後の人数は、おれに尾ついて来い」

と、命じた。

——で彼の手兵は、わずか四、五十人しかなかった。

その小勢で、小六は、天蔵を追いかけた。

小牧、久保くほいしき一色を経て、ようやく先の敵勢に追いつきかけると、道々、物見を残して歩いている天蔵の方でも、

(来たな！)

と覚さとつたらしく、急に山道を迂回うかいして、瀬戸峠から、足助あすけの町のほうへ下つて行くとの報しらせ——それが、山中ばかり追い歩いた四日目の午ひるころ頃ころだった。

夏だし、道は嶮岨けんそだし、具足着ではあるし、追う方も追うほうだった、逃げまわる天蔵の同勢も、逃げつかれて来たものともみえ、道々、荷を捨て、馬を捨て、だんだん身軽になつてどうづきがわ百月川の谿谷けいこくで、空腹すきばらへ川の水を入れ、ぐったり一汗ふいていた。

——ところへ。

わつと、小六の人数が、両側からなだれ落しに、挟撃した。

人間のかかる前に、無数の岩石が降って行った。谷川はもう血あぶらの脂を流していた。

「うぬッ」

「おのれッ」

「退ひくな」

「何の！」

突く。

斬りなぐる。

取っ組む。——川へ墜ちる。

同じ一族と一族との撃突であつた。敵の手下と、小六の手兵のうちには、血のつながる叔父と甥、従兄弟いとこと従兄弟、日頃は仲のよい友達の顔もあつた。

が——ぜひもない！

同じ五体の者なればこそ、その病根は断たなければならぬのだ。小六は、わが血にひとしい敵の鮮血をかぶりながら、

「天蔵ツ。天蔵ツ出合え」

と喚わめきながら、誰よりも勇壯に駈けまわつた。

どうづきがわどうづきがわの谿谷けいこくは、一瞬でまっ赤になつた。

小六の手兵も、十人ほど死んだが、敵はほとんどみなごろしにした。

しかし、小六はなお、

「あの峰。あの道を」

と、ちまなこ血眼ちまなこだった。

肝腎の天蔵の姿は、死骸のなかになかった。彼は逸いはやく、手下を捨て、峰づたいに、恵那山脈えなのふところへ、逃げ去ってしまったらしいのである。

「彼奴きやつ！ 甲州領へ目ざして行ったな」

齒がみをして、小六が、峰に立っていると、突然、四方の山のこだま砦こだまを呼んで、グワーン！ と一発の弾音たまおとがした。

鉄砲だ。

彼を嘲あざわら笑うごとき鉄砲の音だった。

「……………」

小六の頬に、涙がながれた。無念はいうまでもないことだ。しかし、彼は悪鬼のような甥を、その時になつても、自分の五体以外のものとは思えなかつた。自分の不徳に、悔いの涙がわいたのである。

慥然ぶぜんとして——

そのの、峰に立つて考えてみた時、小六は、まだまだ自分が、いかに野望を抱いても、土豪の位置を脱して、一箇の国くにもち持とな
るには、日の遠いことを知つた。その資格がないことを覺つた。

(——身内のひとりすら治めることを知らないでは)

(武力ばかりではだめだ。治策がなければ。……また、日頃の庭て

いきん
訓がなければ)

とも、考えた。

翻ほんぜん然と、彼は、涙の目から、苦笑を光らした。

「畜生めが、おれを訓おしえて行つたわえ！」

小六は、峰から呶鳴つた。

「おういッ。引き揚げろ——」

その日。

三十余人に減へつた人数をまとめて、百どうづき月きが川の谿谷から挙母ころもの

宿場へと下つた。宿場の外れに野営して、翌日、岡崎おかざきの城下へ

使いを立て、通行の許しを得、そこを立つたのがすでに遅かつた

ので、岡崎の城下を通つたのは、もう夜半よなか近くだつた。

街道すじへかかると、国々の出城本城などのほかに、柵さくとりや砦とりでも、鼻のつかえるほどある。人数を率いて、通行のできない要所もあるし、日数もかかる。

で、矢矧やはぎがわ川を舟で下り、大浜から半島の半田へ上がる。そして常滑とこなめからふたたび舟便で海をよぎり、蟹江かにえがわ川を溯さかのぼつて、蜂須賀村まで帰ろうという道どりを取ったものである。

ところが。

矢矧川まで出てみると、夜半よなかでもあつたが、舟は一艘もなかつた。

橋もない。

水瀬は早く、川幅は二百八間とかいわれている。建武けんむの年の新に

田つたあし足利かがの合戦をはじめ、岡崎の要害として、ここはいくたびか古戦場となつて来たし、今も——つい数年前には、織田おだのぶひで信秀と、松平家の軍とが、大戦の血をながし、天文十四年から十六年にわたる合戦の果て、織田の尾州勢が大敗して退いた所である。

太平記印本には、

Ⅱ 矢矧川の橋を引き、楯たてを搔かてふせぎ戦ひける

と、あるから、遠い昔や、江戸の治世になつては、諸人往来のため、二百八間の大橋が架かつていたものとみえるが、その年、天文二十一年の夏の頃には、まだまだこの地は、乱世乱麻の合戦の真ツただ中。矢矧の大河は、とうとうと押し流れてはいたが、矢矧の大橋はなかつたのである。

小六と、一党の者は、当惑顔に、附近の木蔭に屯たむろしていたが、

「下る舟がなければ、渡しに乗って、対岸へあがろう」

と、一人がいうし、

「いや、もう夜が更ふけた。朝を待てば、舟があろう」

と、いう者もある。

だが、ここで屯するには、もう一度また、岡崎の城へ届けに行かなければなるまい——と、小六が分別を与えて、

「渡舟わたしを探せ、渡舟一艘さえあれば、かわるがわる越えて、夜明けまでに、舟で下る道程みちのりほどは歩けよう」

と、指図すると、

「いや、お頭目かしら。その渡しの小舟さえ、どこにも見当らないので」

と、誰かがいう。

「ばかな！」

小六は、叱りとばして、

「一艘の小舟さえないと。そんな筈があるものか。——これほど
 な大河、昼中は、何で往来するか。戦のため、河止めというよう
 な、非常な時にせよ、そこらの蘆間あしまや、河原草のなかに、物見舟
 は隠してあるものだ。よく眼をあいて、探し直して来い」

と訓おしえた。

呶鳴られた勢いで、彼の手兵は、河の上下へわかかれて、五、六
 人ほどばらばらと駈けて行った。

その中の一人が、

「あッ。あつた！」

と、さけんで足を止めた。

洪水の時にでも、土を溹さらわれて行つたらしい断岸きりぎしに、楊かわやな

柳ぎの巨おおきなのが、根を露出して、水のうえへ屈かがみ腰に枝を垂れ

ている——

その樹蔭に、一艘そうの舟が、繫つないであつた。

こんもりと茂つた夏柳の葉蔭は、川の水も、澗とろのように穏やか

で、そして暗かつた。

「……手頃だ」

小六の部下は、すぐそれへ跳び乗つて、一同のいる下流の岸まで、流して行くつもりでもあつたか、そう眩つぶやくと、柳の根に巻い

てある舟のもやいを解きかけた。

——すると。

「……？」

その兵は、ぎよつとしたように、眼の下の舟を見すえてしまつた。

舟は、荷足舟にたりぶねぐらいな、脚の浅い舟であつたが、もう壊れかけていて、水あかに浸ひたされているとみえ、危ないほど傾かしいでいる。それでも、渡しに使えないこともないが、見ると、腐とまつた苦とまを敷いて、舟の端に、高いびきで眠っている男があるのだ。

「何者……？」

と、その兵は、眼をみはってしまったのである。

なぜならば、ふしぎな服装と、ふしぎな容貌と——そして余りに不敵なほど——こころよ快げに眠っているからだつた。

袖も短い、裾すそも短い、白晒布さらしのよごれぬいた着物ひとえに、手

つこうきやはん

甲脚絆つこうきやはんをつけ、素足にわらんじを穿はいた——大人おとなかと思えば

大人でもなく、子供かと思えば子供でもない男が——虚空へ向つて身を仰向け、眉や睫毛まつげに、夜露を置いて、まったく放心の姿で寝ている。

「……おいッ」

兵は、呼び起してみたが、覚めようとしないので、槍の石突で、その男の胸のあたりを、

「おいッ！」

と、もう一度、呼び起しながら、軽く小突いた。

眼をあいた男は、槍の柄をにぎって、くわツと、兵の顔を睨めかえしながら、

「なんだツ？」

と、寝たままで云った。

蛍

流れる水のすがたにも似ている今の境遇を、矢矧川の柳の蔭に寄せて、腐れ^{くさ}苦^{とま}を被^{かつ}いで一夜を舟に過していたその男は、中村の家を出たきり、便りも知れなかつた日吉であつた。

去年の一月、霜の夜——

母に、一袋の塩をのこし、自分は父が遺産の錢一貫文をもらつて、

(偉くなつて帰る)

と、姉にも、母へも、そう誓つて家を出た彼だった。

もう今までのように、商家や工匠たくみの徒弟になつて、転々とする気もちはない。

(侍奉公を！)

と、一途に求めた。

けれど、氏うじ素姓すじょうも定かでない——また、見るからに風采の貧しい彼を、侍屋敷では、どこでも抱えてくれなかった。

清洲。きよす 那古屋。なごや 駿府。すんぶ 小田原。おだわら——と歩く先ざきで、

(紺屋の手伝いなら)

とか、

(馬飼うまかいの厩掃除うまやなら、世話してやるが)

などと、いわれるだけで、たまたま、勇をふるい起して、侍屋敷の門前に立ち、

(わたしを使つて下さい)

と、自分の身を、押売りしてみても、笑われたり、呶鳴られたり、乞食あつかいされて、竹たけぼうき箒ほうきで追われたりするだけだった。

わずかな銭は、すぐなくなりかけた。世間の實際は、藪山の叔母がいったとおりであつて、日吉の考えは、夢にすぎないものだ

った。

しかし日吉は、その夢を離さなかつた。なぜならば、自分の望んでいるものは、誰に聞かれても、恥かしくない立派なことだと、かたく信じているからである。

草に寝、水に枕しているまも、その望みは忘れない。——世のなかでいちばん不幸者ふしあわせものと彼の思っている母を、どうしたら、いちばんの倖者しあわせものにしてやれるだろうか。

また、嫁にも行けないでいる可哀そうな姉を、どうやって喜ばしてやろうか。

勿論、日吉にも、たくさんな慾望がある。殊に、もう十七歳の若者だ、胃ぶくろは、喰つても喰つても食い足りない気持だし、

大きな屋敷を見れば、あんな屋敷に住んでみたいと思い、豪華な武家の身装みなりを見れば、自分の身装かえりが顧みられ、美しい女達を見れば風のなかの香においを強く感じる——

とはいえ、どんな慾望を思うよりも先に、母を幸福に——という念願が、常に前提として彼にはあつた。だから彼は、その第一の希望が達しられないうちに、自分の慾望を先に満たそうとは思わなかつた。

それにはまた、彼には彼のみ、べつな楽しみがあつたから、物の慾には我慢も出来たということもいえよう。その楽しみというのは、流浪の行く先々で、飢えを思ういとま違いもなく、

|| 識しらないことを識る。

と、いう楽しみだった。

世間の機微、人情、風俗。——それから時勢の相だすがたの、諸国の武備だの、百姓町人の生活くらしの様さまだの。

武者修行する者は、応仁頃から室町の末になるほど、流行はやりもののように、多くなつて来たが、日吉も、ここ一年半ばかりは、ちようど、それと同じような辛苦と生活をして歩いて来た。

けれど彼は、武術を目がけて、長剣を差して歩いて来たのではない、わずかな金で、問屋から針を仕入れ、木綿針や絹針を小さなたとうに包み、それを行商しながら、甲州、北越のほうまで歩いて来たのだった。

（——針はいらんか、京の縫ぬい針はりじゃ。買かうておかんか、木綿針、

絹針、京の縫針)

日吉は、諸国の町を呼び歩きながら、わずかな利で、生きて来た。

しかし。

零細な針売りの利益で口は喰べても、針の穴から世の中を見るような、小さい人間にはならなかった。

小田原の北条ほうじょう。

甲州の武田たけだ。

駿府の今川いまがわだの、北越の城下城下などを、ずっと見て来て感じたことは、

(今に、世のなかは、大きく揺れだして、大変な変り方をするぞ)

と、いうことだった。

今までの、小さな、うちわも内輪揉めみたいな戦乱とちがって、日本全体の姿勢を立て直すような、正しくて大きな戦争が、これから起るといふ予感だった。

(——すると、俺だつて)

と、ひそ密かに、彼は思った。

(俺は若い、これからだ。——世のなかは、あしかが足利幕府の、年寄の仕事にだれてしまい、混乱してしまい、老衰してしまっている。若い俺たちを、世のなかは待っている！)

漠然と、そんな考えを抱いて、針イ——、針イ——と呼びあるいて来た。

北陸から、京都、近江おうみとまわつて、一わたり世間の風にふかれて、元の——尾張を過ぎて岡崎へ来たのは、ここの城下に以前、父の弥右衛門の身寄りがいたと聞いていたので、それを頼つて来たのであつた。

といつても、決して、日頃は親類や知るべを頼つて、衣食の法を受けようなどと、さもしい考えを出す彼ではなかつたが、この夏の初めから、食しよくあたり中あたにかかつて、ひどい下痢をわずらいながら歩いて来たつかれと、かたがた、中村の家の様子を聞きたいために——であつた。

ところが。

尋ねる先は見つからないし、きのうも今日も、照りつける炎天

をさまよい歩いて、なまきゆうり生胡瓜を喰つたり、井戸水をのんだりしたため、また腹が洩り出して、たそがれ黄昏、このやはぎがわ矢矧川のほとり畔にたど辿りつくと、その痛む腹をかかえたまま、舟の中に寝入ってしまったものであつた。

……腹がごろごろ鳴る。

微熱のせいか、口が乾く。いばらとげ茨の棘を頬ばっているように、口の中が、熱に刺され、そして唾つばがなかつた。

そういううちにも。

母——

彼のまぶた瞼は、母を描き、彼の眠りには、母が訪ねて来ていた。

が、——いつのまにか、こんこん昏昏々と深く眠り落ちていた。その母

もなく、腹の痛みもなく、天地もなく。

ところへ不意に、

おいッ！ と呼びさまされたと思うと、誰か、自分の胸を、槍の石突いしづきで小突いた者があつたのである。

——だれだッ。

日吉は、無意識に、槍やりの柄えをつかんで、体に似げない大声を出した。

胸は、男のたましいの有り所である。五体のなかの神棚にひとしい所だ。槍の石突で、そこを小突かれたことは、相手の誰であるにかかわ関わらず、日吉を、むツとさせたに違いなかつた。

「小僧ッ。起きろッ」

小六の部下は、つかまれた槍の柄を、引きながら云った。

日吉は、槍をつかんだまま、舟のなかに身を起して、

「起きろツて？ この通り、起きているのが分らないかツ。どうしろというのだ」

と、云い返した。

「おや。この野のふせり伏め」

槍の柄を通して、日吉の力と、その反抗を感じると、小六の部下は、恐い顔を見せて、頭から脅おどしつけた。

「出ろというのだ。——立てツ、その舟から！」

「この舟から、立てだつて」

「そうだ。その舟が要いるのだから、とつとと空あけて、消きえ失うせろ」

すると日吉は、なおさら、つむじを曲げたらしく、舟の上に落
着き直して、

「嫌だツ」

と、いった。

「な、なに」

「嫌だ！」

「嫌だと？」

「おお。嫌なこツた」

「こいつ……」

「何がこいつだ。——人がよく眠っているのを、いきなり檣の先
ツぽで小突き起して、——その上、舟がいりよう要用だから、立てとは

何だ。消^きえて失^うせろとは何だ！」

「ちいッ……。小理窟をこねる奴だ。やいッ、風来」

「なんだ」

「われわれを、誰だと思う」

「人間である」

「知れたことを！」

「訊く奴があるか」

「口の達者な小僧め。後で、その口を曲げて、縮みあがるなよ。

われわれは、蜂須賀村の土豪。お頭目かしらの小六正勝様について、一

党数十名で、こよい矢矧やはぎへかかったが、舟がない。そこで渡舟わたしを

探し求めているうち、おのれの舟を見つけたのだ」

「舟を見ながら、人間は見えなかったのか。ここは俺の住居すまいだぞ」
「見えたればこそ起したのだ。四しの五ごをいわずに立て。出て失せうろ」

「やかましいッ」

「何を。もう一度いってみろ」

「何度いっても同じことだ。嫌だッ、嫌だッ。この舟は、くれてやれぬ」

「いったな」

小六の部下はぐツと槍の柄えを引いて、槍の柄ぐるみ、日吉を岸へ引きずり上げようとして踏ふン張はった。

頃を計はかって、日吉が手を離したので、槍の柄で、柳の葉を、払

いながら、小六の部下は、後ろへよろめいた。

かッ、としたらしく、

「おのれッ」

と、槍を持ち直すと、その兵は白い穂先をひらめかして、日吉の影へ、突いて行つた。

腐つた舟板だの、アカ汲みだの、とま苦などが、舟の上から飛んで来た。——その間に、

「ばかッ」

と、二度ほど日吉の罵る声も、ののし飛んで来た。

すると、そこへ仲間の誰彼が、わらわら駈けつけて来た。そして、

「待てッ」

「何だ」

「何者だッ」

口々に云い合いながら、そこへ立ちむらがつた時、さらに、小六とその部下のあらましも、後から後から駈け続いて来た。

「舟があつたのか」

「あるにはあつたが……」

「どうしたのだ？」

がやがやさわ噪ぐ部下の者を退けて、小六正勝は、静かに前へ出て、柳の蔭の暗い舟へ眼をそそいだ。

小六の影を仰ぐと、日吉も、これはこの者どもの頭目かしらだなと覚さと

つたらしく、やや居住いずまいを改めて、じつとその顔を正視した。

「……………」

「……………」

小六の眼は、いつまでも、彼へそそいだきり、ものもいわなかつた。

小六は、日吉の容貌やその身なりを不思議がったのではない。

——自分の眼を射てくる、彼の眼に、おどろ愕いたのである。

で、小六は、心中、

(こいつ、身なりに似あわぬ不敵もの)

と思つて、殊さらに、ひとみ眸をこらして見つめたが、見つめれば見つめるほど、日吉の眸も、闇夜に見るむささびの眼のように光つ

て、反それようともしないのであった。

遂に——小六は眼を紛まぎらして、同時に、当りまえな音おんじよう声しょうで呼びかけた。

「子ども」——と。

「……………」

日吉は答えない。

まだ口を結んでいる。

そして、射るようなその眼も、小六の顔から離さなかつた。

「……………これ。子ども」

すると、日吉は、

「おらか」

膨ふくれ返った顔していった。

小六がいう。——そうだ、おまえよりほかには、舟の中には誰もいないではないかと。——すると、日吉は、肩を少し昂あげて、

「おらは、子どもじゃない。元服しているツ」
と、いった。

突然、小六は、肩をゆすぶつて笑い出した。

「——そうか。汝われは大人おとなか。……だが、大人だとすると、その扱いをするが、いいか」

「大勢で取りまいて、おら一人をどうする気だ。野武士だな、おまえらは」

「貴さま、いうことがなかなかおもしろい」

「おもしろくない。おらは、いい気もちで眠っていたところだ。おまけに、腹がいたい。誰が来て、何といおうが、ここを動くのは嫌だ」

「ふム。……腹が痛いか」

「痛い」

「どうしたのだ」

「水みずあたりか、暑気あつさあたりだろ」

「故郷くには何処だ」

「尾張の中村だ」

「中村か。——して中村の何という者だな」

「親の名はいえない。おらの名は日吉という。……だが待て待て。」

ひとの眠っているところを起して、ひとの素姓を洗いだてばかりしていいものか。おぬしは何処の何という者だ」

「汝われと同じ、尾張かいとうごうの海東郷、蜂須賀村の蜂須賀小六正勝というものだが、汝われのような大人が村の近くにいたとは知らなかった。何か、商あきないでもして歩いているのか」

——それには答えないで。

「あッ。おじさん達は、海東郷の衆か。そんなら、おらの村からも遠くない」

日吉は急に、人なつかしい顔を示して、早速、中村のうわさでも聞きたそうであつたが、

「じゃあ、同じ故郷くにの衆だ。さつきは、いやだといったけれど、

舟を空^あけてやろう」

と、枕^{あきな}にしていた商^{もの}い物の包を、斜めに背負つて、岸へ上がつて来た。

その様子——一挙一動を、小六は黙つてながめていた。

物売りの世間^{せけん}摺れ——旅^ずれした小童^{こわっば}の、減^へらず口^{ぐち}——と、

小六も初めは見たのであつたが、心が解^うけて領^{なず}くと、少しも悪^{わる}びれた様子はなく、舟を去つて、日吉はすごすご立ち去ろうとした。

「待て。日吉とやら、汝^{われ}はこれから、何処へ行くのか」

「舟を奪^とられたから、寝る所はない。草の中へ寝れば、夜露にぬれて、病んでる腹がよけいに洩^まるで、仕方がないから、夜明けまで歩くんだ」

「ならば、おれと一緒に来い」

「どこへ」

「蜂須賀村へ。——屋敷において飯も食わそう。病も手当してつかわそう」

「ありがと」

日吉は、神妙にお辞儀したが、自分の足もとを見ながら考えているふうだった。

「……すると、おらを、屋敷へおいて、抱えてくれるというのかね」

「汝われの面つらだましいに見どころがある。この小六ずいしんに隨身する気があれば使うてやる」

「ない」

顔を上げた。そして彼は、はつきりいった。

「おらも、侍奉公さむらいしたいと、心がけているんで、諸国の侍の風や、大名たちの威勢ぶりを見て来たから、侍奉公するからには、主人を選ぶのが第一と分つて来た。うかつには、主は持てぬ」

「はははは。いよいよ面白い。この小六正勝では汝われの主人には不足か」

「使われてみなければ、それも分らないことだけど、蜂須賀村の蜂須賀といえ、おらの村では、良くいわない。また、おらが仕えていた前の主人の家へ、泥棒にはいった男も蜂須賀の一族といった。おらが泥棒の手下になったら、おツ母さんが悲しむから、

そんな者の屋敷へ、奉公はできない」

「では、汝われは茶わん屋捨次郎の家に行ったことがあるのか」

「どうして分ったかね」

「茶わん屋へ押し入って、悪事をした渡辺天蔵は、いかにもわしの一族の者だが、わし自身は、そういう不埒ふらちもの者は捨ておかん。

天蔵は逃がしたが、その一味どもを成敗して、蜂須賀村へ帰るところだ。汝われたち達の耳にまで、小六一門の名が、そのように過あやまられているか」

「……うむ。おじさんは、そういう人間じゃないらしいな」

日吉は、十七にしても、ませた口吻くちぶりで、彼の顔を見ながら云った。そして、ふと思ひ出したように、

「じゃあおじさん、何の約束なしに、おらを蜂須賀村まで連れてつてくれるかね。——そしたら、ふたつでら二一寺の親類の家まで行きたいが」

「二寺といえ、すぐ蜂須賀村の隣村だが、そこに知るべがおるのか」

「ああ。桶大工おけだいくの新左衛門という人は、おつ母さんのほうの縁つづきだ」

「桶大工の新左は、侍の果てだ。では汝われの母は、侍の末だの」「お父さんだつて侍だった。おらはこんな事をしてるけれど」

いつの間にか、舟の中には、乗れるだけの者が乗り込み、舟ふなぎをさして、頭目の小六が乗るのを、待ちうけていた。

「日吉、ともかく乗れ。二寺へ行きたくば二寺へ行け。蜂須賀村にいたければ、蜂須賀村におるもよし」

肩を抱えて、舟の中へ伴つれて下りた。

日吉の小さい体は、林のように立ち並んだ槍と大きな男どもの間に隠れた。舟は大河の流れを横切つていったが、流れがはやいので手間がかかった。

日吉は退屈顔に立ちこゆらえていたが、ふと、小六の部下のひとりの背に止まっているほたるる蛍を見つけ、手を籠かごにして捕えると、その明滅を無心に見ていた。

天高し

蜂須賀村へ引き揚げてから後でも、小六正勝は取り逃した甥おいの天蔵を、そのままに放ほうつてはおかなかつた。

或いは、部下を変装させて、刺客として放ち、或いは、遠国の土豪と、聯絡れんらくを取つて、その後の彼の行方をさがすなど、やがて秋の頃となつてもなお、手を尽していた。

しかし、効かいはなかつた。

うわさによれば、渡辺天蔵は、恵那えなの山づたいに甲州へ落ちのび、例の小六が苦心して製作させた鉄砲を献けん物もつとして、武田家へ取り入り、甲州の乱波者らっぱものの組（しのび・攪乱隊こうらんたいの称）へは、いったということであつた。

「甲州へ潜り込んで——」

と、小六もさすがに、諦め顔あきららがにつぶやいたが、しかし、無念そうであった。

すると、その噂の聞えた日頃。

「主人が参るべきでござるが」

と慇懃いんぎんな使者が、門を叩いた。

この事件が起るまえに、小六が茶会ちやのみによばれた織田一族の者の家来だった。

その折、問題になった「赤絵あかえの水挿みずさし」たずさを携えて来て、主命として使者がいうには、

「この一品より、同族の間に、御騒動があつたとやら承る。つい

ては、この名品も、買い求めたものとはいえ、家蔵といたしおくのも心苦しいゆえ、御当家より茶わん屋へおもどし遣つかわされては如何。——小六どのの御一分も、それにて立つことと存ぜらるるが」

とのことであつた。小六は、好意を謝し、

「後日、ごあいさつ申すでござろう」

と、受けておいた。

そして、答礼の使いをやる折に、水挿の価に倍する黄金と、見事な鞍などを持たせてやった。

その日である。

使いを出した後で、また、松原内匠まつばらたくみをよんで何やらいいつけ

ていたが、やがて自身、縁へ出て来て、

「猿ツ。猿ツ」

と、庭へ向つて呼んだ。

日吉は、

「おいッ」

と答えながら、木蔭から小迅こばしツこく走つて来て、

「お呼びですか」

と、膝をついた。

ここへ来てから、ふたつでら寺へも行ったらしいが、直ぐ帰つて来

て、その後、何とはなしに居着いていた。

機転がきく。何でもする。人は彼を小馬鹿にするが、彼は人を

馬鹿にしない。口が達者なほど心は決して軽薄でない。——で、小六は、庭使いに^{ほうき}して愛していた。

庭使いは、^{ほうき}箒持ちの小者の仕事のようではあるが、事實はそうでない。主人の身近に働いて、朝夕主人の眼にふれるし、夜は夜の守り役をもすることになるので、決してよそ者などは使わないものである。それを小六は、庭へ飼った。猿々と呼んではいるが、愛している証拠であった。

「新川の茶わん屋の宅へ行つて来い。内匠^{たくみ}について、道案内をいたしなから」

「茶わん屋へですか」

「なんで、迷惑そうな顔するのじゃ」

「でも……」

「汝われが二の足あしをふむのは分つておるが、きよ用の使いは、茶わん屋の旧蔵だった水みず挿さしを、無事に戻して遣つかわすので行くのだ。で、汝われを付けてやれば、汝われの顔かおもよかろうと思つていいつけるのじゃ。行つてこい」

日吉は、そう聞くと、土の上に坐り直して、両手をついた。

「ありがとうございます。御恩は忘れません。欣よろこんで行つて参ります」

茶わん屋へ着いた。

彼は、供として来たので、家の外で待つていた。

以前の朋輩ほうばいが、

「猿が来た」

と、怪訝けげんがつて、かわるがわる、覗のぞきに来た。

日吉がこの家を追い出された時、笑ったり、打ったりした奉公人の顔も見えたが、日吉は忘れてしまったもののように、

「こんちは。——今日は」

と、その顔のどれへも、笑顔えがおを見せながら、陽なたに蹲うずくまつて、

松原内匠が帰るのを待っていた。

やがて、内匠は、使いをすまして奥からもどつて来た。思いがけない盗難の「赤絵の水挿」が返つて来たので、茶わん屋の夫婦は、夢かよろこび、使者の草履をそろえたり、夫婦して、門もんわ脇きまで走り出て、なお、礼を繰り返したり、下へもおかない待

遇だつた。

於^{おふく}福もいた。

チラと、日吉の顔を見、ぎよつとした顔つきだったが、それへ向つても、日吉はにやつと白い歯を見せただけだつた。

「蜂須賀様へは、いずれ日を改めまして、お礼に参上いたします。何とぞよろしゅうお伝え上げねがいます。また、わざわざ今日のお使い、ご苦労さまでございました」

茶わん屋夫婦、その子、奉公人たちが、一同頭を下げる中を、日吉は松原内匠の後について、手を振つて出て行つた。

(……藪^{やぶやま}山の叔母さん。どうしてるだろうな。叔父もあの大病。もう死んだかもしれない)

光明寺こうみやうじの山を仰ぎながら、日吉はそんなことを考えながら歩いた。

中村は、もうそこだ。

当然彼は、母やおつみの顔を、さつきから胸に思い出して、ちよつと駈け出して行つてみようかとさえ思うほどだった。

けれど、霜の夜、誓つて出たことばがある――。今行つても、母よろこを欣ばしてやる何もかもまだ自分の手にはなかった。

その中村の方へ背を向けて、うしろ髪をひかれながら、彼は内匠について歩いていた。すると途中で、

「おや、弥右衛門やえもんどのの倅せがれじゃないか」

足軽ていの男が声をかけた。

「どなた様でしたっけ」

「日吉だろ。お前は」

「はい」

「大きくなったなあ、わしは弥右衛門どのの友達の乙おとわか若わかだよ。
織田様に仕えていた頃、同じ足輕組にいた者だ」

「思い出しました。そんなに私は大きくなりましたか」

「見せたいなあ。……死んだ弥右衛門どのに」

そういわれて、日吉は、ほろりと涙をこぼしかけた。

「私のおふくろに、近頃、お会いになったことがございませう
か」

「つい無沙汰しているが、中村へは時折行くので、よそながら噂

は聞いている。相変わらず、よく働いていて結構だの」

「じゃあ、病気もせず、丈夫で暮しておりますか」

「お前こそ、どうして家へ行かないのだ」

「偉くなったら帰ります」

「顔だけでも、見せてやれよ。女親にはな」

「ええ……」

熱い^{まぶた}瞼が、堪らなくなつて、日吉はもう顔を^{そむ}を外向けていた。――

――気がついてみると、乙若の姿も、もう^{あなた}彼方へ歩いてるし、松

原内匠も先の方を歩いていた。

残暑も、薄らいで来た。朝夕は秋を覚える。芋^{いも}の葉^はが目立つて

大きくなつた。

「この濠ほりは、五年も浚さら渌らつてないぞ。槍や馬の稽古ばかりして、たつて、足もとに、こんな泥を溜ためめているようじゃあ……だめだ」
今。

村の篠刈しのがりの家へ、使つかいに出いて、戻かえつて来た日吉は蜂須賀家の古ふるい濠ほりをのぞいて独ひとりり眩くらいでいた。

「なんのために、濠ほりがあるんだ。小六様にひとつ云いつて上げよう」
竹竿たけざなを突つつ込こんで、水深みづかをさぐつて見た。水草みづくさでいちめんなので誰も氣きづかないが、日吉ひよしが察さした通り、底そこは何年なんねんとなく、落葉らくえつや泥どろの堆積たいせきに埋くまって、何尺なんせきもなかつた。

二、三カ所さんかでそうして、竹竿たけざなを抛ほうり捨てて、横門よこもんの橋はしへかかろうとすると、

「御小人^{おこびと}」

呼ぶ者がある。

日吉の身なりが小さいから御小人^{おこびと}といったわけではない。大家に仕える小者のことをそういうのである。

「誰だい？」

橋の上から、日吉は振り向いた。

見ると、濠^{ほり}のそばの、椎^{しい}の木の下に、薦^{こも}を敷き、鼠色の着物を着て、尺八を差した男が、ひもじいような顔して、膝を抱えていた。

「ちよつと……」

と、男は手招きした。

この村へも、時々、はいつてくる虚無僧である。薦僧とも呼んでゐる。

ずっと後の、江戸時代のそれのように、その頃の薦僧には一定した宗服もなかつたし、掛絡や袈裟なども、あんな美々しい粧いはしてゐなかつた。どれもこれも、薄ぎたなくて、不精髯を生やして、負い薦おごもに尺八一本持つて歩いてゐた。——中には本格的に鈴を振つて、普化ふけぜんじ禪師をまねて凜々りんりんと遊行ゆぎようしてゐた者が、ないこともなかつたが。

今、日吉へ、手招きした薦僧こもそうもまた、汚れ腐よごつた着物に、不精髯を生やしてゐる組だつた。

「お布施ふせかい。……それとも、お腹が減へつて、動けないのかい？」

日吉は、小馬鹿にしながら、戻って来たが、苦しい旅の味はよく知っているので、腹が減っているなら飯を、体でも病んでいなら薬を、貰ってやろうと直ぐ頭の中では思いやっていた。

「……ちがう」

薦僧は、顔を横に振った。

じつと、日吉を見上げて笑う。そして、敷いている薦こもの席を、半分譲ゆずって、

「ま、お坐り」

「いいよ。立っていても。用事は何さ」

「おぬしは、御当家の召使か」

「ちがう」

今度は、日吉が真似まねして、顔を振った。

「おらは、ここの懸かかり人ゆうどだ。小六様に飯はいただいているが、まだ奉公人にはなっていない」

「ふむ。……でも何か働いてはいるのだろう。台所か、お表か」

「庭掃除さ」

「庭番か。そうか。それでは小六殿にも、目をかけておられるな」

「どうだか」

「今は、お在いでか」

「お留守だよ」

「御不在か。それは生憎あいにくな……」

と薦僧は、落胆したように呟つぶやいて、

「今日中には、お帰りじやろうか」

と、訊ねた。

日吉は、それだけの会話のうちに、この薦僧の様子に不審を見出し、急に、口数を控えてしまった。

「お帰りはいつだな」

重ねて、訊くと、日吉はそれには答えず、

「薦僧さん。おまえは、お侍だろ。薦僧なら、なりたての、新米だろ」

非常な驚きを顔にあらわして、薦僧は日吉の顔を見つめていたが、やがて、

「どうして、わしが侍か、また新米の薦僧と、おぬしに分ったか」

日吉は、事もなげに、

「分らなくツてき！ ひどく陽ひに焦やけているけれど、指の股が、白いじゃないか。耳の穴が、まだ割合にきれいじゃないか。侍という証拠こもには、そうして菰こもの上に坐ぐらつていても、具足を着て、坐ぐらを組ぐらんでる恰好だよ。癖くせだから、どうしても膝頭たが上があつて大坐いざになる。——物もの乞ごや薦こも僧そうなんかは、背骨せこを曲まげて、ぺたんと坐ぐらるものだから、直ちぐわかるさ」

「ウウム……その通りだ」

薦僧は、菰こものうえから起き上がったが、立ち上がりながらも、日吉の顔から眼めを離はなさなかつた。

「おそろしい焔けい眼がんだ。これまで敵地の木戸や関門を通とつて来る

間にも、それ程までに、わしを見抜いた者はなかつた」

「めくらせん盲人だからな。——だけど薦僧さん、何の用だい。お頭か目に」

「実はな」

と、声ひそを密めて、

「わしは美濃みのから来た者だ」

「美濃」

「齋藤さいとう秀龍ひでたつの家中なんばないきで難波内記といえは、小六殿には分つてお

る。人知れず、このままでお目にかかつて直ぐ引き返したいのだが、御不在なれば仕方がない、昼間のうち村々を流して黄たそがれ昏にでもまた、出直して来るといたそう。——もしお帰りになつたら

そつと、お前から耳打ちしておいてくれ」

云い残して、薦僧が歩きかけると、日吉は呼び止めて、

「嘘だよ、薦僧さん」

「え？」

「留守といつたのは、そつちの素姓が分らないからだ。実は、馬場にいらつしやる」

「あ。いるのか」

「うん。もう見届けたから、案内して上げよう。おらに尾ついて、此方こつちへおいでなさい」

「飽くまで、おぬしは、抜け目がないのう」

「弓矢の家にいるからには、これくらいな気くばりは当り前だよ。

美濃衆みのしゅうは、こんなことぐらいに感心するほど皆、ぼんやりしているのかね」

「そんなことはない」

薦僧すゑそうは、舌打ちした。

濠ほりを繞めぐって、畑を通って、森のうしろへ廻ると、広い馬場があった。乾いた土が、空へ揚っていた。

小六以下、蜂須賀衆の人々が、駒を曳き出して、猛烈な騎馬の練習をやっていた。騎乗ばかりでなく、鞍と鞍とを寄せ合なぐって、棒で撲り合なぐっていた。——激戦の場合の突撃を擬ぎしているのであらう。

「ここで待っておいでなさい」

日吉は、薦僧をおいて、一人で駈けて行つた。

しばらく、様子を見てみると、小六が汗の顔を拭きながら、休息所の小屋へ、湯を飲みに来た。

「お湯ですか、お頭目^{かしら}」

日吉は、すぐ湯を汲んで、熱くない程に、水を割つて加減し、盆に乗せて、小六の床几^{しょうぎ}の前に跪^{ひざまず}いた。

「汝^{われ}も見ていたか」

「はい」

答えながら寄つて、

「美濃家の密使を案内して参りました。連れて来ますか。お頭目^{かしら}からお運びになりますか。密使は、森の蔭に待たせておきました

が」

と、早口に告げた。

「なに。美濃から……？」

斎藤家の密使と聞くと、小六はもう、多言を待たず、床几から立って、

「猿」

「はい」

「案内せい」

「ここへですか」

「いや、おれの方から出向く。どこへ待たせておいた」

「森の向うがわに」

指さしながら、日吉は先に立つて歩いた。

美濃の斎藤家と蜂須賀とは、おおやけ公な関係ではないが、かなり長年の間、一つの密盟を結んでいた。

美濃に事ある時は、蜂須賀から手を貸して援け、たす蜂須賀に事あらば、美濃の勢力が後から援護しよう。

また、経済的には、年ごとに二百貫の領を、美濃からみつ貢ぐ。

そういう条約だった。

おだのぶひで

織田信秀や、三河の松平や、駿府の今川家などの、ぼっこうせいり勃興勢

よく力のなかに挟まれて、ぽつねんと、島のような存在でありなが

ら、そのどれからも併へいどん呑をまぬがれて、蜂須賀党が蜂須賀党と

して、土豪ながらも四隣に屈せずにはいられるのは、遠く、稲葉山

の居城から、齋藤道三どうさんひでたつ秀龍というものの睨みがきいているお蔭でもあつた。

地の理を隔てながら、どうして蜂須賀党と、道三秀龍とが、そんな条約の下に結ばれていたか——ということについては、ひとつの話が聞えている。

それは、小六の先代、蔵人くろうどまさとし正利が頭目かしらに立っていた時代のことであるが——

或る夜。

蜂須賀家の門前に、行ゆきだお仆れていた病人がある。武者修行ている侍だった。正利が憐あわれんでやしきへ引き入れ、医療を尽して恢復を見た後、路銀まで与えて立たせてやった。

(……御恩は忘れおかぬ)

寔やつれた武者修行は云った。そして別れて立つ日にもまた、

(いつか、自分が志を得た後には、消息いたして、今日の御芳志にきつと酬むくいる)

と、誓った。

その時、云い残した名は、松波まつなみしょうくろう莊九郎と聞いていたが、や

がて年経てから、その莊九郎からよこした書簡には、齋藤さいとうやまし山ろのかみひでたつ城守秀龍としてあつた。

(あの人)

と、後では驚いたことだった。

そういう旧縁から、小六の代になつても、秀龍との盟は、依然

結ばれていたのである。

その秀龍からの密使！

何事かと、小六がすぐ立つて行ったのは当然だった。

薦僧姿の密使、難波内記なんばないきは、森かげに待っていたが、小六を見

て、

「おう」

と、礼儀をした。

小六も礼を返し、そして双方が眼と眼とを、正しく交わしながら、片方の掌てを、拝むように胸に当て、

「てまえが、小六正勝」

「それがしは、稲葉山の家人、難波内記にござる」

名乗り合つてから、もいちど低く頭を下げ合うのだった。秀龍は幼少の頃、みょうかくじ妙覚寺に入り、けんみつ顕密を学び、前身は僧であつたこともあるので、美濃衆の合い言葉にも、顕密の語が用いられたり、こういう隠し作法にも、どこか寺院臭さがあつた。

作法を交わして、お互いが、

(この者は、間違いない)

と見極めると、初めてうち寛くつろいで、何でも話し合うのだった。

「猿。——誰が参つても、森へ入れるな。おれが許すまでは」

小六は、いいつけて、内記と共に、森の中へはいつて行つた。

森の中の二人の会見に、どんな密談が交わされたか、密書が開かれたか、日吉には知るよしもなかつたし、知ろうとする気もも

とよりなかつた。

彼はただ、忠実に、森の外に立って、張番していた。

使いに行けば使いに。庭掃除になれば庭掃除に。張番に立てば張番に。——彼は持った仕事の人間になりきつた。

彼に限っては、どんな仕事でも仕事を愛することが出来た。それは、貧しく生れたからばかりではない。現在の仕事は、常に、次への希望の卵だったからである。それを忠実に抱き、愛熱で孵かえす時に、希望に翼が生はえて生れることを、彼は知っていた。

（今の世のなかで、身を立てるには、何がいちばん大事か）

日吉は、考えてみたことがある。

それは、系図だ。家がらだ。

しかし、彼には、それが無い。

家がらの次には、いうまでもなく、金と武力だが、その二つも、彼は持たない。

(では、何をもって、おれは世に出たらいいか)

と、自分に訊ねてみると、悲しいかな、肉体は、先天的に矮わいし小ようだし、健康も人並より優すぐれていないし、学問はないし、智慧は当り前だし……一体、何がある？

忠実。

それしか、考え出せなかった。それも、何を忠実に、などと考え分けてするのでなく、何でも忠実にやろうと決めた。忠実なら、裸になっても、持てると思った。

だが、その忠実を、どういふふうおこなに行つてゆくか、と自問自答して、

——なりきる！

というところへ、彼の肚すわが据つた。どんな職業でも、与えられた天職に、なりきつてやろう。庭掃除でも、草履取りでも、厩掃うまや除でも、なりきつてする！

将来の抱負をもつていても、その希望のために、現在の足腰を浮かすまい。

現在から遊離して、将来のあるわけではない。希望は、なりきつている下つ腹うわつらにおいて、上面に出すものではない。

ピピ、チチ、チチ……

森の小禽ことりは、日吉の上で、囀さえずっていた。だが日吉の眼は、小禽ことりの啄つんでいる木の実を見なかつた。

「——やあ。御苦労」

やがて、小六が、森の奥から出て来て云つた。

機嫌がいい。野望的な眼がかがやいている。そしてどんな重大なものを齎もたらされたのか、緊張した後の醒さめた面おもてが、まだいくらか上気していた。

「すみましたか」

「すんだ」

「薦こも僧そうさんは？」

「もう帰つた。べつな道から森を出て——」

小六はそういつてから、ふと日吉を顧みて、

「他言するな」

といまし戒めた。

「はい」

「難波内記が——あの薦僧が、ひどく汝われを賞ほめちぎっておったぞ」

「そうですか」

「いずれ一かどの者に取り立ててやる。いつまでも、蜂須賀におれよ」

その日、美濃の密使が齎もたらした問題についてに違いない。夜になると、小六の邸には、一族の重立った者のみみが寄つて、更ふくるままで密議をしていた。

その晩も、日吉は、星の下に立ちきりで、忠実な張番役だった。

稲葉山城

稲葉山の齋藤道三どうさん秀龍の密使は、いつたい、どんなことを齎もたらして来たのだろうか。

もとより厳秘だ。

一族の者でも重立った者にしかその内容は洩らされていない。

だが――

密かな評議があつた夜の翌日頃から、蜂須賀党のうちでも腕がはちすかとうきくとか、頭がするどいとか、敏びんしやう捷しょうだとかという特質のある

者が、次々に変装しては、蜂須賀村から消えて行つた。

岐阜^{ぎふ}へ。岐阜^{ぎふ}へ。

誰となく囁^{ささや}かれていた。

小六の舎弟に、蜂須賀七内という者があつた。その七内も、何か一役持つて、岐阜へ忍んで行くこととなり、日吉は、その七内の供をして行けと吩咐^{いいつ}けられた。

「何か、戦^{いくさ}でも始まるんで、その探りにでも行くんですか」
日吉が、訊ねると、

「よけいなことをいうな。黙っておれにくつついて来ればいいんだ」

と、七内は、何も話してくれなかつた。

この人のことを、邸の小者でも、台所の者でも、「あばたの七内様」と蔭口して、誰も煙たい——というよりも憎悪していた。兄の小六のような情味が、このあばたの七内様にはちつともないからだった。大酒呑みで生意気で、すぐ腕自慢するといったふうな人間だった。

「……嫌だなあ」

日吉も、正直そう思った。

だが小六から、

「ほかの小者では、こころもと心許ない。先頃、難波内記も賞ほめておつ

たし、そちならばと、思われるので」

と、いわれたので、嫌も文句もいえなかつたのである。

一飯の恩、一宿の義理である。蜂須賀党の端くれに加わって、働くまでの決心はまだつききらないが、

かしこま
「畏りました」

——云ったからには、七内様でも、あばた様でも、飽くまで誠意をもって、供をして行こうと、日吉は思いきめた。

さて。

出立の日となると、蜂須賀七内はすっかりかみかたち髪容まで変えて、きよす清洲の油問屋の注文取というたびごしら旅拵えをして出かけた。

日吉は、この夏、着て歩いていた、針売りの行商着をそのまま着て、少しばかりの荷を背中に負い、油屋の七内とは、道中の道づれというさま態で、みのじ美濃路へ向った。

「猿、往来調べの木戸へかかったら、おれの側を離れて通れよ」

「はい」

「てめえは一体、口達者で、口数が多いから、何を訊かれても、なるたけ黙っているんだぞ」

「へい」

「ボロを出すと、おれは知らん顔して、捨てて行つてしまふぞ」

街道の木戸は、次々にあつた。尾張おわりの織田家と、美濃みのの斎藤家

とは、聳むこしゆうとと舅との親密な関係にあつて、味方同志のはずだが、なかなかそうでない。

いや、尾張美濃の間には、国境もあるから、そうした警戒をどつちがしていても、そう不自然ではないが、美濃へはいつてみる

と、美濃一国の内にも、お互いを疑い合うような眼が、どこにも光っていた。

「なぜでしょ？」

日吉が、七内に訊くと、

「知れたことを訊く奴だ。斎藤道三どうさん様と、その子の義龍よしたつとは、もう何年も前から、睨み合っている仲じゃねえか」

一国の中で、二つの勢力が反目し、一族のなかで、父と子とが闘っていることを、七内は何のふしぎとも思わずにいうのだった。

日吉は、七内の頭を疑った。

武門の上では、源平げんぺいの頃でも、父と子とが、弓矢のあいだに、

敵味方に立った例もないではないが、そこにはそれ以上の苦悶と

理由があつてのことだ。

「どうして、斎藤道三様と、子の義龍様とは、仲が悪いんですか」
腑ふに落ちない顔して、そこでまた、彼が訊くと、

「うるせえな」

七内は、舌打ちして、

「そんな事あ、人に訊け」

と、相手にもしてくれない。

日吉が、美濃の国の土を踏む前に第一に抱いていたものは、彼の気持そむに反そむく、その疑問だった。

だが、岐阜ぎふの里は、山水明媚めいびな城下だった。町並うらわびも麗うらわしかった。

紅葉もみじした稲葉山いなばやまは、小雨に濡れたり、陽ひに映はえたり、折から秋も更ふけた頃だったので、朝夕に見ても見飽かなかつた。

べつの名を「金華山きんかざん」とも呼ぶように、まるで錦の崖だった。

町と田野ながらがわと長良川の水の際から、突とつこつ兀とつと急に聳そびえ立っている

絶頂に、一羽の白鳥でもうずくまっているかと思まごう白壁が、

ポチと小さく見える。

「高い山やまじろ城しろだなあ」

日吉は眼をみはつた。

城下からそこへ登るのには、七ななまがり曲まがり、百ひやくまがり曲まがり、水の手すいの手の要

害堅固であるとも聞かされ、難攻不落というのは、こういう城地をいうのだろうと感心したが、日吉は直ぐ、

「城ばかりで国は持たない」

と、胸の中で呟つぶやいた。

七内は、繁華な町の辻の商人宿に、宿を取ったが、日吉には、「おまえは、この裏の木賃宿へ泊れ。そのうちに、用を吩咐いいつける。遊んでいては、人に疑われるから、用が出来るまで、毎日、針売りに出て歩いている」

と、わづかばかりの錢をくれた。

「はい」

日吉は、神妙に、錢にお辞儀して、すぐ裏町の汚い木賃へ行つて泊り、結句、独りでこの方が気楽だったが、

(そのうちに、用が出来るといったが、一体、何の用事だろう?)

今もつて、分らなかつた。

木賃には、旅芸人だの、鏡かがみとき磨だの、木挽こびきだの、雑多な者が

泊つては入れ交わつて行つた。日吉の皮膚は、蚤虱のみらみにも鍛きたえられていたし、そういう人種の持つ特有なおいにも馴れていた。

日吉はそこから、毎日、針売りに出て、帰りには塩物と米を買つて帰つて来た。木賃暮しは皆、自炊だつた。竈かまどだけを借りて、薪まきだい代と屋根代を払えばいいのである。

七日ほど過ぎた。

だが、七内からは、何にも云つて来ない。七内も毎日、ぶらぶらしているのだろうか。彼は自分だけ捨てられたような気がしていた。

——と。或る日。

彼が屋敷町の小路を、針はいらんか、京針はいらんか——と商あきないして歩いていると、向うから、羽壺うつぼの革かわ袋ぶくろを脇わきに掛けて、
 二張三張の古弓を肩かたに担になつた男が、日吉よりはよく徹とおる声で、

「弓の直しイ。弓の直し——」

と、呼びながら歩いて来た。

そして近づいて来ると、オヤと眼をみはりながら、弓直しは立ち止って、

「あ。猿じゃねえか。何日いつ、誰と此方へ来ていたんだ？」

と、訊ねた。

日吉も驚いた。

その「弓の直し屋」は、小六ころくまきかつ正勝の部下で、仁田にったひこじゆう彦十と
いい、ついこの間まで、蜂須賀村のひとつ邸にいた男なのである。
「彦十様。あなたこそ、どうしてそんな商売をして、この岐阜ぎふに
いるんですか」

「おればかりじゃない。仲間の蜂須賀党が、少なくとも三、四十人
はもう入り込んでいる。——だが、猿まで来ているとは思わなか
った」

「わたしは、七内様について、七日ほど前にやって来ましたが、
用が出来るまで、針売りをして歩いているというので、こうやつ
て針売りをしています。一体全体、これは何のためにやってい
るんですか」

「まだ聞いていないのか」

「七内様は、何も話してくれないので。——人間、目的あての分らないことをやっている程、苦しいことはございません」

「そうだろう」

「彦十様には、その目的めあてが、分っているのでございませよ」

「分らなくて、弓の直しなんかして歩けるか」

「お願いですから、一つ聞かせて下さいませんか」

「こんな所で、立話はできぬ。……だが、七内殿も意地悪な。何のためかも知らず、うろついたりしたりしたら、汝われの生命いのちも危ない」

「へエ。生命にかかわりますか」

「汝われが捕つかまれば、この地へ入り込んでいる一党の密計ろけんが露見して

しまう。……そうだ。仲間一同のためでもあるから、汝も呑みこんでおくように、説いてやろう」

「ありがとうございます」

「だが、ここでは人目につく」

「あの社の裏ではどうですか」

「うむ。……ちようど腹も空いた。弁当でも喰いながら」

彦十は先に歩いた。日吉も従いて行つた。何神社か、森に囲まれて、ひっそりしていた。

二人は、携えている弁当を解いて、喰べ始めた。銀杏の葉が

舞っている。真っ黄色な梢を仰ぐと、木立の彼方に、秋の名残を

燃え旺っている紅葉の稲葉山と、絶頂の城廓とが、くつきりと碧

おぞらそび空に聳えて、斎藤一門の覇権を誇っていた。

「目的めあては、あれよ」

彦十は飯粒のついで、箸はしの先で、稲葉山の城を指した。

「はあ……?」

日吉は、口を開いて、わざと、ぽかんとした顔をしながら、箸の先に眼をやる。

彦十が見る稲葉山の城と、日吉の眼に映じたそれとは、一つ対象ではあるが、心は大きな相違をもって、しばらく眺め合っていた。

「——じゃあ、あの城でも、蜂須賀党で乗っ取ってしまおうという算段ですか」

日吉がいうと、

「ばかアいえ」

と、彦十は、彼の馬鹿馬鹿しい質問に、箸を折って、竹の皮と共に地へ抛なげうちながら、舌打ちした。

「あの城には、斎藤道三殿の子、新九郎義龍しんくろうよししたつがいて、この要害の地に、四隣を抑おさえ、京都と関東の通路を扼やくして、内には兵を練ねり、新しい武器を蓄たくわえて、織田も今川も北条も、所詮しよせん、齒が立つものじゃあない。まして蜂須賀党などが、どうなるものか。――馬鹿も休み休みいえ。せつかく、話してやろうと思うことも、張合いぬけして、嫌になるから」

叱られて、日吉は、

「へい。もうよけいなことは云いません」

素直に口をつぐんだ。

弓直しの仁田彦十は、

「……誰も来やしまいな」

拝殿の横から、境内を眺めまわして、さて、唇を舐めた。

「おれたち蜂須賀党の者と、斎藤道三秀龍様との深い関係は、汝もいつか、聞いているだろうが」

「……………」

日吉は、前に懲りているので、返辞もただ頷いてするに止めておく。

「ところが、その道三秀龍様と、養子の新九郎義龍とは、ここ数

年、互いに不和になっている。なぜといえばだな——」

彦十は、日吉に分る程度に、齋藤一門の内ない訶こうと、美濃の紛ふんら

乱らんしている実状とを、ざつと、次のように搔かいつまんで語った。

道三秀龍は、前名を長井利政ながいとしまさともいい、西村勘九郎にしむらかんくろうといつ

た頃もあり、松波莊九郎まつなみしょうくろうと名乗ったこともあるし——また、

名もない油売りであつたり、武者修行に歩いたり、寺にいたこと

もあるという——何しろ経歴の混入こみいっている人物で、その強したか者もの

ということは、彼が美濃一國に蟠踞ぼんきよしてから、まだ、一尺の地

も、外敵に譲らないのを見てもわかる。

だが、肚は黒い。

何しろ油売りから身を起して、空手からてで美濃一國をわが物とした

男だけに、最初に仕えた主人土岐政頼を殺し、次の主人頼芸を
 また、国外へ追つて、その妾を奪つたりなど——残忍酷薄な数々
 の経歴は、挙げて語つたら限りもない。

ところが、酬いか。怖ろしいのは宿命である。

彼が奪つて自分のものとした——主人土岐氏の妾が生んだ子は、
 今の新九郎義龍で、道三秀龍は、多年、それが自分の実の子か、
 主人土岐氏の子か、悩んでいた。

子は長じて行き、彼は老いてゆく。悩みは、深くなる。

すでにその義龍は、身長六尺余り、膝長一尺二寸という堂

々たる青年となり、稲葉山城の主君として君臨し、道三は、長
 良川向うの鷺山の城へ、隠居の身とはなっている。

鷺山と稲葉山と、川を隔てて、業ごうのふかい宿命の父子は、今や睨みあつていた。——時めく義龍は、やがて自分の素姓を悟るに及んで道三を怨み、道三をないがしろにした。老いゆく道三は、義龍を疑い、義龍を呪のろい、遂には義龍を廢はいちやく嫡して、二男の孫四郎を立てようと計つた。

だが、その企ては、義龍のほうで逸いぢはやく知つてしまった。

義龍は、癩らいびよう病で「癩らいどの殿」と蔭口をいわれたりしているが、宿命の子だけに、性格はつむじ曲りで、智謀も勇もある。

(その儀ならば)

と、鷺山へ向つて、防寨ぼうさいを堅固にし、一戦をも辞していない。

道三のほうでも、勿論、

(あの癩殿を除かねば)

と、浅ましくも、おのが五体に等しい義龍に向つて、いつでも、流す血を覚悟している。

「——そんなわけだ」

と、彦十はひと息ついて、

「そこで、先頃、蜂須賀村へ密使が来たわけだ。で、道三様からの頼みというのは、鷲山の家来方^{がた}では、顔も知れているから、おれたち蜂須賀党の手で、この城下に、火を放^つけてくれというのだ」

「え。——火を」

「といったつて、いきなり放火^{つけび}したつて役には立たない。その前に、種々^{いろいろ}なことを云いふらし、稲葉山城の義龍や家来が、不安

な兆きざししを起した頃、風をつよい夜を計はかつて、この城下を火の海にする。——そこへ道三様の兵が長良川をこえて一挙よに襲せようという計略なのだ」

「ははあ……」

と日吉は、大人びた領うなずきをして、感服したような、しないような表情で、

「では何ですか、わたし達は、この城下へ、流言を放つたり、火つけ役をするために、頼まれて来たというわけですか？」

「そうだ」

「つまり、乱波らっぱですね。人心を攪こうらん乱し、その機に乗じて、事を謀はかる——」

「ま。そんなものだ」

「乱波といえ、下賤の者がやる仕事でしょ」

「仕方がない。道三秀龍様からは、多年、貢が^{みつ}れている蜂須賀党だからな」

彦十は、単純であつた。何といつても、やはり野武士は野武士だなど、日吉は、その顔を見てしまう。

が、彼には、そう単純になれないのだ。その野武士の家の台所で、冷飯を喰べても、自分の身は、珠^{たま}とも思つているのである。これから世に出す身を、そうぞんざいに分別はできなかつた。

「——で、七内様は、何しに来てるんですか」

「指図役だ。何しろ三、四十人もちりぢりばらばら入り込んでい

るから、誰か締めくくりをつける者がいなくてはならないからな

「なるほど」

「もう、あらまし分つたらう」

「分りました。——だが、もう一つ分らないのは、てまえ自身です
すが」

「ム。お前か」

「わたしは一体、何をやる役目なんですよ。七内様からは、流
言^{げん}を放てとも、何を探れとも、吩咐^{いっぷ}かっておりませんが」

「多分、汝^{われ}は、迅^{はし}こくて小粒だから、大風の晩に、火でも放^つける
役の方に置いてあるのだらう」

「ははあ。火放^{ひつ}けですか」

「何しろ、そういう密命をもって、この城下へ来ているわけだから、寸分も油断はならぬ。弓の直し屋をして歩くにも、針売りをして歩くにも、よくよく気をつけて、言葉の端にも、氣どられぬことだぞ」

「知れたらすぐ捕まりますか」

「あたりまえだ。道三様の方では知っていることだが、もし義龍の方の侍にでも、嗅ぎつけられたら、すぐ血祭だ。いや捕まったら汝われだけですむことか、俺たちにとつても、大事だぞ」

何も知らぬのは不愼ふびんと思つて、こう打ち明けはしたものの、彦十は、もし、猿の口から秘密が漏れたら——と、急に不安を覚えてきたらしいのである。

日吉は、彼の顔色を察して、

「だいじょうぶです。旅には馴れていますから」

「抜かりはあるまいが」

彦十はなお、だめを押して、

「敵地だからな。ここは」

「よくわかりました」

「どれ……。そういつている間にも、人目に怪しまれるといかねえ」

腰が冷えてきたと見え、彦十は立ち上がって、二、三度腰ぼねを叩きながら、

「猿、……われ汝の泊っている宿屋はどこだ」

「七内様がはたごいる旅籠はたごの、ちようど裏にあたる横丁の木賃で」

「そうか。じゃあそのうち、おれも一晩泊りに行くが、あいやど合宿あいやどの

人間には、特に気をくばれよ」

破やれ弓ゆみを担になって、弓直しの仁田彦十は、その一言を合言葉に、

町の方へ立ち去った。

日吉は、残っていた。

「……………」

そしてなお、拜殿の横に腰かけたまま、ぽかんと、いちようばやし銀杏林いちようばやし

の梢越こすえしに、城の白壁を、遠くながめていた。

今。——彦十の口から、この国土の主たる齋藤家の内争と、その悪行ぶりを聞いてから、ふたたび、城を仰ぎ見た時、その鉄壁

も、けんがい嶮崖のようがい要害も、日吉の眼には、何の權威にも見えなかつた。

むしろ、彼は、

(——誰が次には、この城の主となつて坐るだろうか)

などと考えて、また、

(さぎやま鷲山の道三もだ！ ろくなまつろ末路をと遂げまい)

と、信じた。

君臣の道もないところに、国土の堅固がどうしてあろう。父と子とがはか謀りあい、さいぎ猜疑し合っているような領主の下に、どうして民の信望があろう。

文化的には、ここはよくや沃野をかかえ、けんざん嶮山を負い、京都諸地方

への交通路を扼^{やく}して、天産に恵まれ、農工も旺^{さか}んだし——水は麗^{うるわ}しく、女もきれいだ、日吉は心のうちで、

(腐^すえている！)

と、観^みた。

信じて疑わなかった。

だから彼の頭は、その腐^すえたる文化の中にうごめく蛆^{うじ}についてなど考えている違^{いとま}がなかった。一足跳びにすぐ、

(次の城主は誰か?)

に、思い至っていた。

同時に。

彼は一つの滅^{めっしつ}失^{しつ}にぶつかった。それは今、自分が飯をもらっ

ている蜂須賀小六にである。

野武士、野武士と、世間とはかくよくいわないが、小六その人を直接に知ってみると、彼は正義の男だし、遠い家系の血をひいて卑いやしくないし、人物もまず一ひとかどといってよいし、日吉も日常、彼に頭を下げて、吩咐いいつけを受けることを少しも恥としなかつたが——さて、ここで少し考えさせられる。

斎藤道三とは、多年、貢みつがれもし、交誼こうぎも深い間がらには違ちがいなかろうが、道三の人物を知らぬはずはない。悪逆非道な行いを見ていないことはない。

だのに、その道三と結び、父子の内争うちげに、乱波らっぱの役をひきうけてやるなどは——どう考えても、日吉には与くみせなかつた。

(めくらせんになん
盲千人。小六もまず、盲のひとりか)

と、いやけ嫌気がさして来ると共に、急にその小六の仲間からも、この城下からも、逃げ出したくなつた。

じゅうべえみつひで

十兵衛光秀

それは、十月末の、から風の強い日であつた。

日吉が、いつもの木賃から、行商に出て行こうとすると、裏町の辻に、鼻を赤めてたたず佇んでいた弓直しの彦十が、

「猿、これを」

と、側へ寄つて来て、彼の手に一通のかいじょう廻状を握らせ、

「——読んだら直ぐ、噛みつぶして、河の中へでも吐き捨ててしまえよ」

と、注意するなり、もう素知らぬ振りして、右と左に別れて行つてしまった。

「何だろ？」

およそ仲間の廻文という見当はついていたが、日吉は、気にかかつて、いやな動悸どうきを打っていた。

この仲間から去ろう。この土地から逃げ出そう。それは何度も、考えてみたが、ここに踏みとどまっているよりは、逃げる場合のほうが、遙かに、生命の危険があつた。

なぜなら、自分は自分ひとりで、この木賃に泊っているつもり

でいたが、自分の出這入りではいや行動には、絶えず、蜂須賀党の仲間
の眼が、どこかで見張っているからだつた。

その見張にもまた、見張が付いているのだ。つまり鎖くさりの一環いっかん
のように、単独に脱ぬけることは許されない仕組にできていること
を、近頃、彼も知つたのである。

「いよいよ、やるのかな？」

かねて、彦十から聞いてはいたが、いざとなると、日吉は、気
持が暗くなつた。

気が小さいのか、兇悪な乱波らっぱとなつて民衆を惑わし、城下を攪こ
乱うらんし、火の海を魔まみたいになつて活躍することなど——どうも
出来そうもない気がする。

第一、それを聞いてから、小六への尊敬を失ってしまったし、齋藤道三に利益する気にもなれないし、なおのこと、いなばやまじよ稲葉山城の義龍よしたつにも味方する情熱など少しもない。

もし、味方すれば、城下の民に味方したい。どこに同情をもつかといえ、やはりそんな場合には、真つ先に戦禍せんかをうける、町人百姓、わけても、子のある母親へ、彼は痛切に、同情をもつ！

「なんの、まだ開けてもみないうちに、取越苦勞をしておつた。……とにかく、読んでみてからだが」

針イいらんか——京針イ——いつもの声で流しながら、日吉はわざと、屋敷町の人目のない横丁へ曲つて行つた。

と、小川がある。行き止りだ。

「おや、こいつはいけねえ」

わざと聞えよがしにいつて、見廻すと、折よく、人影もなかつた。

でも、念のため。

彼は、小川へ向つて、尿いばりをしながら、しばらく悠々と、附近の様子を見とどけ、さてと、おもむろに懐ふところ中から廻文を取り出して読んでみると――

こよい、戌いぬの下刻げこく

風。西か南なれば

常在寺じょうざいじうらの森に集合のこと

風。北に變ずるか

風やむ折は、集合もやむ事

「……………」

予想はやはりあたっていた。日吉は読み終ると、細かに裂いて、口のなかに丸めこみ、紙かみだんご団子になるまで嚙んでいた。

「——針売りッ」

ふいに、何処かで呼ばれたので、日吉はうろたえ、口の中の物を、川へ吐き捨てるいとまもなく、てのひら掌へ吐いて握った。

「へい。どちらですか」

「ここだ。針を買ってつかわすから、はいつて来い」

声は聞えるが、誰か、何処か、一向その人の姿は見当らなかつた。

——いくら見廻しても、姿の見えない筈。

声の主は、彼方の侍屋敷らしい構えの中だった。低い堤どての上へ、二段に繞めぐらしてある築土つじのうちから、その声はしたのである。

「針売り針売り。こつちへ廻つて来い」

築土の横手の、小さい潜り門が開き、そこから若党らしい者が、首をさしのべていた。

「……へい」

日吉は答えたが、ちよつと、様子を計っていた。

この界隈かいわいの侍屋敷なら、問わずとも、斎藤家の家中とは知れきつている。それも、道三方の家臣ならよいが、義龍の直臣でもあつたら、小気味がわるい。

「針売り、針を求めてつかわすと仰つしやる。こつちへはいつて来い」

求めてくれる人は、その若党ではないらしいのだ。いよいよ、気が進まなかつたが、ぜひなく近づいて、

「ありがとうございます」

後にあと従いて、日吉は、潜りの内へはいつた。

そこは裏庭らしく、築山の後を巡めぐつて従いて行く。かなり大身

の屋敷とみえ、母屋おもやは幾棟にもわかれ、建築の宏壮、泉石せんせきの清

楚、日吉は足を竦すくめた。

誰だろう？ 針を買つてくれるという当人は。

若党のことばでは、主人筋らしいが、これ程な屋敷に住む大身

が、奥方であろうと、御息女であろうと、自身、針など求めるはずはない。また、外を呼び歩く物売りなどを近づけるわけもない。

「針売り」

「はい」

「暫時ざんじ、そこで待っておれ」

若党は、彼を庭の一隅へ残して行ってしまった。——見ると、母屋からは、かけ離れた一棟がある。

その一棟は、下が書齋、上が書庫にでもなっているらしく、荒壁で塗り廻した中二階造りになっていた。若党は、その中二階を仰向いて、

「十兵衛様じゅうべえ、呼び入れて参りましたが」

と告げた。

狭間はざまのように、壁を四角く切り抜いた窓がある。十兵衛と呼ばれたのは、二十四、五歳の白晳はくせきめいぼう明眸な青年で、書庫の書棚から、本でも索さがし出していたところか、数冊の書を手にかかえながら、その窓口に、半身を見せていた。

「む、今参る。——階下したの縁先にでも待たせておけ」

十兵衛は、下の若党へ、そう返辞して窓口から姿をかくした。遠くから、日吉は見ていた。なるほど、あんな所に人がいたのか、とその時気づいた。彼処あそこからなら築土ついでの外も見える——

先刻さつきからの自分の挙動を見ていたに違いない。何か疑って自分を調べるつもりだろう。すると、此方こちもその覚悟でいないと飛ん

だ目に遭うかも知れない。

日吉が、そう臍ほぞを決めていると、若党は彼方から手招きした。

そして、

「今すぐ、御当家の甥おいごさま御様が、そこへ見えられるから、お縁先を離れて、謹んでお待ち申しておれ」

と、いった。

いわるるまま、日吉は、その家の縁先から少し離れた所に坐っていた。勿論、土へじかにである。

そしてしばらく手をつかえていたが、なかなか出て来ないので、そつと首を擡もたげた。

日吉は、目をみはった。

室内は、書物で埋まっていた。机のまわり、壁の書棚、二の間も二階も、書物の庫くらになつてゐるらしく思われる。

(ここの主人か、その甥か。よほどな学者だとみえる)

日吉には、書物など、見るのも珍しかった。——しかし、長押ながしを仰げば、そこには見事な槍、床の間をのぞけば、そこには鉄砲が立て懸けてあつた。

やがて、その人は出て来た。

静かに、机の前へ座を占め、頬杖をついた。そして、庭前に屈かがまつている日吉の方を、書物の文字を見るような叡智えいちな眼で、しげしげ見ていた。

「はい。今日は」

——それとは、まるで正反対な、開けツ放しな顔を上げて、日吉は、

「ありがとうございます。てまえが針売りで——。針をお求め下さいますか」

十兵衛は頬杖をついたまま、机の上からうなずいて、

「うむ。求めて遣わすが、その前に、ちと訊ねたいことがある。

——そちは針を売るのが目的か、それとも、御城下を探るのが目的か」

「もとより、針さえ売ればよいので」

「ならば、こんな屋敷小路などへ、なぜはいつて来たか」

「抜け道かと存じまして」

「嘘を申せ」

十兵衛は、少し身をねじ向け、

「見るところ、旅摺たびずれした面構つらがまえ、行商あきないも今日やきのうのこ

とではあるまい。およそ侍屋敷などで、針など売れるものか否か、心得ておる筈」

「そうとばかり限りませぬ、稀たまには……」

「稀に——ではあろうが」

「でも、売れることは、売れますので」

「では、それはまず措おいて。——かような人ひと気けのない所へ来て、何を読んでいたのか」

「へ？」

「辺りに人がおらぬと思うて、そちは密かに紙片かみきれを手にしていたが、およそ天地草木の生々と生きづく所、神の眼のない世界はない。声のない物象はない。……何を見ていたか」

「手紙を見ていました」

「何の密書を」

「おつ母さんから来た手紙を読んできました」

意外な答えだった。

そしてけろりとしていた。

勿論、十兵衛は、その理性的な眼ざしで、

(こやつ、言葉巧みに)

と、なお、疑いを濃くしたが、わざと優しく、

「そうか。母の手紙か」

「はい」

「しからは、その手紙を、見せい。御城下の掟おきてとして、不審の者は、見当り次第、縛からめて、問注所もんちゆうじよへ突き出す定めになつておる。明らかにせねば、不愆ふびんでも、役所へ引き渡すぞ。証立あかしだてのため、その母の手紙とかを、これへ見せい」

「喰べてしまいました」

「何」

「生憎あいにく、読んだ後で、喰べてしまったので」

「喰べた？」

理をもつて、優しく、しかしするどく、徐々に責めていた十兵

衛も、常識負けした形で、呆れ顔あきがしてしまった。

「はい」

日吉は、なお、真面目に、

「わしにとれば、おつ母さんは、神様より仏様より、生きているだけになお、尊いおつ母さんでござります。ですから……」

「だまれツ」

一喝かつを投げて、十兵衛は、後はいわさぬ顔を示した。

「秘密の手紙ゆえ、噛み捨てたのであろう。それだけでも、不審な奴、さてこそ！」

「いえ、いえ。お考え違いをしては困ります」

日吉は、あわてて、手を振って云い足した。

「神仏よりもありがたい、おつ母さんの手紙を、持っていて、ついでに涙はなをかんでしまったり、往来へ捨てて、人の足に踏まれたりしたら、勿体ない、罰があたる。——そう思うので、いつも私は、喰べてしまうのが癖なんです。嘘ではございません、遠く離れている母の文字、喰べてしまいたいほど、懐かしいのは当り前でございまする……」

嘘だ。虚言だ。

十兵衛は見ぬいていた。

しかし、嘘にせよ、人並すぐれた嘘をいう男もあるもの——と
思った。

それと——

十兵衛にも、故郷に遺してある母があつた。郷里、美濃国恵那郷なごこうあけちしようあけちしよう明智城にひとりの老母が待つてゐる。

（嘘も、根からの嘘はいえないものである。母の手紙を喰べてしまつたなどということは、出たら目でも、この猿に似た小男にも、親はあるにちがいない）

十兵衛はまた、そうも考えて、相手の無教養らしい野性をも、かえつて、愍あわれに思つた。

しかしまた、得えてかういう、無知であどけない顔をした男が、いつたん策士に利用されて、騷そうじよう擾の火でも放つけると、野に出た野獣のような兇暴に変わるものである。

わざわざ、問注所へ突き出すほどの者でもないし、斬り捨てる

には慥あわれ過ぎる。——といって、このまま、放つのもどうかと思う。

「……………」

黙って、日吉の挙動を、細かな眼で見ている間、十兵衛はそんな観察をしたり、処理に迷っていたらしかつたが、やがて、

「又また市いち、又市」

と、以前の若党を呼んで、

「奥やへいじに弥平治やへいじどのは、お在いでられるかな」

「いらつしやると思いますが」

「恐れ入るが、ちよつとお顔を拝借したいと申して来い」

「かしこま畏りました」

又市は、駈けて行つた。

程なく、その弥平治は又市を伴ともなつて、大股に奥から歩いて来た。

十兵衛よりは、もつと若い青年だつた。十九か、二十歳ほどで

あろう。この大きな屋敷の主人、明智光安入道あけちみつやすにゆうどうの嫡子ちやくしで、

弥平治光春やへいじみつはるとよばれていた。

十兵衛とは従兄弟いとこ仲である。

十兵衛も、姓は同じ明智で、名のりは、光秀みつひでといった。叔父

光安のやしきに寄食して、ひたすら學問に没頭していた。

故郷くにもとには、母もおり、明智城もあつて、食客をしなければ

ならないような境遇では決してなかつたが、何分にも、恵那郷えなごうの

山地では、読みたい書物を手に入れるのもままにならないし、そ

れに、刻々と進みつつある文化に遠かった。

いや、そういうよりも、十兵衛光秀の内に燃えている青年の慾望に、恵那えなの明智城は、余りに小さく、余りに文化の光や、時勢のうごぎに、遠すぎたのである。

叔父の光安も、よく、わが子の光春に向つて、

(ちと、十兵衛を見習え)

というほど、彼は謹厳で、勉強家だった。

ここへ身を寄せる前にも、すでに十兵衛光秀は、京畿けいきのあいだから、山陰、山陽の地方など、隈くまなく旅して来た。——近ごろ多い武者修行の群に伍して、知識を求め、時代の流れを見、生活の中に、進んで苦しみを迎えることもして来たのである。

わけて、泉州堺さかいに止まって、鉄砲を研究して来たことは、逸いちはやく、この美濃の国防と兵制に多大な貢献をしていた。だから叔父光安始め、誰もが、年はまだ若いが、すでに老成の風を備えている新知識の秀才として、尊敬を払っていた。

「十兵衛どの、何か、拙者に御用だそうですが」

「お、弥平治どのか。お呼び立てするほどのことでもないが」

「何ですか」

「あなたに、ご処置をお願いするのが、よかろうと思うて」

と、光秀も外へ出て来た。そして、日吉のほかんとしている側で日吉の処分を相談していた。

弥平治光春は、十兵衛から仔細を聞いて、

「ほ。この下人げにんですか」

と、日吉に一瞥べつをくれ、

「怪しいとお認めになるものなら、又市に申しつけて、一責め、弓の折れで撲なぐらせてみたら、泥を吐きましよう。何の造作もない」といった。

「いや」

と、十兵衛は、弥平治の眼と共に、もいちど日吉の姿を見直して、

「なかなか、そんなことで、有様ありように口を開く男とも見えませぬ。しかし、不愆ふびんなところもあるので」

「不愆をかけておつては、口を開かせることは出来すまい。な

らば拙者が、四、五日預かつておいて、物置小屋にでも押し籠めておきましょう。自然、飢^{ひも}じさに、実を吐くやも知れませぬ」

「お手数だが」

十兵衛が同意すると、

「縛^くり上げましょうか」

と、若党の又市は、すぐ日吉の側へ立ち寄つて、その手を捻^ねかけた。

と、日吉は、

「あ、待って下さい」

あわてて、身をかかわしながら、十兵衛と弥平治の顔を仰いで、「今聞けば、撲つても、有^{あり}様^{よう}にものをいわぬ男——と仰つしや

いましたが、訊いて下されば、何でもいいです。訊きもせず、幾日も、暗い所へ抛り込まれては堪りません」

「申すか」

「申します」

「然らば問うぞ」

「はい。どうぞ」

「……いかん」

と、弥平治は、日吉のけろりとした顔に、力負けしたように、「こいつ、どうも、おかしな奴ですな。少し頭脳あたまが悪いのかも知れぬ。人を弄なぶつておるような」

と呟つぶやいて、十兵衛の顔を見ながら苦笑した。

十兵衛は、笑いもしなかつた。むしろ懼れおそに似たものを日吉に抱いた。

で——十兵衛と弥平治とが、駄々な子をあやすように、こもごも何かと質問すると、日吉は、

「それなら、今夜大變が起ることを、教えますが、私はその仲間でも何でもありませんから、私の生命は、保証してくれますか」

「よろしい。そちの一命などは取るにも足らん。大變とは、何事か」

「火事があります。今夜の風次第で——」

「火事。……何処から」

「それは分りませんが、わたしと同じ木賃に泊っていた野武士た

ちが、密談していました。——今晚風が西か南だったら、常在じようぎ寺いじの森に集まり、手分けして、城下へ火を放つけようと」

「えっ」

弥平治も愕おどろき、十兵衛も息をのんで、日吉の顔を見まもった。

——半ば、信じ難いような面持おももちで。

が、日吉は、二人の顔いろなど気にかけているふうもなかつた。自分はただ合宿あいやどの野武士のささやが囁ささき合っていたのを、チラと聞いただけで何も知らない。自分の願いは、早く針を売り上げて、故郷の中村へ帰り、一刻も早く、母親の顔を見たいことしかない——
 というような意味を、より以上真顔まがおになって述べた。

愕おどろきの色を、顔に醒さまして、十兵衛と弥平治とは、しばらく、

黙り合っていたが、やがて、

「よし。そちの身は、きつと放してつかわすが、夜までは出すことならぬ。——又市、この小男を、どこぞへおいて、飯でも与えておけ」

と、十兵衛は命じた。

風は、相かわらず、吹き募^つっていた。——しかも風向きは、西南である。

急に、その風が、耳について、二人は胸騒がしくなった。

日吉の身を、若党の又市にあずけて、そこから追い立てると、弥平治はすぐ、すり寄って、

「十兵衛どの。この風に乗じて、野武士どもが、何を謀^{たくら}むのでござい

ざろうか」

と、不安を湛たたえた眼で、雲脚の迅はやい空を見あげた。

十兵衛は默然もくねんと、書斎のぬれ縁へ腰を下ろし、緻密な思慮をこらしているように、じつと、一所を見つめていたが、

「光春どの」

「何か」

「叔父上から、何ぞ、この四、五日中に、変ったことでも、聞いておいでなさらぬか」

「ぎ。……べつに何も、父から耳にしたこともないが」

「はてな？」

「ただ……。そういわれれば、今朝、父が鷺山さぎやまのお城へ出向く

前に、こんなことをいわれた。——御主君道三様と、義龍様との御不和、近頃、わけてもお険けわしい事情にあるゆえ、いつ何時、いかなる事変が起ろうも測り難い。常時、備えは怠りあるまいが、郎党どもも、不意の変に当って、武器馬具の用意など、あわてふためかぬよう、くれぐれも、早速の合戦に構えおれよ——と」

「叔父上がか」

「父が」

「今朝だな」

「いかにも」

「——それだ！」

十兵衛は、膝を打って、

「叔父上は、それとなく、今夜にも合戦があるぞと、暗あんに其許そこもとへ、注意して行かれたのだ。兵の謀略はかりごとは、肉親にも洩らさぬが常。……しかし、叔父上だけは、すべてをご承知のことにちがいない」

「え、今夜にも……合戦が？」

「こよい、常在寺の森に集まる野武士というのは、道三様が、外部から引き入れた、乱波らっぱの輩やからかと思われる。——恐らくは、蜂須賀村の衆であろう」

「では、いよいよ、義龍様を、稲葉山からお取除とりのけと、ご決意を遊ばして」

「そうだ」

と、十兵衛は、自分の判断に、自信をもって、強く領いてみせ
たが、あんたん暗澹と、唇を噛んで——

「……だが、道三様のお考えどおりに、巧くは運ぶまい。義龍様
にも、かねて期しておらることだ。……それに、御父子のおん
仲で、ほこ戈を把つて、血みどろに戦うなど、人倫の道がゆるさぬ。
必ずや、天道のお罰があろう。いずれが勝つも負くるも、流され
るのは骨肉、同族の血。——そしてしかも、斎藤家の領地は尺土
も殖ふえはせず、かえつて、隣国に虚を窺うかがわれ、それが動機となつ
て、さしもの御城地も崩壊ほうかいに瀕するであろう」

彼は、そういつて、長嘆をもらした。

「……………」

弥平治光春も、沈黙して、ただ、暗い乱雲と風の翔ける空を見
ていた。

主君と主君との争いである。臣下の身にはどうしようもなかつ
た。そして弥平治には父、十兵衛には叔父にあたる明智光安
入道うどうといえさぎやまば——これは鷲山の山城守道三やましろのかみどうさん方の腹心で、
義龍はいちやく嫡はの急先鋒であつた。

「……そうだ。どうあつても、さような、人道はずに外れた御合戦は、
お止めせねばならぬ。臣下の道は、それしかない。——光春、其そ
こもと許は、すぐ鷲山へ馳せつけて、死をもつて、父光安殿にすぎり、
光安殿とふたりして御主君道三様の思い立ちを、御諫止ごかんし申せ」

「はいッ。心得ました」

「わしは、日暮を待つて、常在寺の森へ行き、野武士たちの謀ぼうぎ拳よを喰い止める。——死をもつて、きつと、喰い止めるから。よいか！」

火の粉・風の子

大おお竈かまどが、三つも並んでいた。

炊事すいじ小屋である。

何俵という米も一度に炊たいてしまいそうな大釜が、三つも懸かつて
ている。

その釜の蓋ふたが、持ち上がりそうに今、糊のりと湯気を噴きこぼして

いた。

これだけの飯を、一度に喰べてしまうのかと思うと、静かなようでも、この明智家の築土ついでの中に生活している奥侍や、郎党や、その家族らの人数は、百人以上にもものぼるのではないかと、日吉はさつきから、眼をみはっていた。

——そして密ひそかに。

「こんなに豊富にある米が、中村にいる母や姉には、どうして、腹のはる程も、手に入らないのだろう」

と、不審になった。

母を思うと、飯を思い、飯を思うと、母の飢えを思うのが——
今彼の習性のようになっていた。

「ひどい風だのう」

台所頭の老人が、すぐ向う側の厨からやつて来て、竈場の火をのぞき、飯炊仲間や小侍の仕事ぶりを見まわして注意した。

「日が暮れても、風はやまぬようじやから、火の元をよく気をつけてくれよ。——それと、一釜あがったら、すぐ後釜をかけての、手の空いておる者は、側から飯を握りにかかれ」

「心得ております」

「抜かりはあるまいが、夜明けまでは、一切、帯紐ゆるめて、懈怠はならぬぞ」

「はい。その儀も」

「確とな——」

云い残して、老人は、ほかへ行きかけたが、ふと、足を引き返して竈場かまばの竈かまどの前につくなんて、火にあたっている小男を見て怪しみながら、

「これこれ」

と水屋仲間を顧みて、訊ねていた。

「そこにおる、猿のような顔した町人は、どこの何者じや。見馴れぬ男だが」

「十兵衛様からのお預り人だそうでございます。——あれに若党の又市どのが逃がさぬように、番に付いておいでなさいます」

「ほ、甥御おいごの十兵衛様から？」

と、老人は、竈場かまばの中へはいつて来た。そして、隅の薪置場まきおきば

に腰かけている又市の姿に気づいて、

「やあ、御苦労で」

と、何の理わけも分らず、世辞をいつてから、

「あれにいる男は、何か、不審でもあつて、捕えたものでござるか。それとも何か……?」

と、訊ねはじめた。

又市は、

「いや、仔細のほどは、何か知らぬが、ただ、十兵衛様のおいしいつけで」

と、のみ答えて、多くをいわなかつた。

台所頭がしらの老人は、それきり日吉のことは忘れてしまった。そし

て、頻りと、主人の甥にあたる十兵衛光秀の人物を、称え始めて、
「——実に、お年に似合わず、思慮分別のそなわったお方だな。
ああいうお方を、俗に出来ている人間——というのじやろうな。
とかく学問はないがしろになり、ただ、何貫目の棒を使うとか、
悍馬かんばに乗ってよく槍をつかいこなすとか、どこの戦場で何人斬つ
たとか——そんなご自慢を華はなとしてござるが、十兵衛様はそうで
ない。いつあの御書齋をのぞいても、しいんと、湖水のように静
かに学問してござられる。しかも、火術や兵法などにも、人一倍
の実力をお持ちでいながら……。何とも、ゆかしい、末頼もしい
お方であらうな」

と、口を極めていった。

又市は、十兵衛付の若党であつた。直接の主人である十兵衛のことを賞め^ほそやされると、悪い気持はしなかつた。

で、台所頭の老人の口に、彼も合^{あいづち}槌を打つて、

「いや、仰せの通り。手前などは、ご幼少から、十兵衛様には、身近に仕えておるが、あんなお優しい方はない。しかも、母君にはご孝行だし、こうして当地にご遊学中も、諸国をご遍歴中も、母君へのお便りは欠かしたことがない程で」

「総じて二十四、五といえは、剛直なれば大言壮語。おとなしければ柔弱で怠け者。木の股から生れたように、親の恩など忘れて生意氣ぶるものだが」

「——では、お優しいばかりかと思うと、あれで、恐ろしく強い

ご気質もあるので、それは滅多に色にはお出し遊ばさぬだけに、怒ったら、きかないご気性ですよ」

「そうじやろう。おとなしいといわれる者ほど、一たん^{こころ}忪えがつかぬとなると」

「今日なども、感じました」

「ム。今日な……」

「事に当って、是か非か、じつと考え込まれる時には、考えておられるが、決すると、堰^{せき}を切ったように、従^{いとこ}兄弟様の光春様へも、すぐ指図して、こうなさい、ああなさいと、きびきび指図してしまふ」

「将器じやの。いわゆる大将^{うっわ}の器というものじやろ」

「光春様も、十兵衛様には、心服しておられるので、お指図どおりに、すぐ肚をきめて、早馬で鷺山さぎやまのお城へすぐ駈けつけて行かれました」

「一体、どうなるのじやろ」

「さ。その儀はな？」

「飯をうんと炊たけ、兵糧として握たっておけ。ひよつとしたら、夜半にも、合戦となるやも知れぬから——と、光春様は云い残して、あわただしゆう、早馬でお出ましになつたが」

「万一の準備にな」

「万一ですめばよいが、鷺山と稲葉山城との御合戦では、わしら奉公人は、いずれへ弓を引いてよいやら——いずれへ引いても、

友や骨肉がおるしのう」

「ま、そんなことは、万が一にも起りますまい。十兵衛様にも、何やらご決心もあり、喰い止める策をお立てになつておるらしいから」

「神かけて、わしらも禱いのる。——これが隣国となら、真つ先に、白髪首しらがくびを、投げ出してもよいが」

——外はもう暗い。

そして、空は真つ暗だった。

吹き入る風に、大きな竈かまどぐち口の火は音をたてて、燃え熾さかつていた。

その前に、しやがみ込んでいた日吉は、大釜の飯の焦こげつく匂

いに、

「あ、飯が焦げる。お小人衆、釜の飯が焦げつきますぜ」

と、めしたきちゆうげん飯炊仲間たちへ教えた。

教えてくれた礼も忘れて、

「退どいた退どいた」

と、仲間たちは、大竈の火を落し、やがて、梯子はしごを懸けて、桶

へ飯をうつし取ると、手の空あいた者はみな寄つて来て、たすきはちま襷鉢

巻きでにぎり飯を、無数にこしらえ始めた。

日吉も、その中に交まじって、握り飯をにぎっていた。勿論、自

分の口へも、二つや三つ頬張つたが、誰も、何ともいう者はない。

ただ夢中で、飯を握りながら人々のいつていることは、

「戦いくさか」

「戦にならずにすむか」

であつた。

そして、自分たちの握っている兵糧が、むだになることを、そのうちの大部分の者が、願っていた。

やがてもう戌いぬの刻こく頃。

十兵衛光秀が、又市の名を呼んでいた。又市は外へ出て行つたが、すぐ戻つて来て、

「針売り。針売り」

と、大勢の中に交まじつて、一緒に兵糧の飯を握っている日吉を、呼び立てた。

日吉は、指の飯つぶを舐めながら、飛んで来た。

一步、炊事小屋の外へ出ると、相かわらず風は烈しく、暗い夜を翔けまわっていた。

「はい。お呼びですか」

「あちらだ」

「え」

「十兵衛様がお待ちだ。つづいて来い」

又市は、先に立って行く。——見ると、その又市は、いつの間にか、身軽い武装をして、足あしごしら拵しらえも、そのまま、戦場へ出るように固めていた。

何処へだろう？ 日吉には行き先も分らなかつた。何しろ暗い。

やっと、中門へ出て、見当がついた。広い邸内の裏庭をずっと廻って、表へ来たのだ。表門を出ると、誰か、騎馬の人影が一つ、烈風のなかに立って待っていた。

「又市か」

十兵衛の声である。

昼間のままの服装で、鞍の上に在^あった。手綱を片手に、長槍を小脇にして。

「はッ。又市です」

「針売りの男は」

「召し連れしました」

「そちと一緒に、先へ駈けろ」

「心得ました。——針売りッ」

と、振り向いて、そこからまた、タツタと闇の中を駈けた。

その歩速に合わせて、後からは十兵衛の駒と、槍の穂先が背を追って来る。そして辻へかかると、

——右へ。

——左へ。

と、後ろの十兵衛が、馬上から声をかけた。

常在寺の門前まで来て、日吉はやつと気がついた。蜂須賀七内をはじめ、岐阜ぎふに入り込んでいる乱波らっぱの衆が、戌いぬの下刻げこくに集まることになつてゐる場所だつた。

ひらりと、駒を降り、

「又市、そちはここで、待っておれ。何、大事はない」

と、手綱を渡して、

「戌の下刻までに、弥平治どのが、鷺山さぎやまからこれへ見えるはず

だが——もし約束の時刻までにお見えなければ、万事は休すだ。

御城下は修羅しゆらの巷ちまた……どうなるか、人間の智慧では臆測おくそくもつか

ぬことになるであろうが」

語尾は、憂いに消えて、十兵衛の眉には悲壮なものが漲みなぎっていた。

「針売り」

「はい」

「案内に立て。——先に歩いて」

「へ。どこへで？」

日吉は、烈風に立ち^{こら}泳えながら、十兵衛のその悲壮な顔を見まもった。

「森へ。——蜂須賀村の乱波どもが、こよい集まるといふ裏の森へだ」

「さ？ ……私も、どの辺だか、場所は存じませぬが」

「場所は初めてでも、そちの顔は、先の者がよく見知っておるであらう」

「えッ」

「かくすな」

「……………」

日吉は、うまく彼を騙あざむいたつもりでいたが、十兵衛の叡智えいちの眼は、何もかも観みぬいていることを、明らかに示していた。

（これはいけない。騙だまされた顔していても、騙だましきれない人だ）
日吉はすぐ覺さとつたので、もう言い訳も口答こたえもせず、はいといつて、先に歩き出した。

一点の灯も見えない。ただ伽藍がらんの大屋根を、木の葉の疾風はやてが、舷ふなべりを洗しう飛沫しぶきのように打ぶつけていた。

その——常在寺裏の林は、まるで荒れ狂う海原わだつみだった。木々の唸うなり、草うそぶの嘯そぶき、耳も眼も、奪うばわれてしまう。

「針売り」

「はい」

「森の中に、もう仲間が集まっているか」

「分りません。何しろ、このひどい風では——」

「いや、来ている」

「そうでしようか」

「ちようど、時刻もはや、戌いぬの下刻に近かろう。——そち一名が、いつまで、見えぬので、仲間の者が皆、案じているにちがいない」
寺裏の大きな五輪ごりんの台石に腰かけて、十兵衛は云った。

小脇に持っている槍の穂先が、日吉のすぐ足の先で、風に研とが
れていた。

「仲間へ、顔を出して来い」

十兵衛は、先手先手と打つように、日吉の考えを、始終、先を

越して云った。

「——あけちみつやす明智光安おいの甥、じゅうべえみつひで十兵衛光秀が、これにて待つておると申せ。そして、蜂須賀衆のうちで、誰ぞ、重立った者一名に、折入つて、談合したいことがあるから、これまで来てもらいたいと伝えて来い」

かしこま「畏りました」

日吉は、頭を下げた。

しかし、すぐ行こうとはせず、

「集まっている一同の者へ、そう伝えればよろしいので？」

「そうだ」

「そのために、私を、これまで先に立たせて来たわけですね」

「はやく行け」

「参ります。——けれど、これきりお目にかからないかも知れませんが、私にも、ここで云い分をいわせて貰いましょう」

「何、云い分を」

「いわずに去るのは、口惜しゅうございます。何となれば、あなたは飽くまで手前を、蜂須賀一類の手先と見ている様子です」

「それに相違あるまいが」

「あなたはお賢いが、あなたの眼は、鋭すぎて、観みる物ものを、突き抜いてしまいます。釘を打つにも、止とまるところで止っているからよろしいので、過ぎたるは及ばざるが如し、というのは、お前様の智慧のことです」

「……………」

「なるほど、あなたが観破みやぶつているとおり、私は、蜂須賀村の間と共に、この岐阜へ流れて来た一人にはちがいありませんが、しかし、心はあの衆と団体ではありません。中村の百姓に生れ、針売りなどして、未だに志を得ませんが、土豪の冷飯に飼われて、生涯終る気もなし、乱波らっぱを働いて、けちな恩賞にありつこうとも思っています」

「……………」

「もし、御縁があつて、次にまた何処かで、お目にかかる時があったら、あなたの眼が行き過ぎで、手前の云い分が、嘘でないことが証拠だてられましょう。——では手前は、約束どおり、これ

から蜂須賀七内様へ、お言ことづて伝だけ致しまして、そのまま、当地を退散いたしますから、あなたさまにも、ご機嫌よう。ずいぶんお大事に、ご勉強なされませ」

生来、口の達者な日吉が、思い切つてそう述べ立てている間、十兵衛は遂に、一言も吐かなかつた。

——気がついて、

「針売り、待てッ」

と呼んだ時は、日吉の姿はもう、木の葉の暴風を衝ついて、真つ暗な木立の奥へ走つていたため、十兵衛の声も届かなかつた。

駈け抜けて行くと木立に囲まれた少しの平地がある。風も、ここは池のように、強くは当らなかつた。

——見ると。

牧まきの野馬のうまのように、寝そべったり坐つたり、漫然と立ったりしている、一団の人影が黒々とあつた。

「誰だツ？」

立って、四方を睨ねめまわしていた一人がいった。——日吉の躡あ音しおとへである。

「おらだ」

「日吉か」

「うむ……」

「どじめ。寝ね呆ぼけたような返辞をして何処をまごついていたのだ。汝われ一名が見えぬため、皆で心配していたところじゃねえか」

まず、頭から叱られて、

「すみません。どうも、遅くなりまして」

と、日吉は、一同の側へ、おずおずと見える足つきで、近づいて行った。

「七内様は」

「あれにいる。あやま謝って来い。ご立腹だぞ」

「へい」

その日吉の声に、まわ周りの四、五名と何か首を集めていた蜂須賀

七内が、

「猿か」

と顔を向けた。

日吉が、そこへ行つて、遅くなつた詫びを云いかけると、

「何していた？」

「昼間から、斎藤家の御家中の邸に、捕まっていましたので」

「えッ。捕まっていた？」

七内の眼ばかりではない。辺りの眼は皆、愕然と、日吉の顔に集まつて、

（すわ、大事が洩れたか）

と、動揺めきかけた。

七内は、いきなり、

「この間抜け」

と、日吉の襟がみをつかんで、手元へ寄せ、荒々しく次を質し

た。

「どこで、誰の手に、捕まったのだ。——捕まったとあるからには、俺たちの企てくわだを、喋舌しゃべったであろうが」

「話しました」

「なにッ」

「話さなければ、生命いのちがありません。ここへ戻つて来ることも出来ません」

「こいつ」

と、小突き廻して、

「忌々いまいましい馬鹿だ。生命いのち欲しさに秘密をもらしたとみえる。——

——野郎、こよいの血祭ものだ」

七内は、突つっぱな放して、足蹴にかけようとしたが、日吉はひよいと、飛とび退のいて、その足先を躲かわしていた。

だが、左右の仲間は、彼の両手を把とつて、捻ねじ上げていた。日吉は、その手を振りのけながら、

「慌あわてないで下さい。話はよく聞くものですよ。捕まっても喋しゃべ舌つても、それは大事な屋敷なのです。……なぜなら、稲葉山の斎藤義龍の家臣ではなく、蜂須賀党とは同腹の道三秀龍様方の御家来ですから」

と一息にいった。

一同は、ややほつとした面おももち持だったが、なお、疑いは霽はれな
い眼いろで、

「いったい、その屋敷とは、どこの何者の住居」

「明智入道光安様とか聞きました。けれど、おらが手にかかった人は、その主あるじではなく、甥おいの十兵衛光秀とか申しました」

「ア、明智の居い候そうろうか」

と、つぶや呟つぶやく者があつた。

「そうです」

日吉は、そこへ顔を向けたが、また、一同の上へ眼を移して、
洒然しやぜんといつた。

「その十兵衛様が、誰かこの中の、頭かしらぶん分の者に会いたいということで、おらと一緒に、そこまで来ておりますが……七内様、行ってお会いなさいますか」

「明智光安の甥おい、十兵衛光秀が、一緒に来たというのか」

「へい」

「ほんとか」

「ほんとです」

「十兵衛へは、こよいの企くわだてを、残らず話したか」

「いわないでも、観みぬ抜いていました。怖ろしく頭あたま脳まのいい人ですから」

「何しに来たのだ」

「それは分りません。おらはただ、ここへ案内しろといわれただけなんで……」

「で、案内して来たわけか」

「仕方がございませんから」

「ちえツ」

「ああ。——まだ風がひどい」

日吉と。

一方は七内と。

そう二人が問答を交わしている間、周^{まわ}りの仲間^{つば}は、唾^{つば}をのんで聞いていたが、七内が最後に、ちえツと舌打ちして口を結んだのをきっかけに、

「どこにいる。その十兵衛とかは——」

と、急に脚を動かし、七内一人で会うのは危険だから、われわれも共に行こう。いや、七内殿と十兵衛と会っている周囲を、蔭

にかくれて、遠巻きに警戒していよう。——などと口々にぎわめき立った。

——すると、後ろで、

「あいや、蜂須賀衆。人目にふれてはなるまい。十兵衛からこれへ参った。七内殿にお目にかかろう」

と、いった者がある。

驚いて、振り向くと、それは問わでも知れている人影だった。いつの間にか、十兵衛は近くに来て、その静かな眼で、ここの物々しい動揺を見ていたのである。

「あ、……おぬしが」

七内は、やや慌あわて気味だったが、一同の頭かしらに立つ者として、ず

んぐりした体に、草鞋わらじ裁付たつけを着けた身装みなりを前へ進めた。

「蜂須賀七内どのか」

「左様」

七内は、急に、頭ずを高く持った。仲間の見ている手前もあるが、平常でも、主持ちの士とか、少し身分のある武士に対すと、下風にはつかぬぞ、諂へつらいはせぬぞ——と殊さらに態度じを持して示す——野武士たちの通有性でもあつた。

それに反して。

一筋の槍こそ小脇こわきにしているけれど、十兵衛光秀は、頭ずも低く、ことばも慇懃いんぎんに、

「初めて、お目にかかるが、かねて小六殿の尊名と共に、お名は

承知いたしています。——それがしは、道三秀龍様の幕下、明智光安が宅におる懸かかりゆうど人——甥の十兵衛と申す若輩にござります」
相手の丁寧のあいさつに、七内は少し痺しびれ気味だった。

「で、——御用とは」

「こよいのことで」

「こよいのこととは、はて、何だろう？」

そらうそぶ
空 嘯くと、

「そこにおける針売りから委細承つて、驚きのあまり、馳せつけて来たのです。こよいの暴挙は——暴挙といつては失礼だが、兵法から按あんずるも、道三様のお企くわだてとも思えぬ下策げさく。思い止まっていただきたいが」

「ならぬ」

七内は傲然ごうぜんと、

「わしの指図でするのじゃない。道三様のお頼みをうけた小六の指図でいたすことだ」

「ごもつとも」

と、逆さわずに、十兵衛は、語調も常のとおりにいった。

「当然、ご一存では、見合わせもなりますまい。——で、従い兄弟とこの弥平治光春やへいじみつはるが、鷲山さぎやまのお城へ参つて、一方、道三様をお諫いさめ申しあげ、追ツつけ、これへ参り合わせる事になつておる。それまで、一同ここを去らず、お待ち願いとうござるが」

丁寧ていねいも、慇懃いんぎんも、相手の常識に依ることである。かえつて、

相手を思いあがらせてしまう場合は、往々に多い。

——が、この構えは、その人間の個性にあることで、臨機応変にゆける者は稀まれだ。

十兵衛光秀は、性格的に、誰へも丁寧で慇懃だった。剣道でいうならば、いつも下段に構えて人に対する方だった。

しかし、肚は、別問題である。

（ふふむ。程の知れた小冠者。少し学問をかじって、理窟だけは達者な青二才の手輩だろう）

七内は、そう観みたので、

「待てぬ！ 要らざることだ」

と、呶鳴にべった。そして、膠もなく、

「十兵衛殿とやら、よけいなところへ、出しゃばるものじやない。おぬしは、まだ部屋住同様な——しかも明智入道の懸かかりゆうど人の分際ではないか」

「分を顧みる違いとまはありません。主家の大事です」

「大事と思つたら、具足兵糧の用意でもして、おれらが揚げる火の手を待ち、道三様の敵義龍の稲葉山へ、まつ先に、攻めかかるがいい」

「いや、それが出来ぬゆえ、臣下として、われわれは苦しむのだ」「なぜ」

「義龍様は道三様の立てた御嫡子ごちやくしではないか。道三様が御主君なら義龍様も御主君であらせられる」

「でも、敵となれば」

「浅ましい。御父子のおん仲に、左様な弓矢が交わされてよいものか。天あめが下した、鳥とり獣けものの類たぐいすらだに」

「面倒だ。帰れ、帰れッ」

「帰らぬ」

「なに」

「弥平治が、これへ来るまでは帰らぬ」

慇懃いんぎんだとばかり思っていたこの青年の声に、七内は、その時初めて断乎だんことした力を耳に聞いた。

また、小脇に引っ提げている一槍そうの鋭い気ぐみを、その眼に見た。

ところへ。

「十兵衛どの、そこにか！」

と、息を喘きつて、駈けて来た若い武士がある。待ちかねていた弥平治やへいじ光春だった。

「おうツ、これにおるツ。弥平治どののだの。御城内の決けつじよう定、如何になつたか」

「残念だが……」

弥平治は、肩で喘あえぎながら、従兄弟いとこの手を握つて、唇を噛んだ。

「御主君には、何としても、お聞き入れはないのだ。道三様のみかお父上もまた、部屋住へやずみの分際で、お汝こことらが知つたことではないと——」

「叔父御までが」

「かえつて、ひどい御立腹。——でも、死を賭して、今まで頑張つていたが、やがて鷲山さぎやま一円では、密かに、出兵の備えらしく、凡ただならぬ様子が見えたに依つて、御城下に火の手が揚つては、もはや大事と、駒を急がせて、戻つて来た。十兵衛どの、何としますか」

「ウウム。では、どうあつても道三様には、稲葉山を焼き立てるお心か」

「ぜひないこと。……この上は、われわれも、ただ一死をもつて、臣下の道を尽すほかはありますまい」

「嫌だツ……。いかに御主君であろうと、左様な、非道いくさくみの軍に与

して死ぬことは、人として口惜しい。犬死に等しい」

「では、何とするか」

「火の手さえ揚らねば、鷺山の兵は動くまい。——その火元を、火にならぬうち、消し伏せる！」

別人のような、十兵衛の語気なのである。——そういったかと思ふと、彼はふいに、蜂須賀七内や、その他へ向つて、小脇の槍をぴたと付けた。

柔弱な青侍とのみ思っていた十兵衛が、突然、自分たちへ、槍を向けたので、七内も蜂須賀党の輩ともからも、驚いて、さつと輪を開いた。

「何とする！」

七内は、ひとりその槍の正面に立って、吠える風にも負けない声でいった。

「おれ達に、槍を向ける気か。そのへろへろ槍を」

「いかにも」

十兵衛は、凜^{りん}という。

「ひとり残らず、この場は去らせぬ。——だが、汝ら、よく理をわきまえて、それがしの言葉を素直に容^いれ、こよいの暴挙を思い止まって、蜂須賀村へ帰るとあれば、生命も助けよう。また、それがしから出来るだけの手当もして遣^{つか}わそうが、どうじゃ、いずれを選ぶか」

「なんだと。では俺たちに、この場からすぐ引き揚げろというの

か」

「斎藤家御一門の崩壊の危機。稲葉山、鷲山、共に亡びんとするこよいの大事を防ぐためには——」

「ばかなッ」

七内ではない。周りの誰かが怒って叫んだ。

「そんなことができるかッ。青二才の分際で、要らざる喙、大事の妨げすると、うぬから先に血まつりに捧げるぞ」

「一死、元より覚悟の前」

と、十兵衛の血相は、戦わないうちからすでに、白面の夜叉かのように眉を昂げ、

「弥平治どの。弥平治どのッ」

と、後ろの従兄弟いとこに、その構えのまま声を投げた。

「斬死だぞ。よいか」

「おお。ご懸念なく」

弥平治光春も、もう大刀を抜いて、十兵衛と背なか合わせに、大勢へ備えていた。

でも、十兵衛は、なお、一縷いちるの望みを七内らの理性につないで、
 「空むなしく、その方もが、蜂須賀村へ帰るのは、一分いちぶんが立たぬ
 というなら、不肖ふしよう十兵衛の身を、擒人とりことして、連れて行くもよ
 い。拙者が直じかに、蜂須賀村の小六殿へお目にかかり、ようく理非
 をわけてお話しいたそう。——どうじゃ、さすれば、こよいの地
 獄も見ず、ここも互いの血を流さずにすむが」

彼の諄々じゆんじゆんと説く、道理なことばは、かえつて蜂須賀党やからの輩よわねには、彼の弱音として聞えた。

殊に、味方は二十余名。相手はわずか二人のことである。

「うるせえツ」

「耳を藉かすな。もう、戌いぬの下刻げこくは過ぎていゝぞツ」

二、三の者が、群れの中から叫んだのをきっかけに、わつと、
鬨ときの聲が沸わく。

途端に、十兵衛と弥平治のすがたは、狼軍の牙きばにつつまれた。
牙にも似たる長柄、槍、刀——。それらの武器と喚おめきが、轟ごうごう々と吹きうなる風の音と一つになつて、すさまじい乱戦の渦をそこに描き出した。

「ヤ、闘った！」

日吉は、見ていた。

刀の折れが飛んで来る。逃げる血まみれを、槍が追いかける。——そこらにいてはあぶないので、彼はあわてて、樹の上へ登った。樹の上から眺めていた。

一人や二人の斬合は、これまでも、出会ったことはあるが、こういう小戦争は初めて目撃したのだった。しかも、この結果によつては、今夜のうちに、岐阜ぎふの里いちめんが火の海になるかならぬか？ また、鷲山城と稲葉山城との、大乱が起るか否かの——大きな分れ目と思えば、日吉の胸も、生れて初めての大きな昂奮を覚えずにいられなかった。

「——弥平治ッ」

「十兵衛どの」

呼び交わす声が、二度ほど、喚きわめの中で聞えた。

だが、その小戦争は、二、三名の死者ができる、忽ち、その死骸だけを残して林の中へ移ってしまった。

「ヤ、逃げたのか」

また、引き返して来ては、危険と考え、日吉は用心ぶかく、なかなか木の上から下りずに様子を窺うかがっていた。

十兵衛、弥平治のわずか二人に突き崩されて、逃げたものとすれば、蜂須賀衆も口ほどもない雑ぞうひよう兵級の者ばかり——と密かに蔑さげすみながら、なお、耳を研といでいた。

彼のように登っていた木は、栗の木でもあろうか、手や頸すじへ何か針が触る。ばらばらと実や小枝が地へ落ちてゆく。——そして彼の体と、木全体は、暴風にゆさゆさと大きく揺れていた。

そのうちに、

「あッ、何だろ」

日吉は慌てた。

火山灰のような火の雨なのだ。勿論、日吉の周りにも——。

驚いて、梢から伸び上がった。蜂須賀村の者が火を放ったに違いない。森の二、三カ所から熾んな火が立ちはじめている。常在寺の裏の棟にも火がついたらしい。今、逃げ崩れた蜂須賀の者が、一人一人、火を放って逃げたのだ。

「たいへん！」

日吉は栗の実の一粒みたいに、梢から跳び下りて駈け出した。この暴風に、この火の手、一刻を争わねば、森の中で黒焦げくろこはきまっている。

夢中で、町まで駈けた。

町も火だ。

空も、火の粉、火の鳥、火の蝶々。

——稲葉山城の白壁が、赤く映はえて、昼間より近く見えた。そこには、赤い戦雲が、鮮やかに動いていた。

「戦争だッ」

日吉は、どなって町を駈けに駈けていた。

「戦争だ。お仕舞しまいだツ。——鷺山も稲葉山も、亡んでしまえ。焼けた跡には、また草が出る。こんどの草は真ツ直ぐに——」

人にぶつかる。人が転ぶ。

空馬からうまが跳んでゆく。

辻に、避難民がかたまつて戦おのっている。

そんな中を、日吉は——恐らくは無我夢中なのだろう——つつまれた昂奮のまま、予言者のような、また、童謡でも唄うような声を放ちながら、一目散に駈けて行った。

——何処へ。

などという的あてはなかった。

ただ、もう二度と、蜂須賀村へ帰る意思のなかったことは、明

白である。

また。

彼の性格が、最も忌み嫌うところの、陰鬱な領民、暗黒な領主、骨肉の相剋、清新のない文化など、腐えたる土壤の国に、何の未練もなく、そこを後に国外へ急いで去ったことも確実であろう。

そして、それからの一冬を、木綿布子一枚の彼が、寒空に針など売って、何処をどう彷徨つた果てかは知れないが——年も明けて、翌天文の二十二年、桃の花のさかり頃。

「針を買わんか。——京針。——京の縫針イ」

浜松の町端れを、至つて暢ンびりと、相変らずな顔して歩いて

いる彼のすがたが見出された。

松まつした下た屋やしき敷

松まつした下た嘉か兵へい衛えは、遠えんし州しゅうの産で、根ねからの地じ侍むらいであつたが、今川家から封ほうを受けているので、駿河旗本するがはたもとの一人であり、禄ろく三千貫、頭陀山ずだやまの砦とりでを預かつている。

天龍川の流れは、その頃、大天龍、小天龍の二大脈わかに岐わかれ、彼の邸は、頭陀山から五、六町東にある馬込川まごめがわ——大天龍の岸にあつて、馬込橋を中心とする、そのこの宿駅の代官役をも兼ねていた。

その日。

嘉兵衛之綱ゆきつなは、馬込からそう遠くない浜松の曳馬城ひくまじょうに、飯尾豊前守いおふぜんのかみをたずねて帰る途中だった。

飯尾豊前ぶぜんも、彼と同じ今川家の被官ひかんなので、この地方の民治警備には、たえず連絡をもち、また、四隣の国、——徳川とくがわ、織田おだ、武田たけだなどの侵略にも、常に備えなければならなかった。

「——能八のうはち」

嘉兵衛は、供を振り向いた。

馬上からである。

供の郎党は、三人いた。長柄ながえを持った髯面ひげづらの郎党が、

「はッ」

と、駈け寄つて、主人の顔を見上げた。

ちようど曳馬ひくまなわてから馬込まごめの渡舟わたしへ出るあいだの街道だった。

並木の松や雑木のほかは、見通しのよい畑や田だった。

「……はて。百姓でもなし、行者ぎようじやとも見えぬが」

嘉兵衛は、つぶや呟いて、駒の上から頻りと一方へ眼をこらししていた。

主人が眼をやっている方角へ、郎党の多賀能八郎たがのうはちろうも眼を放つ

た。——だが、咲き爛ただれた菜の花や、青い麦や、苗代なわしろた田の浅い

水のほか、何も見当らないのである。

「殿、……何事でございまするか。何ぞ、御不審な者でも？」

「うム。あれに——あの田の畦あぜにつくなくて、鷺さぎとも見える白い

人影。何をしているのじやろうか」

「え、驚？」

能八は、主人のことばを、おうむ返しに受け取って呟つぶやきながら、主人の指さす先を見まもった。

なるほど、人がいた。

田の畦あぜに屈かがみこんで――。

「質ただして来い」

と、嘉兵衛がいう。

能八は、はっと、駈け出して行つた。

およそ、今は、どこの国々でも、少し不審と見られれば、すぐ調べられる。それ程、一国一国が、国境に対して、また、見馴れない人間に対して、神経とがが尖り立っていた。

「行つて参りました」

能八は、すぐ戻つて来て、嘉兵衛の馬前にこう復命した。

「あれは、針売りの旅商人で、尾張の者とか申しました」

「針売りか」

「垢あかじみた白木綿の腰こしきり切を着ていますので、ここから見ると、

鷺のように見えますが、側へ参つて近々と見ると、猿によう似た顔をした小男にござります」

「はははは。鷺でも鳥でもなくて猿だったか」

「口達者な猿で、物を質ただすと、あべこべに、おぬしは何者だなどと大言を吐きますから——当地の御被官ごひかん、松下嘉兵衛様かへえでいらせられると、申し聞かせましたところ、ふーむと、怖れ気もなく腰

を伸し、のぼ此方こなたを無遠慮に見ておりました」

「そして、あぜ畦かがに屈んで、何を一体しておったのか」

「それも、ただ質たしましたところ、馬込の木賃に泊るので、晩の飯の菜に、たにし田螺とを採っているのだ——という返辞にござりました」

馬上のまま、能八の復命を聞いている間に、松下嘉兵衛が、ふと眼を移すと、その針売りの後ろ姿は、田の畦から街道へ上がつて、もう先の方へ歩いて行く。

嘉兵衛は、それに眼を止めながら、また、能八へいった。

「では何も、不審なかどはない者だの」

「べつに、怪しい節ふしも見うけられませぬ」

「そうか」

と、手綱を持ち直し、

「下賤の者らに、些ささい細な無礼咎ふれいめなどはなるべくするな。さ、参ろう」

と、他の郎党へも、鞍の上から顛あじをすくう。

駒の脚は、やや早目——

またたく間に先へ歩いている日吉に近づき、彼の側を、埃ほこりをたてて駈け抜けた。

(猿に似た小男)

と、さつき能八郎から聞いていたので、松下嘉兵衛は、何げなく振り向いた。

日吉は、勿論、道をよけて、並木の下にぼんやり土下座してい

た。——と、嘉兵衛が馬上から振りかえったので、日吉も顔を上げて、じつと見送っていた。

「ア、——待て」

嘉兵衛は、急に駒を締^しめて、うしろ向きに、郎党たちへ、

「今の針売り、これへ召し連れて来い。……異相^{いそう}だ！ 何とも異相な男ではある！」

と、半ば、独り語のような嘆声でいった。

郎党の能八は、主人の物好きなら——とは思ったが、すぐ駈け戻って行き、

「こら。針売り」

「へい」

「御主人がお召しだ。ちよつと、御馬前まで来い」

と、引ツ張つて来て、嘉兵衛の前にひきすえた。

嘉兵衛は、じつと鞍の上から日吉を見ていたが、それは顔が猿に似ているなどという興味ではなかつた。

そんなことは念頭になく、

(……異相だ！)

と、再びしげしげ見入つたのであつた。

しかし、嘉兵衛が、日吉をいちべつ一瞥して、直感したものは、それ

だけの嘆声では、まだ尽きていない。もつと複雑で無形な、靈感的なものが、彼を引き止めたのだつた。

あか垢じみた木綿布子ぬのこにつつまれた小男の——一体どこに、そんな

魅力があつたかといえは、黙つて、大地から嘉兵衛を見上げている日吉の眼だつた。

眼は、心の窓という。

この^{しな}萎びた小男のどこに^{とりえ}取柄というものも見出されなかつたが——何というすずやかな、そして意志の^{たくま}逞しい、無限に広い視力をもっている眼だろうか。

しかも、その眼は、^{こじわ}小皺をつくつて、ニコと笑っているようなのだ。

(愛嬌がある！)

嘉兵衛は、好きになつた。

彼が、もっと専門的な観相に詳しかつたら、真つ黒な^{たび}旅^{あか}垢の

下にかくれている、けいけつせき鶏血石のようなせんこう鮮紅を持つている日吉の耳だの、若いくせに、一見、老人みたいに見えるひたいしわ額の皺に、後年の大器がすでにあらわ顕れていたことも見出して、驚嘆したに違いないが、嘉兵衛の眼光は、その辺までしか、届かなかつたのである。

——でも彼は、一見、日吉に対してふしぎな愛着と期待をもつた。で、このまま、放し難い気持にとら囚われたのであろう、そこでは何も問わず、能八郎を顧みて、

「ついでのことに、やしき邸まで連れて参れ。——邸まで」

と、云いすてて、馬首をあげて、先へ駈けた。

大河にむか対つた門前に、家臣小者たちが四、五名、

「ア、お帰りなされた」

門扉もんぴを開いて待つていた。

駒こまつな繫なぎで、空馬はが跳ねている。誰か、留守中に、客とみえる。

「誰方どなたじや」

嘉兵衛は、そこへ来て、鞍から降りると、すぐ尋ねた。

「駿府すんぷのお館やかたさま様よりお使いにござります」

「そうか」

聞きすてて、嘉兵衛は、つつつと邸内へはいつてしまふ。

駿府といえは、主筋の今川家。使客はめずらしくはないが、その日、曳馬城ひくまじょうの飯尾豊前いのおぶぜんとのあいだに議した問題もあり、嘉兵

衛の頭は、とたんに忙せわしかつたとみえて、日吉のことも、忘れ果

てたか、或いは後でというつもりだつたか、とにかく黙つて奥へ

かくれてしまった。

「こら、待て」

郎党たちに従ついて、一緒に門内へ流れ込もうとした日吉は、早速、門番に発見されて、

「なんだ、その方は」

と、咎とがめられた。

日吉は、泥だらけな手に、泥だらけな藁わらの苞つとを下げていた。

顔にも、泥のハネが、乾きかけているのでムズ痒かゆい。門番は、嘲ちやうろつ弄ろうされているように、その動く鼻を見たのか、

「何だツ、こらツ」

襟えりがみへ、手をのばしかけた。

日吉は、少し退^{さが}つて、

「針売りだよ、おらは」

「針売りなど、みだりに入るところではない。抓^{つま}み出すぞ」

「御主人に聞いてからにおしなさい」

「なにを」

「来いというから従^ついて来たのだ。今、奥へはいつた騎馬のお侍
が——」

「殿が、そんなことを、仰^うつしやるはずはない。うろんな奴だ」

すると、郎党の能八が、思い出して、日吉を拾いに戻^{かえ}つて来た。

「おいおい、門番。そいつはいいのだ。分^わつておるのだ」

「へ、よろしいので」

「猿、こつちへ来い」

能八が、猿と呼ぶと、門番たちはそのことばに笑つて、

「なんだあいつあ。白い腰切こしきりを着て、泥苞どろづとを提げて、妙見みょうけん

様んさまのお使いみたいじゃないか」

能八に連れられて行きながら、日吉は背中に、門番たちのどツ

という声を聞いた。しかし、彼はもう、生れてから十八年、あら

ゆる人中の嘲罵ちやうばに馴れている。

感じないのか。麻痺まひしたのか。

そうでもないらしい。

なぜなら、そういう嘲罵を背に聞く時は、やはり誰もと同じよ

うに、彼の赤ら顔が、なおいくぶんか充血する。殊に、耳は一層

赤くなる。——裡うちに感情がうごいてゐる証拠である。

だが、感情のうごきによつて、彼の動作は変らない。馬の耳の如く平然たるところがある。むしろ少し愛嬌をふくむ。——みずからこういふ逆境ゆがに歪められまい、自己を卑屈くきに育てまいと——心の莖くきに添竹そえだけの支えさやをもつて、静かに嵐の過ぎるのを待っている草花のようである。

「猿」

「はい」

「あそこに、空あいているお厩うまやがある。目触めざわりにならぬように、その辺で控えておれ」

能八にも、用があるとみえ、云いすてて行つてしまった。

黄昏たそがれかかると、お膳番の働いている台所の竹窓から料理を煮るにおいが桃の夕月へ流れていた。

使者との公式な対談もすみ、やがて、遠路をねぎらうきようおう 饗 応
に、燭しよくふやが増されたのであろう。

邸の奥からは、鼓つづみの音が流れてくる。笛の音もはいる。猿さる 樂がく
でも舞っているとも見える。

自体、駿河の今川家は、名門の誇りが高く、歌道といわず、舞
樂といわず、総じて京風な華奢きやしやの好みが、たとえば侍たちの装そ
剣うけんの具にも、女房たちの襟えりの下した重かさねにも見えていた。

ここの松下嘉兵衛かへえなどは、根が地侍だし、嘉兵衛自身が素朴な
人だったが、それでも、清洲きよすあたりの尾張侍の邸宅とは、そのた

たずまいからして違っている。どことなく豊かなのだ。

「まずい猿樂だなあ」

空あきうまや 厩わらに藁わらをしいて、馬の代りに、日吉はぽつねんと、遠い囃子はやしを聞いていた。

舞樂はすきだった。いや音楽がわかるのではなく、彼は、樂から醸かもされる陽気なうつつの世界が好きなのだ。

何ものも忘れるからである。

が、忘れ得ないものを、今、彼は思い出した。空腹すきばらを満たす

ことだった。

「そうだ。鍋なべと火を借りれば……」

泥の藁わらづと苞とを下げて、御膳所ごぜんしよの口のぞを覗いた。

「すみませんが、鍋と焜^{こんろ}を貸してくれませぬかなあ。飯を喰べようと思ひますが」

台所方の小者たちは、異様な男がいきなり覗き込んだので、びつくりして、一応みな日吉の顔を見まもつた。

「何だ。どこから一体、降つて来たのだ」

「こちらの殿様が、来いと仰つしやるので、途中からお供して来た者でございます。田圃^{たんぼ}で採^たつた田螺^{たにし}を煮て、それを菜に喰べようと思ひますので」

「田螺^{つと}かい、その苞^{つと}は」

「腹のくすりだそうぞ。毎日、田螺は喰べることにしてあります。

生れつきか、ややともすると、すぐ下痢^{げり}をやりますので」

「味噌みそ煮にだろ。味噌はあるのかい」

「持っております」

「玄米こめは」

「玄米もございます」

「では、小者部屋の炉ろに、鍋も火もあるから、そこでやれ」

「ありがとうございます」

毎夜、木賃でやる通りに、少量の玄米こめを炊たき、田螺たにしを煮て、飯をすました。

腹がはると、眠ってしまった。うまや厩うまやよりは寝心地がいいので、そこに寝た。するとやがて、夜半近くに、御用のすんだ小者たちが帰って来ると、

「この野郎。誰に断つて、こんな所へ寝ていくさるか」

と、蹴とばして、忽ち、戸外おもてに抓つまみ出された。

で、元の厩へ行つてと思つたら、そこには、使者のお馬が、
（その方などの家ではない）

と、いつているように、威張つて眠つていた。

もう鼓つづみの音もしない。白桃の花に、薄い残月があつた。

宵かに快かい睡すいしたので、眠くもなかつた。日吉は、ただ漫然と、

時を空費していられなかつた。働くか、さもなければ、楽しむか、
どつちかにはつきりしていないと、すぐ欠あく伸びが出た。

「この辺でも、掃はいているまに、夜が明けるだろう」

竹たけ箒ほうきを持って、厩のまわりを掃き始めた。主人の眼が届か

ないところ程、馬糞や落葉や藁わらくずが溜たまりっていた。

「誰だ、今頃。……箒はきを持っている者は」

誰か、どこかで、そういつた者があつた。

箒はきを休めて、日吉は辺りを見まわした。

すると、再び、

「ここじゃ。そちは昼間の針売りだの」

日吉は、ようやく見つけて、

「あ、殿さま」

口の裡うちで答えた

橋廊下はしろうかの角にある雪隠せっちんの手洗所の窓からだった。嘉兵衛の

顔がそこに見えた。

酒のつよいお使者を相手に、量を過したらしく、嘉兵衛は、醒さめ際ぎわを、つかれ気味に、

「もう、夜明け近いか」

嘉兵衛は、窓から消えると、縁の雨戸をあけて、残月を見ていた。

「まだ、鶏にわとりは啼きませぬで、夜明けには、ちと間がございませう」

「針売り、いや、猿と呼ぼう。なんじ汝はそも、夜も明けぬうちから、何で庭を掃いているのか」

「することがございませぬので」

「眠ればよかろう」

「もう、寝てしまいました。手前は、きまつた時刻だけ眠ると、

どうしても体を横にしていただけません」

「履物はきものがあるか」

「ございまする」

日吉は、一走り、どこかへ走って行き、すぐ土のつかない草履を取って揃えた。

「これ、これ」

「はい」

「そちは、夕刻、邸内へ来たばかりで、その上、もう人並に眠りも揃とつたと申すが、どうして、邸の勝手を左様に心得ているのか」

「恐れ入ります」

「何を恐れ入るか」

「決して、怪しい者ではございません。けれど、これくらいなお邸やしきなら、物の在所ありか、御地内の広さ、下水口、火の元、およそのこととは、寝ていて物音を聞いていても考えられます」

「ふむ……なるほど」

「お草履も、どこにあるか、先ほど見届けておきました。なぜなら、床ゆかより下がって、地面に眠っている者は、てまえと馬しかございませぬ。戸が開けば、すぐどなたでもお草履と、お声がかかると思っていました」

「そうか。悪かったの。何も申しつけずにおいたので、そちは厩うまやに寝たか」

「……………」

日吉は、笑つて、何も答えなかつた。無邪氣らしい眸だが、嘉兵衛の人物を軽く見たようでもある。

が、嘉兵衛は、それから真面目に、日吉の身の上や生しょうち地を――そして奉公の望みがあるかないかなど熱心にたずね出した。

日吉は、

「あります」

と、答えた。

その望みを持つて、十六の年から諸国を歩いたと云つた。

「侍奉公したいために、三年も諸国を歩いたというか」

「はい」

「今なお、針売りして歩いているのは、どういふ仔細じや。三年もさがして、奉公口につけぬからには、何かそちに、欠点があるのではないかな」

嘉兵衛が、わざと問うと、

「人間ですから、てまえにも悪い性しやうがあるかもしれません。けれど、最初はどんな主人でも、侍屋敷でさえあればいいと思いましたが、世間へ出てから、そうでないと気がつきました」

「そうでないとは」

「善ぜん大將だいしやう、悪あく大將だいしやう、国々の武將や、武門のお端はしを見て歩

くと、主を選ぶほど大事なものはないと考えさせられました。そこで、めつたに針売りは廃よされないと、つつい、三年も経つ

てしまったので——」

おもしろい。利口者かとみれば、馬鹿みたいな節ふしもある。

話しぶりにも、真実さがあるかと思えば、なかなか山やま気もいう。

まともにそのまま信じきれない言葉が往々出る。

だが、とにかく、どこか異っている。人ひと凡なみではない。

嘉兵衛は、そう観みた。

で、その朝から、日吉を、邸の小者として、召使うことにきめた。

「仕つかえるか」

念を押すと、

「働いてみます」

平凡な返辞だった。

案外、欣ばない顔いろが、嘉兵衛にはすこし不満だった。

しかし、この木綿布子もめんぬのこ一枚の放浪児の主人として、自身が不足であろうかなどとは、考えられもしなかった。

松下家もまた、当時のどこの武家とも同様に、軍馬の訓練が厳しかった。

夜が明けると、邸内のお長屋から、槍とやとう（革のしない）を持った侍たちが、ぞろぞろともみぐら蔵の前の空地へ出て行った。

——えやあッ。

——うおう！

——ヤ、ヤ、ヤッ。

槍は槍と撲りあい、なぐは とうとたたき合っていた。

台所番の小侍から門を守る小者の末にいたるまで、朝は一度、ここへ来て、交代に皮膚を赤くして行つた。

嘉兵衛から云い渡しがあつたとみえて、日吉が、小者の端に召し抱えられたことは、もう皆知つていた。

うまやちゆうげん
厩 仲間 は、新参と見て、

「おい猿。これから毎朝、おれたちがお厩の馬を、草を喰わせに曳き出したら、その後、すぐ厩を掃除して、馬糞を向うの竹やぶの坑へ埋けるのだぞ」

と吩咐けた。

「はい」

馬糞掃除を担当すると、

「猿、ちよつと来い」

と、老侍が、

「担桶にないに、水を汲んで、方々の大瓶おおがめに漲はっておけ」

と、いうし、

「薪まきを割れ」

と、いうので、薪を割っていると、何をしろ、かをしろと、召使ばかりが重宝に召使う。

「あいつ、膨ふくれたことがないなあ。何をいいつけても怒らぬのが取柄とりえだよ」

若侍たちは、一面、彼を玩具的に愛して、時々、物など投げ与

えた。

だが、そのうちに、邸内でもその若手から先に、日吉に対して、

「あいつ、生意気だ」

「小理窟をこねる」

「殿へ諂へつらう」

「ひとを小馬鹿にする」

などという反感が、次第に昂たかまつて来た。

そういう若輩が、小さい落度を大声でいうので、松下嘉兵衛の耳にも、時々、猿の誹ひぼう謗がきこえた。

が、嘉兵衛は、

「今に、あれは使える。まあ見ておれ」

近臣へいって、取り上げたこともなかった。

嘉兵衛の妻、嘉兵衛の子達は、猿よ猿よ、と気に入らなかつた。それがまた、邸内の軽輩には、よけいに快くなかつた。

「なぜだろ？」

日吉は、爪を噛んで、考えた。

忠実に働きたがらない人間の中に交まじって、ひとり忠実たろうとするのは、実に難しいと思つた。

いまがわおうらい
今川往来

奉公人と奉公人との間の、小さい感情に取り巻かれて、そこに

人間を学ぶと共に、日吉は、この松下屋敷を中心として、海道の大勢と、今川、北条、武田、松平、織田などの実力や趨勢にも、だいぶ通じることができた。

(やはり奉公してよかった)

と、思う。

針売りして歩いていたのでは、容易に分らないような内情も、ここでは、時折、知ることが出来た。

もつとも、彼が、ただ喰うため、生きる世渡りのための、碌々たる奉公人に過ぎなかったら、そういうことに触れても、深い実態が小者にまで知れるわけもないが、彼の眼、彼の耳、彼の頭脳が、常に何ものかを求めて、敏感にそれを受感するので、

(ははあ、そうか。……さてはこうだな、ああだな)

と棋客きかくと棋客との対局を、盤の横から観ているように、一石一石の手が、日吉には分るのだった。

駿府すんぶの今川家の使者がここや岡崎や、小田原おだわらや甲府こうふなどへ頻繁に往来しているのでも、或る筋が読めた。

それは。

駿河するがの今川義元よしもとに、天下の覇権をにぎろうとする大望があることを示すものだと、彼は観みていた。

いや、その実現は、遠い将来であろうが、とにかく、理想をそこに置き、他日、京都に入つて、足利將軍家あしかがを擁ようし、自身、天下に臨のぞもうとする——その下工作が、ぼつぼつと始まっているに

違くない。

だが、地形から判じると、駿河の今川の背後には、強国北条が小田原にある。

また、側面には甲斐かいの武田。——京へ伸びんとする足の先には
みかわ三河の松平まつだいら。

こういう国々のあいだにあつて今川義元の工作は、まず前面の、松平家を属国化してしまふことに成功していた。

三河では、松平清康まつだいらきよやすが、今川家へ降つて、その与国よこくに甘んじてしまつて以来、不幸つづきで、清康の死後、子の広忠ひろただも早逝し、嗣子ししの竹千代は、人質ひとじちとして今、駿府に養われている有様だつた。

しかも、その城地の岡崎には、義元の直臣じきしんが派遣されて、領政稅務すべてを管理しているし、松平家の譜代の家来は皆、今川家の軍役に、追い使われている状態。

三河の収入も軍糧も、經營費を余すのみで、全部が駿河の義元の居城へ運ばれて行った。

(あれで、どうなるのだろうか?)

日吉は、三河の将来を暗澹あんたんとなつて考えたりした。

けれど、三河にはまだ、三河人の強韌きやうじんな意思がある。日吉は商あきないして歩きながらよく知っていた。このままで屈伏してしまふ三河武士ではないと思う。

より以上、彼が常に、心をとめて見ていたのは、尾張の織田で

あつた。母のいる土、生れた故郷ふるさと、当然、どこの国より、その盛衰が気にかかる。

今そこの土を離れて。

この駿河の一被官ひかん、松下屋敷から眺めていると、三河の松平を除いては、国の貧乏も、領土の狭さもどこの国より惨めみじに見えた。わけて今川領内の華美な文化と、豊かな経済の中から見ると、よけいにはつきりとそれがわかる。

（中村も貧しいわけだ。おらの家も貧乏なわけだ……だが？）

と、日吉はそれが、絶対な国運とは考えられなかった。貧しい尾張の土に、何か未来の芽ばえを感じ、貴紳きしんの礼風を真似まねて、上下とも華奢きゃしゃな今川領の風俗に、むしろ軽い反感と、危うさをい

つも思わせられた。

また、近頃、頻りと使者の往来がはげしいのは、今川家を中心に、駿^{すん}、甲^{こう}、相三^{そう}カ国間に、不可侵協定の^{ふかしん}下^{した}談^{たなし}が、結ばれようとしている気配だった。

主唱者は、勿論、今川義元で、将来、覇業の大軍を率^{ひき}いて、上洛するためには、駿河の背後にある北条と、側面の強国たる武田の二家とは、善隣^{よし}の誼^{よし}みを厚うしておく必要がぜひともある。

で、義元は、甲斐の信玄の嫡^{ちやくなん}男^{なん}太郎義信に、自身の息女^{むすめ}を嫁がせ、信玄の息女を、北条家に嫁がせることを、かねてから策していたのであった。

その婚姻は、ようやく成功を見、同時に軍事、経済の協定も成

ろうとして、今川家の勢力は、東海の重鎮として、動かし難いものとなつたかの観がある。

それは、随身の侍の、一人の姿にも、いわゆる羽振りとなつて、光つていた。松下嘉兵衛などは、義元直参の旗下とはちがい、地侍の被官ひかんだったが、それでも、日吉の知っている清洲きよすや、那古屋やや、岡崎あたりの邸とは、比較にならぬ程、どこか豊かだし、客足も多く、奉公人たちは皆、わが世の春を顔に見せていた。

「猿——」

と、若党の能八郎が、中庭に立って、探していた。

「はい」

「おや?」

能八郎は、屋根を見上げ、

「何をしているか。そんな所へ上がって」

「屋根を繕つくろっております」

「屋根を？」

と、呆れ顔に、

「こんな暑い日盛りに、ご苦労なやつだ。何で屋根屋のまねなどしておるのか」

「土用照りがつづきました。こんどは大雨です。雨が来てから屋根屋を呼んでも間にあいませんから、板のハゼている所だけ見つけて繕つくろっています」

「だから貴様は、朋ほうばい輩ばいに憎まれるのだ。日盛りの一刻は、皆、

木蔭やそこらで、昼寝しているのに」

「眼につく所で働いていると、皆様の昼寝を邪魔しますから、屋根ならよいと思つて」

「嘘をいえ。実は、貴様あ、そこで、お邸の地形を見ているのだらう」

「さすがは能八様、よくお気がつきました。それをのみ込んでいないことには、いざという時、護るに即座の手配りがつきません」

「物騒なことを、大きな声で申すな。殿のお耳にでもはいると、御機嫌を損じるぞ——降りて来い」

「はい。何か御用で」

「夕刻、お客が着く」

「またですか」

「またとは何じや」

「どなた様が御到着で」

「こんせき今夕のは、お使者ではない。諸国を遍歴してあるく武芸者だ」

「ははあ。大勢で——」

日吉は、屋根を下りて来た。能八郎はおぼえがき覚書をふところ懐中から出して、

「されば、武芸者は、じょうしゅうおおご上州大胡の城主かみいずみいせのかみ上泉伊勢守が甥で、

ひきたし疋田小伯ようはくという者をかしら頭に、門下の同勢十二名。騎馬一領、荷

駄三頭、槍七筋を持ったお客じやて」

「それは、えらい数でございますな」

「武道鍛錬の元氣者ばかりだし、それに、一行の馬や荷物も多いから、倉方くらかたの者がいる一棟むねを空けて、そこに当分、お住居のもりだから、夕方までに、万端、掃除をしてお迎えするように」「へエ。そんなに大勢で、よほど長く御逗留ごとうりゆうになるのですか」「まあ。半年じやろうな」

と、能八郎は、懶だるそうに、汗をふいて云った。

やがて、夕方になると、

「疋田ひきた小伯殿しょうはくの御一行、御到着にござりますぞ」

先触れさきふが告げた。

程なく、疋田ひきた小伯以下、十三名の一行が、門前に、駒を止め、塵ちりを払って立った。

松下家の若侍や老臣は、恭しく出迎えて、

「この度は、当家の乞いをいれて、諸国武者修行の御途次を、
お立ち寄り下され、忝うぞんずる。主人嘉兵衛儀は、折ふし、公
用中にござれば、後刻、改めてご挨拶申すとのことにござります」
「ご丁寧に」

と、受けているのが、疋田小伯であろう。まだ三十歳前後の人物である。

「——必ずご斟酌しんしゃくくださるまい。今般は、伯父伊勢守が心入れにて、若輩のわれら、世上の修行なすべしと、遍歴の途にのぼり、先頃までは、今川殿のご好遇に甘んじ、今度はまた、同勢召し伴つれて御当家のお世話になりに入った。もとより武辺者、逗留

中は、何かの失礼も、偏ひとえにご寛大に」

と、双方の挨拶。

門前の礼が一応すむと、

「お通りを」

と、出迎えが、列を開く。

「御免」

と、曳馬や荷をあずけ、十三名はぞろぞろと、邸内へはいった。

日吉はぼんやり眺めていた。そして、今の双方の挨拶を聞いて、

(兵法が^{おおはやり}大流行だから、兵法者もだんだん^{いかめ}厳しくなった)

と、感心していた。

近頃、武者修行武者修行という声をしきりに聞く。それから、

今まではそういわなかつた劍術だの、槍術だのという言葉もよく聞く。

武田家の与族で、上州大胡おおごの城主、伊勢守上泉秀綱いせのかみかみいずみひでつなの名は、わけて有名であつた。また常陸ひたちの塚原土佐守卜伝つかはらとさのかみぼくでんの名も、それに劣らないものだつた。

武者修行の中にも、行脚あんぎやの雲水うんすいよりひどいのもあるし、また、塚原卜伝こぶしの如きは、道中、常に六、七十人の供人を連れ、家来こぶしに鷹こぶしをすえさせ、侍臣には、乗換馬のりかえうまを曳かせて、威風堂々と、諸国を遊歴してあるくような、武者修行もいた。

だから日吉は、きようのお客の人数には驚かなかつたが、これから半年もいることだったら、随分また猿々と追い使われて、眼

をまわすことだろうと思いやられた。

案のじよう。

四、五日もたつとすぐ、

「やあ、猿。肌衣はだぎが汗くさくなくなった。洗つておいてくれ」

「松下殿のお猿。すまんが、膏藥こうやくを求めて来てくれぬか」

などと、自分らの下男のように日吉を追い使つた。

お蔭で、夏の短夜みじかよを、日吉の寝る間は、なお僅かだった。

梧桐あおぎりの下に、倚りよかかつて、日吉は居眠つていた。

夏の真昼の陽ひが、そこだけを僅かな日蔭にしていた。乾ききつ

た地面に、松葉牡丹ぼたんがぱらりと、そこここに赤く、動いているも

のは、蟻ありの列だけだった。

「……………」

だらんと首を横に、腕ぐみしたまま、眠っているのである。連日の寝不足で、やがて正体もない。

日頃、日吉を、何かと目触りにして、憎悪めどわしていた若侍の二、三名が、稽古槍を持って、そこを通りかけた。

「猿だな」

足を止めて、

「よく眠っておるわ」

と、眩つぶやいた。

「どうだ、この寝顔の、横着つらそうな面は。——それでいて、お奥向や殿には、猿々と、至って気受けがよい。こういう態ていを、ご承

「知なさらぬからだ」

「起してやれ。すこし油をしぼってやろう」

「どうするのだ」

「猿ばかりは、まだ一度も、武芸の稽古をしておらんじやないか」
「日頃、憎まれているのを、自分でも知っているせいだろう。撲なぐられるのを怖れて、どうしても、稽古せぬそうだ」

「それがいかん。およそ武家の奉公人たる者は、門番、お台所の末の者まで、必ず武芸を励むべし——とあるのは、御当家の御家憲だ」

「おれにいつても仕方がない。猿にいえ、猿に」

「だから起して稽古場へ、引っ張って行こうと思うが」

「うむ。おもしろい」

「よかろう」

一人が、稽古槍の先で、日吉の肩の辺りを、とんと突いた。

「こらッ」

それでも、眼を醒ささないので、

「起きろッ」

一人はまた、足を掬すくった。

日吉は、梧桐あおぎりの幹から、背を横へすべらして、びっくりした眼をひらいた。

「あ、なんですか」

「何ですかじゃない。白昼、お庭で大おおい躰びきをかいて、眠つてい

る奴があるか」

「眠つておりましたか」

「わからんのか、自分で」

「では、眠るつもりもなく、眠つてしまったものとみえます。もう起きています」

「当りまえだ」

「はい」

「自体、そちは、横着だぞ。聞けば一度も、武芸の日課すら、勤めたことがないと申すではないか」

「武芸は下手ですから」

「ろくすツぽ、稽古もせぬに、下手も上手もあるわけはない。小

者といえど、武芸鍛錬、怠るべからず、とは御当家の御家憲だ。

——さあ、来い。きようからわれわれが、稽古をつけてつかわす」

「いえ。それには及びません」

「ならぬ」

「でも」

「拒む^{こぼ}か、貴様あ、奉公人の身でありながら、御家憲を守らぬのか」

「ではごさいませんが」

「ならば参れ」

合法的に、撲りつけるつもりであるから、嫌も応もいわせない。

若侍たちは、日吉を拉^{らっ}して、遮^{しゃ}二無^む二、糺^{もみぐら}蔵の前の空地へ引

つぱつて来た。

そこには今日も、逗留中の武芸者の一団と、家中の者とが、炎天の下に、各 槍を持って、喚わめき声ごえをあげていた。

無理に、彼を拉らっして来た若侍たちは、そこへ来るといきなり、
「それツ、木剣でも、槍でも持って、かかつて来い」

と、日吉の背を、突き放した。日吉は、前へ泳いで、辛くも踏み止まったが、そこらにある稽古槍とうにも手を出さなかつた。

「なぜ持たんツ」

ひとり、槍の先で、彼の胸をわざと小突いた。

「稽古をつけて遣つかわすから、貴様も得物えものを持って。……それ、それツ、突き倒すぞ」

日吉はまた、蹠めいた。

しかし、強情に突つ立つたまま、唇を嚙んでいた。

——ちようど、その一方では。足田小伯の門下の、神後五六郎じんごやさかきいちのじよう榊市之丞しんせやらが、松下家の家来たちの求めに応じて、真しんそ槍うで力試しをしていた。

汗止めの鉢巻した神後五六郎が、真槍を把とつて積み重ねてある五斗入りの米俵を、槍にかけては、鮮やかに、宙へ匆はね上げて、怪力を見せていたのである。

「なるほど、その御手練では、戦場で人間を、槍にかけて飛ばすくらいは、易い々いたるものでござろう。恐れ入った力だ……」

驚嘆している人々へ、神後五六郎は、

「これを、ちからわざ力え技と御覧あるは、お考えちがいでござる。力を入れたら、槍の柄えが折れる。また、すぐ腕が疲れてしまう。——それでは、戦場を馳ちく駆して、何ほどの働きがなりませうや」

と、槍を休めながら、かたわ傍ら、劍の理あいも、槍の理あいも同じであることを説き、そしてすべての武道が、ただ丹たん田でんの氣にあること、力なき力——力を超越した心力でなければならぬ——などと講義の弁をふるっていた。

「なるほど」

皆、感銘して、それに聞き入っていた——すぐ後ろでのことだった。

「強情な猿めツ」

若侍は、槍の柄を、横に振って、日吉の腰ぼねを撲りつけていた。

「痛いッ」

日吉は、半ば、泣き声でさげんだ。実際痛かったとみえ、顔をしめながら、腰を曲げ、その辺を撫でまわしていた。

「どうしたのだ？」

後ろの一団は散らかって、日吉の周りに集まった。

「いや、どうにも、箸にも棒にもかからん横着者だて」

と、日吉を撲った若侍は、何といつても、日吉が武芸の稽古を拒むということ、武家奉公の異端者であるとして、口を極めて、悪ざまに人々へ披露した。

すると、また、

「いや、それは、わしも勧めた^{すす}ことがあるが、不器用だとか、何とかいって、どうしてもこの猿は稽古に来んのじゃ」

と、云い足す者もあつたりして、武家の奉公人として、不心得な奴、末の見込みのない奴、横着も直るまい——という判決を、日吉は、衆の中で口々から云い渡された。

先刻から、黙つて、神後五六郎の後ろに佇^{たたず}んでいた疋^{ひきたし}田^{しょうは}小^は伯^くは、

「まあ、まあ」

進んで、人々を宥^{なだ}め、

「見うければ、まだ、どこやら乳くさい小冠^{こかんじや}者。生意気ざかり

という頃だ。しかし、御家憲に反くそむのみか、武家奉公しながら、
武道を嫌うては、この者の不幸でもある。穏やかに、わしから訊
いてやろう。一同はお鎮しずまりなさい」

そういうと、小伯は自身で、日吉の気持をたずねてみた。

「小冠者」

足田小伯は、日吉へ、呼びかけた。

日吉は、小伯の顔を見て、

「はい」

と、いった。

今までしていた返辞とは、返辞の声が変わっていた。

この人なら、どういうことでも、思うまま答えてもいいと、心

で許している眼だった。

「おぬし、武家奉公いたしながら、武芸を嫌うそうだな。嫌いなのか」

「いいえ」

日吉は、かぶりを振った。

「——ではなぜ、折角、御家中の方たちが、親切に稽古をつけて下さるといふのに、稽古をせぬのか」

「はい、それはこういう理わけでございます。——槍の修行をしても一生、劍の修行をやっても一生、その道の達人となるには、どうしても生涯かかるでございましょう」

「うム、その気でなければならぬ」

「てまえも、人なみの一生涯しか生きられないものとする——
刀術や槍術も嫌いではございませんが、まあまあ、その精神^{こころ}だけ
を知ればよいと思っております。なぜなら、他に種^{いろいろ}々と、学び
たいこと、知りたいこと、やりたいことが、沢山にごございますか
ら」

「学びたいこととは」

「学問です」

「知りたいこととは」

「世間です」

「やりたいこととは」

問答のように、小伯がたたみかけて問うと、日吉はそこで、初

めてにこと笑って、

「それはいえません」

「なぜ」

「やりたいと思っても、やれなかつたら、広言になりますから、また、云つてみたところで、皆さんが大笑いに笑うに過ぎません」

「ふう……ム」

変っているな——と、正田小伯は日吉の顔をながめていたが、

「なるほど、そちのいうところは、少し分る気がするが、そちは武道というものを、小さい技わざの修練と、穿はき違えておるらしい。

武道とは、そんなものではない」

「どんなものですか」

「一能に達した者は万芸に達するという言葉もあろう。武は技わざでなく、心胆しんたんのものだ。心胆を深く養えば、世間を観る眼、人間を識しる眼、学問の道、経世けいせいの道、すべてに通じ得るものだ」

「けれど、この人達は、相手を突くことや撲なぐることが、何よりの芸とされています。あれは、足軽どもや雑兵にとつては、役にも立ちましようが、大将には要いらないことでござ……」

云いかける横合いから、

「何だと。無礼者ツ」

家中のひとりが、拳こぶしを固めて、いきなり日吉の頬骨を撲りつけた。

「アふ！」

と、顎を外はずしたように、日吉は両手で口を抑えた。

「いわしておけば、聞き捨てならぬ雑言を申す。小伯先生、お退ひきください。癖になる。ただ置いては」

激昂げっこうしたのは、ひとり今、日吉を撲つた者だけに止まらない。

今日吉の一言を耳にした者のほとんどが、

「われわれを、侮辱したものだ」

「御家憲を誹そしるも同じだ」

「免ゆるせぬ奴」

「いっそ、斬り捨ててしまえ。——殿も、よもや吾々の仕方を、無理とはなさるまい」

ほんとに、裏の藪やぶへ連れて行って、首にしてしまいそうな人々

の怒気だった。

小伯も、止めるのに困った。が、極力一同を宥め^{なだ}、辛くもその場だけは、日吉の首をつなぎとめた。

その日。黄昏^{たそがれ}——

能八郎が、そつと小者部屋をのぞいて、壁の隅に、悄^{しよ}ンぼり坐つて、齒の痛むような顔をしている日吉を、

「おい。おい」

小声で、外から手招きした。

「へ、何ですか」

日吉の顔は、おかしい程、腫^はれ上^あがっていた。昼間、撲^うられた痕^{あと}が熱を持って、ひね生^{しょう}姜^がの根みたいに腫れ出したのである。

「ひどく痛むか」

「そんなでもございませぬ」

濡手拭ぬれてぬぐいを、顔に当てながら答えた。

「殿様が、お召しだ。そつと、奥のお庭の中木戸を開けて通れ」

「え、殿様が。……では誰か、昼間のことを、云いつけましたね」

「あんな雑言を吐きちらして、お耳に入らぬわけではない。疋田ひきた先

生が先ほども、お部屋で話しておられたから、多分、疋田様からお聴きになったのだらう。……お手討かもしれぬぞ」

「そうでしようか」

「奉公人たる者は、朝夕武道怠るべからず——というのは、松下家の鉄則じゃ。家憲の威厳を明らかにすると仰っしゃれば、もう

首はないものと思えよ」

「では私は、ここから逃げ出します。こんなことで、死ぬのはいやです」

「ばかをいえ」

能八郎は、日吉の腕くびを捕えて云った。

「貴様を逃がしたら、おれが腹を切らなければならぬ。召しつれて来いという仰せをうけて来たからには」

「逃げることもできませんか」

「貴様は一体、口が過ぎる。少しはものを考えていうものだ。昼間の広言を聞けば、この能八郎ですら、小癩こしやくな猿と思う。……とにかく早く来い」

日吉を先に歩かせて、能八郎は後から、刀の柄つかを握りながら尾ついて行つた。

黄昏たそがれの庭木の暗がりに、白い綿虫わたむしの群れがうごいていた。

打ち水した書斎の縁先に、灰ほのかな室内の灯あかりが流れている。

「——猿めを、召し連れて参りました」

能八郎が、ひざまずいていうと、松下嘉兵衛は、端近く姿を見せて、

「来たか」

と、いった。

その声を、日吉は、頭のうゑに聞いたまま、庭苔にわごけに、額ひたいをつけて、縮まっていた。

「猿」

「はッ」

「そちの生国の尾張には、桶皮胴おけかわどうとはちごうて、胴丸どうまるとかいう、新しい工夫の具足ぐそくが、近頃行われておるそうな。一領買うて来い。そちの生国じゃ、勝手はよう弁わきまえておるであろうが」

「はい？ ……」

「すぐ立て、今夜にも」

「何処へで」

「胴丸を買い求めに」と、嘉兵衛は、手文庫を寄せて、金をつつみ、日吉の前へ投げてやった。

「………？」

日吉は、その金と、嘉兵衛のすがたとを見くらべていた。

その眼に、涙が溜たまった。やがて頬を伝わって、ぼろぼろと手の甲へ落ちた。

「出立は急ぐがよいが、品は急いで持ち帰るには及ばぬぞ。何年でも、程よいのを探せ。よいか」

「……はい」

「能八、裏の木戸を開けて、そつと出してやれ。……そつと、宵のうちに」

尾張へ行つて、胴丸どうまるの鎧よろいを一領買って来い——。唐突である。

また、余りにも、意外な主人のことばである。

日吉は、そつとした。

松下家の家憲を素みだす者として、手討になるかと思いのほか。

(今夜にも立て)

と、若なにがし干かの金子きんすまで、嘉兵衛は能八郎の手から、日吉へ授けて、いうのであった。

日吉が、襟すじから、ぞつとしたような顫ふるえを感じたのは、嘉兵衛の情けが——人の恩義というものが——骨ほねの髓ずいまで沁み入るほど、身にこたえたからだった。

「ありがとう存じまする」

主人の吩咐いいつけを、主人がまだ詳しく意中をいわないうちに、日吉にはもう分っていたので、つい、そういつてしまったのである。

こういう頭脳あたまが、奉公人たちの中に混まじっていたら、奉公人に

は目まぐるいであり、憎まれ嫉そねまれるのは当然である。——嘉兵衛は、そう思つて苦笑をうかべた。

「猿、何があがたい？」

「は、わたくしを追放して下さいお氣もちと察しまして」

「その通りじゃ、だが猿」

「はあ」

「何処へ行こうと、その才智を、もちツと、内に包まぬと、そちは生涯出世がならぬぞ」

「自分も左様に存じておりまする」

「知りながらなぜ、昼のような暴言を申し、家中の者を怒らせたか」

「つくづく、至らぬ奴と、後で自分で自分の頭を叩きましてごさいまする」

「気がついておるならもう何もいわん。惜しい才ゆえ、助けてつかわす——なれど、今じゃから申すが、日頃より、そちを嫉み憎しむ者が、筭こうがいが失せたといつては猿が盗んだといい、小刀こづかいんろう印籠いんろうが紛失したと申しては、猿の仕業しわざよと、つげ口の絶え間がない。

……それ程そちは、人の嫉そねみをうける質たちじゃ。ようく心得て人中で働けよ」

「……はい」

「きょうのことも、家憲をたてに、家来どもが怒りおるとかいうことじゃから、そちを庇かばうて助けおくわけにも参らぬ。また、公

然、いとま暇をつかわせば、当家の門を十町も離れぬうちに、追討ち喰らつて、討たれるであらう。……で、先ほど、ひきた疋田小伯どのからそつと注意せられたので、まだわし自身、何も聴いておらぬことにして、そちを旅先へ使いに出すのじや。……わかつたか」

「ようく分りました。……きも胆に銘じて……」

日吉は、鼻をつまらせて、何度も何度も嘉兵衛の姿を伏し拝んだ。

松下家の裏門から、その晩、日吉は出ていった。

振り顧つて、

「忘れません。忘れません」

二度もつぶやいた。

人の恩の大きな愛と感激につつまれて、日吉は、いかに報いたらいのかを——ぼんやり胸に抱きながら歩いた。

酷薄こくはくと、嘲ちやうべつ蔑めつのなかに、常に彷徨さまよつて来た彼だけに、人の情けは人いちばい強く感じる彼だった。

「今に……。今に」

何か、感動するか、事にぶつかると彼は行者ぎようじやの念仏のように、今に！を胸の底で繰り返した。

だが、彼の境遇は、ふたたび喪家そうかの犬いぬのように、的あてなく、職なく、彷徨さまようしかなかった。

大天龍の河水は、まんまんと流れていて、人里を離れると、天地のさびしさに、日吉は何となく泣きたくなつた。

そこから歩み出す運命の先は、彼も知らず、天地も星も水も、何の暗示もしていなかった。

のぶなが
信長

「——おじさん」

先刻さつきからこれで二度目である。何処かで、誰か、そう呼ぶよう
な気がする。

織田家の足輕組の乙おとわか若は、昼寝の首をもたげて、

「誰だ？」

と、見まわした。

その日の彼は非番だった。

いつもなら城勤めだが、きようは組長屋くみながやのわが家あに在つて、
手脚を伸ばしていたのである。

「わたしですが……」

声は生垣の外だった。からたちの葉とげや棘とげに、昼顔のつるが絡からんで、白つぽく埃ほこりの乾いている垣根越しに人影があつた。

乙若は、縁側へ出て、

「わたしですがつて、いったい何処の誰だよ。用があるなら、表からはいれ」

「表の木戸あが開きません」

「おや……?」

と、背伸びして、

「猿じゃねえか。中村の弥右衛門やえもんのせがれじゃねえのか」

「はい。そうです」

「なんだ。日吉なら日吉と云やあいに、幽霊みてえに、元氣のない声を出しやがって、どうしたんだ」

「表は、開きませんし、裏へ廻つて、覗いてみると、おじさんは寝ている様子。——今、寝返りを打ったご様子なので、呼んでみただので」

「つまらねえ遠慮をしていやがる。女房が買物に出たらしいから、木戸を閉めて行つたんだらう。待てよ、直ぐ開けてやるから」

乙若は、草履をはいた。

そして、日吉に足を洗わせ、家の中へ入れると、ややしばらく、その姿を眺めていた。

「どうしたんだ一体。いつか途中で会ったが、あれからでも足かけ三年、生きてるのか死んだのか、音沙汰もないので、中村のおふくろも、ひどく案じているようだぞ。——無事な顔を見せてやったか」

「いいえ。まだ……」

「家へは帰らねえのか」

「家へは、ちよつと、行って来ましたが」

「——だのに、おふくろに、まだ顔を見せないとは、どういいうわけだ」

「実はゆうべ、そつと、我家うちの外まで行って来ました。けれど、おふくろ様や姉の顔を、外から一目見ただけで、闕しきいは跨またがずにもどつて来たんで……」

「妙な奴だな。自分の生れた家じゃねえか。なぜ、今帰つて来ましたと、無事な姿を見せて、みんなにも欣よろこばしてやらねえのだ」

「そうして、会いたいのは、山々ですが、家を出る時、一ひとかどの男にならなければ帰らないと、誓つた言葉がありますから——それに、義父おやじにはなおさら、今の姿では会えません」

今の姿——と、いう日吉のことばに、乙若ぺんはもう一遍、彼の身み装なりを見直した。

白木綿しろもめんが、鼠木綿ねずみと紛まがうほど、埃ほこりと雨露あめつゆに汚よごれていた。油

気のない髪、ひやけ日焦やせおに瘦落ちておいる頬、どこことなく、志を得ない人間の疲れと困こんばい憊まいが纏まとっていた。

「何をして喰っているのだ。この頃は」

「針売りをしていました」

「針売り」

「はい」

「奉公したのじやないのか」

「二、三軒、武家の端くれみたいな家へ、勤めてみましたが」

「相変わらず、すぐに飽きてしまうのだろう。もう幾いくつ歳つになつた」

「十八でございます」

「鈍どんに生れついた性分なら仕方がないようなものの、阿呆あほうもいい

加減にしろ、いい加減に。——馬鹿には馬鹿なりの辛抱づよいところがあるものだが、貴様ときたひには、その辛抱もない。これじゃあ、おふくろが嘆くのも、養父が持て余すのも、むりはねえや。……猿、いったい貴様あ、何になるつもりなんだ」

腑ふがいなさに、乙若はつい、久しぶりに会った日吉を、会う早々、叱しつたり、罵のつたりしたもの、心のうちでは、多分に、同情をもっていた。

もともと、日吉の実父の弥や右衛門もんとは、生前、仲のよかつた間だし、その後、養父の筑阿弥ちくあみが、弥右衛門のあとに入夫して、哀れな遺子いじたちに、辛つらく振舞つらつていることはよく知っていたので、義憤ぎふんに堪たえないものがあつたのである。

——で、せめて、猿でも一人前になってくれたらと、密かに、亡父のためにも祈っていたが、その日吉が、十八にもなつて、まだこんなかと思うと、腹が立つてならなかった。

「まあ、誰かと思つたら、中村のお奈加さんの息子だね。お前さんも、そんなに自分の子みたいに怒鳴つてみたつて、仕方がないじゃありませんか。——可哀そうに」

やがて。

外から戻つて来た乙若の妻は、取り做して、井戸に冷やしてある西瓜すいかを上げ、日吉にも割つて与えた。

「まだまだ、十八ぐらいじゃ、何も分りやしませんよ。お前さんだつて、自分の十八頃を、考えてごらんなさいな。四十を越えて

も、まだ足輕長屋から抜けられないのが、世間並じやないか」

「だまつている」

おとわか

乙 若は、ちよつと、痛いところを衝つかれた顔をして、

「おれはな。おれのように一生を凡々と終つちやならねえと思うから、これからの若い者には、よけいいうんだ。——十五、十六

といえ、元服して一人前、十八といえ、男はひと一かどの面構つらがま

えがなくちやあならねえ。……たとえば、勿体ないが、御主人の

おだのぶなが

織田信長公を見ろ。当年、お幾歳いくつだと思う。あれでいて……」

と、云いかけて、急に、また女房との争論を恐れたのか、思い出したように話を逸そらした。

「そうだ、あしたはまた、その御主人のお供で、朝から狩場巡めぐり、

お帰りにはまた、庄内川で水馬や水泳のお稽古だろうて。——お
鼻かかおれも野駈のがけの支度だぞ。膝行袴たつつけの紐ひもや草鞋わらじを見ておけよ」

先刻さつきから俯向うつむいて、叱言こゝとを聞いていた日吉は、

「おじさん」

と、顔を上げて、訊ねた。

「なんだ、改まって」

「べつに、改まってではございませんが、信長公は、そんなに度々狩や川遊びにお出ましになりますか」

「何しろ……申しては恐れ多いが、飛んでもない腕白坊でいらつしやるからなあ」

「暴れン坊なんですね」

「——かと思うと、ひどく、行儀の厳やかましいところもあるがね」

「どこの国へ行つても、信長公のことは、余りよく申しませぬね」
「そうか。いやそうだろうな。敵国の者から見たら」

日吉は、急に腰を上げて、

「せっかく、お休みの日を、お邪魔して、申しわけございません」

「おや。帰るのか」

「また、参ります」

「なにも、そう急に、帰らなくともいいじゃねえか。一晩ぐらいは、泊って行きな。——おれのいったことが、気に障さわつたのか」

「そんなことはございません」

「帰るなら、止めもしないが、早く、おふくろだけにでも、無事

を見せてやんなよ」

「はい。見せてやります。……今夜は、中村へ帰ります」

「そうか。それならいいが」

と、乙若は、門口まで出て、日吉の姿を送ったが、心のうちでは、何か、いい気持ちがしなかった。

中村へ帰るといって乙若の家は出たが、その晩、日吉の姿は、中村の生家には戻っていなかった。

どこへ寝たか。

恐らく、路傍の辻堂か、寺の廂ひさしか、そんな所へ、野宿したのであるまいか。

松下嘉兵衛かへえから貰った金はあるはずだが、それは、乙若の家を

訪ねる前の夜、中村の家の外まで行き、母の無事なすがたを垣間^{かいま}見^み、そつと投げ込んで来たので、身には一銭も持っていないかつたし、——夏の短^{みじか}夜^{かよ}なのでどこに明かすも、夜はすぐに白みかけた。

——その日の、朝まだきである。

日吉のすがたは、西春日井^{にしかすがい}の部落から枇杷島^{びわじま}のほうへ向つて、のそのそ歩いていた。

彼は、何か物を喰いながら歩いていった。腰にも、飯の握つたのを、蓮^{はす}の葉につつみ、手^{てぬぐい}拭で巻いて結^{ゆわ}いつけていた。

今朝の食物と、昼の食物とを、一文の銭のない彼がどうして得たか。彼には常に、

(食物は、どこにでも得られる物だ。人間には天^{てん}禄^{ろく}があるから) という信条と、

(鳥^{とり}獣^{けもの}にすら、その天禄がある。けれど、人間たちは、世のために働けという天のご使命をうけている者だから、働かない者は、喰えないようにできている。——だから人間は、喰うためあぐせくするのは恥辱で、働きさえすれば、当然な天禄が授かるのだ)

と考えていた。

だから彼は、飢^うえると、食う食慾より先に、働くことを先にする。

その場合、仕事がないということも、日吉の経験にはないこと

だった。働こうとする時は、町で普請場ふしんばがあれば、大工や土かつぎの手伝いでもさせてもらう。重い車を挽ひいてゆく者を見れば、後を押す。汚い門前を見れば、箒ほうきを借りて掃かせてもらう。

頼まれないでも、彼は仕事を見つけ、仕事を作り、仕事を誠実にするので、一椀わんの食物や、一銭のわらじ錢ぐらいは、必ず人が酬むくいてくれた。

恥とは思わなかった。

なぜなら彼は、喰うために、牛馬のごとく身を卑いやしめたとはいわないのである。少しでも、世のために働いたので、当然な天禄をもらうのだと、信念していた。

——今朝も。

春日井かすがいの部落で、早起きな野鍛冶のかじの家が開いていたのを見つけ、そこで鍛冶場の掃除を手伝い、その飼牛かいうし二匹を曳いて、草を飼わせ、また、裏へまわって、水瓶みずがめいっぱい、水汲みをしてやったので、子持ちのおかみさんに喜ばれ、朝の飯と、昼のにぎり飯とを恵まれて来たのであった。

「……きょうも暑くなりそうだ」

日吉は、朝空を仰いで、独りつぶやいた。そうして得た飯に、きょうの露命はつないでいたが、頭のなかでは、ひとの思いもよらぬことを考えていた。

「——この天気なら、きょうもきつと、信長公は、河遊びにお出ましになるにちがない。足軽の乙若も、きょうはお供のうちに

加わる番だと、きのう話していた」

やがて。

草の彼方に、庄内川のきれいな流れが見え出した。彼は朝露にぬれた姿を、草から出て、河原に立たせ、しばらく、水の美しさに見み惚とれていた。

「信長公は、毎年四月から九月の末頃まで、水馬、水泳のお稽古を欠かすことなく、この辺の河へ出てなさるとのことだが……はてな、どの辺だろう。乙若に聞いておけばよかった」

河原の石は乾いてくる。

草くさの実みや、露によごれている日吉の着物にも、やがて、陽がかんかんと照りつけてきた。

「ここらにいてみようか」

漫然と、独り云つて、日吉は河原の畔ほとりの草むらに、坐りこんだ。

信長公、信長公。

織田の腕白どの。三郎信長公とは、いったいどんなお方か。

——この日頃。

日吉の頭には、寝ても起きてても、その人の名が、護符ごふのように貼はりついて、離れなかった。

「いちど見たい」

彼の念願だった。

それを今日、果そうとして、早くからこの河原へ来て見たのだ
った。

亡き おだびんごのかみ 織田備後守の跡目を継がれたはよいが、あのわがままで粗暴な大うつけでは、とても、備後守信のぶひで秀の跡は持ちこたえてゆかれまい。

とは、一般的な世評であつた。

粗野で——癩持かんもちな——

たわけ者びた若殿。

行く末の案じられる跡継あとつぎよ。

と、信長の名が出れば、必ずそこでは、そんな陰口かげぐちを聞いたものである。

日吉も、幾年のあいだ、巷ちまたのうわさを信じ、貧しい国土と、不幸な国主を持った郷土に、悲しみを抱いていたが、諸国の実情を

見て来て、

(いや、底の底は、分らないぞ。——合戦のある日ばかりが、戦争ではないから)

と考えられて来たのだった。

一国一国には、それぞれ国の性格があり、そこにはまた、虚^{きよ}と実^{じつ}があつた。

表面、脆^{ぜい}弱^{じやく}に見える国でも、内部は案外、充実している国もあるし、権威富力の大きく見えている強国でも、案外、中^すの腐^すえている国もある。

たとえば、日吉が歩いた範囲でいえば、美濃の斎藤、駿河の今川家のように。

そういう大国と強国のあいだに挟まって、尾張の織田、三河の松平などは、見るからに貧しい小国だった。——けれど、その小国のうちに、何か大国にない力が潜ひそんでいなければ、敵として、存在はしていられないはずだった。

世間でいうように、信長が愚かであつたら、どうして、那古屋なごやが保とう。

ことし、その信長は、ちょうど二十歳はたちになると聞いている。

父の備後守信秀を亡うしなつて、十六歳から那古屋の城に主君として立つてからでも、もう三年はたっている。その三年に、粗暴で、うつけで、何の能も才もない若大将が、どうして、小国とはいえ、亡父ちちの遺産の領土を失わずに、しかも半ば、薄気味わるく思われ

ながら、国土を持つていることができよう。

もつとも、人にいわせると、それは信長の力ではなく、家臣に偉いのがいるからだという。

平手ひらてなかつかさ中務、林新五郎、青山与三右衛門よぎえもん、内藤勝介ないとうかつすけ——

などという良い家来を、備後守も、生前から阿呆な三郎信長の末を案じて、付けておいたので、その謀臣ぼうしんしゅう衆の協力が今日、織田の柱となつていたので、お若い主君は、いわば置物同様にすぎない。——だから先君以来の老臣らがいるうちはよいが、ひとり逝ゆきふたり死に、その柱がなくなる頃になると、織田の衰亡は、火をみるよりも瞭あきらかであろう。

それを、誰よりも待つている者は、信長の妻の父にあたる、美

濃の齋藤道三さいとうどうさんであり、次いでは、駿河の今川家である——
このような見透しは、世間、どこで聞いても、一致していること
だった。

「……おや？」

日吉は、草の中から、首を上げて見まわした。

とき 関こえの音がする——

河すじの上流に、黄いろい埃ほこりが揚っていた。

「何だろ？」

立ち上がって、耳を澄した。そして顔いろを変えた。

「何も見えないが、ただごと 凡事ではないぞ。……戦争か」

彼は、急に、草を蹴って、走り出した。

だが、五、六町も駆けて行くと、そうでないことが分つた。彼が朝から待つていた織田家の家中が、上流の河原へ来て、もう合戦の稽古をしていたのだった。

川狩といい、鷹狩たかがりといい、水泳の調練といつても、この頃の大名のやることには、すべて戦備の心がけがあつた。戦争を離れては、生活がなかつた。

「……ウウム、始まつている」

草間隠れに、日吉は遠くからそれを眺めながら、大きく呻うめいた。

河原の向う岸に、堤どての蔭から上の草原にかけて、織田家の定じょう紋もんのついた陣幕がめぐらしてある。三、四カ所のお小屋からお

小屋へかけて、その幕は翺へん翻ぽんと風を孕はらんでいたので、無数の兵

たちは見えるが、信長のすがたは生憎と見えない。

眼を転じると——

幕とお小屋は、此方こなたの岸にもあつた。馬匹がさかんに嘶いなないてい
る。

わあッ——うわあッ——

という武者押しの声は、その両岸から起つて、川波を呼び立て
ているのだつた。日吉が、立ち止つた時、一頭の放はなれ駒ごまが河の中
ほどからザブザブと駈け狂つて、下流の陸おかへ跳ね上がつて行つた。

「これが、水泳のお稽古か」

日吉は、うなず頷けなかつた。

世評というものは、たいがい好いいい加減かげんなものである。信長を、

暗愚の殿だの、粗暴なうつけ者だのといつても、では誰がそれをつき止めたかといえ、誰も真を追つて突き止めてはいないのである。

毎年四月頃から九月にかけて、川狩や水泳の稽古に城を出るところとは誰でも見ているが、それだけを知っているに過ぎなかつた。

今、彼が現地へ来て、目撃したところでは、決して、腕白な殿の水遊びや避暑ではなかつた。

烈しい軍馬の教練である。

規模は大きくない。元より野駈けの軽装だし、軍馬の数も少ないが、やがて貝の音に兵が揃い、押おしだいこ太鼓がとどろくと、兩岸の人数が、どつと河の中でぶつかつた。

いちめん河は飛沫しぶきとなり、その真つ白な水煙のなかで、武者と武者、足軽隊と足軽隊とが出まんじになつて、合戦をしはじめた。

槍はすべて竹槍であつた。大勢が旋風つむじになつて戦うなかでは、突き合うよりは、撲り合うのなぐだつた。外れた槍そからも、白い虹が無数に立つた。その歩兵群を蹴ちらして、一騎、二騎、三騎——すべてで七、八騎の騎馬の武将が采さいを振り、自身槍を揮ふるい、また、声をからして駈かけ巡めぐつてゐる。

「大介だいすけ、見参」

と、その中で、凜々りりしい声を放つた騎馬武者が、一ひときわ目についた。

白の涼やかな帷子かたびらに具足、綺羅きらやかな朱太刀を佩はき、織田家

の弓道槍術の師範で市川大介とよぶ剛の者の馬うまぎわ際へ鞍を駈け寄せ、無法にも、青竹の槍で横はたきにひとなく一撲りくれて行つたのだつた。

「小癩こしやく」

と、喚おめきあわせて、槍を引ひつ奪たくつた大介は、それを持ち直して、相手の胸いたへ突き返した。

端麗な人だった。その若い武者は、顔を紅潮させ、大介の突いて来た槍を片手につかみ、片手を朱太刀にかけて、きかない眉を示した。が、一瞬、大介の力に引かれて、真逆さまに落馬し、姿はざんぶと河水につつまれた。

——日吉は思わず、

「あ……あのお方だ。信長公だ」

と、独り呶鳴った。

ひどい、思いきったことをする家来もあるもの。

信長は乱暴な殿と世間ではよくいうが、乱暴なのは、信長よりは、その近臣のことではないのか。

日吉は、そう思った。

——が、遠方で見ただけのことである。果たして落馬したのが、その信長だったかどうか。

日吉はなお、われを忘れて、伸び上がっていた。渡河戦の猛演習は、まだその河の真ん中で、双方とも押し合っていた。主君の信長が落馬したのなら、他の臣下が騒いで救い上げそうなものだ

が、戦っている者は戦のほか、わき目もふらないのである。

そのうちに。

戦場となつてゐる辺より少し下流の向う岸へ、ぎぶぎぶ、這い上がった者がある。

見ると、落馬した若武者であつた。——やはり信長らしい人だつた。

「退ひくかツ。馬鹿ひツ」

ぬれぬぬれぬずみ

濡鼠のからだを、そこに突つ立たせるとすぐ、地だんだし

て、叫んでいた。

遙かに、さつきの市川大だいすけ介が、それを見つけて、

「東軍の御大将、あれに流れついて在おわすぞ、つつんで、生いけど擒れ

や」

と指さした。

徒歩かちの兵が、

「御免ッ」

「御免」

云いつつ、しぶきを蹴立てて、信長の前面へ、駈けて来た。

信長は、渚なぎさの竹槍を拾って、ひとりの兵を、真つ向にたたき伏

せ、次の群へ、抛ほうりつけた時、

「寄せはせじ」

と、味方の一隊が、駈けつけて来て、彼の身边を、敵から隔てた。

信長は、堤へ駈^{どて}け上がると、

「弓、弓ッ」

鋭い声で呼んだ。

お小屋の幔幕^{まんまく}のあたりから、小姓がふたり、矢と半弓を持つて、転ぶように、すつ飛んで来た。

取るが早いか、

「この河、渡すな」

と、河原の兵を、叱咤^{しつた}しながら、一矢^{いっし}をつがえると、ぶつんと切つて放ち、すぐまた、矢を嚙^かませては、びゅんと弦^{つる}を翻^{かえ}した。

鏃^{やじり}のついてない稽古矢ではあるが、顔の真ん中を射られて、倒れる敵もあつた。そして、彼一人が射ているとは思われぬ程、た

くさんな矢が急射された。

射てる間に、弦が二度も断れた。断れるたび、弓を換えて、すぐにもた、射つづけた。

が、——そのうち。

必死でそこを支えている間に、上流の防ぎが崩れて、西軍の兵が、どつと堤へ駈けあがり、信長の休息小屋を、包囲して、鬨をあげた。

「敗けたッ」

信長は弓を投げ捨てた。

その時はもう、莞爾と、笑っているのである。そして、敵方の凱歌を、かえって、愉快そうに、振り向いていた。

兵学の師、平田三位と、弓槍きゆうそうの師範役、市川大介とが、馬をお小屋のわきへ捨てて、駈け寄つて来た。

「殿、どこも、何ともございませんでしたか」

「水の中だ。何ともあるものか」

信長は、大介を見るとやはり無念そうに、

「明日は勝とう。大介、あすは憂い目を見せてくるるぞ」

と、少し眉を昂あげている。

平田三位が、傍らから、

「御帰城後、きょうの御戦法について、御講評申し上ぐるでございましょう」

と、いったが、信長はよくも聞かないで、その間に具足をかな

ぐり捨てて、水着一重ひとえになって、河の深い所へ行つて、涼しげに独りで泳ぎまわっていた。

狂児像きょうじぞう

信長は、端麗だった。

彼が血をうけた遠い祖先に、よほど美しい女性がいたか、容貌ひいの秀でた人がいたろうと思われる。

彼のみならず、十二男七女子という、多くの兄きょうだい妹が、みな気品の香りを持つているとか、目鼻だちがよいとか、どこか文化人らしい垢ぬけあかした質を持っていた。

わけて信長は、色白く、びもくしゆうれい眉目秀麗で、何かふと、きつと振り向く時など、ひとみの底から、きかない気の光が人を射るところがあった。

だが、自身が気がつくくと、

はははは。

その光をすぐ笑いつつんで、人がそれと気をつく間まも措おかなかつた。

「またかと、うるそう聞きこし召すやも知れませぬが、御先祖のことは、念仏申すよう、明けても暮れても、飯を噛はむまも、お忘れあつてはなりません。……そも、織田氏の御先祖様と申せば、越えちぜ

前丹生んにゆう氏神、織田つるぎ劍神社の神官に在おわしました。なお天文のそれ

よりも前をただせば、小松平重盛公のお血すじ、さらに、
 溯れば、畏れ多くも、平氏は桓武天皇よりわかれ給うところ、
 申さば、金枝玉葉の御血の雫をすら、今のお身に伝えておうけな
 されているのでござりませぬ。……爺が度々申しあぐるまでもな
 く、よくよく御自覚なさりませねばなりません。

こう彼は常に聞かされる。

亡父の織田備後守信秀が、彼を、彼が生れた古渡城から
 移して、那古屋の城におらしめた時から、守役として、側につ
 けておいた四名のうちの一人、わけても忠誠な老臣のいうところ
 なのである。

平手中務だ。

どうも信長は、その爺じいが、常に煙たくて、うるさいらしかった。「ああ分つたよ。分つておるよ爺——」

と、横を向く。

顔を振る。

少しも沁しみ々とは聞かないのであつたが、平手中務は、それこそ彼自身が、念仏を申すように、

「亡きお父上備後守様の御生涯をよう思い遊ばせや、この尾張八郡をお伝え遊ばすには、朝あしたに北ほつきよう境の敵と戦い、夕べには東隣の国境に征馬をお向けなされ、ひと月のうち、具足を解いて、安々と、お子たちの中にさざめいてお暮し遊ばした日は、幾日ともござりませぬ。——しかも涙ぐましき御忠誠おわに在したことは、

この乱国の中、四隣に戦の絶え間もない中をも、すぐる天文十二年の頃には、この爺めを京へお遣わしあつて、内裏四面の築土の御修理をなされますやら、また、四千貫文を朝廷へ御献上遊ばし、そのほか、伊勢外宮の御造営にもお力をお尽しなされました……。そうしたお父上をおもちなされ、御祖先には「

「爺や。もうよい。分つておるよ、何度聞いたか知れぬことを」

信長は氣に入らないと、すぐ美しい耳朶みみたぶを鮮紅にした。

けれど、吉法師きちぼうしといった幼名の頃から、何でも知っている中務なかつかさには、さすがに、それくらいしか、不機嫌を見せられなかつた。

中務もまた、彼の気性は、よくのみ込んでいた。理窟で説くよ

りは、感動に訴えるほうがききめのあることを知っていた。

で、信長が耳を熱くすると、

「お口輪を取りましようかな」

と、すぐ穂先をかえた。

「馬か」

「さればで」

「爺、そちも乗れ。――ひとむち鞭あてよう」

騎馬で駆けまわるとは、信長の大好きなひとつだった。それも城内の馬場では心にみたく、城下から三里も四里もある所を、よく一気に駆け、一気にもどつて来たりした。

（――まこと寔に人を人臭しとも思われぬ和子君で在すわこぎみでなおわあ）

とは、信長の幼少から守役の平手中務が、何か持て余すたびもりやくに傍人ぼうじんへもらして来た嘆息だった。

十三歳で元服し、吉法師あざなの字を三郎と改め、十四歳初陣して、十六で父信秀にわかれた上総かずさのすけ介信長の、人を人臭いとせぬ面つらだましいは、長ずるにつれて、いよいよ、傍若無人になるばかりだった。

父の葬儀の日、その式場においてさえ、こんなことがあった。

——御焼香。

となつた折、

席から立つた信長の姿を人々が見ると、長柄ながえの太刀脇差わきざしに、七五三しめなわ縄を巻いていた。袴はかまもはいていないのである。

「あれよ、また、きょうたい狂態な跡とり殿が、何の不法法」

と、あきれていると、信長はずかずか、仏前へすすんで、立居のまま、まつこう抹香をつかんで、みほとけ御仏へばらつと投げ懸けて、驚く人々をしり目にさっさと帰ってしまった。

「あきても、呆れたうつけ殿」

「こうまでとは思わなんだが」

情の薄い者はわらい、情の厚い者は織田家のために、眼に涙をたたえて、言葉もなく白け果てたということであつた。

「同じ兄弟でも、御舎弟の勘十郎殿は折り目正しゆう、ふしめ俯目に始終謹んでおいであるに」

と、なぜ跡取が、こうもあべこべに生れたものかと悔むささや囁きも

聞えたが、その時、末席にあつた筑紫つくしの客僧なにかしの某なにかしが、ひとりつぶや呟くようにいったことには、

「いやいや、彼あれこそは、行く末の国持つお人よ。おそろしいお方ではある」

沁しみ々みと、そう洩らしていたと傍にいた者が、後に家中へ語り伝えたが、誰ひとり、そうかと信じる者はなかつた。

また、十六歳の信長には、もう内ない室しつがきまつていた。父信秀が生前に、平手中なかつかさ務きむが肝煎きもいりして、ようやく成立した婚約であつた。

それは、美濃の斎藤道三どうさんの娘なのである。織田家とは多年、兵火に兵火をもつて、鎬しのぎをけずり合つて来た宿年の仇敵国であつ

だが、その齋藤家との婚約には、勿論、戦国のならいといつてもよい、政略の意味も多分にふくまれている結婚であつた。

が、先も名に負う道三秀龍という肚ぐるいのが舅殿しゅうとである。もとより織田家の政策であることをのみこんで、しかも四隣はおろか、京にまで近頃は名高い織田のうつけ息子殿に、最愛の娘をもくれるというのである。尾張八郡の将来を、その炯眼けいがんで見こしていた上の承諾であることはいうまでもない。

程なく、信秀は四十二を一期いちごに世を去つた。

信長のうつけ振り、粗暴、狂態は募るばかりだとある。それも思うつばだつた。

——そして、

今年天文二十二年の四月。

かずさのすけ

上総介信長はちようど二十歳。はたち

「いちど、むこ 賀どのの顔みたい。——双方より出向いて、とんだ 富田の国

境で、むじゆうと 賀舅の初対面と 遂げたいが」

道三秀龍が云い出した。

「承知」

と、信長の即答。

とんだ

富田ノ庄は、美濃尾張のあいだにある一向僧こうそうの坊主領ぼうずりようであ

った。戸数七百ほどの村落で、しょうとくじ 正徳寺という寺院がある。会見

はそこでときまり、四月の下旬、かずさのすけ 上総介信長はは 曠れの人数ひき を率

いて、なごや 那古屋の城を出、やがて木曾川、ひだがわ 飛驒川の渡舟わたし も打ち越え

て、青葉若葉につつまれた富田ノ庄へ押しすすんで行つた。

弓、鉄砲の者、約五百。三間柄の長い朱槍しゅやり約四百、徒士かちの郎

党、足輕組の者、およそ、三百人あまりと数えられた。

しゆくしゆく
肅々しゆくしゆくと流れて来る――

その中に、一団の騎馬隊は、騎馬の信長を囲んで前後に備え立て、いざといえ、そのまま戦隊になるような配備だった。

麦の穂は青い。もう夏めいた四月である。今、越えて来た飛騨川から、爽さわやかな風が、その長い行列の上を燦さん々と渡わたつてゆく。

富田ノ庄は、家々豊かだった。荒土ながら、穀倉こくそうのある家が多い。平和な真昼まがきの籬うに卵たまごの花がうなだれていた。

「来た」

「見えた」

村端れまで出ていた斎藤方の小侍が二人、遙かに行列の先頭を見るや否、どこかへ宙を飛んで行つた。

村を貫いている櫛並木けやきなみきに雀のさえずりが、長閑のどかだった。

その路傍の、小やかな一軒ささ——土民の家の前に、小侍二人は、ひざまずいて云つた。

「織田どののお列彼方あなたに見えました。やがてもう、これへさしかかるでございましょう」

民家の土間には、その薄ぐらい煤すすだらけな壁とは、余りにもふさわしくない、綺羅きららびやかな太刀、袴羽織はかまはおりの人々が、一群になつて、潜ひそんでいた。

「よし。——そち達も、はやく裏敷うらやぶへ身をかくせ」

道三秀龍の側衆たちである。——奥には——いや炉部屋ろべやの側の竹窓がある小さい部屋には、その道三秀龍が、窓べりに凭もたれて、往來のほうを見まもっているのだった。

初めて会う躰むしどの。

しかも、いろいろな風評ていの高い上総かずさ介信長。

「いったい、どんな態ていたらくで参るか、どんな男か、公式に對面する前に、ちよつと垣間かいまみたい」

という道三らしい考えから、路傍の民家にかくれて、先刻さつきから待ちぬいていたのだった。

土間、炉部屋ろべやの近臣たちが、

「大殿、尾張衆が、はや見えた由にござります」

早口に告げると、

「うむ」

道三は、うなず頷いたまま、さらに竹窓の端へ身を寄せて、じつと、

眼をすえていた。

表の土間戸は、いちはや逸早く閉めきつて、家臣たちは、わずかな隙

間、板戸のふし穴などへ、顔をつけていた。

皆……しいんと黙る。

並木の小鳥の声。

その小鳥の群れも、ぱつと羽音をのこして、飛び去ると、もう
そよかぜ微風の音もしなかった。水を打ったように、街道はひそまり返

る。

——と、程なく。

よく揃った兵隊の足なみが徐々に近づいて来た。磨きぬいた鉄砲の列、小隊四十名ぐらいずつ、十段に分列して、林のように流れて行く朱柄あかえの槍組などが、眼の前をゆく。

道三は、息もせず、その武器や、兵隊の足つきや、隊伍の組み方を、見入っていた。

だが、やがて続いて、その肅しゆくぜん然とした足なみの次に、馬蹄の音だの、大きな話声が乱れて来たので、

「さては」

と乗り出すように、道三は眼も放たずにいた。

見ると、騎馬隊の中に、一際優れた馬格の駒がさしかかった。見事な螺鈿鞍らでんくらに、華やかな口輪を噛ませ、紫に白を縋ない合わせた手綱を搔把かいとり、賀殿信長むこは、何か嬉々ききと、うしろの家臣を振り向いて、話しかけながら見えたのであつた。

「……ヤ？ あの態ていは」

道三秀龍は、喉のどのあたりで、そんな声をもらした。

ひどく驚いた眼いろだった。

行列の中に見えた信長の扮装いでたちが、彼の眼を奪つたのだ。いや、呆れさせたのである。

かねて、異様な姿で押し歩くとは聞いていたが——
今、見れば、聞きしに勝まさるものだった。

逞しい駿馬しゅんめの鞍くらに、ゆらと、乗りこなしよく据すわつて、茶筌ちやせん
 むすびの大將髪もえぎ、萌黄うちひもの打紐うちひもで巻きしめ、浴衣染帷子ゆかたぞめかたびら、片袖かたなわきざし
 をはずして着け、熨斗のしつき刀脇差かたなわきざしには例のごとく——何かの
 禁厭まじないのように——七五三繩しめなわを廻まわしている。

その刀腰にはまた、火打袋こひようたんだの、小瓢箪こひょうたんだの、印籠いんろうだの、
 紐付扇子ひもつきせんすだの、馬の一刀彫ぼりの根ね々ぼり《ねじめ》だの、珠たまだの何なにだ
 の——七、八種はちしゆのものをくくりつけて、虎この皮かわと豹ひょうの皮かわとを縫ぬいい
 あわせた半袴はんぼかまの下したには、何なにやら金欄きんらんの衣裳いさうがきらきらと見
 え、

「大介工だいすけ、大介工だいすけ」

鞍くらのまま、身をねじつて振り向むかいていう。

「ここか。富田とんだノ庄とやらは、はやこの村かッ」

それは、民家の窓の中に、身を潜ひそめている、道三秀龍の耳をも、突き抜いてゆくほど、大きな声だった。

騎馬隊の中に、護衛している市川大介が乗りよせて、

「されば、ここが富田ノ庄にござりますしゅうと。舅君の道三様と御会見の場所、正徳寺もすぐそこでござりますれば、何かにつけお行儀ようなされませ」

「ははあ、そうか。ここがもう富田か。——本願寺の坊官どもが領分とやら、穏やかだのう。ここには戦争がないな」

そんな言葉が聞えた。

黙ると、信長は、櫓けやきの並木を仰向いて、青空をよぎった鷹の影

でも見送ったのか——ゆらゆらと鳴る腰の太刀や、七つ道具を響かせて、すぐ通り過ぎてしまった。

表戸を閉たてて、隙見すきみしていた道三の側衆たちは、思わず、

「ぷッ……」

「うふ、ふ、ふ」

口を抑えて、おかしさを咏こらえるのに、苦しがつていた。

「皆よ」

道三は、呼び立てて、

「もはや行列は皆、過ぎたか」

「終わりました」

「見たか。聳どどのを」

「よそながら」

「どう見ても、世評を裏切らぬうつけ者、容貌きりようはよし、骨柄こつがらも一ひと通りとおじゃが、すこし足らぬ。……ここが」

と、道三は、自分の頭を、指でついて、満足そうに苦笑した。

と、裏口で、

「大殿、お早く」

と、ほかの家来たちが、急せきたてて云った。

道三はすぐ起つて、

「おおさ、気けどられては、信長はともあれ、眼はしの鋭い他の家来に気まずいものになる。先を越えて、正徳寺へ参っておらねばなるまい」

どやどやと、側衆に囲まれて、その裏口から出ると、抜け道を急いで走り、行列の先頭が、正徳寺の門前で停った頃、彼は寺の裏門から奥へ駈けこんで、取り澄していた。

「——お出迎え」

「お出迎えを」

側衆たちも、あわただしく、衣裳を着かえ、廻廊や間ごと間ごとを、云い触れる声に応えて、大玄関へ出て行つた。

尾張衆の多人数が着いた。

寺門は、人に満ちた。

お出迎えに——と美濃衆はみな立ち払つたので、本堂、大書院、客殿は風の通るだけで、人影もなかった。

「大殿には」

斎藤家の老臣、春日丹後かすがたんごは、まだ起たぬ道三に向つて、そつと意向を訊いた。

道三は、首を振つて、

「起つに及ばぬ」

と、いった。

客は聶むこ、自身しゆうとは舅しゆうと。それでいいとすればよかろうが、きようは初対面の儀式である。

聶の信長も、一国あるじの主。故に、対等の礼を執つて、美濃と尾張の国境にあるこの本願寺領の中立地帯まで、双方から出向いて来たのであるから、舅とはいえ、出迎えの礼は執らねばならないの

ではないか。

そう丹後は考えたので、一応きいてみたのであるが、

——それには及ばん。

と、道三がいうので、

「はッ。……では、てまえだけでも」

「いや、その儀には及ばぬ。堀田道空ほったどうくうが出ておればよい」

「左様にござりましょうか」

「丹後、そちは、対面の席に居並んでおれ。——また、そこへ行
くまでの廊下に、武者ども、七百余名、残らず威儀を作つて並べ
ておけ」

「すでに、着坐いたしております」

「武者かくしには、猛者どもをひそめ、聳殿が通つたら、わぎと咳せきばらいさせい、庭前には、弓鉄砲の兵、肅しゆくとして立たせ、そのほか息づまるまで、威圧を」

「仰せまでもなく、美濃衆の御威勢を示し、聳どのを始め、尾張衆の胆きもを、気をもつて挫ひしぎおくこと、今日よりよい機おりはないと致して——御家中の者どもみな、腹ふくらませて待ちうけてござりますれば」

「ウム。……」

道三は、大玄関の方の気配をふり顧つて、

「思うていた以上、たわけな聳どの。何につけ張合いもない、馳走の膳部ぜんぶ、対応の礼など、まずまず、好い程でよかろうぞ。……

どれ、わしも客殿で待とうか」

道三は、欠伸あくびでもしたいように——軽い伸びをしながら起つて行つた。

春日丹後かすがは、主命のあるところを、もつと徹底せしめるべく、廻廊へ出て、武士たちの威儀あつたを検め、また、下役をよんで、何やら耳打ちなどしていた。

すでに。

大玄関のほうでは、その頃、信長が式台を踏んでいた。

ここにも、斎藤家の家中、老臣から目見めみえ得格かくの若侍まで、百名以上、所せましと、平伏して出迎えていた。

「どこじや。休息の席は！」

水を打ったように、ひそまり返っている出迎えの中で、ふいに、足を止めた信長が、無遠慮な声で云ったので、

「はッ——」

と、上目越しの顔が、一斉せいにうごいた。

つつつと寄り添った斎藤家の家老堀田道空どうくうが、信長の足もとに平伏したまま。

「こちらで、何はともあれ、暫時の御休息を——」

指さして、

「彼方むこうか」

「はッ、御案内申しあげます。——御免を」

かがかが腰こしに。
屈み腰に。

信長の先に立ち、大玄関から右へ進み、橋廊下を渡る。

信長は、右を見、左を見、

「よい寺じやなあ。見よ、藤の花が真盛りじや。——風が香う」
おうぎ

扇を胸にうごかしながら、自身の近侍たちと共に、一室へはいった。

休息の時間は約半刻ほどで、やがて信長は屏風の内から起つた。

「御案内たのむ。舅殿にお目見得いたそう。山城どのには、いずれに在すかや」
おわ

見ると、

茶筌髪は、折鬘に結び代えている。豹、虎の革の半袴

ちやせん

おりまげ

ゆ

か

ひよう

こ

はんばかま

は捨てて、正式の折目袴に、白綾しろあやの小袖、金糸の縫紋ぬいもん、そして濃い紫地に桐もようかみしもの袴を着け、帯びた小さき刀も、提げた太刀も、華奢きやしやな風雅男みやびおのすがただった。

「……あッ」

「お……」

と、斎藤方の家臣も目をみはり、日頃の道化どうけた身装みなりの彼ばかり見つけている、織田の家中也、びつくりした。信長は、ただ一人、ずかずかと大股に、橋廊下を踏み渡って、

「案内の者！」

と、前後を見、

「近侍たちを連れ纏まとうては寛くつろぎがならぬ。信長ひとりにて、舅殿

へお目にかかろうぞ」

そこでまた、声を高うして云つた。最前、出迎えに出た、家老の堀田道空は、信長が自分を眼にも入れていない様子に、むつと
して、

「こなたへ、お早うお出いでられ候え」

と、少し子供扱いにして、それへ来合わせた春日丹後かすがたんごと共に眼くばせして、

「これは——」

と、本堂の両側に、ぴたと座を構え、わざと厳いかめしく、

「斎藤山城守が家老職、堀田道空ほったどうくうにて候。お見知りおかれませ」

「てまえは、老職春日丹後かすが。——御遠路、つつがなくお渡り遊ば

し、折ふし、日もうららかにきよ^うの御対顔、祝着にぞんじ上げ奉りまする」

左右から、こう色代しきたいしているまに、信長は、拭き磨いてある廻廊を、つつつと足を早め、

「ふム。……よう彫つてある」

欄間らんまの彫刻へ、顔を上げ、そこらの武士——斎藤山城守道三が手飼の者ばかり数百名、ずらりと居並んでいる前を路傍の草ほどにも眼をくれず、真つ直ぐに通つて行つた。

そして、客殿の前まで来ると、尾ついて来た道空、丹後の二家老を、後しりえに見、

「ここか」

「御意にござります」

「うむ」

うなず

頷いて、ずかと、廻廊の板いたづら面から、一段高い畳のうえに踏み上がる、落着き払って、設けの席に坐り、そのまま縁の中柱へ、ゆつたりと背を凭もたせかけていた。

すこし、顔を上げ気味に。

ごうてんじょう

格天井の絵でもながめているかのような風である。その眼のすずやかさ。眉目の優しさ。

室町の京公きょうきん達だちでも、こう整ととのった姿と面おもざしは少なからう。

——しかし、それにばかり見み惚とれていた者は、天井を見ている彼のひとみの、不敵なものを見みの遁がしていた。

——と、その客殿の隅に、立てまわしてある屏風のうしろに、人の気はいがした。山城守入道道三は、その蔭から立つて、信長の上座に、鷹揚おうように着席した。

「……………」

信長は、そ知らぬ風情をしていた。——というよりは、うつつに、扇おうぎを袴はかまの前あてで弄あそびながら、そら嘯うそぶいていたといったほうが近い。

「……………」

じろと、道三は、横に見た。

舅おやぢからものいう法はない。そう自己おのれを持もちて黙もつていたらしい。一瞬、妙な空気くわいになった。道三の眉まゆに、険けわしい針はりが立った。――

—堪りかねた家老の堀田道空は、信長の側へすり寄つて、かしら頭を畳へすりつけながら、

「それおわに在すお方こそ、山城守道三様にござりまする。——ごあいさつを」

いと信長は、

「むう。左様にてあるか」

と、初めて、柱から背を離して、坐り直した。

一礼して、

「これは、初めて御対面つかまつる。織田かづさのすけ上総介信長にてござる。お見知りおきください」

彼から、改めて、こう挨拶すると、道三も気色を柔らげて、

「わしが山城じゃ。かねがね、一度はお会いせいではなるまいと存じおつたところ、今日、宿望を果して祝しゅうちやく着」

「信長も、近頃うれしいことの一つです。まずまず、舅殿には、老いて益、御健勝に渡らせられ、何よりでござる」

「なに、老いてとな。山城もはや、ことし六十を迎えたが、まだ、老いた気はせぬ。お許ことらはちようど、卵の殻を出たばかりの雛ひなどり鳥よ。はははは、男ざかりは、六十越えてじゃ」

「頼もしい舅殿を持ち、信長は仕合わせ者でござる」

「そうか。何せい吉よい日ひではある。道三もたんと生きよう。次の会う日には、孫の顔など見せなされ」

「心得てござる」

「気のさくい聾どのよ。——丹後」

「はッ」

「膳部ぜんぶのしたくを。——お湯漬でも」

眼で——道三は何か、丹後に意をのみこませた。

「心得てござります。……ただ今」

と、春日丹後は、座をすべつて行つた。

はてな？

彼は、道三の眼じらせが、何を意味したのか、ちよつと肚を酌くみかねていたが、最初の気まずい主君の顔が、途中から晴々して、むしろ信長の機嫌をとる態度に変わっていたので、さては、一度粗末でかまわぬと吩咐いいつけた膳部を鄭てい重ちゆうにせいと、云い直したの

であろうと、その通り心を配って出してみると、道三は満足の様子に見えたので、心のうちでほつとしていた。

しゅうと 舅の道三と、しゅうと 舅の信長と。

ふたりの間に さかづきごと 杯事があつて、はなしはなお、気が楽になつてきた。

「そうそう」

信長は、思い出したように、突然云いだした。

「山城どの。いや舅どの。時にきようは、これへ参る途中、めづら 珍かな者に出会うてござる」

「ほ。どのような？」

「されば、舅殿と瓜うりふた 二つの老いぼれが、民家の破れ窓やまどより、信

長が行列を、覗き見しておった。——初対面の舅殿なれど、初のぎよけん御見とは思えぬほど、はてさて、最前の老いぼれはよう似かようてござった」

ははははと、その唇を、信長は半開きの扇子で隠した。

道三は、苦汗くじゆうをなめたように、黙ってしまった。堀田道空も、春日丹後も、肌着に汗をにじませていた。

湯漬を喰べ終ると、

「いや、長坐長坐、陽の入りまでには、飛驒川ひだがわ越えて、こよいの宿舎まで退りさがとうござる。——どれ、お暇を」

「帰らるるか」

道三は、一緒に立って、

「聳どのの歸館とある、名残惜しい、そこまで、見送り申そうず」
彼もまた、その日のうち、美濃の城地へ、歸るのだった。

三間柄さんげんえの朱槍の林は、夕陽を背にして、東へと勢揃いして歸った。美濃衆の槍隊は、それに比して、みな短く、何となく氣勢も昂あがらなかつた。

「ああ、長生きもしようない。——今に見よ。この道三が子らも、あのたわけ殿の門前に、駒を繋いで、生を乞う日がやがて来よう。ぜひもない……ぜひもない儀だ」

その途中、道三秀龍は、駕籠かごのなかで口惜しげに、はらはらと落涙しながら、近侍の者にいったということであつた。

出仕

どうん。どうん——

武者太鼓が鳴る。法螺ほらの音ねが曠野こうやをわたる。

しぶきを上げて、庄内川に泳いでいた者、または野を駈けていた騎馬の者や、竹槍調練をしていた歩卒など、

「御帰城だ」

「引揚げ——」

と、一斉に、河原の仮屋を中心に馳せ集まって、またたく間に、三列四列、横隊になった軍馬が肅しゆくとして、主君のすがたが鞍に乗るのを待っていた。

半刻はんとぎの余も、泳いでは河原に上がって、太陽に肌を焦やき、また、川へ躍り入っては、河童かっぱのように、存分水と戯たわむれていた信長は、

「帰ろう」

云い出すと、飯屋のなかへ駈け込んで、白の水着腹巻を捨て、肌のしずくを拭くがはやいか、すぐ下着、狩衣かりぎぬを着込み、小具足つけて、

「駒を、駒を」

と、その気短いいつけな吩咐は、彼の側を追いまわすように従ついて歩いている近習たちに、いつも泡を吹かせるのだった。

何につけ、信長の手早いことと、性急なものには、日常心得ぬい

ている近習たちではあつたが、それでも面喰らうことがしばしばだったし、また、青年らしい壮気と茶気の満々なこの若い主君は、それを知つてわざと不意を衝くようにも思われた。

けれど市川大介は、さすがに兵法者であつた。信長がどう虚を衝いても、大介が命令一下に、貝が吹かれ太鼓が鳴ると、どんなに乱れていた兵も馬も、青田の早苗さなえのように、揃つて並んだ。

短気はいうが、信長の機嫌は、顔にあらわれ、満足そうであつた。

——きようも。

すでに朝から二ふたと刻ときほども、烈しい教練をやつたので、信長は、なごや那古屋の城へ人数を向け、自身もその中の一騎となつて、しょうな庄内

川いがわの河原から引き揚げて来た。

ちようど、土用の太陽は、曠野こうやの真上にあつて、火車のように灼やけていた。水に濡れたままの兵や駒は、縦隊を作つて蜿うねつて来た。キチキチキチ……と青い蝨ぼったが信長の姿に飛び交う。むうつと暑い草いきれが面を撫なであげる。

水に浸ひたつて、鳥肌になつていた顔には、もう汗のすじが流れ出す。信長は時折、馬上で顔の汗を肱ひじで横にこすつた。もうそろそろ常の特色が出て、粗暴で不良性で、うつけといわれる挙動が、眼づかいにも、することにも、及んで来た。

「あれツ。何だろ。——待て待て、異いな奴が、駈かけて来るぞ」
突然。

信長がそういつて、列を振り向いた時、それより早く、何事かに気づいた後方の武者たちが、列を脱^ぬけて、五、六名、ばらばらツと背よりも高い草むらの中へ、駈^かけこんでいたのである。

そこに、隠^{かく}れていた者がある。

それは今朝からこの附近へ立ち廻^{まわ}つて、信長へ近づ^かく機会を半日も待ち構^{くま}えていた日吉^{ひよし}であつた。

さつき、密^{ひそ}かに信長の姿を川に見て、折もあらばと、うろついているうち警固^{けいこ}の足輕に見つかつて、脅^{おど}されたので、帰城の道すじを考えて、道^{みち}の辺^べの深い草むらの中に潜^{もぐ}りこんでいたのだつた。
(今だツ！)

と、彼は心^{こころ}に奮^{ふる}い立つと、その意志の前には、何もかも見えな

かつた。

ただ馬上の青年信長のすがたが、彼のらんらんたる眸ひとみのうちに、大きくいっばいに在っただけであつた。

——その時。

日吉は大声で、何か叫んだ。

が、何をさげんだか、自分でもわからなかつた。

いのち
生命がけである。

信長の耳へ、その声も届かず、近づきも得ないうちに、警固の者あかえの朱柄の長槍で、突き殺されるかもしれないのである。

それを怖れては、出来ないことなのだ。彼にとってはこの一瞬が、生涯うしおの潮へ乗るかそ反るかであつた。

草むらから身を起すと、信長の姿を目がけ、眼をつぶって、駈け出しながら、

「望みある者でございます。お召仕めしつかいくださいましッ。——主と仰ぎ奉って、身命なげうを抛って、働きたい望みある者でございますッ！」

自分では、

駈けつつ、それだけの言葉を、大声で訴えたつもりではあるが、非常な昂奮をしていたし、とたんに、予測していた警固の士が行列を出て、自分と信長のあいだへ、槍を把とつて遮さえぎつて来たので、気は上ずり、声は割れて、人には何と聞えたか、恐らく、意味をなしてはいなかったらうと思われる。

それになお——

彼の風体は、ただの土民より惨め^{みじ}だった。髪はよごれ、埃^{ほこり}や草の实^みがたかっていた。顔は汗のすじを描いて、黒く赤く、眼ばかりが、飛びつくように、信長のほうを見て駈けて来たのである。

「こらッ、何処へ」

「無礼者ッ、突き殺すぞ」

日吉の眼には、遮^{さへぎ}る槍^えも見えなかった。

が——槍の柄^えで、向う脛^{すね}を払われたので、信長の馬前から十歩ほどてまえで、一度、もんどり打って倒れた。

しかもまた、刎^はね起きて、

「——望みあんなる！ 望みあんなる！ わが君ッ。わが君ッ！」

喚きつつ、槍のあいだを駈け、信長の駒の鎧へ、つかまろうとした。

「穢い奴めツ」

信長が、一喝した時、日吉のうしろから追いつがった士の一
人が、襟がみを把つて、彼の体を、大地へ抛りつけた。

それへ向つて、

「こいつ！」

と、槍が走ろうとした時、

「突くな」

信長がいった。

見も知らぬ——そして穢い姿をした異様な小男が——自分へ向

つて、家来でもないくせに、わが君、わが君、と嘯鳴りながら駈けよつて来たのが、ふと信長の眼を注意させたのであつた。

いや、もつと大きな理由は、日吉の満身に燃えていた、希望の焰ほのおが、信長をして、思わず、

——待て！

と、止めさせた最大な力であつたかも知れない。

「問うてやれ、何か、いわしてみい」

信長の声が、耳にはいると、日吉は体の痛みも、近侍たちの眼も、ほとんど覚えなく、その人の姿だけを仰いで、懸命にいった。

「——父は元、御先代のお館やかた、信秀のぶひで様の足輕組に仕えおりました、木下弥右衛門きのしたやえもんと申すもの。てまえは、弥右衛門の子日吉ひよしとい

い、父の亡ない後、中村で母と共に暮して来ました。年頃、ふたび御奉公の折もがなと、伝手つてを求めておりましたが、所詮しよせん、御直訴じきそのほかはないと、死ぬる気で参りました。——すでにここで突き殺されて死ぬる気でございましたから、後々、御奉公には、生命いのち惜しみはしまいと、自分でも思われます。どうぞ、私の生命ひとつ、拾い取って、お召めしつか仕かい下さるなら、草葉の蔭の父も、御領下に生れた私も、共に本望にぞんじまする」

早口だった。半ばは夢中だった。けれど日吉が、

(この君ならでは)

と、見込んで、生命を賭して訴えただけの情熱は信長の心へ、十分に届いた。信長はむしろ、日吉の言葉以上に、日吉の真実を

買った。

しかし、苦笑して、

「怪態けたいなやつよのう」

と近侍を顧みながら云い、そして、馬上から、

「我に、仕えたいというか」

「はい」

「して、汝は、何の能のうやある」

「何の能もございませぬ」

「何の能もなく、主取りして、何をいたそうと思うか」

「事ある時、死なんと思ふのほか、べつによき能も持ちませぬ」

信長は、すこし気に入ったらしく、口ばたに、笑くぼを作った。

——それからなお、じつと、見直して、

「よしッ。——したが其方そちはただ今、我を目がけて、わが君と、再度まで呼ばわつたが、信長はそちを、家来とゆるしたことはない。そちもまた、召仕われぬ身で、何故、我をわが君と呼ばわつたのか」

「御領土の下に生れ、日頃からまた、仕えるなら彼の御方おかたと、胸に思い込んでおりましたため、つい、口にも出たものと思われま
す」

信長は大きく領うなずいた。そして、市川大介を顧みて、

「大介」

「はあ」

「おもしろいぞ、この男」

「いかさま」

大介も苦笑した。

「望みにまかせ、拾うてくれよう。日吉とやら、きょうより出仕
せい」

「……………」

日吉は、声がつまって、咄嗟とつさにその欣よろこびを、口に出せなかつた。
行列の武者たちは、

「また、わが殿の、物好きいな」

と、驚いた顔したが、その中へ日吉がのこのこはいつて来たの
で、

「おい、もつと、列の後の方に従^つけ。荷駄の尻^しつ尾^ぼへついて来い、荷駄の尻^しつ尾^ぼへ」

と、眉をひそめた。

「はい、はい」

唯^い々として、日吉は、行列の最後方に尾^ついて歩いた。それすら彼は夢心地になるほど欣^{うれ}しかった。

信長の行列がかかると、那古屋の町々は、掃^はいたように、往来が開かれ、廂^{ひさし}の下や辻には、人間の頭がたくさん土下座していた。日吉は、初めて、そういう往来の真ん中を歩いた。そして行列の前方に、遠く主人の背なかを見ながら、

(この道だ。この道だった)

と、思った。長いあいだ探^{さが}しあぐねた本道へ、今ようやく、出て来たという心地である。

だが、その主人は、武者を率^{ひき}いて、町を歩くにも、傍若無人だった。少しも取り澄してはいないのだ。家来たちと、話はするし、笑うし、喉^{かわ}が渴いたといつては、瓜など齧^{かじ}つて、馬上から、瓜の種を、吐きちらして歩いた。

那古屋城が、前に迫った。

濠^{ほり}の水は青く沸いていた。

唐橋を渡つて、行列は城門へ蜿^{うね}蜒^{うね}と隠れて行く。——日吉は、生れて初めての、橋を越え、門を潜^{くぐ}った。

秋の頃だった。

刈入れに忙しい人々を田の面に見ながら、てくてくと中村へ急いでゆく小背丈な若侍があつた。

「おつ母さんツ」

若侍は、筑阿弥ちくあみの家の前まで来ると、恐ろしく大きな声で訪れた。

「まあ！ 日吉ツ……」

彼の母はその後、また、子を生んでいた。干し拵あずきげている小豆の中で、子を抱いて、弱々しい皮膚を陽なたに曝さらしていたが、

「おお？」

振り顧かえつて、変つたわが子の姿を、突然そこに見ると、悲しい

のか欣しいのか、彼女の顔に、一瞬、つよい感情がつきぬけて、眼は涙にくもり、顔じゅうの筋はびくびくふるえた。

「わしじや！ おつ母さんツ。……みんな達者でか」

飛びつくように、母の蕙へ——その乳の香のする懐ふところのそばへ、

日吉が坐りこむと、母は片手の乳のみ児と同じように、日吉をも抱きよせて、

「どうしやった。どうしやったぞ？ ……」

「どうもしません。きようは、一日お暇いとまが出たので、お城へ御奉公に上がってから、初めて外へ出たのです」

「あ……そうか。……それで安心しました。突然来やったので、何ぞまた、不首尾でもでかして、お城を追われて来たのではない

かと、わしは、胸がどきツとして……これこのように冷汗をかい
てしもうたがの」

ほつと、安心したのであろう。彼女は初めて、笑顔を見せた。
そして沁しみしみ々、わが児の成長をながめ、また、垢あかのついていな
い小袖や、髪かみの結びぶりや、刀、脇差などを見て、ほろほろと涙
をながした。

「欣んで下さい、母上。やっと私も、信長公の御家臣の端はしに加え
られ、この通り、まだ御小人組おこびとぐみの端ではありますが、どうにか侍
奉公する身にはなりました」

「ようなあ。……ようまあしやつたなあ」

襷つづれ褌はかまた袖口をあてたまま、彼女は顔を上げ得なかつた。

その背を、今度は日吉が抱えてやりながら、

「きようは、母上に欣んで戴こうと思つて、朝から髪も結い、小袖も新しいのを着て来ました。……けれど、まだまだ、これからです。私が御奉公を見せるのも、ほんとに、欣んでもらうのも、

——おつ母さん、どうか、長生きして下さいよ」

「この夏の頃、そなたが、庄内川の河原で、御領主様へ向つて思いきったことしやつたと聞いた時……わしはもう、そなたの生命いのちはないものと、泣き明していたものを……こんな嬉しい目に会おうとは」

「その後、委細は、乙おとわか若わかどのから、言伝ことづてがあつたでしょう」

「おお、乙若わかどのが来て、そなたが御領主様のお心にかない、御

小人衆に抱えられたと聞かされて——もうそれを聞いてやれうれしや、死んでもよいと思いました」

「はははは。これしきのことで、そんなにお欣賞なされては、これから先、どうしますか。——まず第一に、お聞かせしたいのは、御主君信長様から名みょうじ氏じを名乗ることをゆるされました」

「ほ。なんと? ……」

「姓は以前の木きの下した。名は藤とう吉きち郎ろうと改めました」

「木下藤吉郎といやるか」

「そうです。よい名でしょう。もうしばらくは、この茅あはら屋やと檻つ襖づれの御辛抱をねがいますが、母上も、もつとお心を、確しかと大きく持ってください。——木下藤吉郎の母であるぞと」

「うれしい。こんなうれしいことはない」

母は、そればかり繰り返して、藤吉郎のいう一言ことごとに、すぐ涙してしまふのだつた。

(こんなにも、欣んでくれる人がある！)

藤吉郎は、それを大きな幸福に思った。世の中に誰あつて、こんなに真実に、些ささい細なことをも、大きく欣んでくれる者が、この母を措おいてどこにあらうか。

三年、五年の漂さすらい泊も、その間の飢うえや艱難も、むしろこの一ひと瞬とどきの幸福を大きくするために越えて来たものようであつた。

「時に、姉上は、どうしましたか。姉上の姿が見えませんが」「おつみか。おつみは、よそへ刈入れの手伝いに行っている」

「丈夫ですか。元気ですか」

「変りはないが、あれものう……」

と、ふと母は等しい愛を、おつみの傷ましい青春へ思いやった。

「帰って来たら、そういつて下さい。姉上にも、長いご苦労はか

けません。今に、この藤吉郎が一かどになったら、繻珍の帯、

金紋の箆筒、嫁入りに不足はさせぬと。……はははは、相かわら

ず、私のいうことは、とりとめないと、母上もお思いでしょうな」

「もう帰るのかや」

「お城仕えは、いちだんと厳しゆうございます。……それにな、

母上」

と、藤吉郎は、声をひそめて、

「おうわさ申しては、勿体ないですが、一国一城の御主君という身も、お側近くに仕えてみると、なかなか下^{しも}々の思うているようなものではありません。世間から見ている信長公と、那古屋城^{なごや}の中の信長公とは、たいへんな相違ですよ」

「そうであろうな」

「お可哀そうなくらいです。ほんとのお味方という者は幾人もありません。譜代^{ふだい}の家来も一族も肉親までが、あらかた敵です。その中にいらっしやる信長公は、まだ二十歳^{はたち}の孤君です。——百姓の喰えない苦しみが、一番辛いものだと思つたら、どうしてどうして、そんなものではありません」

「勿体ないのう。……まだわし達は」

「そう思えば、御辛抱もできましょう。が、人間と生れたからには、それでいいものではありません。幸福しあわせの道を切り拓ひらいてゆきます。信長公も——それから藤吉郎も行く末には」

「その気持はうれしいが、余り、功てがらに逸はやつておくれでない。たとえそなたが、どれほど出世しようと、わしの欣びは、これ以上はない」

「では、御機嫌よう」

「もちつと、話して行かれぬのか」

「御奉公が大事ですから」

彼は黙つて、母の庭むしろへ、なにがしかの金を残して立つた。そして頻りと、懐かしそうに、そこらの柿の木や、籬まがきの菊や、裏の物

置小屋などを、何度も見まわして帰って行つた。

その年は、それきり来なかつたが、年の暮には、足輕組の乙若が来て、

「藤吉郎から頼まれたが」

と、一反の織物と、金子きんすと、母の薬とを入れた包を届けて来た。

その折、乙若の話には、

「今は、御小人組おこびとぐみの端だが、二十歳にでもなれば、もちつと、お扶持ふちも増されようし、御城下のお長屋にでも住むようになったら、母上を側へ呼ぶのだといっている。あの息子も、ずいぶん突拍子もないところもあるが、割合に人づきあいはよいとみえ、朋輩たちにも、そう嫌がられてはいないようだ。……何しろ、庄内川で

あんな無茶をしたにしては、生命いのちびろいをしたようなものさ。運のいい男だよ」

と、藤吉郎の近状を、そんな程度に伝えて帰った。

おつみは、その初春はる、初めて垢あかのつかない小袖を着たので、

「弟が送ってくれました。……お城にいる藤吉郎が」

と、どこへ行っても、弟が弟がと、口に出さずにいられなかつた。

じゃじゃ馬

どうかすると信長は、無口になって、終日鬱ふさぎこんでいる日が

あつた。非常な癩癬かんぺきを抑えるためにはまた、非常な無口と憂鬱ゆううつの現象が、自然起るのかも知れない。

そんな時である。

「卯月うづきを出せ。卯月を」

いきなり呼ばわつて、城外の馬場へ駈け出して行つたりした。

先殿様の信秀時代には、一年のうち半年以上も、たえず西に攻め東に護り、一生戦争に暮していて、居城のうちに落着いていられる暇もほとんどなかつたくらいだが、そんな中でも、およそ朝は祖先の礼拝、近侍の受礼、講書や武道の稽古、それから夕刻まで領内の政務を見、また晩には、軍書に親しむとか、評議とか、寸暇くつろを寛いで家庭の良い父になつて興じるとか——一定の規律が

あつたものだが、信長の代になつては、そういう定規じょうぎはなくなつてしまつた。

というよりも、信長自身の性格が、そういう定規にあてはまらないのである。

(やろう！)

と思ひ立つことも、

(止めよう)

とする意思も、彼の心のなかでは、常に、夕立雲の如く、唐突に去つて、唐突に起つてゆくので、彼自身さえ、自身を規律で制していることができないらしかつた。

あわてるのは近侍であつた。

きようは珍しく、書物に親しんでおられる——きようはまた可憐らしく、亡き御先代のために、お仏間にお坐りになった——。などと油断していると、雷の子のように、

「卯月うづきツ。卯月を曳ひけツ」

と、声がする。

声がした時にはもう、そこにはいないにきまつていた。時を嫌わぬこの殿の行動に、近侍たちはあわをくつて、厩うまやへ駈け、馬場へ追いかけて、それでも、

(何を愚図愚図している)

と、いわぬばかりな顔をしている主人の前へ、ようやく駒を曳いて行くのだった。

卯月というのは、彼が乗り馴れた白い愛馬だった。しかしこの馬もやや老境に入つて、^{さか}旺んな信長が乗り叩くには、彼も物足らなかつたし、馬も物憂^{ものう}くなつていた。

「……ち。ち。ちッ」

信長は、口輪を持つて曳きまわしていたが、

「重いのう。水を飼え」

と命じた。

「はッ」

馬柄杓^{ばびしやく}を把^とつて、ひとり^{ひとり}は馬の口を開け、がくと水をぶつかけた。

信長は、馬の口へ手^てを突つこんで、馬の舌をつかんだ。

「卯月^{うづき}め、きようは悪い舌をしておるな。これでは脚の重いはず

じや」

「風邪^{かぜ}ぎみのようでございます」

「卯月も、老いて来たか」

「大殿のおかたみでございますから、はや馬齢もだいぶ」

「馬齢か。なるほど、那古屋の城には、卯月ばかりか、馬齢のみ取ってゆく老い^おぼれども何と多いことじや。いったいに今の時勢が馬齢の世の末じや。十幾代にわたる室町將軍家を始め、規律づくめ、儀礼づくめ、嘘づくめ。腐っている。老ぼれておる！」

誰にいうのでもない。天へ怒るように独り語に云い、そしてぱつと、鞍へあがって、袴^{はかま}を割ると、

「風邪ひき馬を、ひと鞭^{むち}、汗とりしてくれよう」

と、馬場を駈け始めた。

騎馬の上手は、天稟^{てんぴん}だった。市川大介が師範であったが、頃は独り乗りこなして、むしろ大介を後^{しりえ}に見ていた。

若い元気いっぱいな信長にたたかれると、卯月はやがて、汗にぬれて来た。——と、彼の駒を、恐ろしい脚速で、鮮やかに追いついて行つた一頭の黒鹿毛^{くろかげ}があつた。

不意に、自分の駒へ、後塵を浴びせて追いついて行つた黒鹿毛を見ると、信長は、

「あッ、五郎左め！」

と、躍起になり、

「小癩こしやくな鹿毛」

と、競つて行つた。

五郎左という若侍は老臣の平手ひらてなかつかさ中務の子で、城内では鉄砲頭を勤め、優れた士すぐさむらいのひとりだった。

先代信秀が、信長のために、傅役もりやくとしておいた老臣の平手ひらてなかつかさ中務には、三人の男子があつた。惣領そうりょうが五郎左衛門、次男が監物んもつ、三男を甚左衛門といつた。

信長の気性が、その時、無意識に駆りたてられていた。

追い抜かれる——

ひとに遅れをとる——

後塵を浴びる——

おくびにも、そういったことは、そのままではゆるされない彼の気性だった。

びゅツ、びゅツ。ふた鞭^{むち}ほど、彼は、烈しい鞭を自分の駒の卯月に加えた。

もう老いかけてはいても、卯月も名馬である。

大地は、蹄^{ひづめ}に鳴り、卯月の蹄が、大地を蹴るのが見えないほど、^{はや}迅い脚で駈け出した。

卯月の銀毛のような尾が、真ツ直ぐに風を曳いて、五郎左衛門の鹿毛^{かげ}のそばを、勢いよく駈け抜けて、前へ出たので、五郎左は、「殿、殿、お馬の蹄^{ひづめ}が割れますぞ」

と、注意した。

すると信長は、

「五郎左、もう続けぬのか」

と、すこし擲揄やゆしていった。

五郎左もまだ二十四、五の若気であり、主人に上手のいえない士さむらいだった。心外な、という顔して、

「何の！」

と、ばかり追い込むと、信長も負けない気になって、駒の鎧あぶみをたたきに叩いた。

卯月は、織田の卯月と、敵国にまで聞えた名馬であり、値あたにしても、その馬格からしても、五郎左の飼あい使いっている鹿毛などは、本来、比較になる馬ではなかった。

けれど鹿毛は若く、鹿毛の乗人のりてはまた、平常、信長のように、主君扱おごいされて、驕おごっている者とはちがう。なお、馬に騎のる修行も鍛練も、ずっと違う。

五郎左は、前を駈ける信長の卯月をめがけて、遮しや二無二、迫せまつて行つた。

二十間ほども越された距離の差が、十馬身ぐらいつまり、五馬身となり、一馬身となり、鼻ぐらいな差になって来た。

先人を越すは易やすく

後人に越されざるは難し

という古語のとおりに、それを越されまいとする信長は、息がきれて来た。

そして、その息を——一息抜くまに、五郎左衛門の駒は、鮮やかに彼を追い越し、ぱつと、砂塵を後に浴びせて、なお、馬場を半廻りも先まで、馬の余勢なりで跳んで行つた。

「ちいッ」

と、舌打ちしながら、信長は鞍をすてて、地上へとび降りていた。自分の本質をむき出して、しかも鬪い破れた苦しい気持から、その面は、喘いでいる馬よりも、悲痛だった。

「ウウム。良い脚だ。あの鹿毛は……」

信長は、自分の敗因が、ただ鹿毛の脚にあるものと思つて、独り唸っていた。

鹿毛と卯月とが、烈しい脚を競合つて駈けたのを、遠くから眺

めていた家臣たちは、やがて敗れた信長が、途中で駒から降りてしまったのを見ると、

「やつ、五郎左に抜かれて、御気色ごきしよくを損じたに違いないぞ」

と、後の不機嫌を案じながら、あわてて此方こつちへ駈け集まって来た。——と、誰よりも早く、信長に近づいて、茫然としている信長の前へ、

「お水を。……お水を一口」

と、ひざまずいて、塗柄杓ぬりびしやくをさし出した小者があつた。

それは先頃、御小人組の中から選ばれて、信長の草履ぞうりをつかむ小者にまで昇格した藤吉郎であつた。

草履取といつても、数多い御小人組のうちから、主君の足もと

まで、身近く出られる身になったことは、破格な立身で、わずかな月日に、そこまで来た藤吉郎は、身を粉にして、現在の小者の職務に忠勤と誠意を打ちこんでいた。

——が、主人の眼というものは、常に見ているようで、そのくせ、一つや二つの気働きぐらいでは、眼もくれる風も見せない。

今も、信長は、藤吉郎が誰よりも先に駈けつけ、吩咐いいつけられぬ先に、

(お水を)

と、すすめても、信長は、彼の顔などは見もしなかつたし、ウムともいわなかつた。黙つて、塗柄杓ぬりびしやくの柄えを取ると、一息に飲みほして、藤吉郎の手に返し、

「五郎左を呼べ。五郎左を」

と、命じた。

その答えは、近侍がした。あわててそこへ集まって来た家臣のうちから、一人がまた、彼方へ駆けて行つた。

五郎左は、馬場の柳に、駒を繋いでいたが、信長の召しを聞く
と、

「ただ今、御前へ参ろうと存じているところ——」

と、答えた。

そして悠々と汗をぬぐい、襟えりをかき合わせ、刀こうがいの筭すゐを抜いて、
乱れた髪の毛を撫でつけていた。

五郎左は、主君の前へ出るまでに、もう或る覚悟をきめていた。

信長の気色から推して、信長の近侍たちもまた、彼の身が、ただではすむまいと固唾かたずをのんで、差し控えていた。

「五郎左にございまする。ただ今は、失礼を仕りました」

覚悟の程は、肚の底にすえていても——こういつてひざまずいた五郎左の物腰は、涼やかなものだった。

案外、信長もまた、彼の神妙な態度に、面おもてをやわらげて、

「五郎左、よく追つたのう。そちはいつたい、いつの間に、あのような名馬を手に入れたか。あの鹿毛は、何と申すか」

と、訊ねた。

家臣たちはほつと気を安めた。

五郎左は、微笑の顔を、すこし上げて、

「お目にとまりましたか。実はてまえも、いささか誇りといったす愛馬で、南部なんぶの馬商人あきんどが、京の貴人へ、高値に売るとて、都へ曳いて上るのを、強たつて所望いたしたものにございます。——が、値あたいほどな金子きんすを持ち合わぬ身、よんどころなく、父より貰いおきました『野分のわけ』と銘のある家宝の茶盃ちやわんを売り払い、それにて求めましたので、鹿毛の名もそのまま、野分と名づけて飼い馴れておりまする」

「ふむ……。そうか。いや道理で、近ごろ優すぐれた名馬とわしも見た。五郎左、あの野分、信長が所望じゃ。信長にくれい」

「は……」

「よかろう。値はいくらでも取らすであろう。信長が貰うておく

ぞ」

「……いや。恐れながら」

「なんじや」

「お断りいたしまする」

「いけないのか」

「はい」

「なぜじや。そちはまた、よい駒をさがせばよかろう」

「よい友は求め難いように、よい駒も、そうあるものではございませぬ」

「だから信長に譲れというのじや。信長とても、乗りつぶれぬ程な逸いっしゅん駿しゅんを、心がけていた折じや。強たつて望む」

「強^たつてお断りいたします。——何となれば、てまえの愛馬は、ただてまえの自慢や遊び事の備えではございませぬ。事ある時は戦場において、男がいある御奉公も致さばやと、心がけの一として、飼い馴らしておるものです。折角、わが君のお望みにはござりますが、武士にとって大事な駒、差し上げるわけには相成りませぬ」

奉公のため、武士のたしなみのため——という彼の強^{きつ}いことばに、信長もそれ以上、無下^{むげ}によこせとも云い得なかつたが、なお、執着とわがまは、捨てきれなかつた。

「五郎左」

と、重ねて、

「嫌か。どうしても嫌か」

「この儀ばかりは……」

「そちの身分には、あの鹿毛は、ちと過すぎもの物であろうが、そちも父の中なかつかさ務さむらいほどな士になつたら、野分ほどな駒にも乗れ。――

まだ若い身に、鞍くらま負けするといふものじゃ」

「恐れながら、御意はそのまま、殿へお返し申しましょう。――

お鞍の上で、串くしがき柿うりや瓜など喰べて、御城下をお練りあそばすには、何も、名馬のお選みは御無用かと存ぜられます。むしろ五郎左の如き武士に飼わるるこそ、野分も本望の筈と覚えまする」

と、いつて退のけた。

五郎左は、つい、いつてしまった。馬を惜しむ心よりも、日頃

の忿懣ふんまんが、思わず、口をついて出てしまったのである。

孤君こくんと老臣ろうしん

五郎左衛門の老父、平手ひらてなかつかさまさひで中務政秀は、二十日はつかあまりも、門を閉じて、邸こもに籠こもっていた。

彼として、めずらしい例といわねばならない。

十年一日の如くというが、彼の奉公は、織田家二代にわたって、四十年一日の如くであつた。

先代織田信秀から、その臨終りくせきに六尺りくせきの遺孤信長を、

(頼むぞ)

と、託されてからは、信長の守役もりやくとして、一国の藩老として、なおさら、彼は老骨に鞭打って仕えて来た。

その日。——もう夕方。

彼は、独り鏡を眺めていた。

「……………」

自分の髪の毛真っ白になっていることに、今さらのように、彼は愕おどろきの眼をもつて、鏡の中の自分を見ていた。

白くもなる筈。もう齡よわいも六十いくつかであった。

が、その年すら、数えて閑かんを思う暇もなく来たのである。年を思い、髪の毛の白さに気づいたのも、門を閉じた二十日あまりを、幽居の身となったお蔭であった。

鏡かがみ 篔ぼこの蓋ふたをして、

「勘解由かげゆ、勘解由かげゆ」

ふすま越しに呼ぶ。

小侍に、燭しよく台だいを持たせ、次に、用人の雨宮勘解由かげゆが、そつ

と小暗い端かしこに畏おそまった。

「勘解由、使いは出たか」

「はい、もう先刻に、遣つかわしてござります」

「では、見えような」

「程なく、お揃いで、お出いで遊あそばすことと存ぞんじますが」

「酒のしたくも」

「お珍めづしゆう、お揃いで」

「うむ。鬱^{うき}はらしじやよ」

「至極、結構に存じます。何ぞなお、温かい馳走など、作らせておきましょう」

勘解由は、去った。

二月の初めだったが、まだ梅のつぼみすら固かった。ことしはひどく寒く、池の面の厚氷は一日溶けなかった。

さつき使いを出して、呼びにやったのは、各、べつに邸を持っている三人の息子たちへであった。

本来、こういう大きな邸では、総領は元よりのこと、次男三男でも、皆、大家族的に妻から孫まで一つに住んでいるのが、世間の慣わしだったが、^{なかつかさ}中務は、

(朝夕、子や孫どもの愛にひかされては、少しでも、御奉公の懈け怠たいになる)

といつて、皆、べつに邸を持たせて早くから妻にも別れた身を、孤独で暮らしていた。

そして、先君の遺孤、主君の信長を、主と護るのみでなく、わが子とも思いこめて、守役の大任を負いとおして来たのだった。

ところが先頃からその信長は、少しも爺じい爺いよと、自分を慕わなくなつた。——のみか、面おもてを横にし、耳をふさいで、自分のことばをも、厭いとう風ふうであつた。

不審に思つて、近侍の者に糺ただしてみると、

「御子息の五郎左衛門殿と、お馬のことから実は——」

と、数日前、馬場であつた気まずい事件を、話してくれた。

「……さては、それで」

と、中務は、初めて解けたが、さてさて、困つたものと、当惑の顔いろだつた。

不興を蒙こうむつた五郎左衛門も、以来、出仕止めとなつて、謹慎しているらしいし、その余波で、自分の言は、まったく信長の耳へ、真つ直ぐに通らなくなつたように思われる。

柴田しばたごんろくかついえ権六勝家、林美みまさか作などという、常に、一方に立つ家

臣はまた、

(この機に)

とばかり、信長に媚びて、甘言をすすめるため、主君と中務父お

子の間は、なおさら濠ほりを深められた形となった。

二十日あまりの幽居のあいだに中務はしみじみ、自分の老いを知った。

君側には、柴田権六や、林美作などの、新しい勢力が興つてい

る。その力は若かった。

中務は、四十年の忠勤のつかれで、もうその人々と、闘う精はなかつた。

だが、自分の老いを知れば知るほど——孤君信長の前途と、主家の将来は、強く案じられて来た。

なお、その老後の骨を、孤君のために、用いようとして、この

二十日余りを、籠こもっていたのであつた。

「お二方、お揃いで、ただ今お見えになりました」

用人の勘解由かげゆが、やがてまた、彼の居間へ告げて来た。

「そうか。今参る」

と、答えておいて、中務は何か書きものをしていた。硯すずりの水も凍るような宵の寒さに、背を曲げて。

それは、きのうから、苦吟して書いていた、長い書面であつた。きのう書いたそれへ、また筆を入れて、謹厳に、清書しているのであつた。

書院では、総領の五郎左衛門と次男の監物けんもつが、父の使いをうけて、何事かと来て、火鉢を囲んで待っていた。

「ご病気かと驚いた。不意に使いが見えたので」

監物がいうと、五郎左衛門は、顔を振って、

「いや、わしはそうも思わなかった、いつぞやのことが、お耳にはいり、さてはお叱言こいことだなど、すぐ感じた」

「だが、あのことなら、もう二十日も前に、父上のお耳へははいつている筈。——急にお呼びつけになるからには、何ぞほかに、御用があつてのことだろう」

幾歳いくつになつても、父は怖い。兄弟は、父の姿の見えるまでが、待ち遠しくもあり、心配でもあつた。

三男の甚左衛門は、他国の縁家へ行っているので、この宵には、来合わせなかつた。

「来たか。寒いもう」

父の中務は、やがて襖ふすまを開けて現われた。兄弟は、すぐ父の白髪と、めつきり痩せて来た面おもやつ窶れに、眸を向けた。

「どこか、お体でも」

「いや、この通り、変りはないがな、お前たちの顔を見たくなつたのだ。年のせいじやろ、時折、世のさびしみを、思うようになつた」

「では、べつに何ぞ、急な御用というわけでも」

「そんなわけではない。久しぶりに、夕飯など共にして、鬱うさでも語ろうと思うたまでのことよ。はははは。まあ、寛くつろげ」

平常と、変りはなかった。

外は、あられ霰でもこぼれて来たのか、ひさし廂にたばしる音が聞え、しよく燭も、ふすま襖も、しんしんと冷えていた。

しかし、むつま睦じい父子のおやこ酒盛は、さかもりやがてその寒気も忘れさせていた。父が余りよい機嫌なので、五郎左衛門は、主君の御不興をうけたことについて父へ詫びようと思いつつ云い出す折が見つからなかった。

そのうちに、膳も退さげ、席をも改めて、中務は好きな薄茶を一ちやわんぷく命じて、気軽に飲んでいたが、ふと、て掌にのせている茶ちやわん盃から思い出したように、

「五郎左、わしがそちへ譲った家宝の野分のわけの茶盃を、そちは人へ手放したときいたが、左様か」

と、訊ねた。五郎左は、ありのまま、

「はい。家宝の名器と伺っておりますが、欲しい馬がございましたので、茶盃ちやわんを売り払って、馬を求めました」

と答えた。すると、中務は、

「そうか。よかろう。その心がけがあれば、わしが亡ない後も、御奉公むき向に心配はない。よく売り払った」

叱言こごかと覚悟ごつとしていれば、かえってそれを、欣んでくれる父であつた。

「——だかの、五郎左」

中務なかつかさは、賞ほめておいて、屹きつと改まつた。

「茶盃ちやわんを売って、名馬あがなを購あがなう、そちの心がけは、大いによいが、

聞けば、馬場において、殿の卯月を追い抜き、君公から後に、その鹿毛かげをくれいと、お望み遊ばしたものを、そちは、お断りしたというではないか」

「そのため、実は、御不興をうけまして、父上にも、私のため、とんだ御迷惑をかけ、何とも」

「これ、待て」

「はッ」

「父のことなど、さておいてじゃ。なぜ君公の御所望に対して、物惜しみいたしたか」

「……………」

「いやしい奴め」

「……父上」

「なんじや」

「五郎左を、左様に御覧ごろうじなされますか。心外でござりまする」

「ではなぜ、折角、欲しいとお望みならば、信長公に差し上げてしまわぬか」

「生命いのちをすら——君公のお望みとあらば、いつなりと、差し出す覚悟をしておる侍の身、何で物惜しみなど仕りましょう。——それに名馬を持つのは、私事の道楽ではございませぬ。一朝の場合、戦場で御奉公を尽そうためにござります」

「もとよりのことだ。それは分っているが」

「駒をさし上げれば、殿のお気には召しましょう。しかし臣下の

そういう気持も無視して、ただ御自身の卯月より、逸いつそく足と見て、すぐお望み遊ばすわがままな御気性がてまえには、口惜しゅうてなりません」

「……………」

「今の織田家が、危ういこと、てまえなど申すまでもなく、父上にはなおさらようくお分りでございましょう。——時折は、図抜けた御大器と思われるような場合もままございしますが、所詮しよせん、お幾歳いくつになられても、どうやらあのわがままと放縦な御気質は、天性かと嘆かれます。あまりわれわれ家来達が、その御気性にはらはらして、わがままをお通し申すのも、忠義に似て、実はよくないことだと思っております。それゆえ、てまえもわざと、

強情を張った次第でございます」

「いかん」

「いけませんか。てまえの心は間違っていたでしようか」

「心底に忠義があつても、それではかえつて、信長公の悪い御氣性の方を、駆りたてておるようなものだ。——わしは、あの君様を、お乳ちの頃からお抱き申し上げ、わが子のお前たちよりも多く、この手に抱いて、お育てして来た。それゆえ、よう御性質も分つておるが、自体、大器でいらつしやるだけに、細かい短所は人一倍お持ちでもある。そちが逆さつたことなどは、いわばその大器の御天性から見れば、塵ちりほどでもないことなのだ」

「そうでしようか。申しては恐れ多うござりますが、わたくしも

監物けんもつも、また家中の心ある士さむらいは皆、御奉公がいのない暗君と、嘆かぬものはありませぬ。——柴田権六、林美作はやしみまさかなどは、かえつてその暗君ぶりを、勿怪もつけの倅いと欣んでおりましようが」

「そうでない。……ひとは何といえ、わし独りはそうは信じられぬ。おまえたちも、飽くまで、あの君のままに従え。わしが亡い後は、なおさらのことぞ」

「その儀は、お案じなされますな。たとえ御不興をうけても何でも、節義にゆるぎはないつもりです」

「それ聞いて、安心した。——如何せん、わしははや老木、わしの接木つぎぎきとなつて、御奉公を尽してくれよ」

——後で思えば、その夜の中務の言には、思い当るふしが幾ら

もあつたが、五郎左も監物も、まさか父が死を決していたとは気づかず、やがて霰降る夜更けを帰つて行つた。

平手中務の自害は、その翌朝、見出された。見事な自刃の姿であつた。

駈けつけた五郎左と監物の兄弟は、父の死顔から、何の心残りも苦悶の姿も見出せなかつた。

遺言は、昨夜の席で、生前の温い唇くちから聞いていた。遺族に対しては、だから何の遺書もなかつた。

ただ一通。

御主君へ――

と、信長へ宛てて遺書があつた。遺書はすぐ、城へ届けられた。

「何。爺じいが——？」

彼の死を聞いた時、信長の顔には、大きな愕おどろきが走つた。

遺書は長文で、言々句々が、中務の真心をこめた、苦諫くかんの文字であつた。

死をもつて、中務は、信長を諫いさめたのである。信長が天成の大器であることも、その長所をもよく知っている中務の諫言かんげんだけに、信長はそれを読んでゆくうちに、涙より先に、びしびしと、鞭打むちうたれるような、真実の痛さを胸にうけた。

「爺よ。ゆるせ」

信長は、声をもらして泣いた。

中務に対しては、わがままの云いたい放題をいい、また、内外

の苦勞をかけ通して来ただけに、君臣とはいえ、父以上な親しみを抱いていたのである。——たとえば今度のことなども、わがままを出しやすい彼へ、例によつて、知りつつわがままを振舞つていたのだつた。

「五郎左を呼べ」

すぐ命じた。

やがて、五郎左が見えて、平伏すると、信長は席を立つて、対坐になり、

「爺の云い遺した^{のこ}こと、一言もあまさず、信長の胸に沁^しみてぞ。終生忘れはおかぬぞよ。詫びは、それしかない。それしかない。

……」

主君が臣下へ、手をつきかけたので、五郎左はあわてて、その手を取つて拝み、君臣抱き合つて泣いていた。

その年、城下に一字の寺を建こんりゆう立した。爺じいの菩提ぼだいのために、という信長の発願からであつた。

「寺号を、何と名づけましょうか。開山の和尚に、撰せんごう号の儀、お命じなされては如何なもので」

奉行が訊ねると、信長はかぶりを振つて、

「寺僧の名づくるよりも、爺は、わしがつける寺号をよろこんでくれよう。わしが撰えらぶ」

筆を取つて、政秀せいしゅう寺とすぐ書いた。

平手ひらて中務なかつか政秀まさひでの名のりを、そのまま取つたのである。

その後。

何か思い出すと、信長はよく唐突に、政秀寺へ行つた。行つても、えこ回向したり、読経の僧と共に坐っていることなど、滅多にな
い。

「爺よ。爺よ」

つぶやきながら、寺のあたりを一步きして、ぷいと帰城してしま
うだけだった。

そうした感情が、時には、狂人じみて現われることすらあつた。
鷹狩の折、突然、小鳥の肉を引っ裂いて、

「爺ツ、爺ツ。信長の捕つた獲物ぞ。これを受けよ！」

と、虚空へ向つて、投げつけたりした。

また、川狩の日に、いきなり足で川水を蹴上げて、

「爺じやうぶつツ。成せよつ 仏ぶつ せよツ」

と、叫んだ声や眼まなぎしのただならぬ烈はげしさに、家臣たちが、呆あつけ気にとられたこともあつた。

いばらひら
茨を拓いて

弘治こうじ元年。

信長は二十二歳となつた。

その年の四月、信長は、一族の織田彦五郎と乱を醸かもして、彼の居城、清洲きよすを攻め、占領後、那古屋なごやから清洲城へ移つた。

やったな！

藤吉郎は、ひそかに、そう思つて、信長の手際てぎわを見ていた。

右もいばら茨。左も茨。

孤君信長を繞めぐつて虎視眈こしたんたん々な一族がたくさんいた。それが、叔父だの兄弟だの身寄りだのという者だけに、荊けいきよく棘ひらを拓くのも、敵以上であつた。

家柄からいえば、清洲の織田彦五郎は、織田一族中の宗家そうけだつた。しかし宗家の彦五郎は、信長を、

(油断のならぬうつけ)

と、警戒していた。そして事々に圧迫を加え、信長の自滅を計つた。

清洲城には、その前から守護家の斯波義統しばよしむねが養われていた。義統の子義銀よしかねと、義統とは、信長に同情をもっていた。

それが、発覚したのである。彦五郎は、怒って、
「恩知らずの見せしめ」

と、守護家を斬ってしまった。子の義銀は、信長の所へ逃げて行つた。

信長は、義銀を、那古屋の天主坊かくまへ匿つて、その日に軍馬を催して、清洲城へ殺到したのである。

「守護家を奉じて」

と、彼は将士を鼓舞した。

名のない戦いくさはしない。まして宗家を攻めるには、義と名分の旗

じるしが要る。——が彼は、その機会に荆棘けいきよくの一方を、やつと切り拓ひらいたのであつた。

那古屋城へは、叔父の信光を、自分の跡に入れておいた。が、何者にか、信光は暗殺されてしまった。

「佐渡、そちが行け。那古屋はそちならでは、信長に代つて、留守する者はない」

林佐渡守へ、命が下つた。

「身命をもつて」

と、おうけして、佐渡は那古屋へ赴いて、城代の任に就いた。

心ある家臣は嘆なげいた。

「ああ、やはり暗君あんくんはやはり暗君でいらせられる。——時折は、

ぎよつとするような御英氣ひらめの閃きをお見せあるかと思えば——あの林佐渡守などを、お信じあるようでは……」

事実、佐渡の行動には、怪しいふしが多かった。

信長の父が生きていた頃は、彼も無二の忠臣といわれたもので、そのため、先代信秀のぶひでから、平手中務なかつかさと共に、遺子こどもをたのむぞ、と死後を託された一人だったが、その信長の放縦ほうじゆうと、つかまえ所のない天性に、見限みきりをつけてしまったものとみえ、専ら、信長の弟信行と、その母堂すえもりじょうのいる末盛城へ近づいて、折もあらば、信長を廃嫡はいちやくし、信行を主君の座に立てようと意図している男だった。

「殿には、佐渡の気けぶりを、ご存じないのであろうか」

「ご存じあれば、よも那古屋の城を、お預けにはなるまい」

眉をひそめて、憂いあう家中の者のささやきを、藤吉郎も、一度や二度でなく耳にした。

が、藤吉郎は、

(はてな。こんどの寸法は、どう遊ばすお考えかな?)

とは思ったが、他の家中のような心配は、すこしも抱かなかつた。

清洲の城で、いつも明るい顔は、孤君信長と、御小人仲間おこびとにいるひとりの草履取だけだった。

信長を、天性のうつけと見た先入観は、家臣の一部でも、なかぬか脱けなかつた。

林佐渡守、弟の美作^{みまさか}守^{のかみ}、そして柴田権六勝家などの重臣が、それだった。

「何。美濃の齋藤^{さいとう}道三^{どうさん}のど、賀舅^{むじゆう}の初対面をなされた時の信長公の仕方は、なかなか平常のうつけとは違っていたとか。――はははは。あれはうつけの紛れ^{まぐ}当り^{あた}というもの。先が儀式張つてござったところへ、こちらが恐いもの知らずの無法と出たので、さすがの舅^{ぼか}どのも、度胆を抜かれたままでのことよ。例にもいう。莫迦^{ぼか}につける薬はないとな。その後の事々、御行状、どう眺めても、救いはない」

柴田権六などの観察はわけても徹底していた。所詮^{しよせん}、将来性はないときめているので、そういう放言も、次第に大びらになっ

ていた。

その点で共鳴している林佐渡が、那古屋の城代になると、権六勝家は足しげく、那古屋へ往来した。そしていつか其処そこは、陰謀の苗床びようしようとなっていた。

「よいのう、雨夜は」

「かえつて、茶には、一ひとしおの趣おもむきを添えて」

茶によせて、佐渡と権六は、城内の庭木に蔽おおわれた狭い一室にさし対むかっていた。

梅雨つゆすぎだったが、まだはつきりしない夕空から、雨がこぼれ、青梅の実みが、たまたま、ぽとツと地に落ちた。

「あすは霽あがりましょう」

梅若葉の下から、佐渡の弟の美作守みまさかのかみが独り語のようにつ
た。燈籠とうろうへ灯ひを入れたのである。

「……………」

灯を入れた後もしばらく、美作はそこに佇たたずんで、四辺あたりを見廻し
ていた。

やがて、離れへ戻つて来ると、声を低めて、

「異状はございませぬ。家来どもも遠ざけてござりますゆえ、お
心おきなく」

と、兄と権六へささやいた。

権六勝家はうなずいて、

「では、早速、本題にかかろうか。——実はきのう密ひそかに、末盛

城へ伺つて、親しゆう御母公様にもお目にかかり、かんじゆうろうのぶ勘十郎信ゆき行様とも、談合して参つた。……で後は、そこもと其許の心ひとつときまつたが「

「御母公には、何と仰せられてか」

「それはもう、異議のう御同意じゃ。何しても、信長公よりは、信行様のほうが、お可愛くてならぬお方じゃて」

「ふム……。然らば、御舎弟信行様にはもとより御決心か」

「佐渡や権六が起つならば、織田家のため、信長公へ弓をひいても、是非あるまいと」

「もっぱ専ら、もとお許が説いたのでござろうが」

「それや何しても、相手が御母公やら、気の弱い信行様のこと。」

そう油をかけて力説せねば、動くはずもござらぬ」

「いや、おふた方さえ、承知とあれば、名分は充分にある。信長公の暗愚を憂い、お家の末を案じている家臣はわれらのみではない」

「尾張一国のため、織田家百年のため。——と、まず旗じるしはそれでよいが、軍備は」

「折もよし、那古屋へ移されたので、それも手早う進んだ。鼓をつづみ鳴らせば、いつなりと」

「そうか。……では」

権六が、ひとひざ一膝前に、身を揺り出した時だった。

ばらツ、と大地に何か音を立てて落ちた。

二ツ三ツの青梅の実^み。

雨は小やみであつたが、雨以上のしずくが、風のたび廂^{ひさし}を打つ。——犬のような人影が、床下から這い出していた。今の梅の実は、梢^{こずえ}から落ちたのでなく、その男が床下から頭だけ出して抛^{ほう}つたのである。

室内の眼が、それへ振り向いて、気を休めた隙に、忍びの者らしい男の影は、もう風と闇の中に紛^{まぎ}れていた。

忍びの者は、城主の目であり耳であり足であつた。

出るにも退^ひくにも家臣に取りまかれ、城にばかり暮している城主なる者は、皆忍びの者を使う。

信長の側にも、そういう術^{わざ}に長^たけている男がいた。しかし、誰

がその役目をしているか、近侍にも分らなかつた。

草履取は三名いた。お小人組に属しているが、役目から小屋を別にして、お庭近くに三名だけで交代勤めをしている、一人は又たすけ助、一人はがんまく、一人が藤吉郎だつた。

「がんまく、どうした？」

藤吉郎は相役のがんまくに、友誼ゆうぎを尽して交際つきあつていた。がんまくは、蒲団をかぶつて寝ていた。何ぞという、よく寝てばかりいる男だつた。

「……腹が痛い」

がんまくは、顔も出さずに云つた。藤吉郎は、夜具の襟を引つ張つて、

「嘘をいえ。御城下まで出たついでに、美味い物を買つて来たから起きろよ」

「なんだ」

がんまくは、首を伸ばしたが、騙だまされたと分ると、また夜具をかぶつて、

「ばか、病人をからかうなよ。あつちへ行け。うるせえ」

「起きてくれ。兄貴。ちようど又助がないから、訊きたいことがあるんだ。折入つて」

がんまくは、渋々起き出して、

「折角、ひとが寝ているのを」

口叱くちごごと言を呟つぶやきながら、裏へ出て、奥庭の泉水から流れてくる

水で、含嗽うがいしていた。

藤吉郎も尾ついて出た。小屋の中は鬱陶うつとうしいが、清洲城の奥なので、あたりは幽邃ゆうすいだし、遠くは城下を見晴らしているし、心までが大きくなった。

「なんだ、俺に訊きたいことというのは」

「ゆうべのことだが」

「ゆうべ」

「とぼけても、藤吉郎は知っている。那古屋へ行つたらう」

「え」

「お城へ忍んで、御城代の林佐渡や柴田権六の密談を、探つて帰つて来たのだらう」

「おい、おい。猿。……滅多なことをいうなよ、滅多なことを」

「じゃあ、ほんとのことをいつてくれ。友達の仲で水臭かろう。

わしは疾とうから感とづいていたが、黙とつて、おぬしの挙動を眺めていたのだ。おぬしは、信長公の忍とび役と見たがどうだ」

「藤吉、……お前の目に会とつちやあ敵かなわない。知とつていたのか」

「一つ釜の飯を食とっているおぬしのすることを、知とらないでどうするものか。——信長公はわしにとつても大事な御主人だ。蔭とながらわしらでも、案とじられることもある」

「訊とねたいとはそのことか」

「神とかけて、他言はせぬ。がんまく、わしを信とじてくれ」

がんまくは、そういう藤吉郎の顔をじとつと見ていたが、

「よし打ち明けてやろう。だが昼は人目につく、折を待て」

その後、がんまくの口から、彼は、織田家の内情について種々な知識を得た。そして主人信長の境遇に、理解と同情をもつて、よけい奉公の真まことを尽した。

けれど藤吉郎は、そうした陰謀家の家臣の中にある若い孤君の将来を、少しも危ぶみはしなかつた。先代以来の老臣も重臣も、信長を見捨てかけていたが、まだ召し抱えられて年月も浅い藤吉郎のみは、深く信長に信じているものがあつた。

(ここを、わが殿は、どう切り拓ひらいて行かれるだろうか)

と、身分の低い彼は、ただ遠くから祈る気持で眺めていた。

その月の末頃だつた。

いつものことで、多くの家来も従いていかなかった。

信長は、突然、駒を曳き出させて、城外へ遠乗りに出た。

清洲きよすずの城下から、守山もりやままで、その間、約三里程である。彼は

いつも、朝飯前に、飛ばして帰って来る。

が——その日は、先頭の信長の馬首は、守山へは向わないで、城下の十字街道から東へ向って駈け出した。

「やッ。殿には？」

「どこへ行かれる気——」

続く家臣の五、六騎は、また、出しぬけを喰って、あわを喰いながら、後を追いかけていた。

徒士かちの者や、草履取は、当然途中でこぼれてしまう。

だが、がんまくと藤吉郎の二人だけは、遅れながらも、必死に飛んで、信長の駒から捨てられまいとした。

「すわ！ 事だぞ」

と、二人は互に、眼顔を見合つて、ぬかるなど励まし合つた。

なぜならば信長の馬首は、那古屋なごやへ向つているからである。藤

吉郎はがんまくから、深い内情を聞いている。そこは信長を亡き者にして、弟の信行を擁立しようとしている陰謀の府ではないか。

何をしでかすか知れない信長が——何が起るか測り難い危地はかへ、
——向う見ずな駒を飛ばして行くのである。

これほど危険なことはない。

「一大事」

と、がんまくや藤吉郎が、心のうちで、大變を予期したのも無理ではなかった。

だが、より以上、驚いたのは、彼の唐突な來訪をうけた、那古屋城代の林佐渡守と、弟の美作みまさかだつた。

あわただしく、本丸の一室へ駈けこんで來た家臣が、

「殿、殿、——はやく、お出迎えにお立ちなされませ。信長公のお越しにござりますぞ」

と、告げても、

「何、何じゃと？」

耳を疑つて、起とうとはしなかつた。——

まさか！ という氣持が邪魔していた。

「騎馬で、ただ、四、五騎のお供衆をつれたのみで、大玄関まで、いきなりお乗り着けなされました。——何か、高声で、お供衆と笑っておいでなされました。ともあれ、お早くお出迎えを」

「これこれ。まこと真か」

「はッ、はッ」

「信長公が、お越しあそばしたというのか」

「御意にござります」

「すりや大変じゃ」

佐渡守は、なぜということもなく狼狽ろうばいした。顔いろまで、さつと変った。

「弟、……何事じやろう」

「ともあれ、お迎えした上で」

「そうだ。早く来い」

大廊下を、急いで行くと、もう玄関の方から、活潑な足踏みを踏み鳴らして、信長は通つて来るのだった。

「……はッ。これは」

林兄弟は、彼の前を避けて、ひたと廊下に平伏した。

「やあ、佐渡。みまさか美作も達者か。守山までと思うたが、どうせの

ことなら、先に茶のある那古屋にせいと、遠乗りの目当てに駆け参つた。——辞儀など、重々しゆう、飾らずともよい。早く、茶を出せ、茶を出せ」

云いすてると、勝手を知つた本丸の第一の間の上段に坐り、後

から息を喘せいで追いついて来た家臣たちを顧み、

「暑いろう。暑い暑い」

と、駄々っ子のような扇使いして、襟えりに風を入れていた。

茶を。菓子を。

お褥しとねを——

と、出す物も、後あとや前さきに、城内の者は、慌あわて合う。

何しろ不意過ぎる。

林佐渡と美作の兄弟は、倉皇そうこうとして、信長の前へ、挨拶に出

たが、侍女や家来たちの慌あわてぶりを、見ていられない顔して、一度、中坐して退つて来た。

「午ひるどき刻でもあるし、遠乗りの御空腹もあろうで、すぐまた、お

中食ちゆうじき——と仰せ出されるかも知れぬ。早く厨くりやの膳部の者へ、

料理の手廻しを、申しつけておけい」

佐渡が、そう吩咐いいつしていると、弟の美作守が袖を引いて、

「兄上、——あちらで柴田殿が、ちよつとお顔を拝借したいと申されていきますが」

と、囁ささやいた。

頷うなずいて、佐渡も小声に、

「うむ。今参る。……そちも先へ行つておれ」

と、いった。

その日も、柴田権六勝家は、那古屋城へ来ていたのである。何か密談をすました後、さて、帰ろうかと立ちかけたところへ、突

然、主君信長の来臨という玄関の騒ぎに、出てはまずいし、帰ることもできず、度を失つて、小書院の隠れ座敷へあわててはいり込んでいたものだった。

そこへ美作が来、林佐渡も後から来て、三名、ほつと吐息をつきながら、額を寄せ合つた。

「だしぬけだ！ ……いや驚いたな」

「何かにつけて、この調子だから、定じょうせき石いしで行くと手が狂う。

およそ、何が測はかり難いというて、うつけ者の出来心ほど怖いものはない」

「それじゃて」

と、権六勝家は、眼で奥を指しながら、

「あの喰えぬ舅御、しゅうとご山城守道三ともある老獐ろうかいなお人まで、くちばし嘴の青い殿に、煙に巻かれたといういわれは——」

「そうかも知れぬ」

「兄上……」

と、美作は先刻から、眉に険けわしい色を湛たえて、辺りへ気を配っていたが、さらに、声をひそめて、

「今も咄嗟とっさに、権六どのと、申し合わせたことでござるが、いつそのこと！ ……」

「何。いつそのこと」

「お供も、僅か五、六名で、突然お越しあられたのは、いわば天の与えた絶好な機会ではござるまいか」

「殿をか？」

「そうです。——お中食を差し上げている間に、武者隠しへ、腕ききの者を忍ばせ、てまえ御給仕に出ますれば、合図と同時に、信長公を」

「もし、仕損じては」

「何の、庭面にわも、廊下、到る所を、人数をもつて取り囲ませ、多少の傷負ておいを出しましょうとも、眼をつぶつて刺し奉る臍ほぞを決めてかかれば……」

権六も云い足した。

「どうじゃ、佐渡殿」

さすがに林佐渡は——じつと俯向きうつむこんでいたが、権六と美作

のつよい眸にお圧されて、

「ウム。……寔まこと、今が、つかめと与えられた機会かもしれぬ。で

は」

「御決心か」

眼と眼を見合わせて、三名が、膝を立てかけた時だった。

ずしずしと、力のある足音が、廊下を踏んで来たかと思うと、塗ぼねの大障子をさつと開けて、

「やあ、ここにおったか。佐渡、美作。茶ものんだ、菓子も喰うた。はや立ち帰るぞ」

——あつと、立てかけた膝を縮めて、三名は、居い竦すくんでしまつた。

信長は、その中にいる権六勝家の姿へ、じつと目をつけた。

「ほ。……権六じやの」

信長は歩み寄つて、平蜘蛛ひらぐものように手をつかえた権六勝家の、頭の上から微笑ほほえんでいった。

「儂みが参る時に、そちの乗馬によう似た栗毛が、駒繋ぎにつないであつたが——やはりそちのものであつたか」

「はッ……。来合せてはおりましたなれど、御覧のごとく、平常の汚むきい身装みなりをいたしおりましたゆえ、君前に罷まかり出るも、不作法と存じ、わざとこれに差し控えて」

「はははは。存外、洒落男しやれおとこよのう。信長を見よ。かような粗末じや」

「恐れ入ります」

「これ——」

冷たい扇子の塗骨ぬりぼねが、権六の首すじをくすくす撥るように、軽くたたいた。

「君臣の仲じやに、身なりがどうのと、儀式にとら囚われた遠慮、水くさいぞよ。——一にも儀式、二にも儀式。あれは都の公方くぼう殿のすることよ。織田は田舎いなかさむらい侍でいい」

「以後。以後は……」

「どういたした、権六。おのの顫おののいているではないか」

「かえつて、御意に逆さからいましたかと、恐縮の余りに」

「はははは。許す、許す。もう顔を上げい。——いや待て待て、

儂のみの革足袋かわたびの紐ひもが解けておる。権六、ついでに結んでくりやれ」

「……はッ」

「佐渡」

「は」

「邪魔をいたしたのう」

「滅めつ相そうもないおことば」

「したが、信長のみならず、四隣の敵国の客は、いつでも不意に来るものぞ。心して、留守をせよ」

「朝暮、心いたして、弓矢を磨みがいておりまする」

「そうか。頼もしい家来どもを持って、信長は安心。——いや信長のためばかりではない、まちがえばその方どもの首もないのじ

や。権六、よいか」

「お結びいたしました」

「大儀」

信長は、まだひれ伏している、三名の後ろを開けて、中廊下から玄関の方へ、大廻りして出て行った。

「……………」

柴田権六と、林佐渡、美作の三人は、真まつ蒼さおな顔を見合つて、一瞬、茫然としていたが、われかえに回ると、あわただしく、信長の後を追いかけて、再び、玄関の式台に平伏した。

——が、信長の姿はもうそこには見えない。

大手門の方へ降つてゆく幅の広い坂道の辺りに、ただ夏かっ々かっと、

蹄ひづめの音だけが聞えていた。

いつも置き捨ててをくう近侍たちは、また不覚を重ねぬように、帰りは信長に続いていたが、小者の中の、がんまくと藤吉郎のふたりだけが、かなり遅れて、後から駈けて行つた。

「がんまく」

「おう」

「よかつたな」

「よかつた」

遅れはしたが——しかし二人は不覚とはしなかつた。嬉々として、主君の姿を、先に見ながら急いでいた。

もし何らかの、兇事でも起つた場合は、すぐ清洲城へ変を知ら

せて——と、二人は密かに謀しめし合わせ、二の丸の狼煙山のろしやまへ上つて、いざとあれば、狼煙番を斬り殺した上、そこから煙を上げる考えだったのである。

名塚なつかの砦とりでは、信長の手足の一部である。一族の佐久間さくまだい大学がくに守らせてある。

その年の八月だった。

まだ夜も明けぬ頃。——初秋の眠りごこちを、砦とりでの者は、不意の軍馬に驚かされて匆はね起きた。

敵は？ ——意外にも日頃の味方だった。

「那古屋衆の、謀叛むほんと見ゆるぞ。柴田権六の兵千人。林美作みまさかの

人数七百ばかり。——不意を襲せて来おつた！」

物見やぐらで、誰かどなつた。それすら、深い霧の中である。

ここは手薄。

一騎、二騎、霧を衝いて、すぐ清洲の本城へ、知らせに飛ぶ。

信長は、まだ眠っていた。

が——寢所へその注進が伝わると、彼はすぐ、具足を纏い、槍を把つて、城門まで駆け出して来た。

彼の後には、誰もまだ続いて来なかつた。

すると、ただ一人。

信長より先に、大手の唐橋門からはしもんのそばに、駒を曳いて、待ち構

えていた雑兵があつた。

「——お馬を」

と、その雑兵は、信長の前へ、駒を寄せて云った。

信長は、意外な顔した。

自分より早い奴がいたことに驚いたらしいのである。

「誰だ？ そちは」

と、訊いた。

雑兵は、陣笠を脱とつて、ひざまずきかけた。信長は、もう鞍の上上に在つて、

「それには及ばん。そちは、誰の手の者であるか」

といった。

「お草履取の、藤吉郎にござりまする」

「猿か」

信長は、また呆れた。

庭使いの草履取など、出陣の場合に、先駆けして来る筋のものではない。見れば、粗末な物であるが、胴や脛すね当あてなどもつけ、雑兵笠をかぶっている。——その氣負った姿が、信長には愉快に見えた。

「合戦に参る気か」

「お供、仰せつけ下さいまし」

「よし、ついて来い」

信長と彼の姿が、朝霧の中へ、二、三町も遠く淡うすれて行つた頃、大手の橋を鳴り轟とどろかせて、二十騎、三十騎、五十騎——そして四、

五百名の兵がどつと、霧を黒くして追いかけて行つた。

名塚なつかの砦とりでの者は、必死に防戦していた。信長は、単騎、寄手の

陣の中へ駈け入つて、

「儂みに弓を引く者の面見つらせい。信長はこれにあるぞツ。——佐渡、

美作みまさか、権六ともがらの輩。何ほどの力やある。何ほどの思慮やあつて儂み

に叛そむくツ。わが前へ来つてその太刀振りを見せいツ」

彼の声は、怒っていた。その大きな声は、寄手の鬨ときの聲こえを消し

た。

「不忠の臣ども、信長が成敗してくる。逃ぐるも不忠ぞ！」

林美作は、その声に恐れをなして逃げ出した。どう考えても、

信長の声と思えなかつた。雷鳴かみなりに追われているような心地だつ

た。

彼の恃^{たの}みとする将兵たちにも、主君というものに対しては、先天的な觀念がある。

——直接、信長の姿、信長の声、しかもその峻^{しゅん}烈^{れつ}な威風に駈^かけちらされると、手も槍も出なかつた。

「待てツ。逆賊」

信長は、逃げる美^み作^{まさか}を見つけ、馬上から槍で突き刺した。

そして、血ぶるいしながら、美作の兵へ向つて、宣言した。

「主を討つても、そちらは主とはなれぬ身ぞ。叛逆の徒^{あやつ}に操^{あやつ}られて、百世の汚名を残さんよりは、謝して、信長の馬蹄の前に悔いよ。悔ゆる者は、助けおく」

左翼の陣が崩れ、美作が討たれたと聞くと、柴田権六ごんろくは陣を消して、末盛城すえもりじょうへ逃げこんでしまった。

末盛城には、信長の母公がいる。また、信長の弟、信行がいる。「どうしようぞ」

敗軍を知って、母公は泣きおののき、信行は戦慄した。

逃げ帰った叛軍はんぐんの将、柴田権六は、

「この上は、身に代えて」

と、頭を剃りそ、鎧よろいをすてて、法衣ころもになった。

そして、林佐渡と同道して——母公と信行をも連れて——翌日、清洲の城へ、謝罪に出た。

唯一の力は、母公の詫言わびごとであつた。母公は、佐渡と権六から

云いふくめられている通りに、信長へ三人の助命をすがった。

信長は、案外、怒っていないかった。

「免ゆるします」

母公へ、あっさり云って、それから、背に汗をして平伏している柴田権六へ、

「坊主」

と、呼んだ。

「……は」

「権六勝家ともある者が、なぜ頭など剃そりこぼちたか。慌あわてた奴」
苦笑して——また、佐渡へ、

「そちもだ」

と、やや屹ぎつという。

「年がいもない奴のう。平手ひらてなかつかさ中務の亡き後は、そちをこそ、

片腕とも頼んでいたに。——今となれば、中務を死なせて口惜し
ゆう思う」

信長は、落涙して、しばらく黙っていたが、

「いやいや、中務を自害させ、そちをも、謀叛人むほんにんにいたしたは、

皆、信長が不徳というものじゃ。——信長も以後はふかく反省し

よう。そちたちも、儂みに仕えるものなれば、ふた心など持つな。

武門に生きる効かいもあるまい。——武士は一道か、牢人ろうにんかじゃ」

佐渡は、眼が醒さめた。

信長の真のすがたを、今初めて仰いで、その天質をやつと知っ

たのだった。

ただ、恐ろしい心地に打たれた。身の程も恐ろしかった。かたく、忠勤を誓って、顔も上げ得ずに退^{さが}った。

——が、骨肉には、かえって、分らなかつたとみえる。弟の勤^{のぶゆき}十郎信行は、信長の寛大を、むしろ見^{みくび}縊^むって、

「母がいるので、乱暴な兄も、わしをどうすることもできぬのだ」と思った。

母公の愛と、盲目にかくれて、信行はその後、陰謀をやめなかつた。

信長は、嘆じた。

「信行の悪^{わる}戯^さは、悪戯として、放^ほつておいてもよいが、そのため、

幾多の家士が、逆徒となつて、武門の身を過るあやま。骨肉なれど、家のため、家臣のため、眼をつぶらねばなるまい」

機を見て、信長は遂に、信行を捕えてこれを刺してしまった。もう信長を、暗愚と見る家臣はなかつた。

いや、むしろ近頃では、彼の明敏と鋭利なひとみにしょうふく 慥しやう伏ふくしすぎて、信長自身、

「ちと、くすりが利ききすぎた」

と、時には、苦笑を覚えるくらいなものだつた。

しかし、信長の準備は、できていた。彼は毛頭、家臣や骨肉を偽るために、暗愚を装っていたわけではなかつた。

父信秀の死後、自分が一国を負つて、四隣の敵国へ。

——よし。いつでも。

という構えができるまでの安全弁べんに、自己の偽装を用いていたのである。敵国を謀はかるために、自領の中に無数に入り込んでいる密偵を計るために——周囲の肉親をも家臣をも、思い込ませて来たのだった。

が、この間に、信長は人間の表裏と、社会の機微とを、より多く学んだ。彼が年少から名君らしい名君であつたら、それは誰も用心して、露骨に示さなかつたに違いない。

ほうこういっしん
奉公一心

「猿、すぐ来い」

おこびとがしら 御小人頭の藤井又右衛門は、ふじいまたえもん あたふた駈けて来て、小屋の内に休息している藤吉郎を呼びたてた。

何事かと、

「は、御用で？」

藤吉郎は、すぐ出て来た。

「お召しじや」

「え」

「殿様が、ふいに、其方そなたのことをお訊ねなされて、呼んで来いという仰せ。——何か貴様、お叱りでも受けるような覚えはないのか」

「べつにございませんが」

「ま、早く来い」

又右衛門は、彼を促すと、思いがけない方へ、先に立つて行つた。

信長はその日、何思つたか、城内の兵糧倉ひょうろうぐらから台所を一巡して、なお、薪倉まきぐら炭倉すみぐらなどまで、検分して歩いていた。

「召し連れて参りました」

又右衛門が、信長の歩行の横へ額ぬかずいて、こう告げると、信長は足を止めて、

「あ、連れて来たか」

と、彼のうしろに控えている藤吉郎の姿に眼を止め、

「猿、前へ出い」

と、いった。

「は……」

「今日からそちを、台所役人に取り立てて得させる。よいか、台所で働けよ」

「ありがとうございます」

「台所方は、雄々しゅう、槍先の功名もならぬところじやが、戦場の華々はなばなしい場所よりは、わけて大事な陰かげの守りぞ。いうまでもないが、精出して勤めい」

即座に、彼の地位と扶持ふちは、今までより一段、昇格した。台所役人といえば、もう御小人組ではなかつた。

けれど、台所方へまわされることは、その頃、侍の恥か、落ち目のように思われていた。

——あいつも遂々とうとう、お台所へ落ちて行つた。

という風に見られて、そこは戦場や表方では、使い途にならぬ人間の捨場のように、蔑視べっしされていた。

御小人、中ちゆうげん間の端でも、

——台所の者。

といえ、軽く見られるし、若い者にとつては、出世の機会も、将来性もない所だけに——組頭の又右衛門は、退さがつて来ると、藤吉郎へ同情して、慰め顔にいつた。

「猿、つまらないお役目にまわされて、不足だろうが、その代り

に、お扶持ふちが増されたから、まあまあ出世としなければなるまい。お草履取なら、身分は軽くても、御馬前で働く時もあるので、未は楽しみだが、その代り生命いのちがけの御奉公も、覚悟せねばならぬ。お台所にいれば、生命の心配はまずないからのう。二ついいことはないものじやて」

慰めれば、慰められて、はいはいと頷うなずいていたが——しかし藤吉郎自身には、少しもそんな不服は見えなかつた。

むしろ、彼は信長から、望外な見出しに預かつたことを心から感激しているふうだつた。

さて、彼が台所方の職に就いて見ると、第一に、その薄暗いことと、陰湿いんしつなことと、不潔なことが、目についた。

昼間でも、太陽を忘れていような、せいぎ生気のない膳部番や、料理人や、老いたるおまかないがしら賄頭が、十年一日の如く、こぶ昆布の煮出にだし汁じるのにおいの中に住んでいる。

「これはいかん」

藤吉郎には、耐えられないものがあつた。彼は、陰気が嫌いである。薄暗い——生気がない——そういう空気はすべて嫌いだつた。

「そこらの壁へ、大きな窓を切つて、風と太陽を、いっぱいに入りたいものだな」

そう考えたが、台所方には台所方の組織もあり、古顔の上役もいて、その仕事一つも、実行はむずかしく見えた。——藤吉郎は、

毎日、商人あきんどが納品する鰹節かつおぶしの蝕むしくいを調べたり、椎茸しいたけや干か

瓢んぴょうの記入などを、黙々とやっていた。

お城の台所方へ出入りする御用商人あきんど達は、藤吉郎の係になつてから、すっかり調子がぐくだけて来た。

「どうも、旦那のように仰おほつしやられると、良い品を、お安く持つて来きずにいらなくなりませすよ」

「まったく、木下様にかかつては商人も跣足はだしですよ。乾物でも、干魚でも、穀類でも、時の相場はよくご存じだし、品物にお眼まなこは鑑きくし、手前てまえどもを、欣よろこばせて、安くお仕入れになることはお上じやう手てだし……」

と、皆いった。

「ばかを申せ」

藤吉郎も、笑つていう。

「何も、わしは商人じやなし、上手も下手へたもあるものか。わしの利得になることではあるまいが。——ただ、そちたちのお納めする品はみな御家中方の口に入るものだ。命は食よりと申す。このお城の命は、つまるところ、お台所から上げる食物の如何にある。——少しでも良い物を上げることが、われわれの御奉公というものじゃ」

また。

折には、そうした商人たちに、茶など飲ませて、打ち寛くつろぎながら、雑談の中で説いた。

「お前らは、商人だから、御納品を運ぶたびに、すぐにこの一車で、幾らの利得と——利得を離れたことはあるまいが、もし敵国のために、お城が亡びたら何とする。長年の懸代金かけだいきんは、元も子も失うばかりか、他国の大将が、城主となれば、他国から従ついて来た商人が、取って代つて、お前らの商売まで奪つてしまう。——こう考えたら、何よりも、御当家の礎いしずえを根として、われわれもお前方も、枝や花と茂つて、子孫までも共に栄え、利得すること考えずばなるまい。——だからお城へ納める品で、不当に儲もうけようなどという考えは、慾が小さいぞ」

それからまた、彼は、お賄まかない頭がしらの老人にも、誠意をもつて仕えた。分りきつたことでも、老人の意見を問ひ、気にそまぬこ

とでも、一応は服従して、老人の顔を立てた。

が、当然、仲間の一部には、

「目まぐるしい奴だ」

「何にでも口を出しおる」

「働きぶる猿」

などと陰口もあり、彼を、のけもの退者にしようとする気配もあつた。

自分が、一つの波として起る場合、どこにでも、波にぶつけて来る波はある。藤吉郎は、ほとんど、そういうものには、無関心な顔つきだつた。

まかないがしら賄頭と相談して、信長にまで申し出た台所方の改築は、

許可された。

彼は、大工をさしずして、天井には風入れを明け、壁には大きな窓を切らせた。下水、その他、彼の理想どおりに改築した。

守護職しゅごしよくの斯波家しばけが住んでいた時以来——何十年という間、昼間も燈明で煮物するほど暗かった清洲城きよすの大台所に、朝も夕方も、かんかんと太陽が映さしこんだ。爽やかな風がふき通した。

「物が早く腐すえる」

とか、

「塵ちりが目立つ」

とかいう苦情にも、彼は、耳をかさなかつた。

清潔になつた。

無駄むだが目に見えて来て、無駄むだがなくなつて来た。

総じて、一年も経つと、ここも、彼の性格そのまま、明るく風通しよく、活動的な機能を持つ所と變つて来たのである。

すると、その年の冬。

今までの炭薪奉行、すみまき村井長門守むらいながとのかみは免役めんえきになつて、その跡役へ、藤吉郎が奉行に任じられた。

なぜ、長門守が、役目を罷めやさせられたのか。

そしてなぜ、自分が、炭薪奉行に登用されたのか。

藤吉郎は、信長から任命されると、同時に、それを考えてみた。

「ははあ、炭薪の費ついえを、もつと節約せよとのお旨むねだな。いや、

そのお旨は、一昨年から出ているが、村井長門の節約ぶりでは、お気に召さぬのだな」

で——彼は、広い城内の炭火のある所、薪まきを使用している所を、新奉行として、隈くまなく見て歩いた。

御用部屋、控部屋ひかえ、書院、詰つめの間ま、奥、お表、どんな所にも、冬は火の気があつたし、大きな炉ろも切つてあつた。

わけて、小者部屋だの、若侍たちの屯たむろには、山のように木炭を炉ろにあけて、冗じょうひ費ひしていた。

「木下殿だ。木下殿が見えた」

「なんだ、木下殿とは」

「新たに、炭薪奉行になつた木下藤吉郎殿。むずかしい顔して、見廻りに来たぞ」

「あ、あの猿か」

「灰をかけておけ。灰を」

若侍たちは、あわてて灰をかぶせたり、黒いのを、火消し壺へ入れたりして、仕すました顔していた。

「やあ、お揃いだな」

藤吉郎は、そこへ来ると、連中のあいだに割りこんで、自分も炉へ手をかざした。

「こんど、不肖ふしょう藤吉郎が、炭薪奉行を仰せつかりました。どうかよろしく」

「や、それはどうも」

若侍たちは、むず痒いかゆ顔をし合った。藤吉郎は、炉に挿さしてある大きな金火箸を持って、

「ことしの冬は、ひどくお寒いではないか。このように火を埋いこんでおいては、手先ばかりで、体が温ぬくもらぬ」

と、自分で赤い火を掘り出して、

「そちらの炭籠の炭を、もつと存分に、つごうではないか。それから、今までは、一部屋について、一昼夜炭何貫と、お定めがあったそうだが、火の気の儉約は、寒々しい。十分にお使い下さい。そしていちいち部屋がしら頭のお手判だの、何だのと、面倒な手数も御無用、お要いりよう用だけ炭倉へ取りにお越しく下さい」

足軽や中間の小屋へ行つても、藤吉郎はその調子で、節約節約と、従来、やかましくのみいわれて、萎いしゆく縮ゆくしていた人々へ、大いに炭薪を使うことを、奨励してまわつた。

「こんどの奉行は、いやに大まかじやないか」

「察するところ、猿殿、一躍炭薪奉行に引き上げられたので、すっかり気を好くしてしまい、気前を見せているつもりだろうが、猿の上調子に乗ったりしていると、今にこつちまで、飛んでもない御叱責をくうかもしれぬぞ」

いくら寛大に放任しても、炭薪の使用などには、おのずから限度がある。家中の心理は、むしろ自誠じかいして、その限度は出なかつた。

清洲城の一年間の薪炭の使用料は、約千石の余を超えていた。領内の伐木ばっぼくの面積だけでも、年々多大の量を灰にするので、その支出の金額ばかりでなく、藩政上からも、信長は、その節約を

心がけていたものだった。で、二年間ほど、村井長門守に奉行を命じて、やらせてみたが、少しも実績が上がらなかつた。反対に、年費が殖ふえたりした。その上、節約という声の感じが、家中の心理を、萎いびさせたり、歪ゆがめさせたりしたのみだった。

藤吉郎はまず、その窮屈と萎縮から、家中の気もちを解放した。それから彼は、信長の前へ出て、こう建言した。

「とかく冬中は、御家中の若わか殿輩かのぼらも、足軽などお下しもの者も、総じて、屋内に引き籠りがちで、菜漬なづけを喰うて、湯茶をのんで、埒らちもないむだ話に、徒つれづれ然れの日を送りがちに見うけられます。——炭薪の節約などより先に、御賢慮をもつて、この悪習をひとつお矯ため直し願わしゆう存じまするが」

「むむ。そうか」

信長は、彼のことばを容いれて、すぐ老臣に命じた。

彼の老臣は、番頭ばんがしらや足輕頭を集めて、家中一般に、平時の日課を励行させることについて、熟議をかさねた。

武具の手入れ、講習、禪の実修、領土内の交代巡視。——それから射撃槍術の奨励はもとより、城内の土木もやらせ、小者たちには、暇ひまがあると、馬の沓くつまで作らせた。

要は。

閑ひまを与えないことだった。

一体、武將の気もちからすると、家中の侍たちは、わが子の如く可愛ちぎかった。かたく契ちぎられた君臣のあいだは、骨肉にひとしい

愛情で結ばれていた。

いざ、戦いくさとなる日には、その者どもは、自分の馬前で——眼の前で、生命いのちをすてて戦い死ぬのだった。可愛くなくては——また、その愛情や君恩を感じないでは、馬前に死ぬ勇士はない。

従つて。

平時の日には、どうしても、つい寛大に流れやすかった。

また、何日戦いくさへ。

と、思いやるからであつた。

しかし、信長は、それがかえつて家臣らのためにも良くないことを考えていた折からなので、断じて、平時といえども、寸閑の暇もないように、修養や生活を正して、嚴重に日課を励行させた。

同時に。

奥向おくむきの女性たちにも、稽古事や、掃除や、また、籠城攻戦の場合の習練などもさせて、起きるから寝るまで、暇のない生活規律を立てさせた。

もちろん自分自身も。

そして或る時、藤吉郎が見えた折、やや得意そうな顔して云つた。

「猿、どうじゃ近頃は」

「はッ。御威令の効きき目めは見えて参りましたが、まだまだ」

「まだ足らんか」

「もう一層」

「どこがまだ不足か」

「御城内の風が、御城下一般の民家へも、浸みわたって行きますまでは」

「む。なるほど」

信長は近頃、かなり藤吉郎のことばに、信を抱いて、聴くようになつていた。

侍側の人々は、それをいつも、苦々しい顔して、白眼視していった。

なぜならば、彼のように、短い年月の間に、小者小屋から畳の上へ昇つた例すら少ないのに、君前へ出て、献策めいたことを、直接にいうなど、もつての外な——と等しく眉をひそめるのだつ

た。

しかし、年額千石以上の炭薪の消費高は、その冬の半ばかりも
う目立って節約されて来た。いや、藤吉郎自身は、各部屋をまわ
る度に、

「冬は寒いもの、炭薪など、吝けちけちせず、十分にお費つかいなさい。
いちいち部屋頭がしらの御判なども要らぬ。自由に、炭倉へ参つて、要
るだけお持ちなされ」

と、大まかなことをいつてはいたが、一面、家中一般に、暇が
なくなつたので、むだな炭火を費やして、炉を囲んでいる時間な
どなくなつてしまつたのである。

また、多少暇があつても、体を動かして、絶えず筋肉に緊張を

持つと、自然、炭火などは不用な物になり、炊事その他の燃料もすべて簡略になって来て、一カ月の燃料が三カ月もある程、變つて来た。

が——藤吉郎は、それでもまだ、自分の職分を達したものと、満足はしなかった。

来年の冬の炭薪は、夏山のうちに、山で買入れの契約をする。彼は、お城御用の商人あきんどを案内に立て、山支度して検地に出かけた。

薪山の検地などは、従来から形式だけのものに過ぎない。

あの山のなら櫓何百本。

この山のくぬぎ何本。

と、山商人に引つ張りまわされて克明に視て歩いたところで、一山から炭薪が何石とれるか、素人目では見当もつかなかった。しろうとめ百姓仕事や、町のことなら、何でも心得ているつもりだが、藤吉郎にも炭薪のことなどは、仔細に分つていなかった。

「む、む。左様か。——なるほど、なるほど」

彼も、従来の慣例どおり、ざつと歩いて、形式だけで降りて来た。
た。

あきんど商人たちは、その晩、奉行の一行を、土地の豪家に招待して、盛宴を張る——。これも前からのしきたりであつた。

「今日は、お奉行様始め、御大儀さまにござりました」

「さだめし、お疲れのことです」

「何の設けもございませぬが、こよいは悠々ゆるゆると、おくつろぎの程を」

「そして、この後とも宜しくひとつ」

こもごもに挨拶やら追ついで従したがやら、下へも措おかない歓待である。

勿論、酌人も揃っている。どこの唄うたい女めか娘か、とにかく身ぎ

れいに化粧もこらしたのが、奉行の側につききりで、杯を洗う、

肴さかなをすすめる。漬はなといえばすぐ漬紙はながみ。

「よい酒じゃ」

藤吉郎は、悦に入っている。悪い気もちであろう筈はない。

脂粉しふんのにおいを見廻して、

「美人だな。どれもこれも」

と、いった。

商人のひとりが、

「お奉行様にもやはり、女子はおなごおすきでござりまするか」

畏る畏る戯れると、当り前なことを訊く——といわなばかりに、藤吉郎は真面目くさつて、

「女子もすき、酒もすきじや。世の中にある物はみなよいな。ただ心せぬと、よいものもあだ仇になる」

「仇にならぬ程に、どうぞお氣に召しましたら、酒など、花など」

「よしよし。氣随気ままにさせて貰おう。——ところで、その方ども、商売のはなしは一向にせんが、察するところ、遠慮しておるとみえる。では、この方から切り出すが、きょう歩いた山の雑」

木台帳、これへ見せてくれい」

「どうぞ御覧遊ばして」

「ふム、明細じやの。木の数はこれで相違ないのか」

「相違ございませぬ」

「これで炭薪^{すすまき}八百石御上納とあるが、これだけの山で、この石量になるのか」

「昨年よりは、お納めの額^{たか}が減りましたので、今日、御検地の山の分で、左様になりますわけで」

翌朝、商人たちが、お奉行の御機嫌伺いというので来てみると、藤吉郎は、朝まだ暗いうちに起きて、山へ行つたというので、驚いて彼らは山へ追つて行つた。

見ると。

藤吉郎は、足軽や附近の木樵きせり百姓などを督励して、各に三尺ほどに断きらせた縄束なわたばを持たせ、買入れの契約をした山一帯の樹木の根に一筋ずつその縄を結び付けさせていた。

縄数は最初に何千本と分っていた。それが終つて、残部の計算をしてみると、立木の数がすぐに知れる。台帳に記載してある立木の数と、実際の数とを照し合わせてみると、ほとんど、三分の一以上も、数量には懸値があつた。

「商人どもを皆ここへ呼び集めろ」

藤吉郎は、木の切株に腰をすえて、下役の者に吩咐いいつけた。

商人たちは、平伏した。

何を云い出されるかと、内心おそ懼れおののいていた。

いくら山を検分しても、立木の数など、素人しろうとに分るものでないし、実際にまた、これまでの炭薪奉行は、台帳に書いてある数量をそのまま、鶉うのみにしていたものだが、こんどの新奉行は、その手に乗らなかつた。

「商人ども」

「へい……」

「この台帳の数と、実際の木の数とは、だいぶ違うではないか」

「……はあ」

「はあではない。これは如何なるわけだ。その方どもは、多年の御恩顧を、ありがたいとは思わず、かえつて利にな狎れて、御領主

を欺あざむき奉り、かような嘘を書き上げて、暴利をむさぼりおつたな」

「……め。滅相もない」

「然らば、何でこのように数が違うのか。このままの数で炭薪をお納めするからには、御納庫になる品も、百石こくの炭は六、七十石、千石の炭薪は、実際には六、七百石しかお納めいたさぬのであるうが」

「いえ、なかなか、そのような理わけでは」

「だまれ。多年山より炭薪を伐きり出して職とするその方どもが、かような大きな眼違まがいをする筈はずはない。心得て致したとあれば、奉行あざむを欺あざむき、御領主の国費こくばいを騙たばかり取った大罪と申さねばならぬ」

「恐れ入りました」

「一同の家財を没収し、断罪にしてもよいところだが、今までの役人方の手落ちもある。この度だけは、見のがして遣わすが、石こ数くすうのところは、有ありてい態いの通り書き直して差し出せ」

「畏りましてござります」

「——が、それだけでは、免ゆるすわけには参らぬぞ」

「へい」

「古語にもある。一本の木を伐らば、十本の木を植えよと。——昨日よりこの地方の山を見るところ、年としごとに伐きる木は多いが、ほとんど、植えた跡は見ぬ。かようなことで年経る時は、いつか麓ふもとの田野は洪水に見舞われ、ひいては国の衰えとなろう。国衰える時は、その方どもへも当然、負担や不幸はかかって来るものぞ。

真まことの利を積み、真の家富を願ひ、子孫しあわせの幸を願うなれば、まず国を強うせねばなるまい」

「はい……」

「その税として、また、今日まで暴利をむさぼった罰として、今後、千本の木を伐り出す時は、五千本の苗を必ず差し出すこと。

固く申しつけるが、どうじゃ、不服か」

「ありがたい存じます。それでお免ゆるし下さるものなら、苗木は必ず差し出します」

「うム。然らば、人足料として、台帳に書き出しの数量に、五分の割増しは認めて遣わすであろう」

それからまた、その日、手伝わせた百姓たちには、伐木の跡の

植林をいいつけて、苗百本について幾値いくくらと手間賃をきめ、それは城内から支払うであろうと云い渡した。

「さ、帰ろう」

と、藤吉郎に促うながされて、商人たちは、ほっと生きた心地を取りもどした。そして口々に、

「驚いたなあ。こんどのお奉行には、うっかりできぬぞ」

「だが、分ったお方だ」

「今までのように、ぼろいわけにはゆかないが、といつて、損はしない。まあ地道にやろう」

山を降りながら、囁ささやき合っていた。

ふもと麓へ来ると、商人たちは、もう倉皇そうこうと帰りかけたが、藤吉郎

は引きとめて、

「お役が終った。今夜はわしに従ついて来い。わしも今夜は寛くつろぐであらう」

と町の旅舎へ、一同を引つ張つて来て、ゆうべの返礼くたに、馳走を振舞い、お奉行の彼もいい機嫌に酔つて、すっかり砕くだけたところを見せた。

よねまんじゅう
米饅頭

彼は、愉快えつだった。

ひどく独りで悦えつに入っていた。

——というわけはその日、

「猿」

と、例によつて信長に呼ばれ、信長からこういう言葉をうけたからだった。

「台所方は、そもそも、経済を旨とする所なのに、その台所に、そちのような奴を置くのは、大の不経済と申すものだ。以後うまや厩方かたを申し付ける」

そして、知行ちぎよう三十貫、城下の侍小路に、宅地をもつかわす——という君恩を受けたのだった。

欣うれしかった。

彼は、欣うれしいことに出会つたと、正直に欣しがる男だけに、独り

ニヤニヤと顔へ出て来るものをつつまれなかつた。

早速、以前の同役、がんまくの小屋をたずねた。

がんまくはまだ、草履取をしていた。

「どうだ、暇はないか」

「なんで？」

「城下へ参つて、一いっこんおごし献奢りけんおごしりたいが」

「ま。遠慮しましょう」

「どうして」

「木下殿には、今では、台所奉行というお役。このがんまくは、以前に交らぬ草履取。あなたの沽券こけんにかかわりましょう」

「ひがむな。——そんな気持なら、真つ先に訪ねては来ない。実

は、身に過ぎたお取り立ての上にもまた、今度は、おうまやかた厩方三
十貫と仰せつかった」

「ほ……」

「小者小屋にはいても、おぬしの忠義な心底を、おれは頼もしく
思っている。——で、歓びを分かちたいのだ。どうだ、来ないか」

「それはめでたい。——だが藤吉郎殿、おぬしは俺より正直者だ
な」

「む。なぜ」

「おぬしは何事も、おれに打ち明けて包むことがないが、わしは
実は、多分におぬしへ隠していた。本当のところをいうと、わし
はお草履取はしていても、例の……時折特別な御用を勤めるので、

殿のお手許てもとからじかに、莫大なお手当を戴かいていて、それは皆、密ひそかに国元の屋敷の方へ送はつておるのだ」

「ふム……故郷くにに屋敷など持つておるのか」

「江州ごうしゅうの柘植村つげむらへ行けば、一族もいるし召使も二十人くらいはいる」

「ははあ、甲賀こうがだな」

「柘植村は伊賀いがだ」

「ああ、そうか」

「だから、貴公おごに奢おごられては、こちらが面目めんもくない。いずれお互いに、もつと立身たてみしたら、奢おごりもしよう。奢おごられもしよう」

「そうか。知らなかつた」

「まだ、風雲はこれからだ」

「そうとも、これからだ」

「預けておこう。将来へ」

「いや、よかろう」

藤吉郎は、そこでまた、よけいに愉快になつて来た。

実に、社会は明るい。

彼の見る眸ひとみのまえには、陰やみだの暗やみだのというものがない。

怖ろしい秘密性を持つ乱波らっぱもの者のがんまくすら、彼には遂に、

何も隠さなかつた。織田一藩で知る者のない、身の上までを、簡単ではあるが、とうとう打ち明けてしまった。

きよう沙汰ろくされた禄は僅かに三十貫ではあるが、この三十貫の

うちには、主君の信長が、ここ二年ばかりの台所奉行としての、自分の働きを認めてくれた知己の意味がこもっている。

彼は、それが欣^{うれ}しいのだ。炭薪の消費も、一年間の額^{たか}、半分以上に減つて来たが——そんな数字よりは欣^{うれ}しいのである。

（経済を旨とする台所方に、そちのような奴を置くのは、そもそも大の不経済——）

こう信長からいわれたのは、何にしても、忘れられない喜びだった。——信長公もまた、うまいことを仰^うつしやる大将ではある——と感心しながらも、欣^{うれ}しくて堪^たらなかつた。

いわゆる、おめでたい男に、傍^{はた}眼^めからは、見えもしよう。

独りで、にやにやと、時々、笑くぼを泛^{うか}べながら、彼は午^{ひる}から

お城を出て、清洲きよすの町をぶらついていた。

町を歩くにも、得意であつた。

ここ五日は、転役を機会に、彼の体には、休日を与えられていた。——その間に、拝領した屋敷に——どうせ侍小路のうちでも最も小さい、門と垣と五間ぐらいな小屋敷だろうが——それにしても家財を備えつけ、婆やと中ちゆうげん間の一人ぐらいは、召し使わなければならぬ。

「生れて初めて、一戸の主人となるのだ。その家を見ておこうか」
こう考えて、道を変えた。

附近は、お厩うまやもの者ばかり住んでいる。組頭の家をのぞいて、ちよつと、挨拶をしておく。組頭はいなかつたが、妻女が出て来

て、

「まだ、お独りでいらつしやいますか」

と、訊くので、

「独り者でござる」

ありのままに答えると、

「では、何かと、御不便でございましょう。宅には、召使もおり、家具の余分なものもありますから、何など、お入り用なものはお持ち下さいませ」

親切な奥方であつた。藤吉郎は、いずれ充分、わがままなお願いに出るでしょう、とあらかじめ頼んで、門を出た。

すると、奥方は、自身わざわざ門の外まで出て来て、二人の中

間を呼び、

「新規に、うまやお厩方へ変つて来られた、木下藤吉郎様じゃ。あの、

きりばたけ

桐畑の空屋敷へ、近いうちお移りになるそうな。——ちよつ

と、御案内して、お前方の手空てすきの時、お掃除などしておいてお上

げなさい」

と、いいつけてくれた。

で——藤吉郎は、中間に案内されて、これからのわが家になる官舎へ行つてみた。

想像以上、大きい家なので、

「ほう……これは立派な家だ」

と、門へ向つてつぶや呟いた。

聞けば、前には、小森式部こもりしきぶという者が住んでいたとか。それも大分前のことらしく、屋敷は荒れているが、しかし、彼の眼には大きく立派に見えてならなかった。

「裏は、桐畑でござるな。これも何やら吉兆きつちようでござる。てまえ木下家の紋が、先祖以来、桐を用いておりますからな」

確しかとした記憶はないが——彼は何かそんな気がしたのである。父弥右衛門やえもんの持っていた古い鎧櫃よろいびつか、短刀さやの鞘さやだけに、そんな紋を見た気がするので、案内してくれた中間に向つて、ともかくそういうってしまった。

彼自身も、気がついていることであるが——とかく機嫌がよい時は調子づいて、そう必要もないことをも、また、確しかと肚はらにもな

いことでも、得意にまかせて、喋舌しゃべつたりする傾向がある。

口から出てしまった後で、

(こいつ、いい程なことをいう)

と、自分でいまし誠めたりすることもあるが、決して、悪い肚があつたり、軽薄でいうのではないから、自分では、さしたることとも思っていない。

しかし、専ら、

(猿めは、法螺ほらをふく)

という一部の評も、その辺に原因していた。

そして、彼自身でもまた、

(そうだ。おれは、法螺ふきでないこともないな)

と、認めていた。

だが、そのために、彼の全部を誤認してしまったり、また、毛嫌いしたりした小さな潔癖家は、遂に、彼の大きな生涯の同伴者にはなれない人々だった。

——それからしばらくすると、彼の姿は、清洲の町の、繁華な中心地に見出された。

家具なども買ったらしい。

また古着店の前で、ふと立ち止まったら、偶然、桐の紋のついた陣羽織があつたので、値を訊いてみた。

「安い」

彼はすぐ買って、すぐそこで着てみた。——すこし長いがみつ

ともない程ではあるまいと、着て歩いた。

陣羽織といつても、青木綿あおもめんのひらひらしたやつで、ただ、襟だけに金欄きんらんに似た布きれが膝かがりつけてある。誰が着たのか、桐の紋は、背中に白く染め抜いてある。

「見せたいなあ、母上に」

自分の姿を——そう思う。

ここらの繁華な町を歩けば、また感慨にたえないものがあつた。

新川の茶わん屋に奉公していた頃のことだ。陶器やきものを積んだ手

押し車を押して、素跣足すはだしで、町の者や、きれいな女の見る中を—

—その頃のみじめな自分の姿も思い出されるのだつた。呉服屋へはいった。

そこには、京織の上等な呉服ものが、棚に並んでいた。

何を買ったか、彼は、

「では、相違なく、届けてくれよ」

と、代金をおいて、外へ出て来た。彼の懐ふところ中は、常にかくの如くにして、半日の休日には、空からになるのが常だった。

—— よねまんじゅう米饅頭。

と、青貝で文字を埋めた立派な看板が、町角まちかどの屋根にかかっていた。それは、清洲の名物で、いつも旅人が大勢腰かけ、一方では土地の客が混み合っていた。

「饅頭をくれい」

藤吉郎は、今そこから着て来たばかりの、大きな桐の紋を背負

つて、混み合っている客の中へはいった。

あかまえだれ
赤前垂の小女が、

「いらつしやいますし。ここでおあがりなさいますか、お土産でございますか」

藤吉郎は、一つの床しょうぎ几に腰かけて、

「両方だよ。先にここで喰べる分を一盆。それからべつに、使いの駄賃は出すから、中村へ行くついでに馬子にでも頼んで、中村のわしの家へ、饅頭一折——大きな折に入れてな、届けておいてもらいたいのだ」

後ろ向きに働いていた店の亭主らしい男が、

「おう、旦那様で。まいどありがとうございます」

「よう。相変らず繁昌だな。今も例のところへ、届ける折を、頼んだところだが」

「はいはい。中村へは、よくこの辺からついでの衆もございますし、中村の衆も、お寄り下さいますから」

「いつでもいい、頼んでおくぞ。——それから、この手紙を、饅頭の折の中へ、入れてやってくれ」

藤吉郎は、懐ふところ中に用意して来た手紙を、店の者に頼んだ。

母上へ　とうきちろう

と、封の上に書いてあつた。店の者は、手にとって、

「何か、お急ぎの御用でも」

「なに、早いに越したことはないが、いつでもよい。何しろ、わ

しの母ときては、以前からここの米よねまんじゅう饅頭じゅうというと、眼のない好物なのでな……」

云いながら、彼も、一つ頬張った。

だが、彼にとると、その饅頭の味には、すぐ涙を催して来るよ
うな思い出があつた。

母の好きな饅頭——

買ってやりたいが。自分も喰べたいが。と喉のどから手が出るほど
欲しく思いながらも、買えずに、手押し車を押して、さもない我
慢をしながらこの前を通つた少年の日が——いつもここへ来れば
思い出されるのだつた。

「やあ。木下殿ではないか」

若い娘づれの武士。さつきからこちらを見ていたが、彼の、盆の饅頭を空からにした頃、こう声をかけながら立つて来た。

「おお。これは」

藤吉郎は、頭かしらを下げた。

ゆみのしゆうゆみのしゆうの浅野又右衛門長勝あさのまたえもんながかつなのである。小者小屋に勤めていた頃から、世話になった人なので、格別、礼を篤あつうして、いんぎんに辞儀をした。

が——場所は、城内とちがい、町の米饅頭屋の土間なので、又右衛門も、きようは気軽だった。

「おひとりかな」

「はい。一人で」

「こちらの床几しょうぎへ参らぬか——あれへ寧子ねねも連れて来ておるで」

「ほ。お嬢様も」

藤吉郎は、横を見た。

すぐ床几一つ隔へだてて、うしろ向きに、十七、八の小がらな麗人が、白い襟足を見せて、騒々しい辺りの客の中に、独り端然として、腰かけていた。

麗人——といったが、藤吉郎も女にかけては、かなり鋭い審美眼を備えている。あながち、彼の眼だけにそう見える女性ではなく、誰が見ても、

(美人！)

と、迷わずに云い切れる程な——それは十人並み以上の娘だつ

た。

寧子と書いて、ねねと訓む。その可憐な名も、この娘の人からにふさわしかった。小さく整った容貌かおだちに、ぱちりと、聡明らしいひとみ眸を静かに持っている。

又右衛門は、藤吉郎を誘って、その明眸の持主の前へ連れて来た。

「寧子ねね」

「はい」

「こちらは、木下藤吉郎どのというて、この度、御台所御用人から、お厩うまやしゅう衆しゅうへご登庸とうようになったお方だ。お見知りおきを願っておくがよい」

「……はい。あの」

寧子は、顔を染めて、

「木下様には、初めてではございませぬ」

「何。知っておる……?」

「ええ」

「いつ、どこで」

「お手紙をいただきましたり、また、お贈物をいただいたりして」

又右衛門は、仰山に驚いた顔をして、

「これは怪けしからぬ。手紙などを遣やり取りいたしておったのか」

「わたくしからは、差し上げたことはございせんが」

「それにせよ、父のわしへ、黙っておるなど、不埒ふらちな沙汰じや」

「いいえ、お母様には、いちいち申し上げてごさいます。お母様は、度々のお贈物などは、かたくお断りいたしていらつしやいませが、お節句の、正月のという度に、木下様からは、よく頂戴物をいたします。……お父様からも、お礼を申しあげて下さいませ」

「ふーむ」

と、又右衛門は、娘の顔と、藤吉郎の顔を見くらべて、

「いや、男親という者は、恐こわそうな眼ばかりしていて、存外、迂う闊かっなものよの。……知らなかつたわい。……よく、猿殿は抜け目がないぞ、という噂は聞いていたが、まさか、わが娘にお目が止まつていようとは思わなかつた。——あはははは」

「いや、どうも」

藤吉郎は、大きく後ろへ手をまわして、頭を搔いた。

非常なてれ方だった。

しかし、苦労人の浅野又右衛門が、笑ってくれたので、いささか救われた顔だったが、それにしても、真つ赤になつた顔はなかなかさめなかつた。

事実。

寧子ねねの方では、どう思っているか知らないが、先の意志にかかわらず、藤吉郎は、寧子が好きだった。

——で、中村の母と共にいる姉の所へ、時折、帯や反物など求めて届けてやるついでに、寧子の許へも、身に過ぎた京きょうぞめ染だの、堺さかい織おりの錦にしきなどを奮発して、届けておくことも忘れなかつ

た。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年5月11日第1刷発行

2010（平成22）年4月1日第25刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2014年11月14日作成

2015年11月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第一分冊

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>